

創立

50周年記念誌

高知県立須崎工業高等学校



1991

創立
50周年記念誌

高知県立須崎工業高等学校



1991

校 旗



校 歌

土井晚翠作詞
平井保喜作曲

堂々と〔♩=108〕



すさき工業 こうこうのおしえのにわに



みどころ しんてんしんち こうみょうの



かがやくもとに いさましく ひびきた



いぬーく けんじだ ん

三、

二、

一、

須崎工業高校の
 教の庭に身と心
 新天新地光明の
 輝やくもとに勇ましく
 日々鍛いぬく健児団

自然の暗示わが教
 太平洋の荒波は
 わが人生の活動か
 さらに心の平穩は
 波静かなる錦浦

工業報国理想とし
 自主独立の精神を
 いだき責務を怠らず
 真理と正義重んじて
 わが向上の道を逐う



目次

〔校旗・校歌〕

〔創立五十周年記念式典〕 11

式次第 11

実行委員長挨拶 12

学校長式辞 14

高知県教育委員長挨拶 16

祝辞 高知県知事 18

高知県議会議長 20

須崎市長 22

高知県高等学校校長協会会長 24

来賓御芳名 26

祝電発信者御芳名 27

感謝状贈呈者御芳名 28

生徒憲章の発表 30

祝楽 32

〔創立五十周年記念祝賀会〕 33

祝賀会次第 33

〔記念写真〕 34

〔創立功労者・創立事情〕……………48

〔歴代学校長〕……………50

〔校舎の変遷〕……………54

〔記録写真〕……………63

〔序〕……………104

〔ごあいさつ〕……………106

〔ごあいさつ〕……………107

〔沿革〕……………109

現況……………114

卒業者数……………121

〔須崎工業スペシヤル〕……………123

はじめに……………124

回想 ―苗木を植えて三十年― ……125

寺尾 豊 先生 ……127

あの頃の思い出 ……131

須工建学の精神 ―「技術のためには死ね」―中内知章校長先生の遺訓― ……133

初代同窓会長 田辺博造(昭十八年機卒)……………136

須工創立と初代校長中内知章先生 ……136

創立後の数年間 ……138

元 P T A 会長 中田稔(三十年誌より転載)……………136

元 教 頭 田村隆徳(三十年誌より転載)……………138

校章図案作成の思い出	元高知工業高校教諭 森 光喜 (遺稿・三十年誌より転載) ……	143
学校創立当時を偲ぶ (造船科の発足)	元 職 員 桑原章師 (昭十八―二十三年、公・船) ……	145
外国人としての私と須崎	卒 業 生 崔 權炯 (昭二十年機二卒) ……	147
須工への留学	卒 業 生 張 泗海 (昭二十年機二卒) ……	152
二昔半前の思い出	元 職 員 池上健男 (三十年誌より転載) ……	153
学校火災	卒 業 生 西森正忠 (昭二十六年機卒) ……	155
創立十年の危機	第四代校長 前田建造 (遺稿・三十年誌より転載) ……	157
電通科設置の頃を顧みて	元校長事務取扱 野中健一郎 (三十年誌より転載) ……	159
須工の思い出	卒業生 (本校初の女生徒・旧姓 長山) 宮本恵美子 (昭三十一年電通卒) ……	163
栄冠の蔭に ― 機工クラブ顧問としての思い出 ―	元 職 員 広瀬雄助 (三十年誌より転載) ……	165
相撲部OBキャプテン座談会	元相撲部顧問・監督 田原敏雄 (昭二十四年―三十九年、体) ……	169
	初代相撲部主将 岡林幸保 (昭二十八年造船卒) ……	169
	ほか 歴代主将 十一名 ……	169
化学工業科のできた頃	元 職 員 田所靖通 (昭三十一―六十一年、理・化) ……	197
移転新築への胎動	元PTA副会長 古谷義計 (遺稿・三十年誌より転載) ……	199
新校地への陣痛	第九代校長 澤本 豊 (遺稿・三十年誌より転載) ……	200
移転新築について	移転新築期成同盟会 ……	210
創立三十周年記念誌と新校舎への引越	第九代校長 澤本 豊 (遺稿) ……	211

触れ合いの教育

元PTA会長

川上和男(昭六十三年度)

217

〔須工での日々〕 (その一 旧教職員)

須工二ヶ年

第八代校長

西本澄雄

220

追 想 ―しんまえ校長の七日間―

第九代校長

澤本 豊(遺稿)

221

思い出のままに

第十代校長

村木 威

226

須工と私 ―二度の勤め―

第十一代校長

大島正賢

228

須工三年間の思い出

第十三代校長

宮地恒雄

229

須工創立五十周年におもう

元 教 頭

田村隆徳

233

防火訓練の思い出

元 教 頭

久 正 一

234

昔と今

前 教 頭

竹村義典

236

工業教育を考える

教 頭

森 峯 雄

238

わが青春、その出会い

元国語科教諭

市原麟一朗

239

時の流るるままに

元社会科教諭・元校長事務取扱

野中健一郎

241

「須崎工業高校相撲道場は私の心のふるさと」

元体育科教諭

田原敏雄

242

雑 感

元英語科教諭

山田良幹

245

思い出すままに

元養護教諭

野島幸代

246

駆け出しの頃

元社会科教諭

広瀬典民

248

思い出の須工

元養護教諭

橋田美智子

250

教材「三輪トラック」	元機械科教諭	西川良治	251
回顧	元機械科教諭	前田隆一	252
霧の中の思い出	元機械科教諭	島崎良一(昭和二十二年機卒)	254
回想十二年	元機械科教諭	福富恒彦	256
「須崎工業高校と私」	元造船科教諭	合田正寛	258
生と死のさすらい	元造船科教諭	川島隆志	259
余談の余談	元化学工業科教諭	堅田政雄	261
追憶	元化学工業科教諭	田所胤雄	262
回想記	元電気通信科教諭	木岡滋雄	264
須工と私	元電気通信科教諭	森義彰	266
須崎工業の思い出	元電気通信科教諭	中澤恒雄	267
私の須工時代と生徒たち	元電気通信科教諭	島本理夫	268
ダチュラの花咲けば	元事務職員	吉村靖子	270
須工と私	元職員(警備)	松本亀男	272
「須工での日々」(その二 卒業生)			
機械科二種一期生	昭和十八年機械科卒	西川嘉明	276
回想 同窓会関東支部の発足	昭和十八年機械科卒	海地清幸	277
思い出の実習あれこれ	昭和十八年機械科卒	矢野亀雄	278
旧校舍跡地記念碑雑感	昭和二十年機械科卒	梅原健一	280

こんにちわ。ー須工五十周年記念に寄せてー

敗戦をはさむ二年間

望郷

三枚の卒業証書

ありがたきかな母校

通学の思い出

「卓球人生」

プレイバック STHS

思い出

思い出の記

ちよつとした苦勞

わが母校

「選択」

ダイジェスト

思い出、そして今

みちのく一人旅

「一枚の賞状と靴べら」

「祝創立五十周年」

我が就職変遷

昭和二十年機械科卒	林 弘	283
昭和二十二年機械科卒	高橋 典男	284
昭和二十四年機械科卒	上岡 親雄	286
昭和二十五年機械科卒	竹内 良一	288
昭和三十一年機械科卒	安井 護	289
昭和三十二年機械科卒	矢野 敦	290
昭和三十九年機械科卒	鍵本 肇	292
昭和四十三年機械科卒	川上 清義	293
昭和四十四年機械科卒	岡田 雅幸	295
昭和四十七年機械科卒	中間 正志	296
昭和五十四年機械科卒	坂本 定浩	297
昭和五十九年機械科卒	広瀬 剛	298
昭和六十年機械科卒	井上 澄男	300
昭和二十四年造船科卒	森 久敬	301
昭和三十一年造船科卒	藤田 国基	302
昭和三十五年造船科卒	増田 浩	303
昭和三十七年化学工業科卒	橋田 泰	305
昭和四十二年化学工業科卒	青木 鎮	306
昭和四十六年化学工業科卒	松坂 博史	307

マラソンに賭ける青春	昭和四十九年化学工業科卒	黒田 一福	308
七年前	昭和六十二年化学工業科卒	林 大作	311
「たら」と「おかげ」と	昭和三十年電気通信科卒	野並 允温	312
電通科を卒業した女生徒の一人として	昭和三十二年電気通信科卒	上野 富美子	313
五十周年に寄せて思いつくままに	昭和三十五年電気通信科卒	益 法子	314
我が故郷「高知」そして「須工」	昭和四十一年電気通信科卒	楠瀬 三四郎	316
高校生活の思い出	昭和四十一年電気科卒	氏原 豊	318
光陰矢の如し	昭和四十五年電気科卒	吉田 文雄	319
「今も生きている須工時代」	昭和四十五年電気科卒	西森 豊	320
我が母校	昭和四十七年電気科卒	徳 永逸夫	322
神戸の街より	昭和五十六年電気科卒	大石 高志	323
学校・社会・ソフトボール	昭和六十年電気科卒	田村 亮二	324
須工で過ごした三年間	昭和六十一年電気科卒	笹岡 健	325
「須工タイムスより」	―平成三年度卒業生・学校生活とクラブ活動―		
「その一・学校生活」			
三年間の思い出	三M A	浜口 浩也	328
高校生活をうたう	三M B	青木 孝弘	328
高校生活をふり返って	三 S	古谷 謙信	328
		ほか十一名	

私の高校生活	三 C	宮崎 亜也	329
三年間を振り返って	三 C	竹内 淳也	329
学校生活を振り返って	三 E A	谷脇 覚	330
「その二・クラブ活動」			
クラブ活動の思い出	バレー部	柳本 剛	331
野 球	野球部	西森 貴司	331
私にとっての三年間	空手道部	石本 篤司	332
サッカー部の思い出	サッカー部	大和田 広志	332
クラブ活動の思い出	バスケットボール部	藤田 研	333
クラブ活動の思い出	卓球部	川添 英生	333
剣道部の思い出	剣道部	中岡 聡	334
思い出	ソフトボール部	細木 達也	334
須崎工業テニス部	テニス部	山崎 大	335
ヨット部の思い出	ヨット部	福田 賢司	335
三年間のクラブ活動	柔道部	堀内 浩司	335
三年間の思い出	陸上部	田中 誠	336
雨の酸性度を調査して	化学部	小野 浩司	336
クラブ活動を振り返って	美術部	下元 伸一	337

〔同窓会〕

同窓会（記録）	学 校 長 森 岡 清（昭二十六年機卒）	340
同窓会活動を通じて――記念碑建立、校旗・標記の新調、会員名簿の作成について――	同窓会事務局長 武 森 幸 利（昭三十五年機卒）	351

〔P T A〕（資料）

高知県立須崎工業高等学校P T A 歴代会長名簿（敬称略）	364
P T A会則	364
食堂・売店の運営規則	366
P T A財産運営委員会とP T A基金運用規程（その経緯について）	367
財産運営委員会会則	368
高知県立須崎工業高等学校P T A基金並びに益金運用規程	368

〔おわりに〕

編 集 委 員	370
---------	-----

創立五十周年記念式典

(平成三年十一月二十二日 於 体育館)

式 次 第

関係物故者に対する黙禱

- 一、 開式の辞
- 二、 校歌斉唱
- 三、 実行委員長挨拶
- 四、 学校長式辞
- 五、 高知県教育委員会挨拶
- 六、 祝辞
- 七、 来賓紹介
- 八、 祝電披露
- 九、 感謝状贈呈
- 十、 生徒憲章の発表
- 十一、 祝楽
- 十二、 閉式の辞

実行委員長挨拶

秋深く菊の花薫る今日のみき日、高知県立須崎工業高等学校創立五十周年の記念式典を挙行するに当たりまして、高知県知事殿をはじめ、県議会、県教育委員会並びに県下教育界各位はもとより、関係市町村知名の方々のご臨席を仰ぎ、また、PTA関係者及び同窓各位の多数のご出席を頂き、このように盛大かつ厳肅に挙行できますことは、私ども記念事業に携わった者として、この上ない喜びであり感謝にたえない次第であります。

本校は、昭和十六年四月、高知県立須崎工業学校として、須崎市糺町に開設されたのでありますが、創立事情につきましては、次のように記されております。

「本校は、須崎市出身元郵政大臣 寺尾豊氏の巨額の私財提供に端を發し、県当局並びに須崎市民の物心両面にわたる多くの貴い協力のもとに、昭和十六年四月に開校した。

当時、本県の中学校は主として高知市に集中して……（中略）……須崎市にはなかったので、須崎に中学校を新設の要望が次第に強くなっていった。

その当時、須崎町長であられた、池内実吉氏が中心となって運動を始められ、寺尾豊氏に相談された。

寺尾氏は、郷土のために役に立てば幸いだと、巨額の私財を寄付せられ、あわせて「本県には工業高校が一校しかなく、出来れば工業学校にして欲しい」との希望を述べられた。

このご寄付がきっかけになって、県立須崎工業学校創立の具体案がまとまり……（中略）……開校されることになったものである。……（中略）……

創立当時の事業は、当地域社会の多くの人々の美しい奉仕の精神による美談の数々に包まれている。……（後略）と、記されております。

開校当時は機械科のみでしたが、時代の変遷とともに学科も増設され、造船科、電気通信科、化学工業科、電気科（電気通信科は電気科に統合）と、学校規模も漸次拡大されてまいりました。

昭和二十三年の学制改革に伴い、高知県立須崎工業高等学校と改称し、昭和四十七年四月、この地に移転し現在に至っております。この間輩出した卒業生は、七千四百五十余名に達し、県下はもとより広く全国各地及び海外にあって、行政・産業・経済・文化の各分野、各層において重要な地位にあって活躍されております。

本校は、歴代校長先生はじめ諸先生方並びに諸先輩方の熱心なご指導の下、半世紀にわたる歴史の中から生み出され、継承され、発展してきた輝かしい伝統があります。ご承知のとおり社会情勢は、国の内外を問わず大きな変革の時代にあります。この伝統を踏まえて、新しい二十一世紀を目指した教育の殿堂として、その使命を果たしてゆかねばなりません。

最後になりましたが、この度の意義ある創立五十周年の記念式典並びに記念事業に対しましては、本校発展のために寄せられました関係各位のご尽力に対し深甚の謝意を表しますとともに、物心両面にわたりご援助賜りました皆様方に心からお礼を申し上げます。私たちは本校五十年にわたるすばらしい実績をもとに、よりよい校風を樹立し、母校の声価を一層高め、皆様のご期待に応える学校として、有意な人材の育成に努力し、産業の発展・地域社会繁栄のため貢献できますよう努力いたす所存でございますので、今後とも皆様方のご指導ご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。ご挨拶といたします。どうも有り難うございました。

平成三年十一月二十二日

高知県立須崎工業高等学校

創立五十周年記念事業実行委員会

委員長

清家

寛

式 辞

ここに、本校創立五十周年記念式典を挙げるにあたりまして、高知県並びに須崎市をはじめとする各界からのご来賓の皆様には、お忙しい中を、特にお繰り合わせいただきましてご臨席を忝けのうし、本校に大きな節目となりますこの式典を、共にお祝いいただきますことを心から有り難く、本校関係者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

また、同窓会並びにPTAの皆様方におかれましては、この式典のため大きなご援助を賜り、お陰をもちましてこのように盛大かつ意義ある式典ができますことに、心から感謝を申し上げます。誠に有り難うございました。

さて、先ほど清家様からのご挨拶にもありましたように、本校は昭和十六年四月、当時の須崎町を中心とする近郊町村の皆様方の大きな期待を担って開校いたしました。

その節の各町村の皆様方の、物心両面にわたるご援助とご協力は、本校関係者の忘れることのできないものでございます。

殊に、本校が工業に関する課程として発足しました陰には、寺尾豊先生の工業人育成にかける並々ならぬお気持があつてのことでございます。

本校は、こうした多くの皆様方のお気持ちに対し、常に感謝の念を持ち、そのご期待に添えるように努力を続けてまいりました。そして、本校を母校とする卒業者の大半は、本校創立の精神でもある工業人としての道に進み、日本の工業界をささえる一助として活躍しております。

しかしながら、本校の歴史は決して順調な歩みを続けてきたものではなく、幾つかの困難に遭遇し、それを乗り越えながら発展してまいったものであります。

そしてその発展は、それぞれの時代に本校をささえてこられた、多くの関係者の皆様方のご労苦の賜であります。

さて、ところで、生徒の皆さんは、「工業高校である本校で学ぶ目的は……？」と聞かれたら、何と答えますか。皆さんは、それぞれに個性と適性をもっています。また、現代のように発達した工業技術を見ると、自分とはいささか遠い存在のように思っている人もいるかも知れません。

しかし、ハイテク産業といわれる現代の工業技術を、ここまで発展させてきた原動力の中で、工業高校卒業生が果たしてきた役割は、大変大きいのであります。つまり、工業界が工業高校生である皆さんに寄せている期待は、皆さんの想像以上のものがあることを知ってほしいのです。

さらに、世界情勢を見ると、代替エネルギー技術、資源のリサイクル技術、そして環境浄化技術等、人類の存亡をかける技術革新への課題が山積し、しかも、これらの問題は工業によって解決されるべき部分の多いことが示されています。

これからの工業は、常にそうした人類の向上に寄与するものでなければなりませんし、工業高校に学ぶ皆さんが、将来その真価を発揮する場合は、従来にもまして大きい広がりを見せています。

今回の本校創立五十周年を、新たな契機として、一層の研鑽を重ね、それぞれの適性を生かした立派な社会人となるよう心がけてください。

最後に、私たちは本校に課せられた使命の大きさを改めて認識し、先達の残された多くの栄光と輝かしい伝統を守り、地域社会のご期待に応える学校として、発展させる努力を重ねてゆくことを決意いたしております。

皆様方におかれましても、どうか今後とも宜しくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

本日は、誠に有り難うございました。

重ねて御礼を申し上げまして式辞といたします。

平成三年十一月二十二日

高知県立須崎工業高等学校長

森 岡 清

挨拶

本日ここに、多数の来賓、保護者並びに校友の方々の御臨席を得て、高知県立須崎工業高等学校創立五十周年の記念式典が盛大に挙行されますことは、誠に喜ばしいかぎりであります。

顧みますと、本校は昭和十五年、当須崎市出身の元郵政大臣尾豊先生の工業立国の志に端を発し、地元の方々の物心両面にわたる貴い協力のもと、翌十六年高知県立須崎工業学校として創立されました。

爾来、五十年の星霜を重ね、本日ここに創立五十周年の記念の日を迎えられましたことは、誠に意義深く、感激ひとしおのものがあります。

この間、本校の工業教育は、時代の進展に応じて、教育内容の見直しなどに努めるとともに、諸先輩をはじめ関係者のご苦心やご努力により、学校の整備充実も図りながら発展してまいりました。そして、錦浦を見下ろす多ノ郷の高台で、海の香りと人情味豊かな風土の中、教育の原点である人格の完成を目指し、有意な産業人の育成に努め、七千四百余名の人材を県内外の様々な分野に送り出してこられました。

卒業生諸君の実社会における活躍ぶりは、学校関係者のもとより、今日まで学校の発展にご尽力、ご協力を賜りました地域の方々にとりましても、万感胸に迫るものがあることと存じます。高知県立須崎工業高等学校で学ぶ生徒諸君は、どうか今日までの力強い歩みを忘れることなく、一人一人が向学心と礼節を忘れず、未来の展望を切り開く不撓不屈の精神を持ち続け、更に本校の新しい伝統を築き上げていただきたいと思います。

ところで、今日の我が国の工業技術は、世界的にみても高水準にあります。技術革新は日進月歩で、特にエレクトロニクス、メカトロニクス分野の進歩は著しく、世界はまさに高度情報化社会に向かって、急速に進んで

おります。資源に恵まれない我が国が、今後も国際社会において工業先進国としてその期待と役割を果たしていくためには、技術の開発とそれを支える有意な人材の育成がますます重要視されているところであります。

本校におきましては、今後とも教育内容の改善充実を図り、工業国日本を支える確かな技術と広い視野を持った多くの人材を育成されんことを期待しております。

どうか、創立五十周年を一つの節目として、教職員各位、生徒諸君が一体となって教養を高め、人格の涵養と強健な身体の錬成に努め、更に工業に関する知識と技術技能を修得させるといふ本校の教育方針のもと、更に精進を重ね須崎工業高等学校の声価を一段と高められるとともに、二十一世紀を目指してますます発展をされますよう祈念いたしましてご挨拶いたします。

平成三年十一月二十二日

高知県教育委員長

吉村 雄治

祝 辞

高知県立須崎工業高等学校創立五十周年を迎えるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

皆さんもご承知のとおり、本校は高知県の代表的政治家の一人で郵政大臣にもなられた、寺尾豊先生の物心両面にわたるご尽力により、昭和十六年に開校され、県民の大きな期待のなかで今日まで着実に発展の道を歩んでまいりました。

この間、世に送り出された幾多の優れた卒業生の方々は、県内外の産業界はいうまでもなく、あらゆる分野でめざましい活躍をされ、社会に多大の貢献をしてまいりました。

また本校は、県中西部、高吾地域の工業技術教育の核として、地域との連携も醸成され、地場産業の振興にも大きく寄与しておりまして、地域と結びついた産学一体のこの取り組みは、今後の郷土の発展に更に拍車がかかるものと、大きな期待を寄せているところであります。このことは、校友をはじめ関係各位から寄せられましたご支援、ご指導の賜でありまして、ここに深甚の敬意と謝意を表するものであります。

私は、これまで生徒の皆さんが郷土の担い手として活躍できる地場産業の振興を図るとともに、最先端技術産業をはじめ各種企業の誘致を行い、鉄道、道路、港湾等の建設を推進することが、足腰の強い経済基盤を確立し、二十一世紀を目指した、豊かで活力ある県土づくりにつながるものと信じ、積極的な施策を講じてきたところであります。

また一方、教育は「国家百年の大計である」といわれるように、県勢発展の原動力は人であるとの認識から、心豊かでたくましい人づくりを県政の最重要課題の一つとして位置づけ、そのための各種施策を推進してまいり

ました。

二十一世紀に向けての本県の夢は、果てしなく広がりますが、その担い手は若い世代であります。そういう意味からも、生徒の皆さんにかける期待は誠に大きなものがあります。この期待に応えていただくために、変化の激しい現代社会にあつて、生徒諸君は自らの立場を冷静に見つめ、より高い知識と技能の修得を目指して精進を重ねてほしいと願うものであります。

本日の、記念すべき五十周年を契機として、本校の教育目標の実現に向けて、教職員、生徒諸君が一丸となつて、更に前進されることを心から期待しております。

終わりに臨みまして、須崎工業高等学校の創立五十周年を心からお祝い申し上げるとともに、ご臨席の皆様これまでの本校に対する、いつに変わらぬご尽力に御礼を申し上げ、併せて本校の今後ますますのご繁栄を祈念いたしまして、祝辞といたします。

平成三年十一月二十二日

高知県知事

中内 力

祝 辞

本日、ここに、県立須崎工業高等学校創立五十周年記念式典が盛大に挙行されるにあたり、県議会を代表いたしまして、一言お祝いを申し上げます。

ご当地ご出身の、寺尾豊元郵政大臣の貴い浄財と、地元の方々の強いご熱意により本校が創立され、五十年を経た今、本日の慶賀すべき日を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

この間、開校当初の施設の不備や、戦後の教育改革などその歩み来たつた道は、必ずしも平坦でなく、ご苦労も多かったと存じますが、先人の献身的なご努力のもとに、立派な校風をうちたてられ、中西部地域唯一の工業高等学校として、本県産業の振興発展に多大の貢献をされ、広く県勢伸長に寄与されてきたところであり、心から敬意と感謝を申し上げます。

今日の隆盛は、ひとえに歴代校長先生をはじめ教職員各位のご熱意と、生徒諸君の努力の成果であり、また後援会長、諸先輩、PTAをはじめとする関係各位のご協力、ご支援の賜であります。

二十一世紀を目前に控え、高齢化や開放化の進行さらには国際化の高まりなど、県土を取り巻く状況は試練と変革の時代を迎えて、一層激しさを増してきております。このような中において二十一世紀を展望した産業の振興をはじめ、各般にわたり新たな対応が望まれる今日、次代を担う青少年の育成は県政の最重要課題であり、教育の果たす役割は従前にも増して重要性を増してまいりました。どうかこの意義深い五十周年を契機に、新しい決意のもとにさらなる本校発展のために、全校一致し、また地域を挙げてご努力、ご協力を願うものであります。

また関係各方面のご理解とご協力のもとに、ますますの充実強化を図り、生徒諸君の学力、教養の向上に努められ、五十年の栄えある伝統の上にさらに輝かしい歴史を開拓せられ、校運いよいよ隆盛に向かわれますようお願いするものであります。

重ねて本校のますますのご発展と、生徒諸君の前途に幸多からんことを心から祈念いたしまして、祝辞といたします。

平成三年十一月二十二日

高知県議会議長

西岡 寅八郎

祝 辞

高知県立須崎工業高等学校創立五十周年記念式典を挙行されるにあたり、須崎市並びに近郊町村を代表いたしまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

本校は、須崎市出身、元郵政大臣寺尾豊氏の巨額な私財提供に端を発し、県当局並びに須崎市を中心とする地元町村民の、物心両面にわたる多大な貴い協力のもとに、昭和十六年四月、高知県立須崎工業学校として創設せられ、「信頼と尊敬に値する工業技術者の育成」を教育目標に、もっぱら機械工業技術者養成機関として発足され、昭和十九年には造船科を増設、その後も電気科、化学工業科を増設せられ、時代の要求に応える工業高等学校として特色ある校風を樹立してまいりました。

この間、創立以来歴代校長並びに教職員各位の不断のご精励と、それに応える生徒諸君のたゆまざる勉学と努力に対し、文部大臣賞をはじめ、工業技術の学習成果に対する全国工業高等学校長協会理事長表彰を受賞、さらに加えて充実完備した施設により年々優秀な卒業生を輩出し、県下はもとよりのこと、我が国工業界に多大の貢献をもたらしておられるのであります。

本日、この慶典において輝かしい五十年の歳月を回顧し、記念されます各位のご心中は、さぞ感慨無量のものがあるかと拝察し、心からご同慶に存する次第であります。

いまや、世界をリードする先進経済国として、その地位を確固たるものとしている我が国ではありますが、この進展を支えてきたのは高度の先進技術であることはいまでもありません。

今後とも、より一層の発展を期するためには、本校の教育方針でもあります、より高度な、より新しい工業に関する技術と知識、技能を修得し、実践してゆくことが肝要であることはいまでもないところでありまして、

伝統に輝く本校教育に期待するところは誠に大であると確信いたします。

どうか、森岡 清校長をはじめ、本日の創立五十周年記念実行委員会委員長清家 寛様並びに関係各位におかれましては、本日の慶典を契機といたしまして、ますます校運の隆盛に全校一致の努力を傾注され、広く工業界の発展に寄与されますようお願いいたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

平成三年十一月二十二日

須崎市長

戸田 喜生

祝 辞

県下の高等学校を代表いたしまして一言お喜びを申し上げます。

校長先生をはじめ教職員、校友、保護者、生徒の皆様、本日の創立五十周年記念式典、誠におめでとうございます。心からお慶びを申し上げます。

今日の式典は、昭和十六年、本校が本県二番目の工業学校として創立され、この間七千五百名の卒業生が産業界はもちろんのこと、それぞれの分野で先頭に立ってご活躍されていることなど、建学の精神に思いをいたし、さらなる発展を誓い合うのが目的であろうと存じます。

中国の諺に「井戸の水を飲むときは、井戸を掘った人の恩を忘れるな」とあります。

生徒の皆さんには、須崎工業高校というすばらしい井戸を掘って下さった寺尾豊先生をはじめ、歴代の先生方、先輩方の無言の語りかけと励ましを真摯に受け止めて、二十一世紀の日本の指導者たらん気概をもって、新たな第一歩を踏み出してくださいよう願うものであります。

この会場には、大勢の校友の方々もご参列のことと存じます。厳肅な式典のなかで、それぞれの時代に、それぞれの校舎で過ごされたドラマの一コマ一コマが蘇って、感激と感動も一入のものがあろうと思います。皆様役割を見事に果たされましたことが、よき伝統の礎となり、またそれぞれのお立場で、先頭に立ってご活躍されていることが、今日のおよき日を一層華やかなものにしていきます。改めて敬意とお祝いを申し上げる次第でございます。

ところで、二十一世紀まであと十年足らずとなりました今、国際化、情報化など社会の変化から、高校教育も

大きく変わることが求められています。ただ、私たち高校教育に直接携わる者として、我が国の将来はこれでありのか、社会の風潮だけに流されていないかなど、いろいろの思いが浮かんでまいります。例えば、普通科志向が高まっていますが、我が国が世界の大国になった課程で最も大切な働きをしたのは、工業教育から生まれた工業力であったことなど、忘れてはならないことがあります。

このような中で、本校が工業教育に今求められているものを積極的に取り入れ、産業界から高い評価を受けていることは、誠に頼もしく、先生方はもちろんのこと、生徒の皆さんの日ごろのお取り組みに対しまして敬服いたしますとともに、なお一層のお励みを願うところでございます。

本日は誠にめでとうございました。私は、先ほ दौरान、生徒の皆さんの真剣な眼差しと静肅さ、それにもまして声高らかに校歌を斉唱されたことに感心しています。

重ねて本校の限りないご発展と、ご参列の皆様のご健勝をご祈念申し上げまして、お慶びの言葉といたします。

平成三年十一月二十二日

高知県高等学校長協会会長

野 口 顕 二

来賓御芳名 (敬称略)

県教育次長	中平 昭	(知事代理)
県議会副議長	森下 博之	(議長代理)
県議会議員	梅原 一	
県議会議員	山本 明司	
県議会議員	藤戸 進	
県教育委員	寺尾 好男	(委員長代理)
県総務課長	岡崎 健	
県総務課財産班	山中 寛	
県指導第一班長	山脇 和隆	
県指導主事	平田 健一	
県高校長協会会長	野口 顕二	
県産振理事長	塩田 一郎	
須崎市教育長	高橋 楠好	(市長代理)
佐川町助役	渡辺 宏允	(町長代理)
中土佐町長	西森 英身	
葉山村長	川村 義孝	
須崎営林署長	細木 建	
須崎商工会会頭	西内 正	

初代校長夫人	中内 菅子
第七代校長	小松 一夫
第九代校長夫人	澤本 千鶴
第十代校長	村木 威
第十一代校長	大畠 正賢
第十二代校長	西村 博
第十三代校長	宮地 恒雄
龍馬学園理事長	佐竹 茂一
四国電力(株) 須崎営業所長	濱川 恭二
四国電気保安協会 高知支部長	西森 政章
大阪セメント(株) 高知工場次長	山口 毅
(株)ミロク製作所人事課長	野村 稔
東洋電化工業(株)人事課長	小島 修二
都築紡績(株) 高知工場副工場長	竹村 利男
(株)高知ミットヨ工場次長	檜山 和美
東洋精密機械(株)人事課長	津野 正男

(株)フクシ 代表取締役 山崎 米蔵

学校医

野中 規弘

新高知重工(株)常務取締役 安井 護

学校薬剤師

金澤彌三平

その他 学校関係者・旧教職員・同窓会・PTA各会員等多数

祝典来賓者総数 二一九名

祝電発信者御芳名 (敬称略)

県議会議員 小松 雅

県議会議員 結城 建輔

四国銀行頭取 濱川 耕一

高知銀行頭取 清水 泉

日鉄工業(株)鳥形山工業所長 小田 剛

(株)日立製作所四国支社長 日下 善博

高知ダイハツ販売(株) 代表取締役 辻 福夫

(株)扇商会 代表取締役 武石 英男

伊野紙(株)

川崎製鉄(株)水島製作所

その他 県立高等学校長・旧教職員・同窓会会員等

三一通

教 教 教 講 教 職 教 講 教 教
諭 諭 諭 師 諭 員 諭 師 諭 諭

竹 武 岡 多 津 大 中 植 西 山
崎 森 林 田 野 塚 内 田 森 崎
貞 幸 一 和 泰 幸 昌 吉
男 利 馬 子 隆 子 裕 子 身 広

以上
三〇名

生徒憲章の発表

本日は、私たちの学校の創立五十周年記念式典に、多くの先輩方、高知県並びに学校関係者の方々のご列席を戴きまして、有り難うございます。生徒会を代表しまして、厚く御礼を申し上げます。

社会の中で立派にご活躍されている多くの先輩方に、今こうしてお目にかかり、私たちは改めてこの須崎工業高校を誇りに思います。

しかし、日々の私たちの学校生活を振り返ってみますと、決してすべての分野において頑張っていたとはいえないと思います。私たち生徒会は、何か、学校生活に物足りないものを感じながら過ごしていました。

そんなとき生徒会担当の先生が、部室の黒板に「生・徒・憲・章」の四文字を書き、その制定の意義を話してくれました。

創立五十周年を迎える立派な学校に耻じない生徒になりたいという、みんなの思いが一つになって、私たち執行部は、生徒憲章制定の原案作りを始めました。

十月中旬には、クラスの代表者と一緒に、大野見村でリーダー研修を行いました。その中で十分な話をする事ができました。

その結果を要約すれば、

- ◎ 挨拶が出来るようにしたい
- ◎ 授業中の私語をなくしたい
- ◎ マナーをよくしたい
- ◎ きれいな学校にしたい

ということです。

当たり前のことばかりで先輩方には恥ずかしいのですが、今までの私たちにはこれらが完全にはできていなかったのです。その反省から、これらのことを私たちの毎日の生活目標に置き、そして大きな視野に立つて憲章を考えました。

この五十周年記念式典の場をお借りして、先輩の方々、高知県並びに学校関係の方々の前で、生徒憲章を発表させていただきます。

高知県立須崎工業高等学校 生徒会

生徒憲章

- 一、 私たちは 須崎工業高校を誇りとし 社会の信頼に応えます
- 一、 私たちは 日々の学習を通し 有能な工業技術者を目指します
- 一、 私たちは 心身を鍛え 規律ある健康な生活を送ります
- 一、 私たちは 真理と正義を重んじ 人権を尊重します
- 一、 私たちは 自主独立の精神を持ち 視野を世界に拡げます

私たちは、先輩方に負けないよう、またこの学校を、より一層立派な学校にしてゆくためにこの憲章を深め続け、実行することを誓い、ここに宣言を終わります。

平成三年十一月二十二日

高知県立須崎工業高等学校

生徒会代表

石本 篤司

祝
楽演
奏

尺	八	山	本	秀
十	七	山	平	恭
琴	弦	大	妻	紀
				俱
				峯

曲
目

「吉野の静」

創立五十周年記念祝賀会

(平成三年十一月二十二日 於 須崎市農協会館)

祝賀会次第

- 一、 開会の辞 教頭 森 峯雄
- 二、 主催者挨拶 副委員長 笹岡 公明
- 三、 祝辞・乾杯 高知県教育委員 寺尾 好男 先生
- 四、 開宴
- 五、 終宴・万歳三唱 第十代校長 村木 威 先生
- 六、 閉会の辞 教頭 森 峯雄

記念写真

●ご多忙中お越しいただきまして有り難うございます（ご来賓）

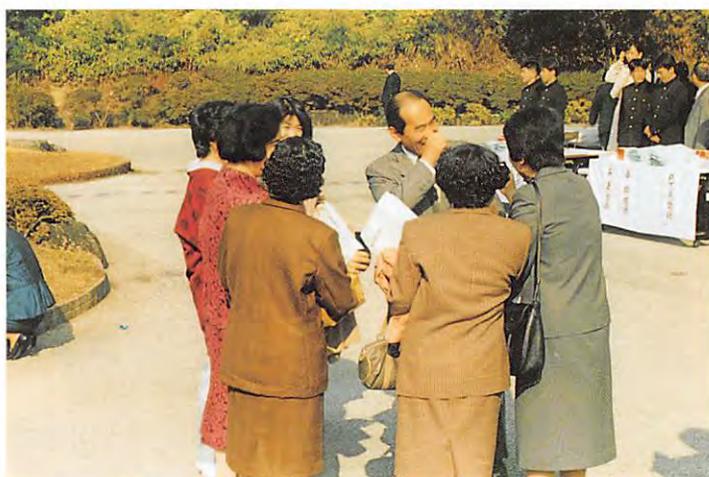






● いらっしやいませ ようこそお越しくださいました(旧教職員・同窓会)





● I t s B e n A S o L o n g L o n g T i m e !



● 式典に花を添えた造船クラブ建造船「煌煌丸」

式典



着席



黙禱



開式の辞(森 教頭)



校歌斉唱（卒業生も合唱してくださった）



委員長挨拶（同窓会 清家会長）



学校長式辞（森岡校長）



教育委員会挨拶
(教育委員 寺尾好男殿)



県知事祝辞
(教育次長 中平 昭殿)



県議会議長祝辞
(県議会議長 森下博之殿)



須崎市長祝辞 (市教育長 高橋 楠好殿)



県校長協会会長祝辞 (岡豊高等学校校長 野口 顕一殿)



ご来賓席

特別功勞感謝状の贈呈





勤続功労感謝状の贈呈





生徒憲章の発表



祝
楽



生徒憲章碑



創立功労者・創立事情



元郵政大臣 寺尾 豊氏

創立事情

本校は、須崎市出身、元郵政大臣寺尾豊氏の巨額の私財提供に端を発し、県当局並びに須崎市民の物心両面にわたる貴い協力のもとに、昭和十六年四月に開校した。

創立当時の事情は、当地域社会の多くの人々の美しい奉仕の精神による美談の数々に含まれている。

当時、本県の中学校（現在の高等学校）は主として高知市に集中し、わずかに安芸及び幡多地域にそれぞれ中学校、女学校があるのみで、その中間地域である須崎にも中学校の設置を望む声次第に強くなっていた。

当時の須崎町長であった池内実吉氏は、教育に対する熱意が強くこの地域の要望に応えるべく、中心となって須崎への中学校新設の運動を始められた。

池内氏はその運動にあたって、上記した寺尾豊氏に相談された。寺尾氏は、郷土のために役に立てば幸いだと、極めて巨額の私財



元須崎市長 池内実吉氏

を寄付せられ、併せて「本県には工業学校が一校しかなく、できれば新設は工業学校にして欲しい」とのご希望を述べられた。このご寄付とご希望がきっかけになって、県立須崎工業学校創立の具体案がまとまり、昭和十六年二月に設立が認可された。

開校当時は校舎がないため、須崎国民学校（現須崎小学校）の諸施設を借用して授業を行いながら約二年間にわたり、学校敷地の埋め立て整地作業や校舎の建築を行ったが、その作業は、当時の生徒、教職員はもとより旧須崎町を中心とする周辺地域の多くの人々、延べ六万五〇〇〇人に上る人たちの汗と油の尊い奉仕作業によって成されたものである。

かくして校地一万四九四二・四平方^{メートル}、校舎三三一九・八平方^{メートル}が竣工し、盛大な落成式を行ったのが、昭和十八年五月二十五日であった。

この五月二十五日を本校の創立記念日とし、学校創立に際してご尽力、ご協力下さった方々への感謝の意を表するとともに、本校の良き伝統を引き継ぎ発展させることを念じているのである。

歴代
学
校
長

初代校長 中内 知章先生
(昭和16年4月～20年12月)



第三代校長 小林 秀雄先生
(昭和22年4月～26年3月)



第二代校長 西森 稜威穂先生
(昭和21年1月～22年3月)



第五代校長 森岡 貞篤先生
(昭和27年4月～34年3月)



第四代校長 前田 建造先生
(昭和26年4月～27年3月)



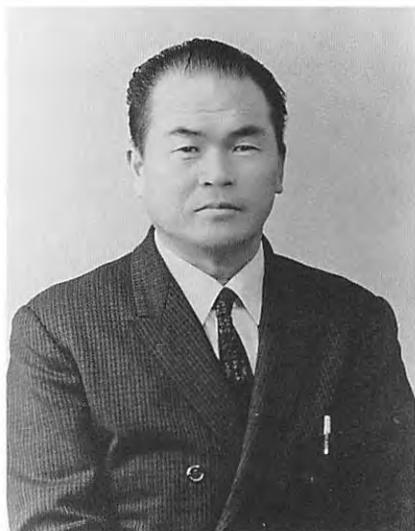
第七代校長 小松 一夫先生
(昭和36年4月～39年3月)



第六代校長 松岡 常雄先生
(昭和34年4月～36年3月)



第九代校長 澤本 豊先生
(昭和41年4月～47年3月)



第八代校長 西本 澄雄先生
(昭和39年4月～41年3月)



第十一代校長 大畠 正賢先生
(昭和53年4月～55年3月)



第十代校長 村木 威先生
(昭和47年4月～53年3月)



第十三代校長 宮地 恒雄先生
(昭和57年4月～60年3月)

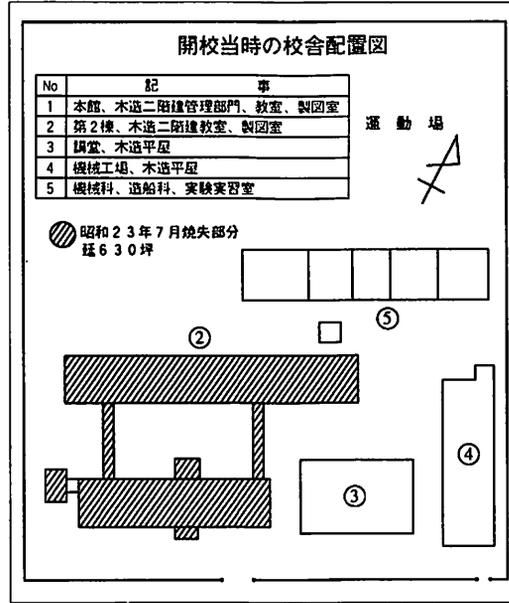


第十二代校長 西村 博先生
(昭和55年4月～57年3月)

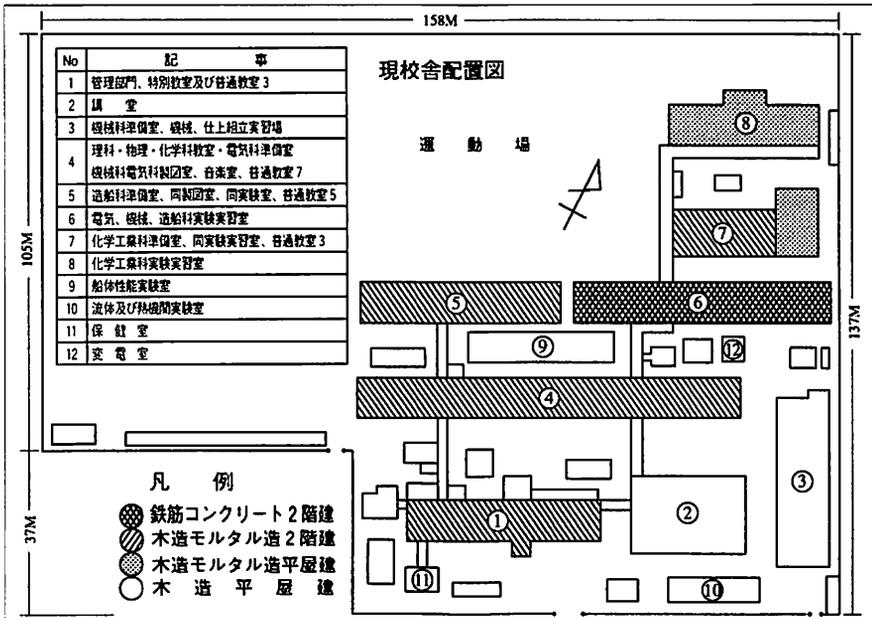


第十四代(現)校長 森岡 清先生
(昭和60年4月～)

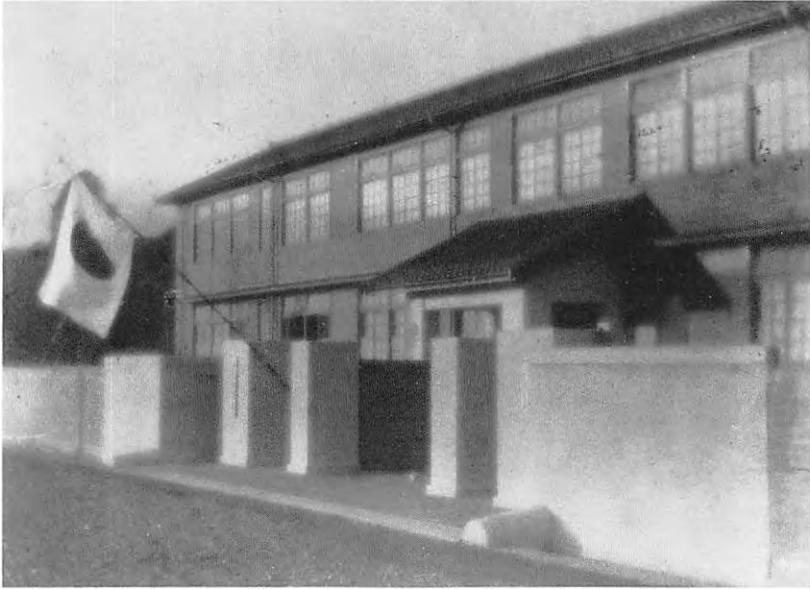
校舎の変遷



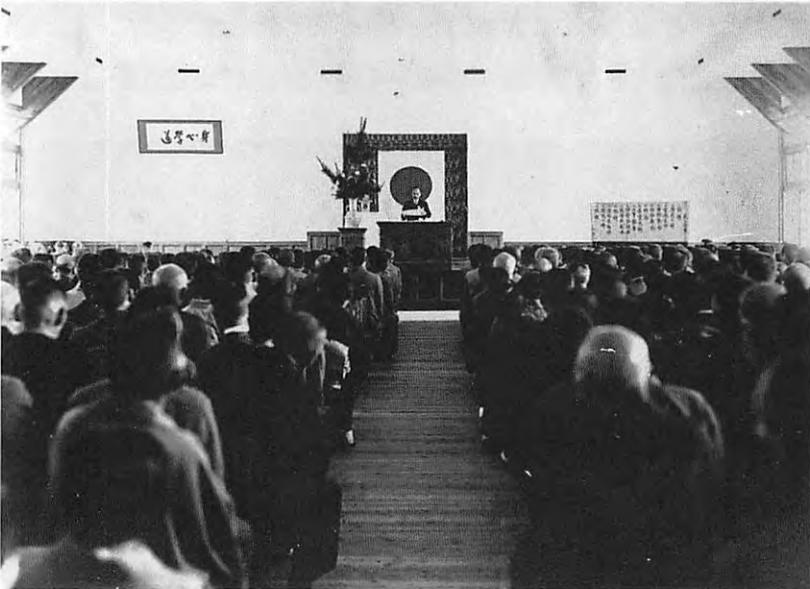
創立当時の校舎配置図
 (斜線)は昭和23年7月焼失した部分)



移転前の校舎配置図（昭和46年当時）



創立当時の正門（昭和18年5月25日）



校舎落成式（昭和18年5月25日）



裏山からの展望（昭和29年6月1日）



南面 本館・講堂・機械工場を望む（昭和31年）



航空写真（昭和33年2月15日）

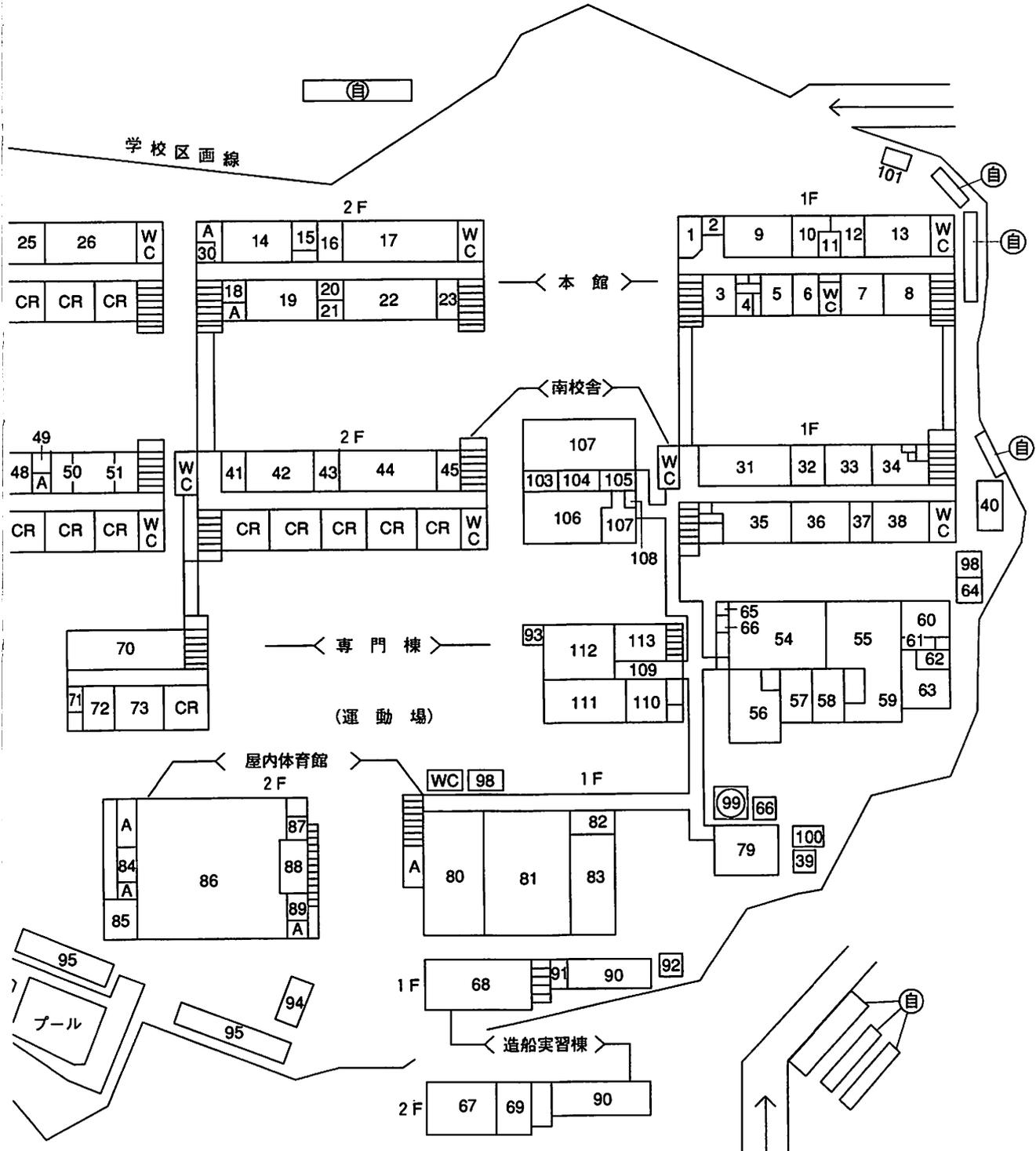


航空写真（昭和35年5月）



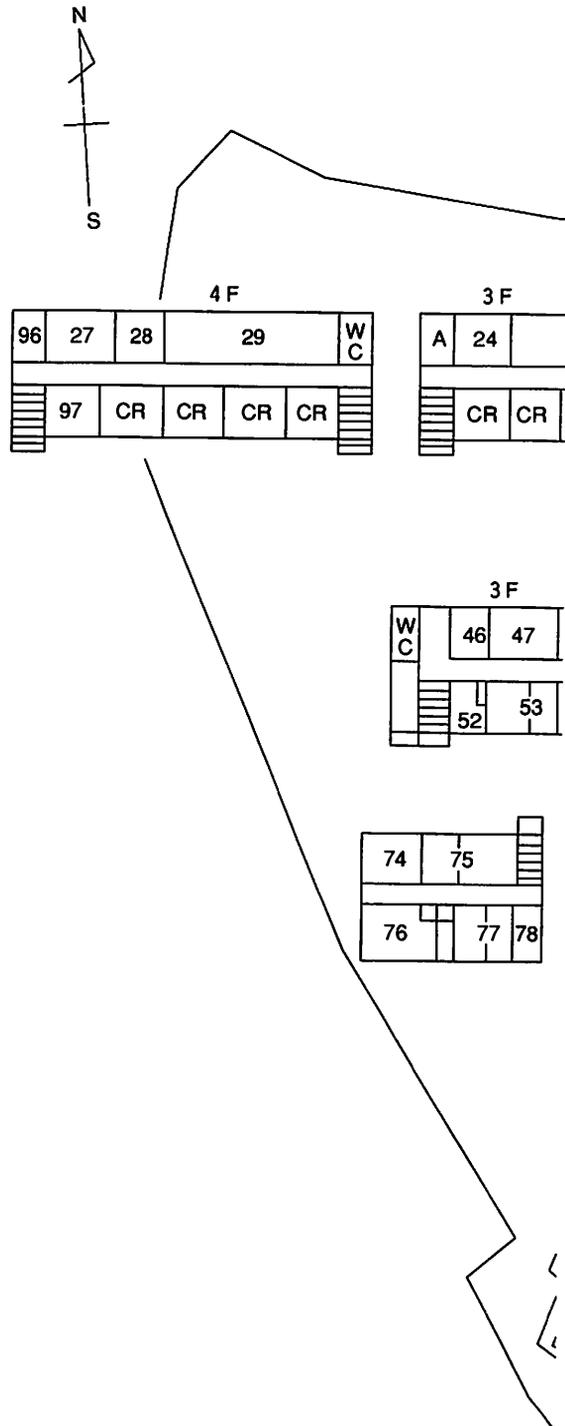
航空写真 移転前の学校全景（昭和46年10月）

新校舎配置図 (平成4年3月)



- | | | | |
|----|----------------------------------|-----|--------------|
| 1 | 玄関 | 59 | 板金工作室・工具室 |
| 2 | 第二応接室 | 60 | 電気溶接室 |
| 3 | 事務室 | 61 | 生徒更衣室 |
| 4 | 守衛室 | 62 | 資料室 |
| 5 | 校長室 | 63 | 管理室 |
| 6 | 応接室・会議室 | 64 | 油庫 |
| 7 | 進路指導部室 | 65 | ボイラー室 |
| 8 | 保健室 | 66 | 浴室 |
| 9 | 化学教室 | 67 | 整備実習室 |
| 10 | 化学準備室 | 68 | 建造実習室 |
| 11 | 暗室 | 69 | 準備室 |
| 12 | 物理準備室 | 70 | 電気機器実習室 |
| 13 | 物理教室 | 71 | 暗室 |
| 14 | 視聴覚室 | 72 | 電気応用実習室 |
| 15 | 映写室・準備室 | 73 | 準備室 |
| 16 | 教材室 | 74 | 電気工事実習室 |
| 17 | 製図室 | 75 | 自動制御実習室 |
| 18 | 生徒会室 | 76 | 化学工学・設備 |
| 19 | 職員室 | 77 | 管理実習室 |
| 20 | 放送室 | 78 | 物理化学実習室 |
| 21 | 印刷室 | 79 | 薬品器材室 |
| 22 | 会議室 | 80 | 化学実習室 |
| 23 | 生徒指導室 | 81 | 格技室 |
| 24 | 標本室 | 82 | 土間 |
| 25 | 製図室 | 83 | 厨房 |
| 26 | 製図室 | 84 | 食堂 |
| 27 | 美術教室 | 85 | 玄関 |
| 28 | 準備室 | 86 | 管理室 |
| 29 | 製図室 | 87 | ホール |
| 30 | 暗室 | 88 | 更衣室 |
| 31 | 建造・溶接・板金実習室 | 89 | ステージ |
| 32 | C.A.D実習室 | 90 | 放送室 |
| 33 | 工業計測実習室 | 91 | 運転性能実習室 |
| 34 | 材料試験実習室
(工具室・暗室) | 92 | 準備室 |
| 35 | 材料試験・機械・船用機関実習室
レントゲン室・暗室・測安室 | 93 | 焼却炉 |
| 36 | 熱機関実習室 | 94 | シャワー室 |
| 37 | 準備室 | 95 | 体育器具室 |
| 38 | 流体機械実習室 | 96 | 部室 |
| 39 | 劇薬庫 | 97 | 美術準備室 |
| 40 | 変電室 | 98 | 教育相談室・同和教育部室 |
| 41 | 高周波室 | 99 | 倉庫 |
| 42 | 電子工学実習室 | 100 | 土俵 |
| 43 | 準備室 | 101 | 放射能排水処理室 |
| 44 | 電気計測実習室 | 102 | 消火ポンプ室 |
| 45 | 電力実習室 | 103 | 計算機実習室 |
| 46 | 準備室 | 104 | ホスト |
| 47 | 化学分析実習室 | 105 | 準備室 |
| 48 | 天秤室 | 106 | 昇降所 |
| 49 | 暗室 | 107 | 図書室 |
| 50 | 機器分析室 | 108 | 司書室 |
| 51 | 工業試験実習室 | 109 | 倉庫 |
| 52 | 準備室 | 110 | 昇降所 |
| 53 | 製造化学実習室 | 111 | 家庭科準備室 |
| 54 | 機械実習室 | 112 | 被服実習室(総合) |
| 55 | 仕上組立実習室 | 113 | 食物実習室(調理) |
| 56 | 鍛造実習室・管理室 | | 食物実習室(試食) |
| 57 | 木型室 | | |
| 58 | 鍛造実習室 | | |

CR 普通教室
A 器具室
W.C 便所
㊦ 自転車置場





昭和52年3月
300M上空から撮影

航空写真 移転後の学校全景（昭和52年8月）



西側山からの展望
（平成4年3月）



航空写真 50周年学校全景 (平成2年5月25日)



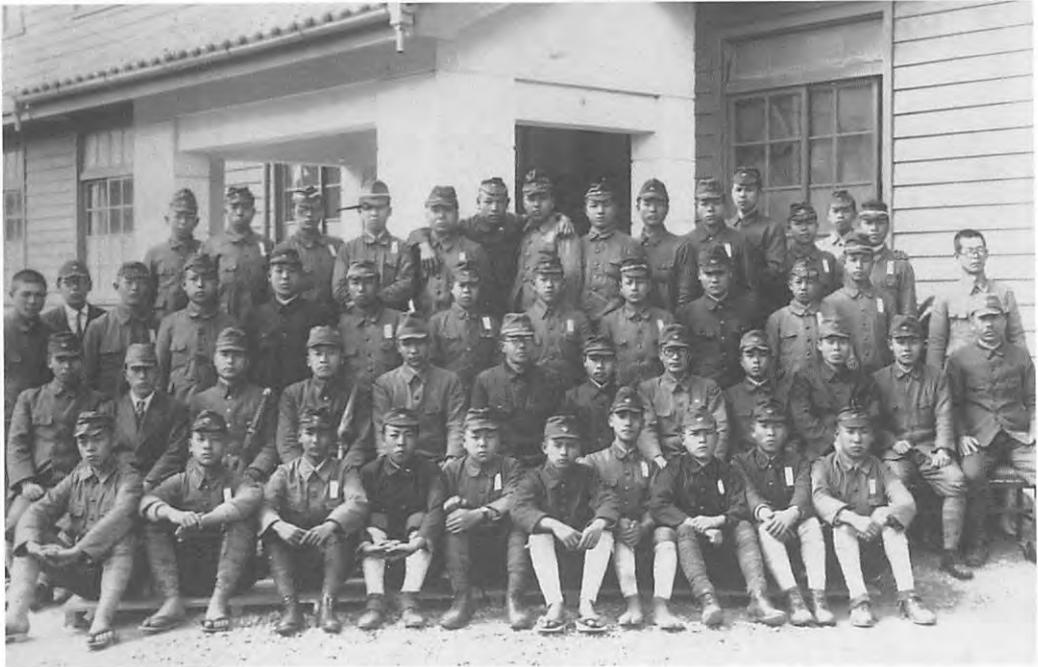
記 録 写 真

その一 旧校舎の時代





機械科二種 第1期卒業生 昭和18年 玄関前にて

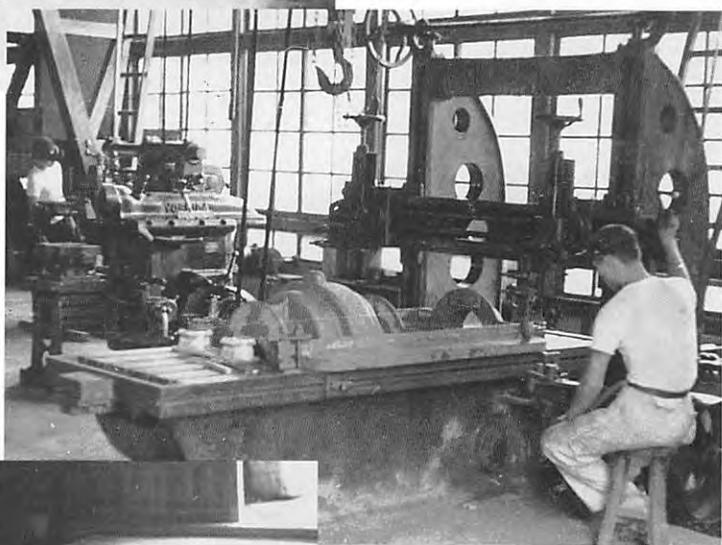
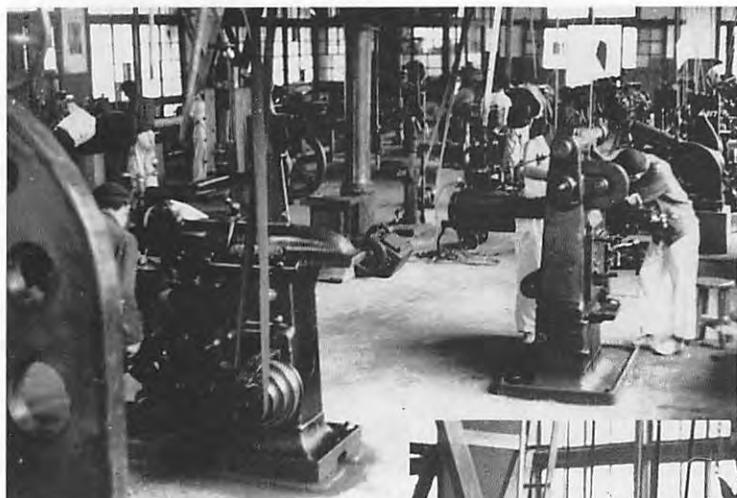


機械科一種 第1期卒業生 昭和20年3月 玄関前にて

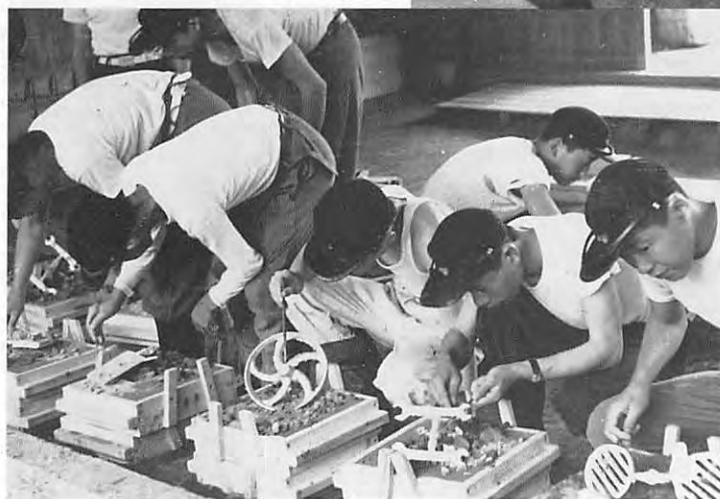
機械科実習と設備

機械実習工場の風景 その一（昭和30年ころ）

ほとんどの機械はベルト掛けで、天井にカウンタシャフト（中間軸）が通っていた。カウンタシャフトの取り付けは、初代中内校長先生が自ら天井の梁に穴をあけボルトを通し軸受の取り付けをされたという。



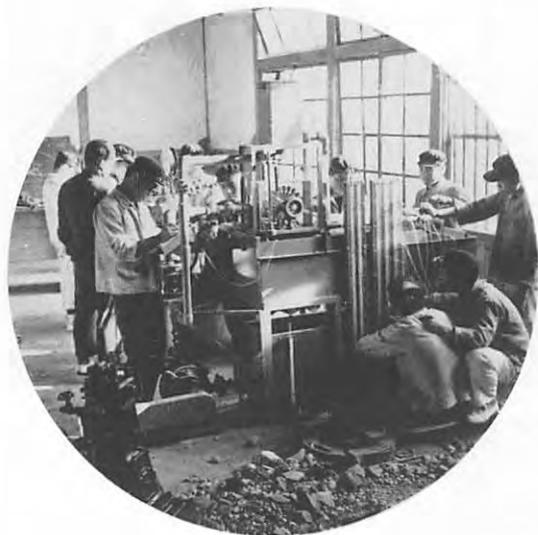
機械科のシンボリック存在だった
プレーナ



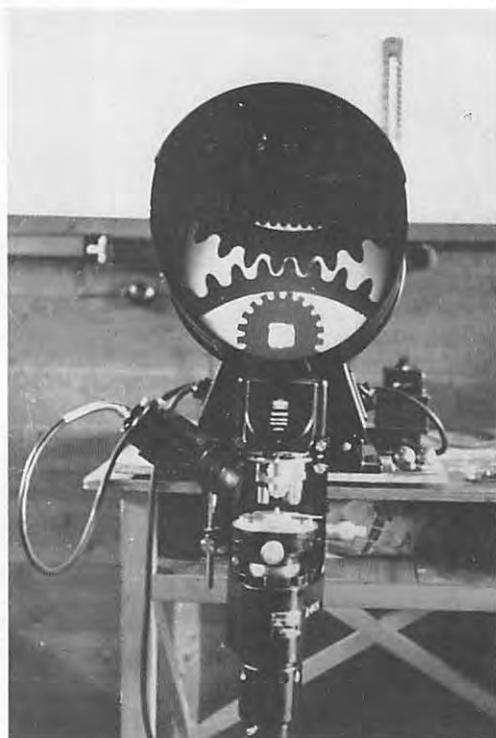
鑄造実習

機械実習工場の風景 その二（昭和46年ころ）

ベルト掛けの機械はなくなった。すべてがモーター直結になり機械工場は生まれ変わったようになった。昭和30年代後半から40年前半にかけて全国の工業高校の設備は高度成長時代を反映してその様子は一変した。



水力学実験 昭和34年、講堂の前に原動機実験室が竣工した。そこに水力学実験装置がまず設置された。



精密測定実験（昭和30年ころ）それまで機械工作中心だった実習に、初めて実験的な内容が加わってきた。

造船実習

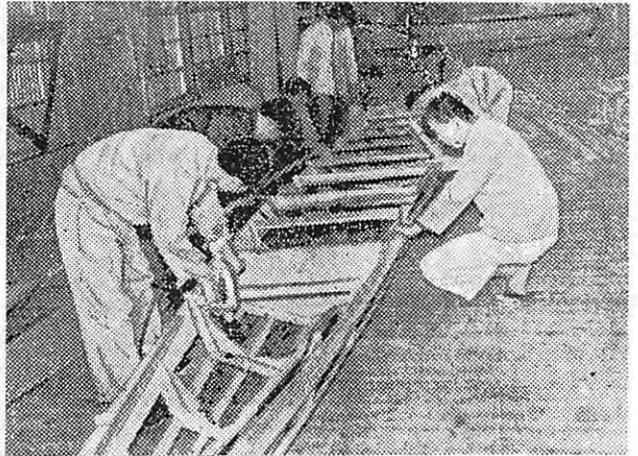
造船科が初めて造った船は和船だった（昭和26年ころ）。須崎の船大工さんの指導により先生も生徒も一緒になって造ったものだった。その船は、後日機械科の広瀬先生の開発による、自転車改造した足踏み式動力船に変身し、糺池で試運転を行った。踏めば踏むほどスピードが出て、池のボラが驚いて跳ね、船の中に飛び込んできたという（詳細は165ページ栄冠の陰に一）。

それ以後、レース用ボート（ナックルフォア）、ヨット（ジンギタイプ）と、次々に造られ、更にFRP船へと発展し建造実習も軌道に乗った。



バツテンを使っての現図作り

昭和30年 高知新聞掲載の記事より



製作を急ぐ造船科の生徒

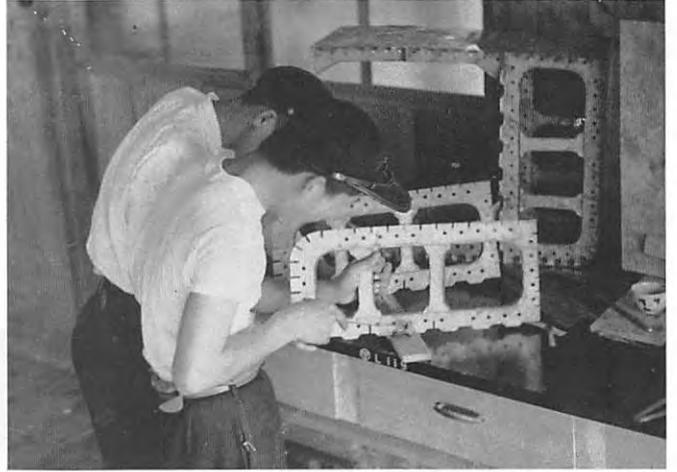


須崎湾は絶好の試運転場

（須崎）県立須崎工業高校で長さ十尺余のレース用ボートがつくられている。同校造船科二年の生徒十八名が久正一教諭の指導で実習をかねて今春から製作しているもので、むろん高知県下でははじめて。

万円。日本海艇協会指定の標準型で、この種のボートは県下で高知大学に横浜市の造船所がつづいたものが二隻あるだけという。

須崎工高、レース用を製作



断面構造模型の工作



ヨットの建造



F R P 船の製造（昭和42年ころ）建造船は段々と大形化し、ついに屋外へ船体を出すのに校舎入り口の柱を切り取って出したこともある（後に修復した）。

電気通信科実習

電気通信科の設置は昭和27年度だった。そのころ電気通信科という名称は聞き慣れないことばだった。今ならさしずめ電子科というところだろう。

エレクトロニクスのはしりだった電気通信科は、そのユニークさのために、教育課程の設定にも、実習設備の整備も大変だった。

昭和40年には、この科が電気科になり現在にいたっている。



電気の基礎「直流回路実験」 電源はバッテリーだった。



ラジオの工作と調整 当時先生の中には、ラジオ作りの名手がいた。5球スーパーラジオが全盛のころである（昭和28年ころ）。

昭和30年11月には、文部省産業教育研究指定校として「工業高校電気通信科における生産実習の好ましい運営について」と題する研究発表会を開催した。



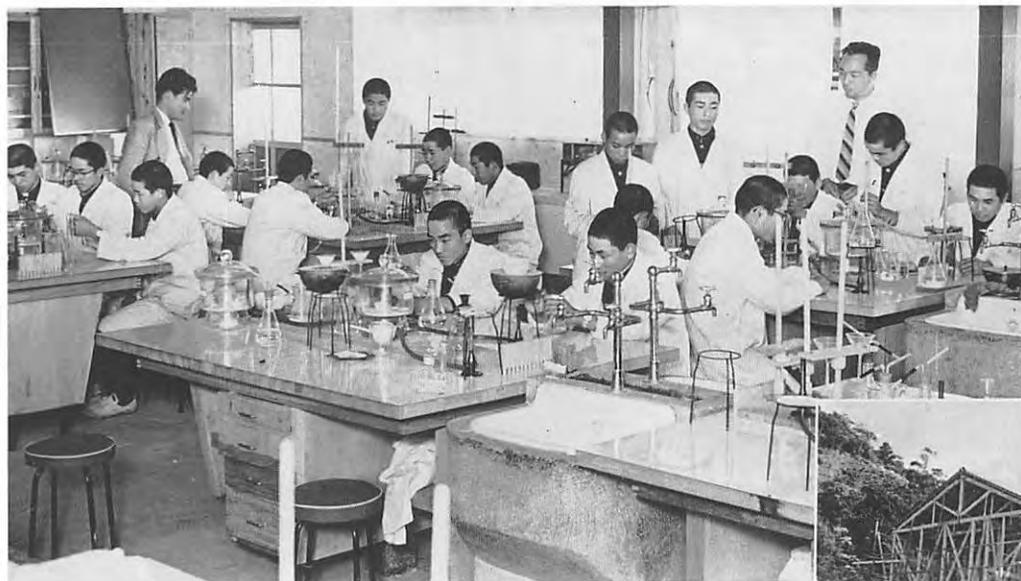
電気通信実習 テレビはあったが映らなかった。高知にしか放送局のアンテナがなく、須崎で受信するには余りにも遠かったからである。テレビ1台ウン十万円、今でいえばハイビジョンというところか。



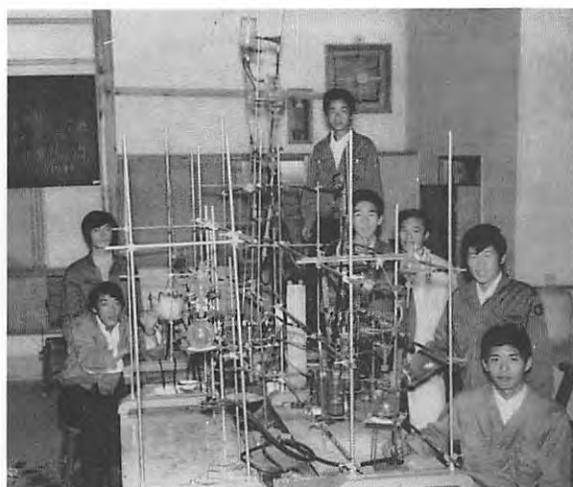
モールス信号による通信実習も正規の授業だった。

化学工業科実習

「工業化学科」と「化学工業科」はちがう。うちは「化学工業科」だ。初期の卒業生なら一度は聞かされた言葉という。
化学工業科の設置で、本校も総合工業高校としての態勢が整った。



化学の基礎 分析実習



化学合成実験



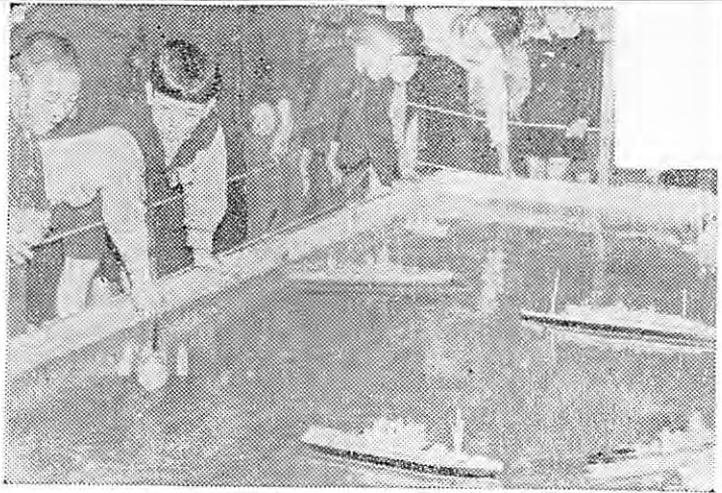
放射線測定実習も行ってた。

文 化 祭



本校最初の文化祭は、昭和23年だった。それ以後しばらくは2年ごとに開催された。第4回文化祭（29年）のころから仮装行列、第5回から前夜祭（ファイアーstorm）も加わった。それ以来仮装行列は須崎の名物になり、沿道は見物人でにぎわいをみせ、前夜祭は時間制限を忘れるほどだった。





動く模形土船 大人気

豆放送局や機械実習も

須崎工高文化祭盛況裏に終る

(須崎) 高知県立須崎工業高校では三、四の両日多様な文化祭行事を催し、大人や子供の参観でにぎわった。この催しは三日目に一度行われ、しかも今年は何度創立十五周年にあたることから在学中の思い出をこめた数々の生徒作品展示や、実習授業の公開が行われ、動く工業展、生きた工場見学として参観の人々に深い印象を与えた。写真写真は精巧な模形船に夢をそそられる子供たち(造船科)

機械科では百五十坪の実習工場に旋盤、ライス盤、プレーナーなど二十数台を駆使して、機械製作の実習が行われ、生徒自製のディゼル発動機や、一昨年通産大臣賞を受けた船舶用エンジンも人目をひいたが、造船科では教室の床に設けられた二坪ばかりのプールに電池で走る模形船が数隻走り、古風な水車船

あり、軍艦あり、タンカーありで水槽の両側に陣取った子供たちを喜ばせた。

また電気通信科では、実験用のこみ入った電気器具がずらりと陳列され、電気の魔術を応用した寿命測定器や、魔法の鏡も人気を呼び、またラジオ相談室が一般市民にラジオ修理のサービスを行った。ワイヤレス・プレーヤすなわち豆放送局や電気抵抗の変化を利用した電気オルガンも異彩を放ったほ

か、各教室には家庭電化器具の展示会や、試作電器によるレコード・コンサートも催され映画部製の八咫鏡、新須崎風景も大好評を博した。

なが社研部の新聞、写真展も校外有志の協力で充実した内容を示し、短かい二日間の日程は盛り沢山のプログラムのうちに意欲深く閉幕した。

型船が数隻走り、古風な水車船



“大勢来てください”



スピーカーをつけた三輪自動車が先導した。



何となくテレクサイ……



売り上げを稼ごう…と食堂部



街を歩くうちに段々と笑顔も出る。



機械工場の人り口付近



工場内は人の波



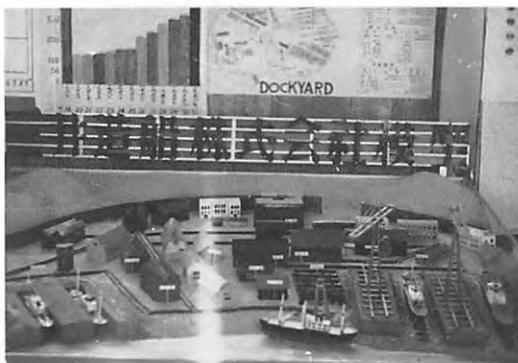
すべての機械を生徒によって運転した。



鋳型の製造・不思議そうに見ている少女



動く機構模型を熱心に見入る人が多かった。



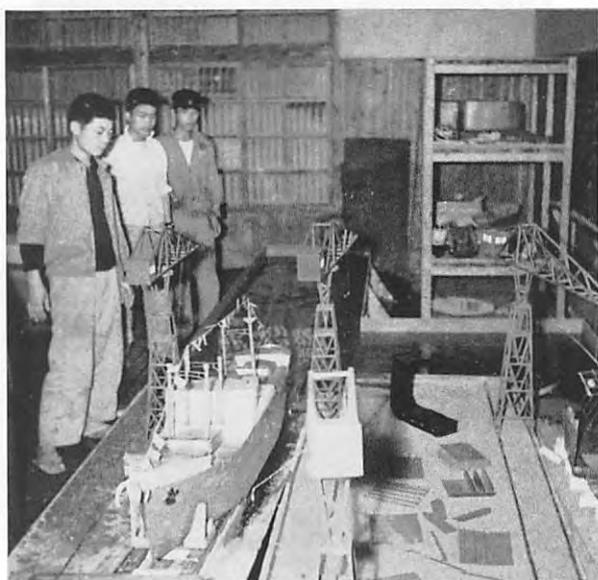
DOCKYARD模型



現図室に造られた船首部分



いろいろの模型船が走り回る。



進水式の模型（本物同様に船が進水する）



口に手を入れると目の電球が点灯する。



モールス信号による電報の送受信



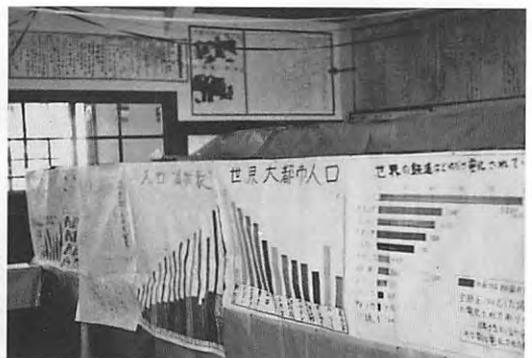
H i F i 電蓄のレコードコンサート



家庭電化製品の展示も人気があった。



新聞部の展示



社研部の展示



運動部の展示 数々の優勝カップ



にぎわいをみせた食堂部と裏方さん



ブラスバンド部

優勝に輝く相撲部

ス。ホ。ル。便。リ

遂に果した全国制覇の宿願 本年度相撲部の活躍の跡を省みて

三月全国に須磨工専高があり、その名を挙げた中心の鶴島弘主将を筆頭に、遂に果した宿願の達成を遂げた。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。



(写真説明) 全国大会優勝の木校相撲部右より
長山、田原部長、高山、岡崎君

三月全国に須磨工専高があり、その名を挙げた中心の鶴島弘主将を筆頭に、遂に果した宿願の達成を遂げた。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。

昨年度相撲部は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。

昨年度相撲部は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。

栄冠の高山君

選抜高校相撲大会

選抜高校相撲大会で、高山君が栄冠を手にした。彼の活躍は、全国の注目を集めた。彼は、力強い相撲スタイルで、多くの強敵を打ち倒した。

選抜高校相撲大会

選抜高校相撲大会の結果は、高山君の優勝が決まった。これは、相撲部にとって大きな栄光である。大会は、全国のトップ選手が集まり、激しい戦いを繰り広げた。

全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。

準決勝

準決勝の戦いは、非常に激しかった。両チームの選手は、最後まで諦めず、力を出し切った。観客も、熱い応援を送った。

高山選手談

高山選手は、優勝について、感謝の言葉を述べた。彼は、チームメイトや指導者のサポートのおかげで、優勝することができた。彼は、今後の活躍に意気込みを示した。

優勝戦

優勝戦は、相撲部にとって最大の瞬間だった。高山君は、力強い相撲で、優勝を手にした。これは、彼にとって大きな栄光である。

新主将談

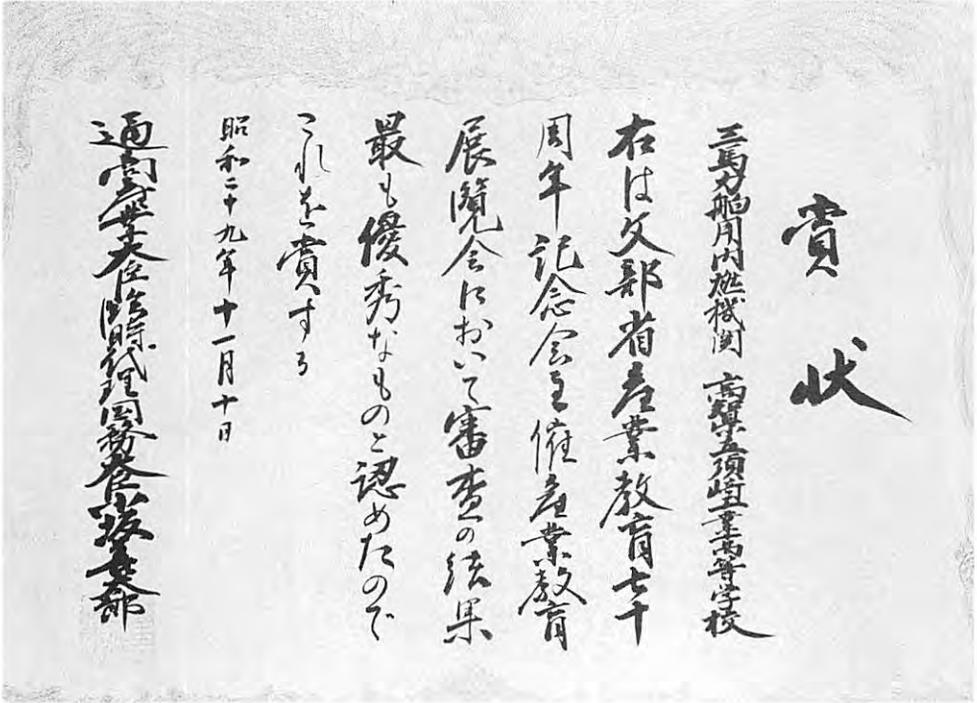
新主将は、優勝について、感謝の言葉を述べた。彼は、チームメイトや指導者のサポートのおかげで、優勝することができた。彼は、今後の活躍に意気込みを示した。

相撲部

相撲部は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。

相撲部

相撲部は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。この一年は、全国的な大会、金沢、三本木、に連勝した。



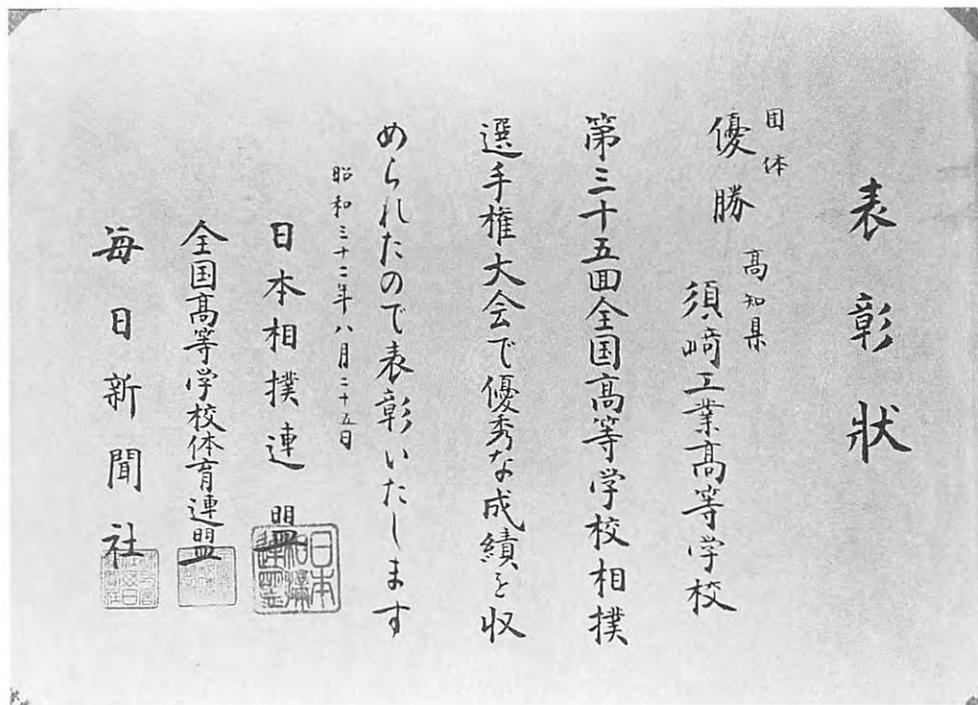
指導・顧問

広瀬雄助先生

製

作

機械工作部員



昭和32年度 全国選手権優勝
 岡崎憲史・中井幸増・甲把辰夫・中川 浄
 監督・顧問 田原敏雄先生



昭和29年度 全国初優勝
 岡崎嘉男・高山三郎・長山 正
 監督・顧問 田原敏雄先生

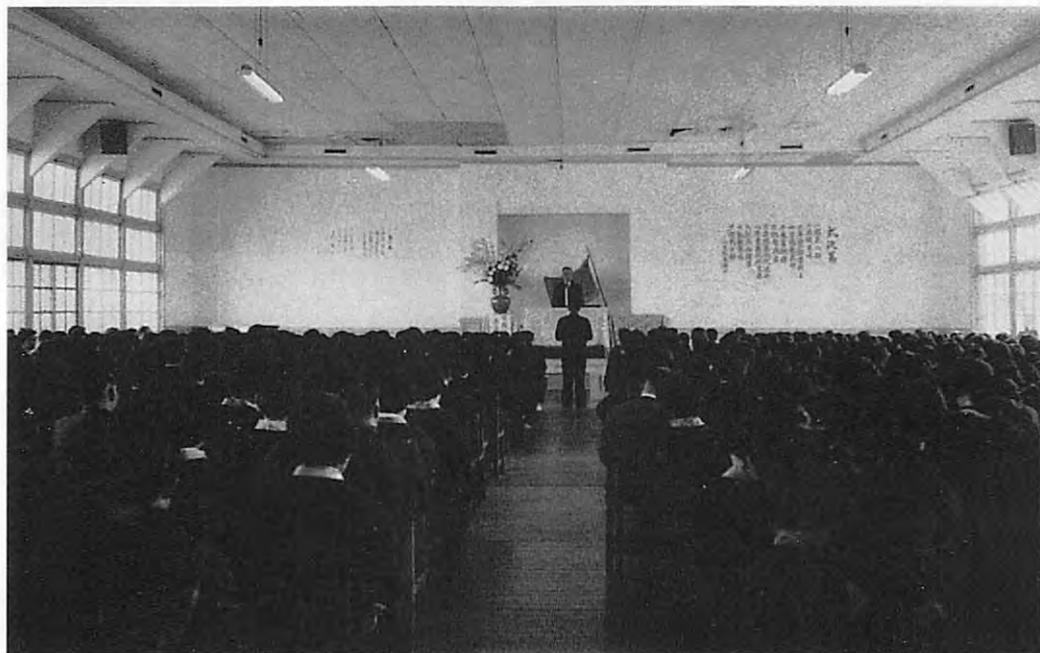


校内大会 (クラスマッチ)

校内大会は、種目別に年間を通じて放課後に行われた。成績は、玄関口の廊下にはり出され3学期には総合優勝が決まり、平均年齢の若かった教員チームが優勝することもしばしばあった。校内大会の種目には、相撲もあって5月25日の開校記念日に行われていた。

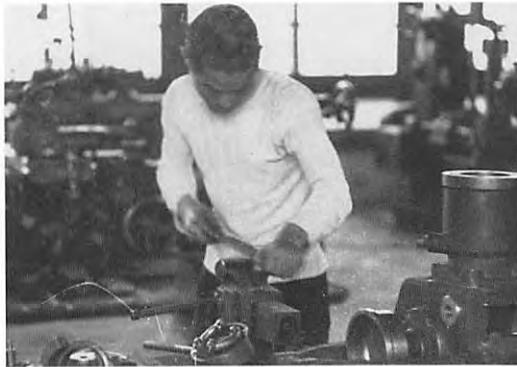
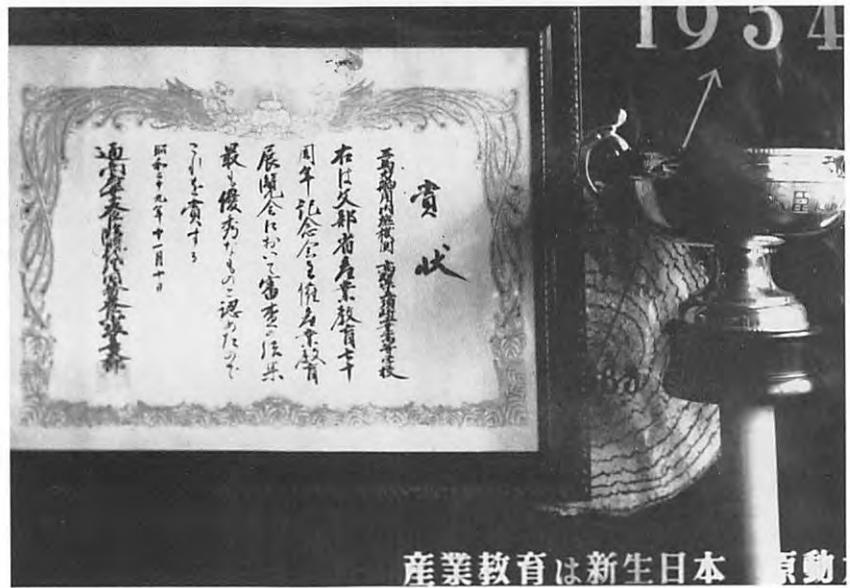
旧校舎最後の卒業式

(昭和47年3月1日 壇上は澤本校長)



の 成 果

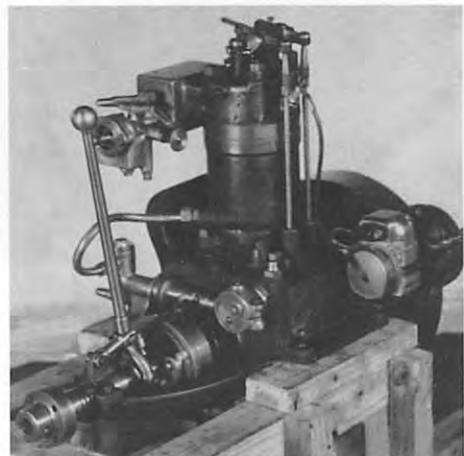
昭和29年11月産業教育70周年記念、産業高校生徒作品展、機械部門第1位賞状とカップ。



生徒たちは夏休みを返上、残業、徹夜で精根を込めて制作し出品期限に間に合わせた。

実は展覧会に出したエンジンは右の写真のもので、前ページのカラー写真のものは第二作のエンジンだった。

キャブレター部分がわずかに違う。第一作は、この榮譽あるエンジンをどうしても自分の船に付けたいという漁民の方がいて、お譲りしたのだった。



努力



昭和32年8月、念願の全国大会優勝を果たして帰校した相撲部員は、須崎町をあげての歓迎を受けた。(須崎駅前)



優勝パレードの出発



「皆様の声援のお陰で優勝できました」
(主将中井君のあいさつ)



稽古台はいつも田原先生だった

記録写真

その二

移転への6年間

学校移転の話が現実のものとして始まったのは昭和40年だった。

41年に入り7月になって移転新築期成同盟会が発足し、活動が始まった。

候補地は二転三転し、なかなか決まらなかったが、

42年4月ようやく多ノ郷和佐田の現在地に決定した。

取り付け道路から工事が始まり、

校地が整地されたのは1年後の43年4月だった。

47年3月には第3期工事が竣工し、新生須工の陣容が整った。

同年4月、新校舎に移転完了。

同年6月、体育館・格技場・食堂工事完了。

同11月25日には移転新築落成並びに30周年記念式典が盛大に行われた。

3億8,714万円の大工事だった。

53年3月にはプールも竣工し、予定の全工事が終了した。

同年6月、移転新築期成同盟会を解散した。

適地を求めて

角谷・安和・池の内・多ノ郷南・大間と適地を求めての探索が続いた。

(41年8月池の内地区の候補地で)



最終決定地の多ノ郷和佐田の地。この小山の上に本校が建つことになった。年度もおし迫った3月25日のことであった。



和佐田の山から須崎湾を望む。

工事始まる！昭和42年7月15日着工



ブルドーザがうなり山頂へと道が付く。



進入路完成 カンバンも建った。(昭和42年7月17日)



急ピッチの造成工事 昭和42年7～8月



溝渕県知事 新校地視察 昭和43年6月22日



期成同盟会役員 左から又川・古谷・松下・井上の各氏 昭和42年7月31日



新校地完成 43年4月 施工主期成同盟会長天野氏・施工関西土木株式会社
工費総額5,058万円をもって高知県教育委員会が買い上げ。



新校舎建築工事起工式
昭和45年3月6日



県代表 山本係長



玉串奉典 澤本校長



生徒代表



高知土建株式会社社長
鍬入れの儀



第一期工事 竣工
(昭和45年10月8日)

左から山本係長・
井尾木事務長・澤
本校長・広光技官



第一期工事 本館東半分



第二期工事 竣工近し 本館東半分・南校舎 (昭和46年1月)

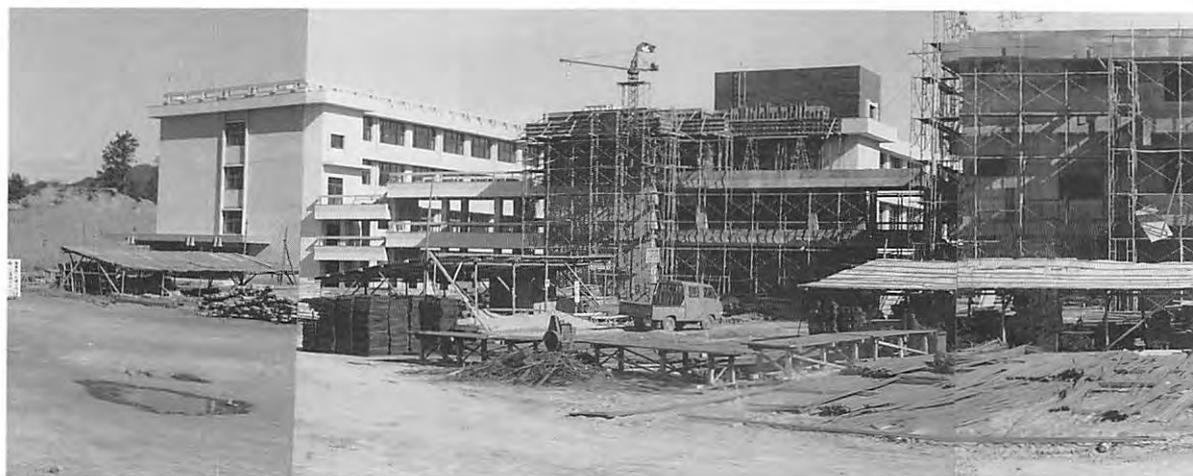




四国電力ヘリコプタより
第二期工事 竣工後
(昭和46年9月2日)



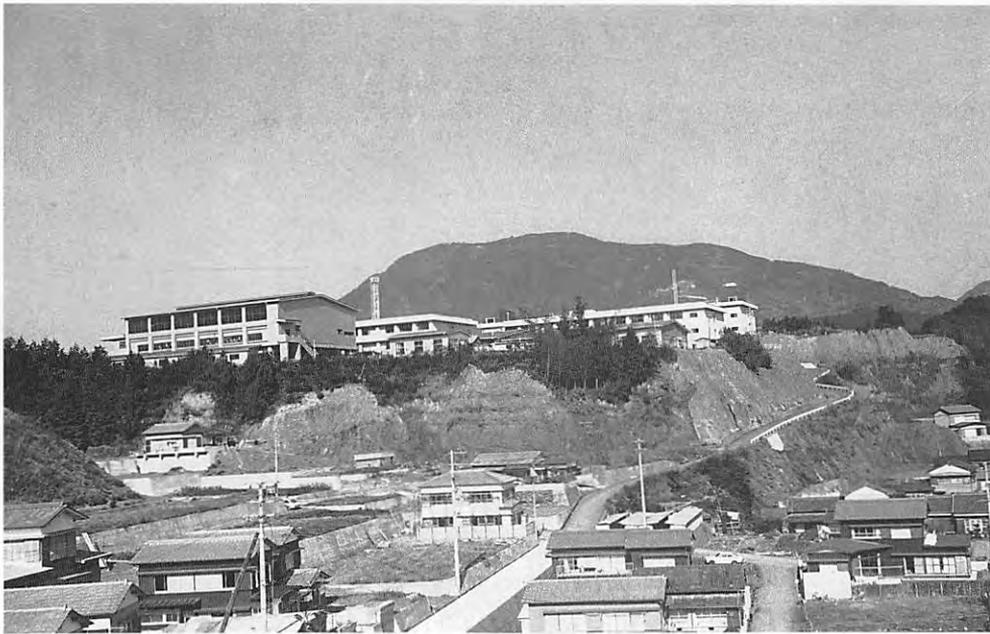
第三期工事 機械科実習棟・化学工業科実習棟・造船科船体性能実習棟・体育館
(昭和46年12月29日)



全 容 (昭和46年11月30日)



急ピッチで進む第三期工事（昭和47年1月30日）



大間方面から見た本館と南校舎（昭和46年9月23日）



新校舎の体育館で行われた移転新築落成並びに創立30周年記念式典
（昭和47年11月25日）

記 録 写 真

その三

—— 新校舎に移って ——

新校舎に移転して20年が経過した。

この20年間は情報化の時代といえる。

昭和50年には電子計算機システムが導入され本校情報化のスタートがきられた。

このコンピュータは主として電気科が利用していたが、

数年後には各科にもパソコンが入り、情報教育も本格化してきた。

50年代後半には、県教育委員会も情報教育強化の方針をたて

60年からは電子計算機システムの年ごとの機能向上に対応するため、

5年更新レンタル化を決めこれを工業高校に適応した。

学校では、小容量で低機能の古いコンピュータをいつまでも使うことから開放された。

平成元年には、専用の計算機実習室を増築し、

高性能のパソコンが多量に導入され全学科での利用が定着した。

一方、62年度には数値制御工作機械（MCフライス）、63年には同旋盤、

平成2年にはC A D（Computer Aided Drawing）が導入されるなど、

情報化ラッシュが続いている。

平成3年、造船科は大きな変革期となった。

それは、平成6年から実施される新教育指導要領に、

高等学校家庭科の男女共修が規定されたことによるものだった。

本校は、ほとんどの生徒が男子であったので、これまで家庭科の授業はなかった。

家庭科の授業は実習を伴うため、本校では家庭科実習室を準備しなければならなかった。

新築の話もあったが、造船科の実習室が機能的に不十分であることから

これを家庭科実習室に改造し、

造船科の実習室をもっと機能的な施設に新築することになった。

これを機会に造船科では、新しい造船業界の動きでもある高速船にも対応できる

回流式船体性能実験設備の導入に踏み切ったのであった。

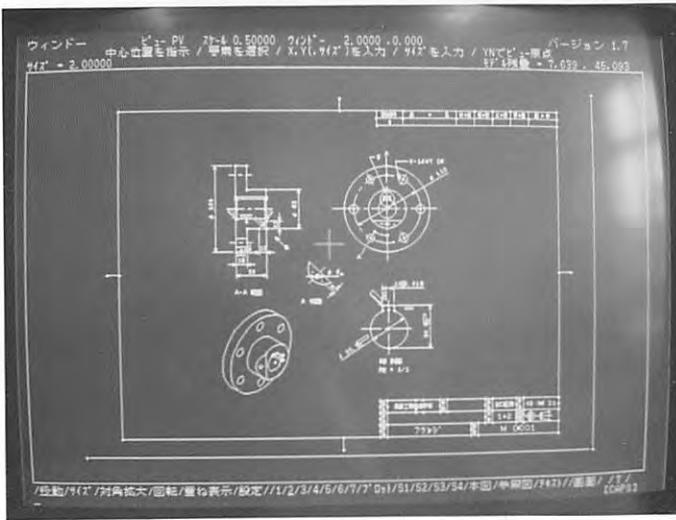
この画期的な実験設備は、地元の造船業界でも大きな波紋を呼び、期待をされている。

機 械 科



機械工場 旋盤実習

C.A.D (Computer Aided Drawing)

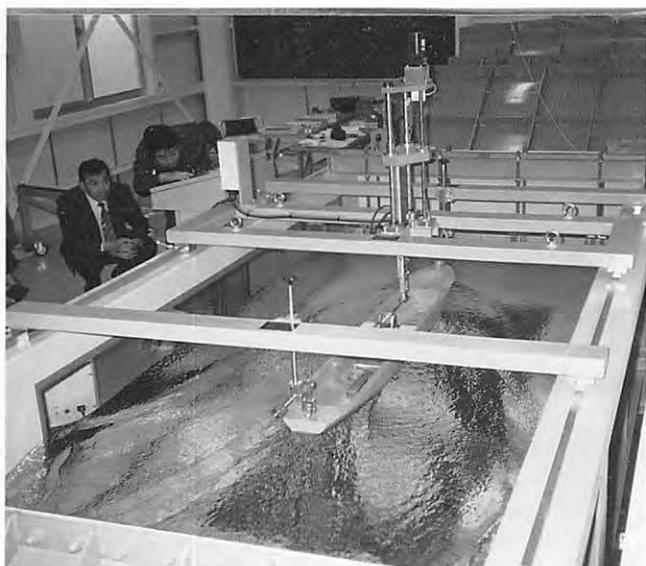


精密測定実習

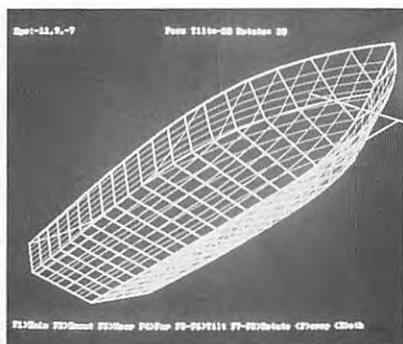


数値制御工作機械 (MCフライス)

造船科



回流式船体性能実験装置の据付



造船設計用C.A.D



23年間お世話になった曳航式船体性能実験装置



数十隻を超えたF.R.P船の建造

化学工業科



自動天秤実習
分銅でバランスをとる天秤はもう使っていない。



機器分析実習 むつかしそうだなあ…



化学合成実験 化学工業は合成の技術



パソコンはエンジニアの武器
卒業までには使えるようになる。

電 気 科



電気工事实習
資格試験も取れると思うと
熱が入る。



ポケコン（ポケットコンピュータ）による、
プログラム制御実習
全国的にポケコン実習が盛んだ。



電気機器実習 電気科の本命



端末機でホストコンピュータを
操作する。資格試験もある。

県体



高知県を主会場とした元年総体に備えて整備された春野運動公園での県体開会式が平成3年に初めて開催された。これまでの開会式は、元年・2年とも雨で中止になっていた。本校は初めて女子が選手団の先導をつとめた。



ソフトボールと空手道が県体優勝に最も近い。今に……と、気合いがかかる。



体 育 祭

●生徒会の活動

50周年で変わったことは？
といえば、まず上げられるのは「生徒会活動」の活発化である。

学校行事は今や生徒会執行部に任しておけば見事にやっつける力を備えてきた。

生徒憲章しかり。体育祭・クラスマッチもまたしかりである。

今本校は、文部省から「福祉等体験学習研究校」の指定を受けている。生徒会もその一翼を担うことになっている。



男子の多い学校の体育祭は面白い。元気がある。てらいがない。健康は生活の基である。「学問」「健康」「人間性」がそろって初めて青年紳士になる。卒業までの目標である。



綱引きの秘けつは力を合わせることにある。昔の開校記念日には相撲の校内大会を行った。それがなくなった今、綱引きのクラスマッチを行っている。



体育祭には、陸上競技の種目もある。昔は陸上競技大会だった。
その伝統を残したものである。

文化祭

●ファイアーstormはなくなったが、仮装行列は伝統を守っている。出し物はあまり変わらず昔と似たようなものである。街の
人気も好評で、温かい声援を受けている。コースは発展著しい大
間・多ノ郷に変わった。



焼きそば屋・串焼き屋等、
食べ物屋も繁盛する。
平成4年は文化祭の年である。



登校する生徒たち

平成3年度生徒数 男子645名 女子10名 合計655名 (5月1日現在)



教職員

平成3年度教職員数 72名



序

昭和十六年、本校が創立されて以来五十周年を迎えるに際し、記念事業の一環として、ここに記念誌を発行するとになりました。

本校の創立については、本誌創立事情にも記載いたしましたように、数々の美談に包まれ、そうした地域の方々のお気持ちは、とりもなおさず本校に対する期待の大きさでもあったのであります。本記念誌は、そうした本校の五十年の歴史の一端を記録にとどめるものとして編集されました。

昭和十六年と申しますと、まさに日本が世界戦争に突入した年であります。その当時から物資の困窮はことのほか厳しい事情にあり、そうした状況のもとで、本校は工業学校として発足し、普通校にはない実習施設と設備を準備しなければなりませんでした。

また、学校の整備の様子や、戦時中のことなど、本誌に収録されたご寄稿の中には、そうした開校当時の困難の様子がありと述べられています。

戦後の学制改革、それに伴う学校統合の話、昭和二十三年の学校火災等、本校の歴史は、まさに困難と混乱を極めた戦前、戦後の日本の歴史そのものという感じがいたします。

戦後十年たち、ようやく落ち着きをみせ始めた昭和三十年代、日本の工業の復活の兆しとともに、工業高校は新たな時代を迎えました。本校も、それまで機械科及び造船科の二科だった設置科に加えて、時代に対応する電気通信科（後の電気科）、そして化学工業科の設置など、総合的な工業高校として発展するとともに、将来を嘱望される多くの工業人を輩出し、当時の卒業生は、今や日本の工業界で中心的な役割を果たしています。

また、この時代は、須崎工業の黄金時代ともいえるところで、相撲部の相次ぐ全国制覇や、機工部の船用エンジンの通商産業大臣賞受賞など、文化・体育の両面での日本一に、学校はもとより須崎の町中を沸かせた時代でありました。

昭和四十年代、学校はこうした発展とともに校舎の増築が相次ぎ、校地は段々と狭くなり、新校地への移転の時期を迎えました。昭和四十一年には新校地の探索が始まり、以後六年間をかけての新校舎竣工、移転にいたる関係者の

ご苦労は並々ならぬものがありました。

古い卒業生は、札幌の旧校舎に対する惜別の念を禁じ得ませんでした。大間を通る国道五六号線から見上げる白亜の新生須工は、新たな息吹を感じさせるものでした。

新校舎の時代は、まさしく情報化の時代であり、またハイテクノロジーの時代であります。

本校でもすべての学科でコンピュータ実習を組み入れ、更にはCAD、NC、MC工作機械の導入、そして造船科の回流式船体性能試験設備など、教育内容並びに施設・設備には大きな変化がみられます。しかし、一方では基礎的実習設備の老朽化が目立ち始め、早期にそれらの設備の更新が望まれています。

また、家庭科の男女必修に伴う家庭科実習室の設置も、工業高校の長い歴史のなかでは画期的なものであります。

本校の歴史を振り返る時、卒業生の総数は七五〇名を超え、多くの者が本校の教育目標である「信頼と尊敬に値する工業技術者の育成」に因ってエンジニアの道を歩み、それぞれの時代に本校のよき伝統を継承し、さまざま困難はあったにせよ、それら乗り越えて、今こうして本校が存在することは、多くの関係者の温かく、たゆみないご指導とご鞭撻があつてのことと、心から感謝申し上げる次第であります。

創立五十周年を契機とし、本校の果たすべき役割の大きさを自覚し、一層の努力を重ね発展することを祈り序といたします。

平成三年十一月二十二日（一九九一年）

学校長 森岡 清

ごあいさつ

この度は、本校創立五十周年記念式典が盛大かつ有意義に挙行され、まことにおめでとうございます。この慶事を迎え半世紀にわたる母校の姿を回顧する五十周年記念誌を刊行されることは、まことに意義深く、うれしいことでもあります。

本校は創立事情に記されておりますとおり、須崎市出身元郵政大臣寺尾豊氏の巨額の私財提供に端を発し、県当局並びに須崎市民の物心両面にわたる貴い協力のもとに、昭和十六年四月高知県立須崎工業学校として開校されたのであります。戦後県立須崎工業高等学校へと発展し、更に昭和四十七年校地も糺町から現在の和佐田ヶ丘の新天地に移転、新校地三万五〇〇〇平方メートル、校舎延べ一万五二四八平方メートルの立派な学園が完成し、創立五十周年を迎えた今日卒業生も七五〇〇名を有する大学園に発展したことは、往事をしのぶ私共にとっては夢のごとき飛躍でありまして感慨無量のものがあります。

本校の輝かしい伝統と校風は、歴代校長先生はじめ諸先生方並びに諸先輩方の熱心なご指導の下に守り育てられ母校発展の基礎をつくってこられたのであります。

創立五十周年記念式典において後輩の在校生諸君には、生徒憲章を発表されました。その前文に「高校生活は、私達の人生で最も多感かつ、二度と体験できない時期であることを深く自覚し、この学び舎が真に人生の礎となるよう、この憲章を指針として努力することを誓い、ここに生徒憲章を定めます。」と記されております。そして、五か条の指針が発表されました。

創立五十周年の慶事を迎え、後輩諸君には努力目標を定められ、諸先生方のご指導の下、貴重な高校生時代を取り組んでいこうとされている姿に深い感銘を覚えました。

同窓会も、お陰さまで大きく発展して参りました。同窓会本部並びに支部役員の方々、また会員の皆様に対し心から感謝とお礼を申し上げます。

最後になりましたが、本校創立五十周年記念事業並びに本校発展のために寄せられました関係各位の、物心両面にわたるご援助ご高配に対し、衷心より感謝とお礼を申し上げます。ごあいさつといたします。

平成三年十一月二十二日

同窓会長 清家 寛

ごあいさつ

「創立五十周年に寄せて」

須崎工業高等学校の創立五十周年に当たり、感慨深いものがあります。

本校は昭和十六年四月に県下で二つ目の工業高校として発足致しましたが、その後の五十年は正に日本の歴史そのものであり、幾多の喜びと困難を経てきたものとお聞きしております。

戦後、資源に恵まれない我が国が極貧の時代を克服し、今日の経済大国としての繁栄をみるに至ったのは、何といっても優れた工業技術により外資を獲得し得たからであり、その点で本校の卒業生は多大に貢献し、各分野各地域において目覚ましい活躍をされておりますことを耳にする時、うれしくもまた、心強く誇らしい思いを新たに致します。

さて、本校の創立に当たりましては、須崎市出身の元郵政大臣寺尾豊先生が、地元での信頼できる工業人育成を強く望まれて、巨額の私財を提供され創立の原動力となつて下さったことは余りにも有名です。また、戦時下にあつて物の乏しい時代に地域の皆さまからの物心両面にわたる計り知れないご協力と励ましを頂いたことや、当時の教職員と生徒全員が、桑畑跡の整地に、建設にと汗水流しての勤勞奉仕を卒業近くまで続けられたことなど多くの御苦勞を

お聞きしています。人は高大な樹木をみる時その偉容に感動を覚えますが、みえない地下の部分に思いを致すことは減多にありません。しかし聞くところによりますと樹木の根は地上部分の高さの数倍の距離に及んで伸び広がり、地上部分を強風、嵐、炎熱から支えているものだそうです。年輪五十を数えた本校の輝かしい現在と未来を思う時、多くの方々の善意と御尽力のあったこと、今なおそれに支えられていることに改めて感謝の念を深め、決して忘れることのないようにしたいものだと思います。

世界一流の工業国となり、ハイテク産業の時代となった今、時代の要求に応えるべく先生方のみならず生徒も、日々研鑽努力されていることと拝察致しますが、創立に際して寄せられた期待を励みとされて、今後とも立派な工業人、社会人育成の責任を果たし、本校が一層発展してゆかれますように切に祈ってやみません。

平成三年十一月二十二日

PTA会長 笹岡 公明

沿 革

沿革

一、所在地

高知県須崎市多ノ郷和佐田甲四一六七―三

二、年表

昭和一六年二月

文部省告示をもって高知県立須崎工業学校設立認可、機械一種(初六卒五年、定員二五〇名)、同二種(高小二卒、三年、定員二二〇名)を置く。

四月

高知工業学校教諭中内知章初代校長となり、須崎国民学校の施設を借用し、四月一九日開校式挙行。

一八年五月

生徒 機械科一種五〇名、二種四〇名、計九〇名。
校地四五二八坪(登記面四〇〇〇坪六四)に延べ一〇〇八坪七五の校舎竣工、五月二五日に落成式挙行(この日を開校記念日とする。)

八月

戦時特令により修業年限を五年と四年とする。

一二月

戦時特令卒業期繰り上げにより、機械科二種第一回卒業生三八名を送る。

一九年四月

造船科(初六卒四年)増設。

二〇年三月

機械科一種第一回卒業生四五名、機械科二種第二回卒業生三七名、計八二名を送る。

一二月

中内知章校長退職し、徳島県立第二工業学校西森稜威穂教諭、二代校長となる。

二一年四月

修業年限を五年に復帰(戦時特令廃止による)。

二二年四月

西森稜威穂校長退職し、池上健男教諭、校長事務取扱となる。

学制改革により二三年度から新制高等学校に切り替え

ることになるため第一学年の募集を停止し、第二、第三学年生徒は新制度による併設中学校の第二、第三学年生となる。

六月

広島市立第一工業学校長小林秀雄三代校長となる。

名の卒業生を送る。

四月

新制高等学校としての高知県立須崎工業高等学校となる。

四・五年生を一・二年に編入、また三月卒業生中希望者は三年に編入。

五月

校歌制定。

七月

火災のため本館、第二棟校舎、小使室、便所、倉庫、廊下等計六三〇坪を焼失(原因は本館天井裏配電線の漏電)、講堂、実習工場等三七八坪七五焼け残る。

九月

造船科現図書竣工。

二四年三月

旧制度最後の卒業生、機械科一種第四回三六名、同造船科第一回二八名、計六四名を送る。

新制工業高校機械科第一回卒業生三八名を送る。

四月

機械科二学級となる。

五月

本館校舎、小使室等の災害復旧第一期工事竣工。

二五年三月

機械科第二回二四名、造船科第一回一九名、計四三名の卒業生を送る。

二六年四月

小林秀雄校長退職し、窪川高等学校校長前田健造四代校長となる。

八月

前田健造校長病氣休職となり、野中健一郎教諭、校長事務取扱となる。

二七年四月

電気通信科増設される。

二八年三月 高知工業高等学校校長森岡貞篤五代校長となる。
校長公舎(本校前、敷地七〇坪、建坪二五・五坪)落成。

一〇月 文部省から産業教育研究指定校の指定を受く(向こう二か年間)。

二九年三月 校舎災害復旧第二期工事竣工。

一一月 産業教育七〇周年記念行事の一つとして催された全国産業教育校における実習作品展(東京三越本社)に本校から出品した三馬力船用石油エンジンが機械部門第一位に入賞し、通産大臣賞を授与される。

三〇年三月 電気通信科第一回卒業生三三名を送る。

校舎復旧第三期工事竣工。

一一月 文部省産業教育研究指定校としての研究発表会開催、題目「工業高等学校電気通信過程における生産実習の好ましい運営について」

三二年三月 校舎災害復旧第四期工事竣工。

五月二五日 須工創立一五周年並びに校舎災害復旧建築落成祝賀式典を挙行。

三三年一月 三一年度校舎増築工事(造船科棟)竣工。

八月 全国高校相撲選手権大会で団体優勝。

一二月 三二年度校舎増築工事(造船科棟西)竣工。

三三年三月 高知県教育委員会から本校相撲部に高知県児童生徒文化賞を授与される。

四月 校地西側に運動場拡張用地として三三二坪購入。

三四年三月 原動機実験室竣工。

四月 化学工業科増設。

森岡貞篤校長高知工業高校長へ転出、清水高校長松岡常雄六代校長となる。

三五年四月 化学工業科第一期工事竣工。

四月 普通教室二室増築。

校舎総延べ坪一五〇八坪一一、運動場西側拡張用地買収一一八二坪。

三六年一月 化学工業科教室、実験室第二期工事竣工。

四月 松岡常雄校長退職、高知工業高校教諭小松一夫七代校長となる。

六月 食堂増築。

一月 創立二〇周年記念式典挙行。

三七年三月 化学工業科第一回卒業生四〇名を送る。

電気通信科実験室二階増築、製図室完成。

一〇月 運動場拡張整地工事完了。

三八年三月 校舎木造二階四教室増築。

船体性能実験室、保健室一棟新設。

四月 電気科一学級設置。

三九年三月 実験、実習施設整備計画(機械科及び造船科の木造建物)を鉄筋コンクリート造りに改築するとともに電気科の実験実習施設の拡充に基づく第一期工事竣工。

四月 小松一夫校長県教育センター理科部長へ転出、中央教育事務所長西本澄雄八代校長となる。

四〇年四月 電気通信科を廃止し電気科を二学級(強電コース、弱電コース)とする。

実験・実習施設整備計画に基づく第二期工事(電気科及び機械科実験実習室)竣工。

四一年三月 電気科第一回卒業生四一名を送る。

四月 西本澄雄校長小津高校長に転出、高知工業高校澤本豊教頭九代校長となる。

- 七月 実験、実習施設整備計画に基づく第三期工事(現図書、電気工作室)竣工。
- 移転新築期成同盟会創設さる。
- 一二月 電気事業法の認定に基づき、主任技術者の資格等に関する省令第一条第一項の規定による学校の認定を受く(同日付官報告示。通商産業省告示第五七七号)。
- 四二年一月 高知県教育委員会規則の変更により、本校の学科「機械科、造船科、電気通信科、化学工業科、電気科」を「機械科、造船科、化学工業科、電気科」と改められる。
- 四月 学校の移転用地を須崎市多ノ郷字中郷、金堂、和佐田に校地並びに進入路合計二万八七二〇平方尺(登記面積)を購入。買主期成同盟会長天野剛利(須崎市長)。
- 七月 移転用地及び進入路造成工事着工。施工主天野剛利。工事施工者関西土木株式会社。設計、監督、検査、高知県教育委員会。
- 四三年四月 校地並びに進入路造成工事完工。校地(三万五〇〇〇平方尺)は本事業に要した工費総額五〇五八万円をもって県教育委員会に買い上げられる。
- 四五年三月 新校舎建築工事起工式。
- 校舎新築第一期工事着工。
- 七月 校舎新築第二期工事着工。
- 一〇月 新校舎建築第一期工事竣工。
- 本館鉄筋コンクリート四階建て西半分、延べ一五九九平方尺、工費五三五八万円。施工者高知土建株式会社。
- 四六年五月 新校舎建築第二期工事竣工。延べ五三九八平方尺。本館鉄筋コンクリート四階建て東半分二二七〇平方尺、南校舎鉄筋コンクリート三階建て二九三二平方尺、変電室。工費一億六四五一万円。施工者高知土建株式会社。
- 七月 新校舎建築第三期工事着工。
- 四七年三月 新校舎建築第三期工事竣工。
- 三月 専門棟鉄筋コンクリート三階建て延べ一六九〇・九平方尺、機械科実習棟鉄骨平屋一〇〇一・二七平方尺、化学工業科実習棟一〇八・二九平方尺、造船科船体性能実験室二四九・五五平方尺。工費一億一八四七万円。施工者高知土建株式会社。
- 四月 澤本豊校長退職、安芸工業高校村木威教頭一〇代校長となる。
- 六月 体育館、格技場、食堂工事、鉄筋鉄骨二階建て竣工。工費六八〇〇万円。
- 八月 進入路舗装工事竣工。
- 一一月 移転新築落成並びに三十周年記念式典を挙行。
- 一一月 本校創立功労者寺尾豊殿逝去。
- 四八年三月 学校正門工事竣工。
- 九月 教員住宅竣工。
- 四九年二月 プール用地買収。
- 三月 高知県教育委員会から本校造船部に高知県児童生徒文化賞を授与される。
- 五一年三月 自転車置場(二F)完成。
- 五二年八月 社会体育用照明設備四基新設。
- 五三年三月 社会体育用便所新設、プール・プール附属棟竣工。
- 四月 村木威校長退職、高知工業高校定時制大島正賢教頭一代校長となる。
- 六月 プール落成式。移転新築期成同盟会解散。

五五年 一月 校長公舎完成。

四月 大島正賢校長高知工業高校長に転出、清水高校長西村博一二代校長となる。

博一二代校長となる。

五六年 三月 部屋(六室)完成。

一〇月 校長公舎(西札町)取り壊し。

五六年一〇月 宿舎敷地(四六九・四二二平方メートル)及び宿舎建物三戸(二二九・四二二平方メートル)を公共学校共済から譲渡。

五七年 二月 旧校長公舎跡地(西札町)とPTA所有地(多ノ郷金堂)と等価交換締結。

四月 西村博校長県立図書館長に転出。

県教委高校教育課長宮地恒雄一三代校長となる。

倉庫(体育館北)新築。

五八年 三月 守衛(常勤)退職に伴い校舎等整備委託契約を締結。

五九年 三月 赤崎町の職員宿舎三戸取り壊し。

六〇年 四月 宮地恒雄校長高知小津高校長に転出、高知工業高校定時制森岡清教頭、一四代校長となる。

六一年 三月 「昭和六〇年度地方教育費調査の実施について」文部大臣表彰を受ける。

六二年一〇月 高知県教育長から本校ソフトボール部に高知県児童生徒賞を受ける。

平成元年三月 実習棟、鉄骨平屋建て四八四平方メートル、渡り廊下二八平方メートル竣工。工費八五八三万円。

二年 二月 造船クラブ、全国工業高等学校校長協会理事長から平素の工業技術の学習成果に対し表彰を受ける。

三年 四月 「奉仕等体験学習研究推進校」としての文部省から指定を受ける。

四月 高知県学校環境緑化優秀校として表彰を受ける。

九月 造船科実習棟新築工事(七二四平方メートル)着工。

十一月 学校創立五十周年記念式典を挙行、祝賀会を催す。

十二月 家庭科実習室改造工事着工。

四年三月末 造船科実習棟新築工事並びに家庭科実習室改造工事竣工。

歴代校長

- 初代 中内 知章 昭和一六年四月～二〇年二月まで
- 二代 西森 稜威 昭和二年四月～三年三月まで
- (事務取扱) 池上 健男 昭和二年四月～三年五月まで
- 三代 小林 秀雄 昭和二年六月～二六年三月まで
- 四代 前田 健造 昭和二六年四月～二七年三月まで(病休二六年九月～)
- (事務取扱) 野中 健一郎 昭和二六年九月～二七年三月まで
- 五代 森岡 貞篤 昭和二七年四月～三四年三月まで
- 六代 松岡 常雄 昭和三四四年四月～三六年三月まで
- 七代 小松 一夫 昭和三六年四月～三九年三月まで
- 八代 西本 澄雄 昭和三九年四月～四一年三月まで
- 九代 澤本 豊 昭和四一年四月～四七年三月まで
- 一〇代 村木 威 昭和四七年四月～五三年三月まで
- 一代 大島 正賢 昭和五三年四月～五五年三月まで
- 二代 西村 博 昭和五五年四月～五七年三月まで
- 三代 宮地 恒雄 昭和五七年四月～六〇年三月まで
- 一四代 森岡 清 昭和六〇年四月～

三、現況

一般教養を高め、人格の涵養と強健な身体の錬成に努め、更に工業に関する知識と技術、技能を修得させる。

教育目標

信頼と尊敬に価する工業技術者の育成。

本年度教育重点目標

人間性の育成と人権の尊重を基本に目的意識をもち、活力に満ちた生徒の育成。

(1) 学習に取り組む積極的な姿勢を育てる。

(勤勉)

出席、充実した授業、予習、復習。

(2) 規律正しい生活習慣を身につけさせる。

(規律)

正しい言葉づかい、端正な服装、校則、交通安全。

(3) 同和教育の充実、発展をはかる。

(友愛)

人間尊重と連帯の精神、暴力の否定。

(4) 環境の美化に努めさせる。

(美化)

生徒憲章

高校生活は、私達の人生で最も多感かつ、二度と体験できない時期であることを深く自覚し、この学び舎が真に人生の礎となるよう、この憲章を指針として努力を重ねることを誓い、ここに生徒憲章を定めます。

一、私たちは、須崎工業高校を誇りとし、社会の信頼に応えます。

一、私たちは、日々の学習を通し、有能な工業技術者を目指します。

一、私たちは、心身を鍛え、規律ある健康な生活を送ります。

一、私たちは、真理と正義を重んじ、人権を尊重します。

一、私たちは、自主独立の精神を持ち、視野を世界に拓けます。

平成三年十一月二十二日 高知県須崎工業高等学校 生徒会

施設状況

平成3年、須工・全

建設区分		総面積	備 考	
学 校 建 物 等	校 舎	普通教室	1,166.40 ^{m²}	18教室
		特別教室	545.28	視聴覚、美術、物理、化学、図書室
		実験実習室	5,617.34	
		管理関係その他	4,241.92	
		小 計	11,570.94	
	屋内体育館		1,947.97	格技場262 ^{m²} 、食堂201 ^{m²} ほか部室、土間等を含む
	プール附属棟		106.50	
	計		13,625.41	
	その他	借用建物	92.26	P T A 部室32 ^{m²} 、倉庫8.68 ^{m²} 自転車置場40 ^{m²} 、浴室11.58 ^{m²}
		計 算	92.26	
学 校 用 地	土地区分	総面積		
	建物敷地	12,831.36 ^{m²}		
	屋外運動場	15,084.58		
	プール敷地	2,618.80		
	職員宿舎敷地	646.00		
	計	31,180.74		
教 職 員 住 宅	区 分	総面積	戸 数	
	校 長	77.77 ^{m²}	1 戸	
	教 頭	68.97	1 戸	
	事 務 長	68.97	1 戸	
	職 員	394.48	8 戸	
	計	610.19		

教職員構成

平成3年、須工・全

性別 年齢	校長	教頭	教諭		養護教諭	期限付講師		講師		時間講師(専)		実習助手		事務長	主監		主任技師	技師	校医	校薬	計			
	男	男	男	女	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	男	女	女	男	男	男	男	女	計	
～19歳																								
20～24						1						2										3	3	
25～29			8	1						1	1											9	2	11
30～34			5	3	1							1	1									6	5	11
35～39			6	2								1						1				8	2	10
40～44			7					1							1		1					9	1	10
45～49			6						1								1		2			8	2	10
50～54			8						1							1						8	2	10
55～59	1	1	3											1						1		7		7
60～64										1												1		1
65～						1				1												2		2
計	1	1	43	6	1	2		1	2	3	1	4	1	1	1	1	1	1	1	2	1	61	14	75

教育課程 (昭和58年4月から
昭和62年4月一部改
平成3年4月一部改)

54(普通教科)+42(専門教科)+3(クラブ活動)+3(ホーム・ルーム)=102単位

平成3年、須工・全

	科 目			1年	2年	3年	科 目			1年	2年	3年	
	国語	社会	数学				保健体育	外国語	芸術				普通科目計
普通科目 (各科共通)	国語	国語Ⅰ	9	4			10	体育	8	2	3	3	
		国語Ⅱ			3	2		保健		1	1		
	社会	現代社会	11	4			2	音楽Ⅰ	8	3	3		
		地理			3					英語Ⅰ			
		日本史				4				英語Ⅱ			2
	数学	数学Ⅰ	10	4			2	美術Ⅰ	2		2		
		数学Ⅱ			3	3				書道Ⅰ			
	理科	理科Ⅰ	4	4									
								普通科目計	54	22	18	14	

	機 械 科					化 学 工 業 科				
	科 目	単位	1年	2年	3年	科 目	単位	1年	2年	3年
職業科目	工業基礎	3	3			工業基礎	3	3		
	工業数理	4	2	2		工業数理	4	2	2	
	機械実習	10		3	7	工業化学	6	2	2	2
	機械製図	10	3	4	3	化学工業安全	2			2
	機械工作	4	2		2	化学工学	5		2	3
	機械設計	5		3	2	設備管理	3			3
	原動機	4		2	2	化学工業実習	15	3	6	6
	電気基礎	2			2	化学製図	4		2	2
	職業科目計	42	10	14	18	職業科目計	42	10	14	18
	特別教育活動	6	2	2	2	特別教育活動	6	2	2	2
合計	48	12	16	20	合計	48	12	16	20	

	造 船 科					電 気 科				
	科 目	単位	1年	2年	3年	科 目	単位	1年	2年	3年
職業科目	工業基礎	3	3			工業基礎	3	3		
	工業数理	4	2	2		工業数理	4	2	2	
	造船実習	8		3	5	電気実習	9		3	6
	造船製図	11	3	3	5	電気製図	3			3
	造船工学	12	2	4	6	電気基礎	8	5	3	
	機械設計	4		2	2	電気技術Ⅰ	8		3	5
	職業科目計	42	10	14	18	電気技術Ⅱ	7		3	4
	特別教育活動	6	2	2	2	職業科目計	42	10	14	18
	特別教育活動	6	2	2	2	特別教育活動	6	2	2	2
	合計	48	12	16	20	合計	48	12	16	20

学科別生徒数

平成3年、須工・全

学科	学年 性別	1 年			2 年			3 年			計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
機械科	MA	40	0		40 (1)	0		36	0				
	MB	40	0	80	41	0	81 (1)	36	0	72	233 (1)	0	233 (1)
造船科 S		37	0	37	40	0	40	35	0	35	112	0	112
化学工業科 C		40	3	43	29	1	30	34	3	37	103	7	110
電気科	EA	28	0		31	1		40	0				
	EB	26	2	56	32	0	64	40	0	80	197	3	200
計		211	5	216	213 (1)	2	215 (1)	221	3	224	645 (1)	10	655 (1)

出身中学校別生徒数

平成3年、須工・全

市町 村名	中学校名	学年 性別	1 年			2 年			3 年			計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
高知市	潮江中学校					1		1				1		1
	三里中学校		1		1							1		1
	愛宕中学校					1		1				1		1
	城北中学校		1		1	3		3				4		4
	朝倉中学校		1		1	2		2				3		3
伊野町	伊野中学校		12		12	12		12	16		16	40		40
	神谷中学校		2		2	1		1				3		3
土佐市	高岡中学校		3		3	4		4	7		7	14		14
	戸波中学校		6		6	5		5	5		5	16		16
須崎市	浦ノ内中学校		6		6	10		10	7		7	23		23
	朝ヶ丘中学校		41	1	42	30		30	35	1	36	106	2	108
	須崎中学校		30	1	31	20		20	22	2	24	72	3	75
	南中学校		3		3	3		3	10		10	16		16
	上分中学校		3		3	3		3	9		9	15		15
日高村	日高中学校		5		5	6		6	8		8	19		19
佐川町	加茂中学校		3		3							3		3
	佐川中学校		15		15	25		25	20		20	60		60
	尾川中学校		2		2	5		5	2		2	9		9
	黒岩中学校		5		5	5		5	3		3	13		13

市町 村名	中学校名	学 年			1 年			2 年			3 年			計		
		性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
越知町	越知中学校		12		12	5		5	2		2	19		19		
吾川村	吾川中学校		1		1	1		1			2		2			
池川町	池川中学校							2		2	2		2			
葉山村	葉山中学校		14		14	27		27	29		29	70		70		
東津野村	東津野中学校					2		2	4		4	6		6		
大野見村	大野見中学校		5		5	1		1			6		6			
中土佐町	久礼中学校		16		16	28	1	29	21		21	65	1	66		
	上ノ加江中学校		7	2	9	5		5	3		3	15	2	17		
窪川町	窪川中学校		12	1	13	4	1	5	11		11	27	2	29		
	興津中学校								1		1	1		1		
佐賀町	佐賀中学校		4		4	4		4	4		4	12		12		
神戸市	市中楠中学校		1		1						1		1			
合 計			211	5	216	213	2	215	221	3	224	645	10	655		

通学別生徒数

平成3年、須工・全

区分	学 年	1 年			2 年			3 年			計			
		性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
通 学 方 法	汽 車		92	2	94	102 (1)	2	104 (1)	84	0	84	278 (1)	4	282 (1)
	バ ス ・ 汽 車		10	1	11	1	0	1	2	0	2	13	1	14
	バ ス		3	0	3	1	0	1	2	0	2	6	0	6
	船		1	0	1	1	0	1	0	0	0	2	0	2
	自 転 車		91	2	93	65	0	65	77	2	79	233	4	237
	バイクモーター		0	0	0	29	0	29	37	0	37	66	0	66
	徒 歩		13	0	13	6	0	6	13	1	14	32	1	33
	バイク・汽車		1	0	1	8	0	8	6	0	6	15	0	15
	計		211	5	216	213 (1)	2	215 (1)	221	3	224	645 (1)	10	655 (1)
通 学 状 況	自 宅		208	5	213	209 (1)	2	211 (1)	213	3	216	630 (1)	10	640 (1)
	親 族		3	0	3	4	0	4	6	0	6	13	0	13
	下 宿		0	0	0	0	0	0	2	0	2	2	0	2
	計		211	5	216	213 (1)	2	215 (1)	221	3	224	645 (1)	10	655 (1)

進路別卒業生数

平成3年、須工・全

		卒業生	進学者	就職者	就 進 学 職 者	各種学校	その他
機 械 科	男	70	3	59		8	
	女						
	計	70	3	59		8	
造 船 科	男	27		25	1	1	
	女						
	計	27		25	1	1	
化 学 工 業 科	男	31	1	27		2	1
	女	3		3			
	計	34	1	30		2	1
電 気 科	男	73	1	70		2	
	女	1		1			
	計	74	1	71		2	
計	男	201	5	181	1	13	1
	女	4		4			
	計	205	5	185	1	13	1
	%	100	2.4	90.2	0.5	6.3	0.5

卒業生

(1) 高知県立須崎工業学校分 (昭和)

年	機 械		造 船	小 計	累 計
	一 種	二 種			
昭和18.2		38		38	38
20.3	45	37		82	120
21.3	47	37		84	204
22.3		40		40	244
23.3	20	25		45	289
24.3	12		9	21	310
計	124	177	9	310	310

(2) 高知県立須崎工業高等学校分 (平成3年、須工・全)

年	機 械	造船	電 通		化 工	小 計	累 計
昭和24	38					38	38
25	24	19				43	81
26	38	25				63	144
27	48	11				59	203
28	37	5				42	245
29	45	16				61	306
30	48	12		33		93	399
31	65	15		32(1)		112(1)	511(1)
32	60	17		41(9)		118(9)	269(10)
33	72	19		34(1)		125(1)	754(11)
34	80	18		33(2)		131(2)	885(13)
35	84	22		42(5)		148(5)	1,033(18)
36	84	29		37(2)		150(2)	1,183(20)
37	85	25		42(1)	40(1)	192(2)	1,375(22)
38	87	26		44(4)	45(6)	202(10)	1,577(32)
39	81	23		41(1)	39(6)	184(7)	1,761(39)
40	90	28		41(1)	44(2)	203(3)	1,964(42)
昭和41	81	22	電通	電 気	39(2)	220(2)	2,184(44)
42	87	31	40	44	37(1)	239(1)	2,423(45)
43	85	23		79	37(2)	224(2)	2,647(47)
44	75	30		65	39	209	2,856(47)
45	72	31		67	26	196	3,052(47)
46	78	27		72	26(2)	203(2)	3,255(49)
47	80	32		61	27	200	3,455(49)
48	74	40		69	42	225	3,680(49)
49	78	36		76	32	222	3,902(49)
50	72	36		71	35	214	4,116(49)
51	78	39		71	30	218	4,334(49)
52	76	35		71	40	222	4,556(49)
53	76	27		71	26(1)	200(1)	4,756(50)
54	64(1)	33		70	29	196(1)	4,952(51)
55	74	19		67	25	185	5,137(51)
56	67	9		56	19	151	5,288(51)
57	67	23		76	26(1)	192(1)	5,480(52)
58	67	17		69	21	174	5,654(52)
59	68	10		71	19	168	5,822(52)
60	68	14		58	11	151	5,973(52)
61	69	23		73	35	200	6,173(52)
62	65	23		77	24	189	6,362(52)
63	67	13		68	17	165	6,527(52)
平成1	71	29		80	29	209	6,736(52)
2	78	32		67	28(1)	205(1)	6,941(53)
3	70	27		74(1)	34(3)	205(4)	7,146(57)
4	72	34		80	37(3)	223(3)	7,369(60)
計	3,045 (1)	1,025	497 (27)	1,844 (1)	958 (31)	7,369(60)	7,369(60)

註：()内数字は女子生徒で内数。

須崎工業スペツシヤル

はじめに

いまNHK総合テレビでは、「NHKスペシャル」という番組を放映している。

なかなか見ごたえのある番組で、さすがNHKがスペシャルと名付けるだけのことはある。

本編は、その素晴らしい「NHKスペシャル」にあやかっつて「須崎工業スペシャル」としてみた。

内容は、移転までの須崎工業の歴史で、それぞれの時代の重要なできごと及びいま記録にとどめておかなければ、多分永久に忘れ去られるであろうと思われるものを選んでみた。

本編を編集するに当たっては、創立三十周年記念誌からも一〇編の転載を許していただいた。これらの転載は本校の歴史に不可分のことながら記載されているからである。

また、新しく今回の企画でお寄せいただいた原稿の中には、これまであまり詳細を知らされていなかったものや、裏話もある。それぞれに感慨が込められていて、その方々のお気持ちやご苦労は、察するにあまりあるものがある。それらのご寄稿には、心からの感謝の念を新たにするところである。

現在の我が国の発展は、工業あつてのものといわれている。これから先、日本の産業の中で工業の果たす役割は殊の外大きくなっていくと思う時、工業教育の重要性を一層痛切に感じるのである。

本校を守り育てて下さった先人のご苦労をしのび、はしがきとしたい。

編集委員

回 想

— 苗木を植えて三〇年 —

寺 尾 豊

高知県立須崎工業高等学校が、創立以来、三〇周年の偉業を樹立し、多くの人材を世に送り、郷土並びに国の発展に寄与することが出来たその喜びの記念事業として先づ母校創立三〇年誌を発行するに至ったことは誠に意義深いものがあります。

これも、ひとえに、関係当局並びに、初代校長、中内知章氏を初め、卓絶した関係者各位のご努力のたまものであり、更にまた、卒業生諸君の真面目な実力が、社会的に認められ、且、愛校の精神による、ご協力の結果だと思えます時、開校に関与した私と致しまして、その悦びと感激を身近かにかみしめながら改めて、関係者の皆様に深甚の謝意を表する次第であります。

春雨秋風三〇年を今顧りみます時に、昭和の初年に日本を襲いました、経済恐慌の嵐が漸くおさまると同時に、人材の育成と、産業の振興が急速に唱導された当時の須崎町には、中学校はなく、遠く高知市に学ぶ不便を重ねて居りました。このことに対処するため、町長池内実吉君を中心として、須崎町に中学校の誘致運動が澎湃として起った当時の事が昨日のこの様に思い出されます。

曩に、私は、高知工業学校開校と同時に入学し、技術や薫陶をうける過程におきまして高知工業創立者、竹内綱・同明太郎両先生の、農を以て国を養い、工を以て国を富ましむる、この先生の座右の銘とも

云うべき精神に立脚し、立国の大本は、農をもってその基礎をきづき、国土は狭く、繊細な技倆をもつ国民性を生かして、工業の隆盛発展により、文化並びに生活の安定と、経済の高度化を、その基盤とすべきだとの信念をかたく致しました。

この考えを実行にうつすため、東京に、関東正機株式会社を創立しました処、先輩並びに志を同じくする郷土の青年同志の協力を得て、会社は目的の方向に発展致しました。

私は、その余力をもって、郷里須崎に工業教育の施設を致し度いと考えて居りました矢先、たまたま、友人池内町長より、須崎町に中学校の誘致運動をおこしているからと、協力方の要請があり、私はここぞとばかり、今迄の信念からして須崎に工業学校の必要性ありと強く説きました結果、幸いに、関係者並びに町長の賛同を得、一致してその運動を展開し、私も建築資金等を御寄付すると共に、当時、特に調達極めて困難であった、実習用機械器具全部を提供し、優秀な指導陣と相まって、完全な教育が出来たことは、私にとって、生涯忘れ去ることの出来ない、最高の喜びでありました。

この様にして、本校は、太平洋戦争に突入しようとする、昭和十六年に、機械科のみではあったが、希望の開校を見たのであります。

しかし、本校の歩んできた道は決して平穩ではありませんでした。戦争の深刻化に伴い、関係者の応召、社会的混乱、遂に敗戦をむかえ、日本のすべてがそうであったように、色々の困難に遭遇したが、

その後、教育制度の改革により、工業高等学校として発展し、機械、電気、化学工業、特に全国にも例の少ない、造船科を設置し、その内容とともに、校名はあがり、人材及び技術教育の高度化は、社会的に

も信頼を得て、創立の目的を達成しつつあり、当初百名の生徒は、現在毎年二百余名の卒業生を世に送る盛況となり、漸く、校舎等の拡充に迫られ、今回大間地区に、広大な敷地を得て、理想的、近代的な、施設の充実に向っておりますことは、誠に喜ばしき次第であります。

私は、以上のような関係で、須崎工業高等学校の関係者各位とは、血のつながりさえ覚え、身近かな問題として今後の御活躍を心から御期待申し上げる次第であります。

本校が、益々発展し、創立並びに、教育の目的に向って、更に邁進することを祈念してやみません。

(四六・九・五 元郵政大臣、参議院副議長)

(遺稿・三十年誌より転載)

貴台並に職員各位には無
 却説來る廿五日には輝か
 中校創立十五周年記念式
 典挙行の趣向は目出度く
 中同愛に堪へ喜ん
 挙式の中盛大と益々の発展
 と衷心より祈り申す
 中一同様も宜敷申す言
 贈る存不取敬承祝詞まで
 五月十日
 参議院
 寺尾 豊

昭和31年5月、本校創立15周年記念式に寄せられた祝詞

元参議院副議長・元郵政大臣

寺尾 豊先生

元 教 諭 矢 野 象 一

(昭和二十年 機械科一種卒)

私達、機械科一種・二種の一期生九十名は、昭和十六年四月十六日、須崎国民学校(現小学校)の講堂で開校式並びに入学式を行った。

本誌を読まれる皆さん方は、私がおこにあらためて申し上げるまでもなく、本校創立に際して、地元須崎市ご出身の寺尾先生が果たされたご功績についてはご存じの方が多いと思う。

入学式るとき、来賓としてご臨席賜った寺尾先生は、まだ四十歳半ばのお若さで、二つの会社、「関東製作所」「関東精機」の代表取締役社長であった。

来賓祝辞として、講堂の壇上に立たれた先生は、壇上を左右に歩かれながら、「皆さん入学おめでとう……、おめでとう……、と、まるで私達の一人一人に対するかのように、「おめでとう……」を繰り返言われた。そして、そのときのお話を要約すると次のようなことであつた。

「私は高知工業高校の卒業です。高知工業高校は、竹内 綱・竹内 明太郎両先生のお創りになった学校であります(綱先生は高知県宿毛市のご出身で、戦後総理大臣を努められた吉田茂氏のご尊父、明太郎先生は綱先生のご長男で、吉田茂氏の兄に当たられる)。

両先生は、当時から日本の工業立国について大変な先見の明をお持ち

ちになつておられた方で、私はその両先生のご薫陶をいただいたお陰で現在があると常々感謝しています。今回、この本校の創立にあたって私のしたことは(本校創立経費の半分強にも当たる私財をご寄付された)、両先生へのご恩返しができると思つてのことでありませう。

従つて県と町は本校を中学校(現在の普通高校)にしたいとお考えであつたようですが、私がお恩返しをさせていただくからには、本校は工業高校でなければならなかつたのです。

お話にもあるように、本校が工業高校として発足した理由は、この寺尾先生のご意向をお受けしたものであつた。

また創立当時は、約二年間にわたり、私達生徒はもちろんのこと、須崎町内及び周辺地域の大勢の方々が、スコップと鍬・モッコ・トロッコだけの、全くの手作業で学校用地の整地作業に勤勞奉仕をして下さつた(勤勞奉仕とは賃金無しの奉仕作業のこと)。

このように地域こそつてもいえる稀な創立事情から、本校の創立記念日である五月二十五日(昭和十八年五月二十五日に札町の校舎が落成し、この日を本校の創立記念日とした)には、歴代の学校長が本校創立の功勞者として寺尾先生のご紹介をし、併せて当時それぞれの立場でご協力、ご援助をいただいた方々への感謝の念を新たにしているのである。

寺尾先生はその後、衆議院議員に当選されて政界に入られたが、やがて吉田茂氏の政界出馬に際して、衆議院議員を吉田氏に譲られ、ご自身は参議院に移られて、同副議長、郵政大臣等の要職を歴任され、晩年には長年にわたる政界でのご功績により勲一等瑞宝章をお受けになられた。



相撲部と共に国会へ寺尾先生を訪ねて。
後列右から3人目が寺尾先生

高知県高校相撲界でこの人ありといわれた、名監督の田原先生だった。私も当時本校の教員として同僚の浦先生と共に三本木大会に同行し、その帰りに東京に立寄り、準優勝旗をさげて参議院へ寺尾先生を訪ねてご挨拶に行った。

先生は、「それはおめでとう、よく頑張ったね、えらかった、えらかった……。これからも頑張つて、須工の名を挙げて下さい」と、我が事のように喜び、励ましの言葉を掛けて下さり、何気なく帰りの汽車の時間を聞かれ、「東京駅へお弁当を持っていくからね」と言われた。

私達は、東京駅で「瀬戸号」に乗り、先生をお待ちしたが中々お見えにならない。夏の暑いとき、ましてコンクリートの東京の夜は高知などとは暑さが違う。待ちかねて皆がシャツを脱ぎ、半裸になつて、「来てくれるろうかねえ……。」と半ば諦めの声もでました。

ご受章の祝賀会は、先生のご出生地である当須崎市の中央公民館で行われ、先生を慕う大勢の市民はもとより本校教職員も多数が出席し盛大な催しであった。

先生は、政治家としてそのご生涯の半生を捧げられたが、その間にあつても本校のこととなると殊の外ご留意、ご配慮をいただいた。

その幾つかを思い出すままに紹介したい。

本校相撲部がその名を全国に轟かす活躍をはじめたころ、あれは昭和二十八年のことだった。高知県相撲大会初優勝の勢いによつて、全国高校相撲金沢大会、同三本木大会に出場し、何れも準優勝という成績を納めた。選手は藤原・高山・長山ほか中井(規)・山崎等、監督は

田原先生だけは、「いや、寺尾さんは約束を守るき、もう少し待ちよつてみろう」といつていた。程なく、ホームの向こうの方から両手に大きな風呂敷包みを下げて、列車の窓を覗きながら私達を捜してこちらに歩いて来られる先生を見付けた。「寺尾先生じゃ……」。私達は大急ぎでシャツを着て、ホームへ飛び出し、先生をお迎えた。

「おお、間に合つて良かった。相撲取りは腹がへるから汽車の中で食べなさい」と寿司折りを二十折りほども私達に下さった。

私達は、先生のこの誠実なお人柄に感服し、また先程まで先生を疑つたりしたことを恥じ入り、唯々「すみませんでした」、「有り難うございました」を繰り返すばかりだった。

先生のお見送りをうけて列車が発車し、車内では先生の心尽くしの稲荷寿司を皆で頂戴しながら、「誰ぞ、もう来んかもしれんじやの言うたがは……」と、大笑いしたことだった。

昭和三十一年、郵政大臣になられた寺尾先生は、故郷の高知県に錦を飾ってのご帰郷をなされ、それを機会に、火災後第五代森岡貞篤校長先生のご尽力により復旧発展のめざましい本校に立ち寄られることになった。(寺尾先生と森岡貞篤先生は高知工業の同級生)

私は、同僚の木岡先生と当時学校にあった車、トヨベットワゴンに「歓迎・郵政大臣寺尾豊先生」と、フスマ一枚分の大きさのカンバンを縛り付けて吾桑の桜橋までお出迎えをした。

当時の道は、道幅が狭くまだ舗装もしていなかったので、晴天続きの日に車が走ると、もうもうと土煙が舞い上がり、後に続く車は何もかもほこりだらけになるのが常だった。勿論車は冷暖房など無いので窓を閉めることは出来ず、ほこりは容赦なく車内に充満するのだった。

学校へ到着された先生は、講堂で待ち受けていた全校生徒に約二十分くらい、本校に対するお気持ちや生徒達への激励等をお話になった。

また、新設された電気通信科の教材機器不足の解消にと、電信電話公社(現在のNTT)の電話交換設備で、破棄処分になった機材の本校への払い下げについてご配慮をいただくことになった。

本校の修学旅行団は、当時は観光よりも就職に関連付けた工場見学が主目的だった。私が主任を担当した二つのクラスは、東京に行ったついでに、国会見学もコースに入っていた。

私は寺尾先生にこのことをお伝えしてあったところ、その時刻に国会議事堂の前で私達の到着を待っていただき、生徒達に、国会の仕組

みや、仕事についての説明をして下さり、秘書の方を案内役に付けて下さったりしていただいた。お陰でよい社会勉強が出来たと喜んだことだった。

寺尾先生のことと忘れられないのは、先生の胸像を学校の玄関わきに建立しようという話のことである。

それは昭和三十四・五年の頃であった。

この話がどこから出てきたものか私はよく知らない。とにかく、同窓会と当時のPTAが主体になって作るという話であったが、あれこれしている間に、何時のまにか同窓会が主体になってしまっていた。

当時私は、本校に勤務していて、第一期の卒業生でもあり、同窓会規約のたてまえもあって、田辺博造前同窓会長のもとで同副会長兼同事務局長になっていた関係上、いつのまにかこの企画の推進役になっていた。

何よりも先に、先生のご了解をいただかなければならないということとで、この話を先生にお伝えしたのだが、先生は「それは、私は現職の国会議員であるし、お話は大変有り難いがとてもそのようなことは……」と、極めて強く固辞された。

何度かお会いしてご相談申し上げたが、一向にお聞き入れいただく気配がなく、それならその資金で、寺尾奨学金を設立するのはいかがなものでしょうか、ともお話ししたことだったが、周囲はやはり胸像建立をと強い要望で、先生もそれほどまで言っただけなら本意ではないかと、やっとのことでご承知下さり、モデルになる写真を宿泊先の城西館で撮らせていただいた。校長室や三十周年記念誌にある写真がそれである。

胸像は、その頃高知工業高校教諭で、県内彫塑界の大御所、県展審査員でもあった渡辺一八大氏に制作をお願いし、予算十五万円で昭和三十五年にブロンズ製の立派な像が出来上がった。ちなみに、この経費は全部同窓会で賄ったものである。

ところが、折しも高知県の教育界は勤務評定・学力テスト反対闘争等の真っ最中で、職員会では「どんな理由であれ、現職の国会議員の胸像を学校の中に建てるなどは非常識もなはだしい」ということで、とうとう承認して貰うことが出来ず、建立話は宙に浮いてしまった。

その間職員会では、私と、同窓会を援護して下さっていた田村隆徳先生の二人がその反対の矢面に立たされ、まったく四面楚歌の思いであった。そして私は、同窓会に対する責任もあり、同窓会解散宣言をしたことだった。もともとこの宣言は私だけのもので、その後の同窓会は第九代沢本豊校長先生のご指導により、前にもまして組織力を強め、今では資金力もある全国的にも稀に見る立派な同窓会になっている。

宙に浮いてしまった胸像はどうすることも出来ず、それはどうかと思いつながら、寺尾先生に献上するということになった。

どうしてそうなったか未だによく解らないところであるが、今考えしてみると、まさに冷汗三斗の思いがする。

案の定、寺尾先生は、あれほど断つたのにと大変なご立腹で、お断りに行ってもお会いすることすら叶わないという始末だった。

やむを得ず、本来なら寺尾先生にお渡しすべき胸像の目録を作り、昭和三十六年に行われた創立二十周年記念式典の中で、当時の須崎市

長だった上田辻益氏にお願いして先生の代理人になっていただき、目録を受け取っていただくことでなんとか決着をつけたのだった。

しかしもちろんのことながら、胸像そのものは寺尾先生の手元にお送りすることもできず、学校の校長室にしばらくの間保管させていたく以外に手の打ちようがなかった。

昭和四十七年、本校は糺町の校舎を後にして多ノ郷和佐田の地へ移転した。幸いにもその年は、本校創立三十周年にも当たっていて十一月には新築移転と創立三十周年記念の祝賀行事が行われることになっていた。同窓会ではこれを機会として寺尾先生の胸像を新校舎の玄関わきに建立することが出来た。(建立については註を参照)

記念式典の当日、その時の学校長であった村木先生、同窓会長の清家氏、同窓の現教職員、県内外から式典に出席していた同窓会員等約三十名程が参列して除幕式を行った。

銅像となった先生は、「矢野君、随分苦勞したねえ」と言われているようだった。半生を国会議員として国家に捧げ、本校を常に心に留めてこられた先生の穏やかなお顔がそこにあった。私は過去の紆余曲折が走馬灯のように頭の中をよぎるのを感じた。

銅像の話がでてから、すでに十三・四年の歳月が経過していた。

先生は、昭和四十七年十一月二十七日に逝去された。本校の移転並びに三十周年記念式典、そして胸像除幕式を行った二日後のことだった。ご命日は学校の校誌にも記載されている。

高知県での告別式は、後日高知市にある県民体育館で県内外各界の千数百人が参列し盛大に行われた。

思えば、政治家として大成され、また高知工業創立者の竹内先生の



玄関わきに建立の寺尾先生胸像

ご薫陶を生かされて、高知県工業教育に大きな足跡を残され、本校の発展にも意を尽くされた先生であった。私は須崎工業の一卒業生ということもあってか、公私共のご交誼にあずかり、お人柄に接することの出来たことを心から光榮に思っている。

本校の創立五十周年記念に当たり、先生のご遺徳を讃え、感謝の気持ちと併せて心からのご冥福をお祈りして、終わりになりたい。

胸像建立について（編集委員、註）

建立については前同窓会長田辺博造・同副会長矢野亀雄両氏の計らいもあって、同窓会本部で段取りをした。

特に矢野亀雄氏は、地元の利から揮毫及び施工者などのお世話をいただいた。

記録として関係者を記載しておく。

胸像制作 渡辺一八大氏 高知工業高等学校教諭（制作時）

胸像鑄造 いずれかの鑄造所に渡辺先生が依頼されたようである

が、鑄造者名は不明である。

台座碑文 学校沿革誌から引用されたものと思われるが、作文者は

不明である。

揮毫 吉村輝吉氏 須崎市中町（当時須崎市随一の書家）

台座工事 江西石工所 須崎市鍛冶町

あの頃の思い出

元職員 邑田一郎

寺尾豊先生の寄付で県立須崎工業学校が、誕生することとなり、須崎町は寺尾先生に心から感謝するとともに、高岡郡の中心地として凡ゆる機関の備わっていた須崎に、ただ一つ欠けていた中等学校が生れることは、それこそ須崎町あげてのよろこびであった。そのよろこびの裏には次のような話もあったようであった。

大正も末に近い頃、佐川町と現在の佐川高校の誘致争いをして一敗地にまみれ、聊か面目を失っていた須崎は、佐川に対抗する意味合でもあるまいが、組合立須崎実業女学校（現在の電報電話局はその跡に建っている）の内容を充実して子女の実業教育の振興を図った。

普通科二年本科二年の四年制、その上に研究科一年別科一年、研究科へは本科の卒業生と高等女学校卒業生を收容することを看板とし、別科は更にその上で、施設の充実を図るとともに、指導者にも有資格者をいれて、実業科では高等女学校にヒケをとらない陣容を整えていた。事実佐川や高知市内の高等女学校の卒業生が研究科に入るようになった。

これは当時の須崎町の指導者が、県立女学校のないために如何に苦悩していたかの一面を、物語るものであろう。こんな時、寺尾先生の御好意で郡下唯一の男子中等学校の創設は、町を挙げての朗報であった。(この頃高知市以外で県立中等学校のあったのは安芸町に中学校と女学校、中村町に中学校と女学校、佐川町山田町に女学校があったのみである)

校地が糺町に決ってから、建築にとりかかる迄の整地に、町民の勤勞奉仕があつたのは、寺尾先生への報恩と対面上どうしても中等学校がほしかったという、ひそんでいた意識があらわれたことと思う。当時の松下組合校長は寺尾先生と親しかった関係もあつて、特に青年学校、実業女学校の教員生徒は、整地に毎日のように勤勞奉仕をした。町を挙げての奉仕である。バイリヨウ、担い棒、三ツ鍬、今のように入気のきいた用具はない。これこそ竹槍で肉迫戦をやるようなものである。先づ最初の鍬入れは東南隅の少し高かった桑畑であつたように思う。丁度暑い頃で汗をふきふき、原始的な用具で桑の株抜き、三ツ鍬も役立たない礫交りの砂土を、それこそ海戦術で西方の低地にバイリヨウで二人一組になつて運んだものである。他人様の学校づくり、こんなに奉仕をせにやいかんかと不平もでた。然し須崎に待望の中

学校が生れるという喜びの気持もあつてか、組合校の生徒も馬力をかけて整地に汗を流してくれたのである。

奉仕も終り、本館(昭和二三年七月火災のため焼失)が出来あがると、仮校舎の須崎小学校にいた生徒も本校に移り、借家から我が家で腰を落ちつけて勉強に精を出した頃、私は中内校長の請をうけて、体操科の嘱託として確か、週二時間か四時間位月手当五円?で須崎工業の新しい歴史をつくらうと、真剣なまなざしに燃えた生徒の対手をする事となつた。

校舎もまだ整っていない時だし、ろくな運動場のあろう筈もない。ましてや戦時下、資源の欠乏している時、運動用具はないし、殺風景な運動場で満足して貰えなかつた、あの頃の生徒に気の毒な思いをしたことであつた。寺尾先生から初代校長として、懇望されて赴任された中内先生は、温厚な方であり、黙々として新設校の経営に当たられた。その人柄に動かされて、嘱託とはいえ、何とかして御酬いせねばと働かせてもらったものである。

運動場の東北隅に鉄棒を三間と附設した砂場をつくって貰い、それが唯一の運動用具、時により組合校から跳箱を借用したこともあつたかと思う。全くの徒手空拳、味もそつけない授業であつたと思う。時により準備体操が終ると、池山から池ノ内一周マラソン、当時の池の内は何の障害もない、見透しもきき、サボル者はすぐわかるし、誠に都合のよい郊外運動場であつた。私が昭和十九年県の社寺教学課へ体育担当者として入るまで、短い時日ではあつたが、あの頃を想い出して懐しさが一杯である。

母校の校地校舎を失うことは、心のよりどころを失つて、何となく

寂しいものである。私は二十年ぶりに第二の故郷である須崎へ帰ってきた。ところが当時関係した三つの学校がそれぞれ移転し又移ろうとしている。組合校跡は電報電話局になり、思い出のものは講堂前の一本の公孫樹だけである。漁村修練場のあった水産試験場もないし、須工が今度大間の丘陵上に移るし、新しく発展するためには結構なことではあるが、跡地がショッピングセンターになっても、せめて須工を想い出す校門か樹木か記念になるものを残して貰いたい。創立当時ここで学んだ者には特にその感が深いと思う。何か残してほしいと思うものは私だけではない。

(四六・八・三〇 県議会議員)

(遺稿・三十年誌より転載)

須工建学の精神

「技術のためには死ね」——中内知章校長先生の遺訓——

初代同窓会長 田 辺 博 造

(昭和十八年 機械科二種卒業)

昭和四十六年、当時の同窓会長として、母校創立三十周年記念誌を発行したのが、つい昨日のこのように思う。

当時五十周年などといえば、はるかに先のことと思つたが、あつというまに二十年が流れ、須工創立五十周年は、現実のものとなつて私にも迫ってきた。

次の八十年、更に百年と、限りなく時は移り、母校は充実発展してやまないと思う。

この五十年という大きな節目に当たり、一体「須工建学の精神」とは何であろうかを探り、記録にとどめておきたいという思いにかられた。

創立当時、校訓というものがあつた。

- 一、恒に聖勅奉体し皇国民たるの自覺を堅持すべし
- 一、健康に留意し強靱なる心身の錬成に努むべし
- 一、和親を旨とし至誠の人たるべし

一、明朗豁達にして明智の学徒たるべし

一、勤勞を尚び技術の錬達を期すべし

これを毎日、大声で朗読させられたが、果たしてこれが須工建学の精神といえるかどうか、論の分かれるところであろう。

そこで、初代中内校長先生の奥様や、今日生存する唯一の校史の生き証人、田村隆徳先生などをおたずねし、何でもいいから、建前論で



後列で立つのが筆者
機械工場床のコンクリートに使う砂利を須崎の浜へ取りに行っていた。

はなく、本音のところ、初代校長先生が、須工の創立にあたって、一番強く望んでおられた「祈りのような思い」は何であつたかに視点を置いて、お話をうかがつた。特に菅子夫人からは、実には沢山の、貴重なお話を拝聴することができて、一人感動を深くし、また田村先生は、「少し時間が欲しい」と申され、後日わざわざ、長いお電話を下さり、大変恐縮するとともに、その熱い母校への思い入れに胸を打たれたことであつた。

これらのお話の中から、私なりに、これぞ「須工建学の精神」と思われるものを抽出してご披露申し上げ、母校創立五十周年の記念にしたいと思う。

須工が開校された昭和十六年といえば、四年間続いた日中戦争の停戦もできないまま、更に強大な連合軍を敵にまわして、日本が太平洋戦争に突入していった年である。

このころから、少年兵の学内募集が行われだして、予科練習生や、予備練習生の募集が須工の中へも入ってくるようになった。

そのような状況を、初代中内校長先生は、「私は十五や十六の子供達に、銃を取つて死ぬ、とはようすすめん……」と、悩んでおられたそうである。そのような中で迎えた第一期生の卒業式の式辞の原稿に、夜を徹して取り組まれ、出来上がった原稿を、「聞いてくれ」とご夫人に朗読してお聞かせになつたという。

その中に、若き青年校長として一番言いたい、胸を流れる熱い血の叫びとも言えるものがあつた。それは、「技術のためには死ぬ」という言葉であつた。

「どうかな、ちよつときついかな……、ほんとうは、こう言いたい

のだが……」と、先生は夫人にたずねられた。

夫人は静かに申し上げたという。

「おめでたい卒業式に、死ぬという言葉はどうでしょうか……、技術のためには身命を捧げよ」ではどうでしょうか……、

「そうか、そんならそういうふうに直そうか」といわれたと夫人は私に語られた。

実にほのぼのとした夫婦愛のただよう、ロマンに満ちたお話である。

おそらく、少年兵の募集に心を痛めておられた中内校長先生は、諸君は、「銃を取つて死ぬな」、しかし「技術のためには死ぬ」と申されたかつたのではないか。

国をあげての軍国主義教育、戦争賛歌の大合唱の中で、お国のため、陛下のために、戦死は男子の本懐であり、最高の名譽であるという風潮に、何人も逆らうことはできず、また許されなかつた。

それをいった途端に、国賊である。だが中内校長先生は、胸の奥から噴き上げる潮のような思いで「技術のためには死ぬ」と申されたかつたのであろう。

この言葉は、校長先生が「技術者の良心」として、お若いときから培い、永い間、心の奥深く、温めてきた思いであり、それが戦時下に送り出す教え子たちへの「教育者の信念」となつて噴出したのだと思う。

朝に晩に、寝ても起きても、校長先生の口から出るのは、「何とか、技術を身につけさせて、一人前の生徒に仕上げにゃいかん」という言葉であつたという。工業高校の生徒にとつて、「技術」は正に命であり、「技術のためには死ぬ」ということは、「技術のために生きよ」、「技

術のために生涯を捧げよ」ということである。

先生はまた、「就職したら三年は辛抱せよ、それでいかなば転職せよ」ということもよくいわれたそうである。一か月や二か月の、安易な転職を別の言葉でいましめ、三年という目処めどを与えて励ました慈父のようなご指導だったと思う。

「教育の力は三割じゃ（微々たるものだ）。その個性を変えることはむづかしい。だから、その人の個性に合った能力を引き出さなきゃあいかん」というのも先生の持論であつたという。

このような、教育に対する「情と幅」を併せ持ち、一つの哲学をもつておられた中内校長先生であつた。

また、あれだけ敵愾げんぎ心を煽る情報、スローガンの氾濫した戦時教育の中で、先生の口からただの一度も鬼畜米英等という言葉聞いたことはなかった。それどころか、「米国や英国の技術は、高い優れたレベルにある。そのことを冷静に見つめ、学ぶところは学ばなければいかん」という授業があつたことを、当時の幼稚な私の頭の中にも、驚きのような記憶として残っている。

この「技術のためには死ぬ」という言葉を、田村隆徳先生は「私の考えだが」と前置きして、「校長さんのお考えは、役にたつ人間を作る」ということであつたと思います。それが校長さんの教育方針であり、私も全く同じ思いで一生懸命でした」と語ってくださいました。

この言葉は、中内校長先生の言葉と、正に表裏一体のもので、さすがに中内校長先生が最も期待する後輩として、須工にお呼びになり、一番目をかけて、面倒をみられたという田村先生だけに、その教えの神髄を見事に把握しておられたのに感嘆した。

中内校長先生は、終戦とともに教職を辞して、須工を去られた。

しかし、その卓越した技術者としての能力を入交太兵衛氏に高く評価され、請われて入交産業(株)に入社され、戦後の同社の復興に取り組まれたのであつた。

同社におけるご活躍を、当時の高知新聞は次のように報じている。

「土佐石灰のリーダー 中内知章氏、入交産業取締役製造部長」という見出しで、「疲れた開襟シャツ、風采も地味、言うことも派手ではないが、衰え行く土佐の石灰を背負って立つピンチヒッター。

ハッタリもない、もとより政治的な腹芸をこね回す技術など、トント縁遠く、釣りと山をぶらぶら歩くのが道楽。あれや、これやの人柄で、戦争中須崎工業の初代校長になつた。だが、敗戦後、教育の百八十度の転換にほほかむりして行くには、あまりにもナイーブな技術屋の良心に、入交産業取締役製造部長とおさまつた次第。

この暑さでは、粉塵のために水ぶくれも出来るという工場の中に頭を突っこみ、忙しく走り回っている。

だが、窯や風化機の改良で、コストの引き下げに早くも成功。特許も出願中。この人の力で、なにもかも立ち遅れる土佐の産業の中、石灰だけでも生き返る日も遠くはあるまい。」

またその当時、産業界に一大センセーションを巻き起こした、「中内式堅型石灰風化機と窯（焼成炉）」の成功については、各新聞が写真入りで大きく報じているが、高知新聞も、風化機と窯を写真で紹介し、

「中内氏の研究実る！」馬力のいらぬ風化機。石灰二割が節約の窯。と大きく見出しをつけ、「この方面の権威、永井東大教授も視察、激

賞されたもので、いま県発明協会を通じて特許出願中である」として、先生がいかにか戦後の物資不足の折に、省力化とコストダウンに寄与されたかを、こと細かに解説し、産業界全体にも大きく貢献されたことを、絶賛した記事を載せている。

奥様のお話では、この種の研究に徹夜は付きもので、先生は毎日二時間しか寝なかつたそうである。当時の、小さな丸い飯台を机にされて、夜もすがら計算に没頭し、図面を引いて暁に至り、奥様や子供さん達が朝起きていったら、「そうか、もう朝になったのか、これは大変」とほんの少しの間仮眠を取り、食事もそこそこに、出勤時間に遅刻しないよう、出かけられたそうである。

こうした不眠不休の努力が稔ったとき、先生の肉体はボロボロになって、遂に病の床につかれたのであった。しかし、実際の機械の稼働は、先生が見なければどうにもならず、毎日病床から、タクシーで現場に出かけ、必要な指示をされてお帰りになるということを繰り返され、一〇〇%の完成を見届けて後、間もなく不帰の客となられたのであった。享年五十五歳。

私たち教え子は、頼り切っている父親を失ったような、深い悲しみに打ちひしがれた。

入交産業は、盛大な社葬をもって先生のご功績をたたえた。

中内校長先生は、当時の大阪高等工業学校（現大阪大学工学部）をご卒業と同時に、母校、高知工業高校の教諭となられたが、程なく尼崎工業高校に出向され、同校の実習機械工場の建設を果たされ、その経験と能力に対する絶対的な期待と信頼により、弱冠三十八歳にして、異例の抜擢により、須崎工業の初代校長となり、その創立を成し遂げ

られたのであった。

また、戦後は入交産業の復興再建と、そのご生涯において三つの大事業を手がけられ、いずれも見事な花を咲かせ、実を稔らされたお方である。凡人には、その中の一つでも容易ならぬ大事業であることを思うと、いかに豊かな才能の持ち主であり、同時に周囲の協力が、自然に集まってくる仁徳のご人物であったかが理解できる。

先生は、身をもって自らの言葉を実行し、その生涯を技術のために捧げ、技術のために死す、の範をお示しにされたのであった。

須崎工業五十周年にあたり、偉大なる創立の恩師、中内知章先生を追悼し、あの眉目秀麗の貴公子、青年校長の温顔を偲び、先生の遺訓「技術のためには死ね」とのお言葉こそ、須崎工業高校に不滅の灯火として、絶やすことなく燃やし続けなければならない「建学の精神」であろうと固く信じてやまない。

(了)

註記 高知新聞の記事は、奥様保管の切り抜きによりました。また、奥様並びに田村隆徳先生のお話に関する文責は、すべて筆者にあることをお断りいたします。(田辺)

須工創立と

初代校長 中内知章先生

元PTA会長

中 田

稔

『悲願』 親の願の内、吾が子の教育は、今も昔も変りない望であり、願でもある。戦前小・中・高、六・五・三時代、中学に進学する

数は極めて少なかった。県内で高知市には一中、市商、工業、農林など随分古くから開校されて居たが、以外では中村に中学、安芸に中学と女学校があった。須崎には中学校はない。進学しようとすれば、鉄道は開通していない為、外宿しなければならぬ。高知へ外宿して通学さすだけ経済面で許される家は全般的に収入の途が少い時代故、非常に少く旧須崎町で毎年五、六人、多くても七、八人内外だった。須崎に「中学がほしい」それは長い間の悲願であった。

当時県の貧弱な財源では、中学校新設は容易でない。昭和の初期高岡郡中に一女学校新設が県議会で通過、その候補地に佐川と須崎が上った。地理的にも人口分布などよりしても、須崎が条件が勝れているように思われたのは吾々の自負心かも知れない。佐川には同地出身東京に維新の元勳、元宮内大臣伯爵田中光顕翁あり、政治には直接関与しなかったが、大きな力だったと思われるし、当時県議会随一の開將で重鎮でもあった森淳太郎氏が居た。須崎には当時一人の県議も出していない。結局佐川に決った。政治力の敗退だと当時いわれた。かくて悲運の涙をのんだ。

『寺尾豊先生の篤志』 須崎出身で東京で関東精機製作所を経営成功した寺尾豊先生から、母校高知工業を創立した恩師竹内綱、同明太郎両先生の遺志にならない、郷里須崎へ工業学校を新設したい。その費用を奇附するとの申入れがあり、県としても女学校でかつて苦しい思いをさせた須崎だったので、之を受入れた。

『悲願達成』 かくて長い間の悲願は、寺尾先生の愛郷と今後我が国の進むべき途「工業立国」、この戦士養成という遠大な理想の下に、待ちに待った中等学校、然も技術者養成の工業学校だから町民の喜び

はたとえような程だった。

『須工開校』 機械科だけで発足、初代校長として高知工業より美男にして人格識見抜群の中内知章先生を迎え、須工は誕生した。時に昭和十六年四月であった。この年十二月八日大東亜戦争勃発、国運をとしての戦故、学徒として勉学のみを精進は許されず、勤勞奉仕に随分動員された。敗色濃い昭和一八年一二月二種一期生三八名が初めて社会に送り出された。

『感謝の勤勞奉仕』 敷地は札町の現在地だが、ここは桑と野菜畝、それに公文儀太郎氏経営須崎牧場があり、北は湿田だった。敷地造成は桑の木を抜き、その地の土で湿田を埋めたり、整理する作業で、今日の機械力を以てすれば僅の期間で出来るが、当時としては鋤やスコップで、土をバイリョウやモッコで運ぶのだから、随分手間だった。然し悲願達成の喜びに湧く町民の、感謝は一九となって、各町が順次割当てで奉仕した。奉仕日数は当時、例のない程多かつた。かくて敷地は出来た。

『中内先生退職』 昭和二〇年八月一五日終戦。見るからに温厚にして気品風格だけでなく余りにも豊かな才能、然も「ボツチャン」の愛称で親しまれた名校長中内先生は、戦時下の教育理念と敗戦後のそれとの相違に、遂に職にとどまることを潔しとせず、戦後数ヶ月を経ずして退職された。退職後しばらく浪人生活をされたようであるが、入交太蔵氏の要請により、東洋電化設立のため技術部門の責任者として、夜もろくに眠らない程の努力を傾注された由であるが、重なるご苦勞がたたってか、間もなく五十をいくばくも出ない若さで他界された。先生は、県内工業教育の第一人者として、長くこの道にお留まり

願うべき方だったが、まことに惜しい極みであります。

(三十年誌より転載)

創立後の数年間

元教頭 田村隆徳

一、間借り生活と勤勞奉仕の話

開校早々は無論校舎も無いままに、須崎小学校(当時国民学校)の二教室とそれに続く理科の準備室を借り、授業に使用した。私が奉職した時、北の理科の準備室を改造した急造の職員室に、常時席をかまえておられたのは、中内校長先生、太田幸吉先生、森岡千足先生のお三方のみ。他の先生方はすべて小学校、高等小学校からの応援で授業をまかなっておった。この森岡千足先生こそ、須工最初の物故者となられた方である。

先生は、もの静かでまじめな君子人で、責任感の強い方であったが、もともと蒲柳の質で、生徒の指導や、打ち続く勤勞奉仕に心身をすり減らされ、いくばくもなく結核を病む身となられた。或る時、健康診断に私と共にひっかかり、高知の保健所だったかで精密検査を受け、私は無事パスしたが、先生は血沈が一時間に三十近くで、大変気にしておられたことを憶えておる。間もなく休職、ご郷里の佐喜浜で療養中に、まだ前途春秋に富む身でとうとう亡くなられた。

去る者は日々とうとして、忘れ去ることは故人に対しまことに申し訳ないと思ひ、同窓会誌創刊号にも特に先生のこと言及したことが

あるが、このたび改めてお名前を挙げ、草創時代のご苦勞にむくい、且又教えを受けた方々の思い出のよすがにもしたいと思う。

扱、この間借り生活は二年続いた。一年目は一種一期生五十名、二期生四十名が共に小学校で学び、二年目には一種一、二期生が小学校、二種一、二期生はすでに出来ていた機械工場に入り、職員室も小学校と機械工場に別れた。勉学の合い間には勤勞奉仕に精を出した。初年度には主として土方作業であったのが、二年目には建築作業にも手を貸すようになった。それは、彼等が卒業後述懐したように、勉学と勤勞奉仕と相半ばする程のものであった。やがて教室が順次出来るに従い、学校造成のための勤勞奉仕はなくなり、これにかわって郊外での勤勞奉仕、勤勞動員が行われることになったのである。

一、実習工場設備の件

学校創立時の苦心は、それにたずさわる者の誰しも経験するところであると思うが、須工創立当時は、丁度大東亞戦争のはじまる前後であり、軍需物資最優先の時であったので、実習工場は出来ても、中に入れる機械器具の入手については、校長中内先生の非常に苦心されたことの一つである。その詳細については思ひ出せないが、時々「機械が思うようにはいらんで困る」とこぼしておられたのを憶えておる。校長命で、寄宿舎建設の資料集めに出張した途次、愛知県のワシノ精機に立ち寄り、万能研削盤の納入督促をしたところ、さんざん待たされたあげく、民需は後回しという訳で、要領を得ぬまま追返され、坊の使いを演じたこともあった。結局この機械は納入されず、特別に作られた基礎も無駄となった。

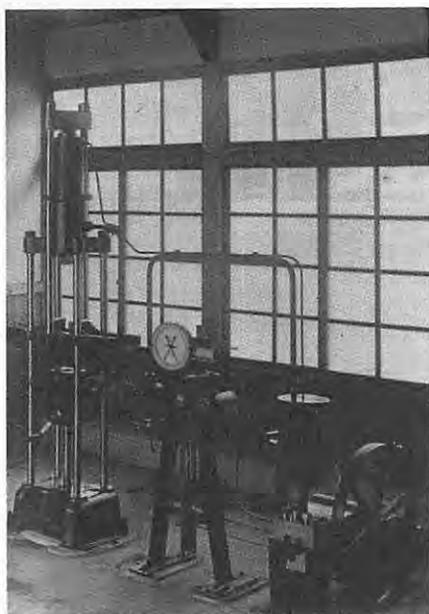
これは苦勞の一例であるが、幸い先生と同窓の橋田正治さんが東京

で機械商を営んでおられ、同氏の並々ならぬ御協力があった、結果的には、当時としてはまず上等と云えるのではないかと思われる設備が出来上った。機械科の先達は無論校長中内先生であったが、御多忙だったので、われわれに、ああせよ、こうせよと大まかなことを指示され、後はまかせるとゆう風であった。

後から考えると、任された当方が未熟のために、先生の意図するところが十分に達せられず、先生としては相当はがよい面があったのではないかとも思う。

さて、実習実験用機械器具購入に使われた金額は約十一万円であった。ベルト掛四呎旋盤で一台約千二、三百円、最も高価だった三十トンのアムスラー万能材料試験機がたしか七、八千円位であったと記憶する。これ等の記録は昭和二七年に出来た産振設備台帳に転載され、もとの手持の帳面は其後どうなったか記憶にない。

当時県下で比較的珍しかったのは歯切機械で、須工の他には鈴江農



たしか7,000~8,000円だった万能試験機

機と他一、二社あったらしいが、高知工業でも歯車はすべて万能フライス盤で切っていた頃だったので、一寸得意であった。又、入交好敏氏より寄贈を受けたタレット旋盤も当時の高知としては珍しい方であったと思う。

ベルト掛旋盤は今はなく、アムスラー万能材料試験機も影を消し、僅かに残った歯切盤も平削機も、学校移転を機に廃棄処分となる運命にある。恐らく学校移転後は、創立当時を思い起す何物も残らないであろう。何か一つや二つ、教材として古いものを残しても満更無意味ではないと思うが、これは私の郷愁であろうか。

話が前後するが、これ等当時の高知県に於ける新鋭機器の据え付けの中核となったのは、最初の実習指導員西原健夫先生と、一期生の諸君であった。一期生の諸君は結局、整地作業と建築作業の他に、機械の据付作業にも習熟したことになるのである。

なお、これ等の工作機械は、戦争末期に、県の命令で加茂村に強制疎開させられたらしく、私が復員したとき、旋盤類は加茂の製材所の中に雨露をしのぎ、平削盤等大型機械は加茂駅倉庫の横で雨ざらしになっておるのを見た。疎開を担当させられた先生方は随分とお骨折りのことだったと思う。

一、校章、校旗、校歌制定のいきさつ

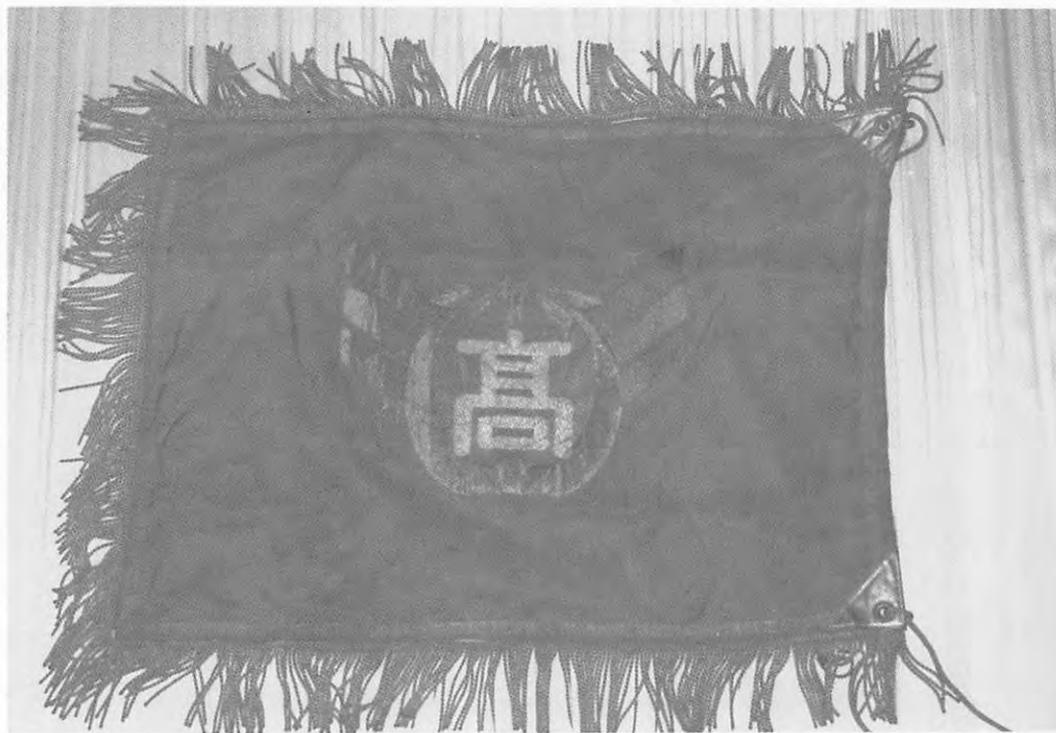
校章は開校当初より決っていた。図案は中内先生が高知工業の森光喜先生に委嘱せられたもので、現在のものと違うのは、中央の『高』の字が当時は『工』であった。図案の意味するものは、錨は港すなわち須崎を表わし、互は工業、両翼は大鵬の羽ばたきを表わす。つまり須崎工業はおおとりの如く飛躍するとの意であると中内先生より聞い

た。

後年、新制工高となってから職員会で『高校となったのだから』というのが主な理由で互が高に変えられた。変更の時期は、この職員会が、講堂を仕切った一室で行われたことを記憶しておるので、昭和二年七月の火災以後であることは確かであるが、正確な年月については憶えていない。



実習工場に入荷した歯切盤と旋盤（昭和21年）



高知工業同窓会東京支部（桂工会）から寄贈された初代校旗。
現在は記念品として保管されている。

校旗は、当時東京に在住せられた中内先生の同窓の方々が、須工創立を祝して、相当の費用をかけて作って下さったもので、出来た時期については、これも正確な記憶がないが、多分開校後暫らくたってからのことであると思う。

次に校歌の件であるが、学校沿革史によれば、昭和二三年五月制定となっておるが、このいきさつを簡単に述べる。相当永い間校歌なしで過ぎてきた須工にも、もうええ加減で校歌を作ってはという機運が熟し、生れ出たのが大崎一郎君作るところの須崎工業校歌原案である。

同君は一種一期卒業生であり、二二年九月から二三年三月まで、須工助手として勤務していたが、当時詩人として活躍した頃であったようで、私も多くの作品を見せて貰ったことがある。その大崎君がものした校歌の歌詩の調子は、自由奔放で躍るが如く、必ずしも韻律にとらわれていない風があった。これが土井晩翠先生に送られて書き改められ、更に平井保喜先生によって作曲されて、校歌として体裁が整ったのが二十三年五月ということであろう。敢て大崎君の名をあげ、かくれた功をたたえる所以である。

一、スパルタ式実習

昭和一八年機械工場の設備もほぼ整った頃の話である。

授業開始のベルが鳴る。実習に当った生徒達はかけ足で機械工場の前に集合する。点呼が終る。時あたかも厳冬、吐く息は白い。おまけに曇った空からは白いものがチラホラ。忽ちさかんに降り出す雪。

この時教官の口よりとび出す号令『実習体操始めッ』生徒は散開、上半身裸。天を衝く拳、どよもす声。ヨイシヨッ、ヨイシヨッ、ヨイシヨッ、ヨイシヨッ。十分、二十分。寒さにちぢかんだ体が内からの



鍛造実習「大鎚は真っすぐに振り上げる！」

ぬくもりでボカボカしだすまでこれは続く。終ればかけ足で工場中央に整列、安全頷と皇国民の信念を大声で唱和、それから持場にうつる。与えられるのは片手ハンマと刃のないタガネ。手仕上げのタガネ集

団練習の開始である。『用意』の声で脚を開きハンマを思い切り後方に振り上げる。『ピッ』笛の音一声、ハンマは勢よく振りおろされ、やがて静かにタガネに衝突する。一回よりも二回、二回よりも三回と衝突の速度は速くなり、衝撃音は高くなる。『ピッ』『ピッ』『ピッ』『ピッ』『ピッ』……だが馳れないうちはハンマはタガネを打たず手を打つ。『チャン』の音のかわりに『ウツ』のうめき声が出る。忽ち皮はやぶれて血がにじむ。痛さに堪えかねてウエスでも手に巻こうものなら『コラッ、はずせ』と教官に叱られる。『エイッ』と気合いを入れ、『ピッ』『ピッ』『ピッ』『ピッ』『ウツ』

これが当時の実習の一齣である。

彼等はいくかの如く鍛われたために、就職後も、古くからある伝統ある工業学校の卒業生に伍して、一步もひけをとらなかつたということである。

一、魚つり大会の話

草創期の年中行事の一つに、校長中内先生の發議で始まつた新莊川のゴリ釣り大会があつた。二、三年でやまつたように思うが、これは今でも時々思い出す。

この日は校長以下職員生徒全員が、思い思いのつり竿を手に持つて、新莊川下流に集り、川口から新莊橋上流にかけてゴリの数釣り競技が行われる。エサは多分ミミズ、ゴリの大きさは七、八糎ぐらい。いたつて釣りやすいので、たちまち相当沢山の獲物が集まる。これがゴリ汁に化ける。食糧不足の折、結構な蛋白資源となつて全員の胃の腑におさまる。さてはそのあまりが飲食会の材料ともなろうという寸法である。

今思うと、その頃の新莊川はすばらしくきれいで、魚も多く、弁当持ちでの半日の精遊は、つり好きもそうでない者も、日頃のスパルタ教育や奉仕作業の苦勞も忘れて、師弟一体の、まことに心やすらぐたのしいものであつた。

一、専修科生の話

今でも倉庫の中に専修科生と表紙に書かれた学籍簿が一冊ある。これは一種二期生中の十四名のもので、何故このクラスだけが専修科生となつたかについては、今は知る人も少ないと思われるので誌しておく。

昭和二年三月彼等は須崎工業学校一種二期生として卒業する予定であり、卒業と同時にその殆んどは失業者となる筈であつた。彼等は在学中、学校作りの勤勞奉仕に続く農村への勤勞奉仕、工場への勤勞動員等で落ちついて勉學する時間が少なかつた。これをそのまま失業者の渦巻く世間へ送り出すのは、まことに情に於てしのび難い。よつて希望者があれば後一年学校に残し、ゆっくり勉強して貰い、そのうちに適當な職が見つければ、その時出て行つて貰えば良いではないか、ということになつた。

そこで希望者を募つたところ、前記の人数が居残り、国、数、英、物象、実習の授業を受けることになり、これが一年続いたという次第である。これは県の正式認可によるものではなく、須工独自のものであつたので授業料は不要であつた。名づけて専修科生という。万一前記学籍簿が失なわれたら、これを証明する何物もなくなるだろう。

一、玉屋文庫

学校が出来てまもない頃、実習工場を視察せられた恰幅の良い紳士がいた。後から聞けば玉屋喜章氏で、この時千円寄付せられたという。

これを図書購入費に当てようとゆうことで出来たのが玉屋文庫で、普通科と機械科に金を折半して図書を購入した。

その後廃棄処分等で現在は殆んどなくなっていると思うが、相当長い間、玉屋文庫の判をおした書物のお世話になったものである。

一、初期の就職

一期生の軍需工場割当て就職は論外として、敗戦後の食糧難、住宅難、就職難をおして県外就職運動を開始したのは、昭和二四、五年頃のことであった。当時県外からの求人申込は極めて稀で、就職の開拓は殆んどゼロからの出発に等しかった。困難に満ちていた。これは一種の戦いであった。担当者の心をこの戦いに駆り立てたものに当時の学校の事情があった。当時学校は衰微して振わなかった。入学志願者も減った。おしまいは学校の存立さえ危ぶまれるような話も出る始末であった。

この窮状打開については各人各様の考えがあり、それぞれの立場で努力が重ねられていたが、その中で、就職状況を良くすることこそ、困難でも、回り道のようにも、結局これが学校の存在意義を明らかにし、窮状打開の近道となり、又これは工業学校本来の道でもある、これに力を傾注してはどうかという高知工業校長森岡先生の個人的なアドヴァイスがあった。そのとおりでと思つて大いに努力した。

その後も森岡先生はこちらの相談に応じて何くれとなく指導してくれたし、二七年須工に赴任後も率先して開拓に努力された。又阪神、東京方面で活躍しておられる県出身の方々の御援助、御鞭撻も頂いた。

その後工業界の復活と発展にともない、就職も少しずつ楽になっていった。かくして開拓開始以来約十年、一応の地盤は出来た。が、其

の間、担当者の一人であった自分の到達し得たものは、就職状況を良くするのは結局は卒業生の就職先に於ける働きぶり、実績である、これ以外の何ものでもないという極めてありふれた結論であった。又求人と求職の立場が逆になり、卒業生が引張り風となつていくにしたがい、昔の生徒に悪いことをしたような気持が深まるばかりである。

一、むすび

須工誕生の時に、初代校長中内先生を頼つて教員生活をはじめて以来三〇余年、新設校要員として南国市、宿毛市に転勤した七ヶ年を除いて、その大半を須工と共に過して来た自分として、思い出は尽きることがない。だが、心身共に尾羽打ち枯した状態の現在、いにしへを語ることは何としても心が重い。然し、それでは責をふさぐことが出来ないで、重い心に鞭打ち、草創時代の事どもを少し、なるべくありのままに、客観的にという心組んで書き綴つてみた。

此の機会に、須工育成の為に随分ご尽力頂き乍ら、物言わぬ故人となられた方々のことに言及すべきだとは思ふものの、筆至らず申し訳なく思う。又何かの機会に語ることが出来れば幸いである。

(三十年誌より転載)

校章図案作成の思い出

元高知工業高校教諭

森

光喜

今から三〇余年の昔、私は高知工業学校に勤め風雲ようやくあわただしい社会情勢下、工業技術の開発刷新等に心を配る同僚と共に靑少



森先生作図の校章
(昭和24年ころまで)

年達の教育にたずさわる毎日を生き甲斐に思っていました。その頃須崎に工業学校が創設せられるとのめざましい大ニュースは私共に取って何ともさわやかな快い極みでした。

寺尾豊先生とは私が須崎の白石君と呼んでお互いまだ小学校三年生の頃から親しく存じあげていた仲であり、この時巨額の私財を提供せられ須崎工業学校創立の口火を切られたことを承り満腔の敬意と限りない感激を覚えたことでした。

そんな矢先、こんな心境で居た私に校章図案作成のご依頼があり、不肖を顧みずお引受け致しました。純真闊達、ひたむきに工業技術者をめざして進む好ましい少年達を対象としてその真正面に光りかがやくべき校章の考案は誠に晴れがましい限りの仕事でした。

当初私は今まで他に類形のない変った形状の図案を用意しましたが、周囲の人々から高知工業と兄弟校の須崎工業であるので校章もどこか似通った感じのものが望ましいとのご希望やご助言に副って、結局現在通りの形に落付いたわけでございます。尤も戦後高等学校になつて中心部の文字に変更もあり、又女子生徒用の徽章にもなつていくかと思われまます。

図案の要点としては高知工業の古典的な意匠に比べてこちらはグッと近代的明快な様式にして、清楚端麗な表現を意図して計画を進め、仕事は淀みなく五日間で実にスラスラと順調に終了し、帽章としての原寸図、拡大図、写真による縮小図など、一連の作図を提出させて頂

いたことは記憶していますが、その季節が思い出せないのは戦時戦後のあまりにも異常多端の年月をへだてたためでしょうか。

自分の考案設計による品物に他日めぐり合った場合は、自分とそっくり醜悪さもそのままの人間に突然行き当たったようで、頭からゾッと寒けを覚え、およそいやなものです。この校章に対してはそんな思いを全くしたことはありません。といつても決して図案が優れているわけではなく、三〇年前私が図案の仕事を進める時対象とした、純真で逞しく、工業技術の研鑽に邁進し果立って行った、今や三千人に余る先輩の伝統を踏まえて精進する健やかな須崎工業高校生徒のシンボルとして浄められ、もはや、私風情の画いた小さなデザインではありません。

校章考案の後も校旗の制定、国旗掲揚台の建設等々、初代校長中内知章先生とは頻繁に会合懇談を重ね、いささかでもお役に立つことが出来たことを今日でも冥加に存じて居ります。

三〇年といえは生れたての赤ん坊が数人の子の親になる程の長い歲月であり、しかも忍苦に明け暮れた戦時戦後を含む三〇年の貴い歴史の上に今力づくよくそびえ立つ須崎工業高等学校の栄光に対し、私は心をこめた歓呼と拍手を捧げるものでございます。

四六・八・一五

(高知県美術展工芸の部審査員)
(遺稿・三十年誌より転載)

学校創立当時を偲ぶ（造船科の発足）

元職員 桑原章師



桑原先生

公民倫理の担当として奉職した。

戦火は日をおって熾烈となり、生徒は田畑や工場に動員され、一部は学徒兵となった。運動場は野菜畑と化し、ある先生は学校の前のドブ川でジミ取りに精を出し、ある先生は台場の浜の塩造りを手伝って、ひと握りの塩を手にしていた。

戦火がいよいよ激しくなった昭和十九年四月、文部省の通達により造船科を増設することになった。だが、造船に関する書籍は一冊もなく、船体構造を描く現図室、船体実験の水槽室など、およそ船に関するものは何もなかった。なによりも困ったのは、専門の造船科を担当できる教員がないことであった。

私は、「校長、人材が見つかるまで、間に合せの勉強をしてくる」といって、今の国立横浜大学の造船科に昭和十九年の秋に特別入学をした。数学の微分、積分、専門教科の船体強弱学、船用機関などを大急ぎで学ぶのだったが、理解ができる筈がなかった。

明けて二十年三月、東京・横浜の上空襲で、勉学どころではなくなり、造船の概要も判らぬまま帰校した。そのうちに造船科の専任教員として竹村義典先生が赴任されたのは幸いであった。

先年、その造船科一期生の数名と共に新装なった今の学校を訪問した。玄関先の庭に堂々たる木造船がその偉容を誇るように鎮座していたのには驚きとともに涙のにじむ思いがしたのであった。

昭和二十年八月十五日。敗戦の日である。戦争は終結して全国民に安堵感が湧いたが、この造船科一期生には戦争が終わっていないかった。

学徒動員計画による大野見村の農道整備の指令がきていた。これは戦争終結と共に中止してもよいと思っただけだが、私は校長の同意を得て、生徒と共に隊伍を組んで、敗戦日の翌日出動した。生徒諸君にとっては「泣き泣き」の出発であった。その理由は、既に送ってある荷物の散失のおそれと、村人役場から「ご苦労さま」と米の一升や二升を出動諸君にもらって帰るといふ考えがあったからで、それほどに食糧は欠乏していた。農道整備は完了せぬまま解散となったが、生徒諸君は脱兎の如く四散して帰宅したのであった。しかし、この大野見村への出動は、造船科一期生の終戦時の思い出のひとつとして、鮮烈に脳裏に刻まれているという。

こうして敗戦から復興へと立向っていた昭和二十二年十二月二十一日、正月も間近い日の夜、室戸岬沖を震源とする南海大地震が発生した。当時、台場の前の家に住んでいたが一瞬飛はされた地震であった。女房は長女を背に負い、二女を抱えて学校の裏山に逃げた。途中土蔵が音を立てて崩れ落ちた。無数に倒れた家屋を乗り越えて逃げた。遠くでは「水が来るぞ！」とあちこちで叫んでいた。須崎湾をすぐ向



機械科二種 第二期生同窓会 須工「紀会」(平成元年5月2日)

前列左3人目が芦田先生の奥様、続いて右へ芦田忠夫先生・橋田沢視先生・田村先生の奥様・桑原先生の奥様・竹内(森下)今夫先生・森岡校長(現)・桑原先生の奥様の左後が桑原章師先生・その左後が田村隆徳先生・その後が崔(高山)権炯氏・後列左から2人目が張(長田)泗海氏

こうに望む台場前に住んでいたの、女房の母は「津波にやられた」と嘆いたという。

高知市から兄と弟が、米をもって徒歩で見舞に來た。須崎八幡宮の石垣は倒れ、多の郷土崎付近の鉄路は曲がり、湾内の船は打ち上げられ、津波は湾内奥深く浸入した。この地震のデータは物理の橋本先生が持つており、また、多くの惨状写真は下元博君(造船一期生)が持ち提供を受けている。

それから一年ぐらいいして、戦争責任の嵐が学園にも吹き荒れた。学校からは私ひとり教職追放の身となった。その追放の理由を高知の審査会の知人に聞いた。その理由が大変面白いのである。

同人は、学園の軍事化に積極的活動をなし、学徒動員計画の中心的人物であった。……というにあるという。

また、「幾人か追放せねばならんようになってる。君の場合は東京の中央適格審査会に「不服の申立」をするとよい」といった。当時、高知から東京に出られる車内の状況ではなかった。私は校長でも教頭でもなく、ただ情熱に燃えたひとりの教諭に過ぎなかった。追放後は、広島・東京へと出た。今は、無線通信機、電子応用機器製造の会社で七十五歳、流転の人生を反省することが多い。

私の学校でのアタ名は創立当時の機械科では「カマキリ」、造船科では「桑兄くわにい」であったという。その「桑兄くわにい」の所在を探したが、校誌に「桑原先生ご逝去」とあるのを見付けて諦めていたという。それから三十数年後、当時須崎駅長の息子森久敬君(神官・郷土史家)が私が東京での健在を知り、文房具商の福永徳七郎君と共に世話人となり、昭和五十五年八月十五日の終戦記念日に高知市で第一回同窓会を開催

した。その名は「陸船会」。浮かばぬ船を学んだ敗戦当時の学徒の会とも思えて涙ぐむ思いである。

それ以来、毎年高知市で、この陸船会と称する造船科一期生の同期会を開き、交友を温めており、私も女房同伴で東京から参加している。生ある限り、毎年同席して有縁の喜びを共にしたいと考えている。

学校創立五十年。心から祝福いたします。でも、創立当時の先生方は、殆んど古稀をすぎているだろう。また、今は亡き先生も多くあろう。ご家族はどうしているだろうと人生の有情、無情を痛烈に感じます。若い熱血に燃えた五十年の昔を偲び、そして、創立当時の先生や出来事を思い浮かべながら、須崎工業高等学校の御発展を東京の空から切に祈ります。皆さま、お元気で。

（参考）

現コロナ電業株式会社会長

年齢 七十五歳

外国人としての私と須崎

昭和二十年機械科二種卒業

崔 權 炯

今年で、卒業生の総数が七二七名ということですが、その同窓生のなかで、外国籍の者も相当数いると思えますけれども、その内でも少し変わった特殊な環境で、波乱万丈なる人生旅路を歩かなければならなかった私の行跡中、その一部を事実そのままご紹介し、少しでも参考になれば幸いです。

原稿執筆の依頼を受けて最初は、もう四十数年の間日本語とは無縁で、文章的に全く自信がなく、断ろうかとも思いましたが、外国人としての義務感から無理をしてもと、記憶をたどり粗筆を流してみます。

私の複雑な身の上は、一九二七年（昭二）十一月九日生まれで、姓名は「崔 權炯（CHOI KWON HUNG）」と名乗り、一九三三年、私が七歳のとき父母に連れられて日本に移住し、日本名を「奥田一郎」と作名しましたが、一九四三年、日本軍閥主義下で植民地政策（内鮮一体）の一環であった「創氏改名令」によって「高山權炯」と再改名になり、一九四六年（昭二一）帰国し、「崔 權炯」と、元にかえった者です（須崎工業学校入学時は「奥田一郎」、卒業時は「高山權炯」）。

日本へ移住したその翌年、まだ意思の疎通が完全でない未熟な状態で、須崎町新荘尋常小学校へ入学はしましたが、不十分な言語のため、子供たちの見せ物や笑い話の種になり、言語の障害者として本当に惨めなものでした。

それでも、四学年のときの担任の先生だった豊永治子先生（現須崎市市中町在住）から、その時代外国人としては破格的な待遇だった級長を任せていただき、初めて「これはできるぞ」という自信を得たことでした。「[編者注、豊永治子先生から崔さんへのお便りの中で、豊永先生は次のように述べられています。

（前略）「小学四年生の時の一郎さんは、知力体力抜群で、腕白盛りクラスの級長さんとして、何かと助けてくださいましたね、ありがとうございます。その当時、あなたにかわいがって頂いた哲史（先生のご長男

卒業證書

高山 權炯

昭和二十年五月九日生

右者本校第二種機械科

課程ヲ卒業セリ

仍テ之ヲ證ス

昭和二十年三月十七日

高知縣立須崎工業學校校長 樋野正

第六一號

崔さんの本校卒業証書

で現須工森岡清校長とは須工機械科の同級生)も五十五歳、妻と共に
教員生活で、孫三人となりました」(後略)。

終戦後二十歳のとき、須工恩師諸先生の卓越なるご指導のもとで、
完成した立派な青年となり、祖国解放で帰国はしたものの、今度は自
国の言葉を一言も話すことのできない言語の受難で、再び悲運の男と
なっていました。

感謝状

高知縣立須崎工業學校
第一火動真鑛部

高山 權炯

昭和十九年六月學徒動員會 會長

出勤シ挺身勤勞他、模範的ニ勤勞ス

専心學徒運動其後、指導謝状、

其ノ勤績顯著ナリ仍茲ニ感謝意

ヲ表ス

昭和二十年三月二十四日

高知縣高岡郡須崎町

松下電器産業株式會社

須崎電鑛工場長 樋野正

松下電器産業株式会社・須崎電鑛工場長
樋野正二氏からの感謝状

それでも、この言語の障害を何とか克服し、後日、口商売ともいわ
れる労働運動に投身し、全国電力労働組合本部委員長として勤労大衆
のため奉仕したことを考えると、実に夢のような感じがします。

言語が正常になった頃、二、三か所へ就職願を出したときのこと
です。卒業証書がちよつと変わった「二種」という肩書きのため、堂々
たる甲種でありながら、乙種と誤認され、一時は乙種で勤務した職場
もありました。



電力労報へ掲載された委員長としてのあいさつ (1961年=昭和35年)

その頃は、韓日国交が未修のため照会が不可能で、資格の問題で被害を受けた唯一の卒業生ではないかと思っています。

遑って、在学中は戦時中で極度の人力不足のため、草刈り、麦刈り、暗渠掘り等の課外活動にも多く参加しました。

その中でも特に、戦争末期の学徒動員令で、松下電器産業株式会社須崎電鍍工場への挺身のときは、当時の樋野正二工場長（後、本社長務、副社長を歴任）から、ただ一人感謝状をもらうなど、比較的運の良かった学生で、この感謝状は、卒業式るとき中内知章校長先生から授与されました。

一方、脱線行為も色々あって、代表的なものが、学徒動員で八田村の暗渠掘り作業のときには高岡天理教に寄宿していましたが、私（ゴンサン）と、竹下増秀（マツサン）、川面 卓（ツラサン）、遠藤源二郎（コメサン）等数名の悪童たちと一緒に、引率責任者だった桑原章師先生の目を避けて、近所のみかん畑を急襲して喜んだり、松下電鍍工場の裏側の芋壺を荒らしたことや、学生の本分は後回しで暗夜に新莊川へ出動、肉弾戦で捕まえた鮎を食卓に上げて、ご馳走になったりしたものです。

このような行為は、その時代の世間の人々が学生の身分の「あいさよう」と、大目にくれましたが、昨今の時代では理解できないことだと思います。

在学時代、田村隆徳、桑原章師両先生をはじめ、数多い恩師の諸先生から立派な教えを受けましたが、その中でも、特に忘れられないのは、今もう故人になられました教練の、厳格な福本三郎教官に、特別な温情をもって接していただいたことです。

私が、福本三郎先生と惜別する際、「聞けば、君は朝鮮人なりとか、君のごとき青年は、日本青年の中でも多からず。もしくは、今のままに進め。君の前途を祝福する」という揮毫を直接書いて下さった程でしたから、もちろん教練だけは満点者でした。

当時は、「気合い」が至る所で盛んに行われ、上級生が下級生に向かって、何とかかんとか理由（けち）をつけ、叩いたり、蹴ったり、走らせたり、大変賑やかな舞台を作った時代でした。

それで、同級生の多数が、この「気合い」行事に参席させてもらったのですが、私は卒業まで無事通過し、無被害者の免許をとったのです。上級生に感謝します。

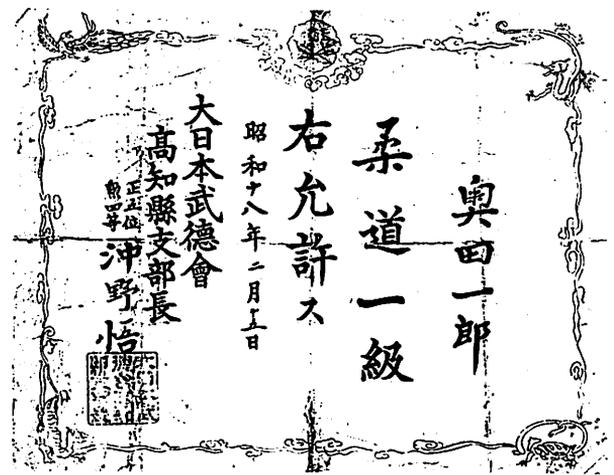
在学中の一時期、RとH、二名の美貌女学生との好機を握り、純白な交際をしていましたが、結局外国人という身分がばれて蹴られ（振られ）、随分落ち込んだ気分になりました。しかし今考えてみると、将来悲劇にもなりかねず、賢明な結果だったと思っています。

話は変わりますが、この頃はどの国へ行っても韓国式「キムチ」（漬物）が流行で、好食家がますます増加の一途とのこと。

当時の日本人たちは、このおいしい「キムチ」を、「臭い匂いがするに」「にんにく臭いに」と言いながら全く近寄りもしなかったものです。

今では、日本はもちろん、世界各国至る所で人気があり、本当に時代も変わったという実感を受けます。しかしその中でも、同期生の竹下増秀、川面 卓、遠藤源二郎の諸君等は私の家で、その時代この「評判切下」のキムチを「ほう ほう、辛い 辛い」と、涙を出しながら、よく食べたものでした。

またその当時は、牛の内蔵物（今の通称・ホルモン）は一切口にせ



奥田姓の免許状

ず、全部捨て物で処理していましたが、私は、父が時々屠殺場でもちろん無料で貰ってきたこの内蔵物を、きれいに洗い流し、炭火で焼いて、味を付けてよく食べました。

私が柔道部の主将として、「五等」の免許（大日本武徳會長東条英機氏名義、昭和十八年十二月二十一日付）を獲

得ることが出来たのも、もちろん、川淵昇一師範の優れたご指導があつてのことですが、その一方では、この栄養素がたっぷりあった内蔵物を沢山食べた体力のお陰もあつただろうと思っています。

今でこそ、世界各国で「ホルモン焼き」として公認され、大変な人気ですが、その当時は、下品な人間の行為だと指弾されていましたので、平素交誼の厚かった級友たちにも、このことだけは結局一切「緘口秘密」にしたものでした。

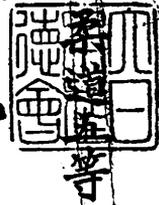
須崎を中心にした高知地方は、本当に平穏で美麗な所でした。

そして、みんなの私たちは、臨接している太平洋のごとく、幅が広くて義理があり、その地方の暖かい気候のように温情が深く、親切そのものでした。



高山姓に改名後の免許状

高山 權洞



右允許ス

昭和十八年三月二十一日

大臣武蔵會長
大臣武蔵會長
大臣武蔵會長



その当時日本の一部では、常識の無い「没知覚」の日本人たちが、「あの朝鮮人!」、「あの半島人!」といったは無条件蔑視し、迫害を加えた大小の事件も相当発生しましたが、

須崎近郊で幼・少・青年期を送った私は、そのような話を、この耳で聞いたことも、この目で見たことも全然ありません。

恩師の先生方を始め、同期生、上級生、下級生の全部の人たちが、まるで話し合ったように、少しの差別意識の感情すら探すことも出来ないほどの人間味で、私を慰労、激励して下さいまして、いつも感謝しています。特に二種二期の賑やかな集まりだったクラスの忠実派、孝誠派、義理派、軟派、硬派を筆頭として、努力家、読書家、スポーツ万能家、才能家、達弁家、そして愛煙家に至るまで、(同期四十三名の中で、誰がどれに該当した人物だったかと、今でもその記憶は生々しく残っています)このような色とりどりの級友たちは本当に良く付き合ってくれて、私は幸福者でした。

母校というのは、社会活動の基盤になるすべての知識の産室で、そ

のため、教えを受けた卒業生たちは、誰もかも母校の発展を祈り、母校の諸行事へ深い関心をもって、協力する積極的な姿勢で臨んでいるのです。

また、先生と教え子の間も、一生、切るに切ることの出来ない、不可分の因縁で、いつも恩師を尊敬し、教え子をかわいがり、同窓相互間の交誼を厚くするのもそのためです。

韓国では五月十五日が、国の制定した「恩師の日」になっていて、この日には全国的に恩師と教え子の間で、人情味の溢れる、色々の行事が盛大に行われています。

私も、この日になると時々昔を考え、ご恩を受けた田村隆徳、桑原章師、福本三郎(故人)の諸先生をはじめ、小学生時代の豊永治子先生、松下電器の樋野正二先輩などへ、感謝の手紙を一通でもと、出すときがあります。

また当地で、小中高大など、各種の同窓会や総会が、毎年いたるところで盛大に開催されるのですが、日本で教育を受けた私には、残念ながら該当事項まったく無しという立場です。

そのため、自分自身の慰めもあって、韓国で一度同窓会を開催してみたい気持ちで、この趣旨を同期生たちに連絡をとり、交渉したときがありました。結局色々の事情で実現できず、ようやく一九八八年の秋に、梅原康一(須崎市)、遠藤源二郎(加古川市)、田所三男(春野町)、片岡弥太郎(玉野市)、小松章洋(高知市)、三木正廣(宿毛市)、中平善造(大阪市)、の七名が来韓してくれまして、少数の貧弱な集まりでしたが、それでも韓国で、少し変わった雰囲気のもとで、同窓の情を味わう機会を持てたことを、本当に感謝しています。



同級生の韓国訪問記念（ソウル空港にて）

遅れましたが、この度の紙上を通じて、私たちの初代の校長として教育界へ至大なるご功績を残され、残念ながら少し早めの悲運で他界なされました中内知章校長先生をはじめ、そのほか二世代の教育のため献身されながら逝去なされた恩師諸先生及び同期の中ですでに不帰の客になった竹馬の友竹下増秀君等、数名の瞑目を異国でお祈りしながら、ご家族皆様へ、ご慰労の言葉を申し上げます。

最後に、母校の無窮なる発展を祈りながら、開校五十周年を真心から祝福いたします。

大韓民国 電労実業株式会社 社長

巨象スポーツ商社 社長

須工への留学

昭和二十年第二種第二回生機械科卒 張 泗海

一萬八仟七百五拾の日限は、溪流のまゝに早や昭和、平成。

瞬間中慶祝五十年祭、憶へば唯昨日の様子が走馬燈の様に、頭腦の中に呼び浮かびます。

如何五十年の交友會を迎へる歲月の中で母校は種種の役割り、亦多才多藝の彩文は云ふまでもなく、社會貢獻等一攫千金一言一句で、歴代校長、諸先生方の指導鞭撻をば稱賛出来ません。

西は台湾海峡、東は太平洋黒潮で日本列島に繋がり、無限に文化の交流出来る事を誇にし、益益交友會をかためる事を確信しました。五十年ついで此の間の如くは、同國民今では國籍だけ変りましたけれども、學校は永久に自分の母校と確任して居ます。

忘れ得ぬ思い出今に礼會

礼會かおる宵なり酒一つ

札かおる日本安かれと祈るわれ

私も早や還暦過ぎ去った聲に、何だか無理に年をとらせたような気がして居ます。年寄ると無暗に人なつこくなるのです。憶へば東西

南北も知らない自分が希望の船に乗り日本留學、初代校長 中内知章先生の許に卒業、總ては諸先生方の輔導、おだやかな純撲の環境と修身養成、土佐の質實剛健に鍛練されました。

此處で飲思源、自分は、運よく下宿。須崎聖人といわれた中川藤太郎先生、住宅西町須崎市史人物編より、熱心なクリスチャンで人道主義博愛主義に徹した方です。終戦迄下宿させて貰ひました、御恩にこうむった小父さんの「人格」の感化この教諭は、自己の良心に對して厳しかった。ある時朝早く旅行から歸った小父さんは、家人を起そうとせず、夜の明けるのを軒下で待った、自分一人辛抱すれば家人に迷惑をかけないで済む。大正初期大阪飛田遊廓が全焼後の再建反對、飛行機でその上空をとび、自分の小指を切つて流れる血しおで公娼廢止、有名なエピソードである。終戦後マツカサア元師宛てに、日文、英文二萬字の歎願書を出した。「貧困から日本を立ち上らせるため、今後に問題が起きないため賠償金はとらないで欲しい。」小父さんの思ひ出話は、山程積み重なつてきりがありません。此の方は、愛心に徹した方にはまり、平素優しいく徳のこもつた偉人でした。今改めて感謝の念を込めてこの特刊に掲載して頂きます。

戦時中は、學徒動員松下電器須崎工場で磨礪されました。

學舎時代は、食料難で大分お腹を引きしめました、それに暴風雨來訪が何よりも頼しみてした。海上から流れてくる南瓜、芋、昆布、貝、小魚……等を拾い集めては海邊で、焼いてよく食べました。たまには部落の勤勞奉仕に参加し、どつさりと詰めた麥飯便當などは實に美味しかった。或る寒い冬夜の夜など空腹に絶えきれず、夜中にとび起きて水をガブ／＼飲んだ事もたびたびでした。

自分も教育會を家とし、全力精神を竭盡厥職し、俯仰無愧なく退職し、只今は好好グランパアの責任感に取り次ぎ、自分の趣味、旅行を楽しみに按排し、樂觀てきな人生の降り坂を過して居ます。

最後に母校が素養科技を授與下さいました恩惠感無量ならびに一方面、慶祝母校の前途光明、校運昌隆を祈つてやみません。

交友會の皆様どうぞ南台湾の豊かな土地に御觀光下さい。

一昔半前の思い出

元職員 池上健男

創立三〇周年、人生正に飛躍の年齢。これを機として海拔四〇米、北に名山桑田山を仰ぎ、南に錦浦湾を見おろす、眺望絶佳の高台への發展的新築移転。この二重の喜びは永年に亘る学校を中心とした関係各方面の方々のご努力の賜であります。こうした七〇年代へ大きく雄飛しようとする姿は想像するだけでも楽しいものであります。特に昭和二三年七月の大火当時、校長出張中の留守責任者であつた私にとつては、この須工躍進の姿を見て、人一倍の喜びと同時に、今まで澱のように心の底に淀んでいたいやな思い出がうすらぎ、ホツとしたような安らぎをおぼえます。昭和二一年から四年間の在職中には数々の楽しい思い出がありますが、この大火だけが唯一の忘れることの出来ない痛恨事であります。

全く悪夢のような出来事でありました。夏休に入つて間もない、カンカン照りの、昼下り伊野の自宅でうとうとしているところへ伊野警



灰 燼
昭和23年7月23日、本館・第2棟校舎など630坪焼失。
(翌7月24日、校庭西南隅から撮影)

察署から使いの人が来て『今学校が火事だという連絡がありました。校舎が全部燃えているそうです』といわれた時には、どこかの間違いではないかと信じられませんでした。火事の季節でもない真夏の、しかも

こんな時間に、どうしてそんなことがあるものか。千頭先生の監督で卓球部が合宿しているし、中沢先生御一家もおられることだし、どう考えても分かりませんでした。最悪の場合でも全焼などとはとても考えられ

ませんでした。やっとかけつけた時には焼け残った講堂で、先生方が集まって茫然としていました。まさかと思つた本館、第二校舎全焼という惨状を目の前に見て途方にくれました。高陵病院の患者さんなどの話では、本館校舎が殆んど一斉に火をふいたということで、消火も手のつけようがなかったようです。

卓球部が茶をわかすためヒーターを使ったとのことでしたが、終戦当時、海軍が校舎を宿舍とし、天井裏などの配線を変えていたのが漏電の原因ということになりました。創立者である寺尾豊先生が林讓治

先生と焼跡を見に来られた時は、まともにお顔をようみませんでした。聖書を片時も手ばなしたことなく、温厚で物静かだった方だけに、今はなき小林校長の胸の中は察するに余りがあります。

後年自分がその立場になって、申し訳なきが一層身にしみました。不幸中の幸といましようか、夏休みに入ったばかりで、しかも講堂と実習工場が類焼をまぬがれたので、機械科の先生を中心として、先生方の手で講堂を仕切って授業の出来るよう応急の処置をすることが出来ました。

復興資金獲得のため生徒と一体となり、石鹼その他日用品の販売や久礼の八幡様の夏祭りに売店を出すなど、復興の意気にもえたものであります。地元の方々からも随分と物心両面のご援助をいただき元気づけられました。県当局も大変同情的で、その九月には早速、造船科の現図書、翌年五月には本館校舎を建築していただくという物資不足の当時としては異例の復旧ぶりでありました。

先生、生徒の一体となつての復興への願いと、校長、PTAのご努力の結果であります。寺尾先生が陰の力になっておられたのではないのでしょうか。その小林校長も、会長だった黒岩のおんちゃんも今は亡き人になりました。この大火をきっかけとてかどうかは分かりませんが、須高との合併問題がおこり、県教委から楠瀬課長が説明に来られました。会場は須高の講堂でしたが、私の隣に座っていた父兄が猛烈な反対の野次をとばしたことが印象に残っています。両校とも絶対反対で、総合高校は実現しませんでした。あぶないところでありました。

私の赴任した頃は、機械、造船科だけのささやかな旧制の工業学校

でありました。然し戦災もうけず、分散授業の必要もなく、当時としては広い運動場にも恵まれていました。敗戦直後のこととて、生徒も先生も楽しみとはなく、昼休や放課後などにキャッチボールをやる位のことでした。

若い先生が多かったので、野球チームを作り、生徒と試合もしました。隣の須小に親善試合を申し込み、私もまだ四十歳位でしたから、ピッチャーなどやりました。いつの間にかやら生徒の方にも野球部が出来、伊野からきていた西内、塚本両君がバッテリーを組んでいました。軽快な動きをしていた山田君は後に市商に転校して名シヨートとして活躍しました。はじめて市営球場で試合した時は、さんざんでしたがよい刺戟となりました。やがて卓球部も出来、大火当時、合宿練習していた西森、小野君などは県体でも大いに活躍しました。運動会には、近くの青年団チームを招いたり、校内相撲大会を開いて、先生も参加して、いやがる生徒を無理にとらしてみたり、全校生徒をつれて須崎の浜へ水泳に行ったり、楽しい思い出が次から次へと蘇って来ます。

生徒は素朴で先生は若く、明かるい楽しい学園でありました。汽車通勤の先生も数人おられました。斗賀野のトンネルには閉口しました。吾桑駅で石炭をくべてトンネルにいどむこと三回位、やっと登り切る頃には車内は白煙もうもう。これが毎日ですからたまりません。昭和二二年一二月の南海大地震のときは汽車不通のため、吾桑駅からはるばると歩いたものでした。一月からは佐川小学校を借りて分散授業をしましたが、その寒かったことはよう忘れません。

私は須崎には大変縁があり、其後昭和三八年、須高へ赴任して来ましたが、須工がなつかしく、まだ当時のなつかしい先生方もおられた

し、また丁度遠慮のない小松校長も先輩としておられたのでよく遊びに行きました。現在の沢本校長とも旧知の仲だったので用事もないのに度々話しに出かけました。その都度事務の方々からも快く迎えられ、いつも、おいしいお茶などご馳走になりました。

つきない思い出をたのしみ乍ら須工のご発展を祈っております。

(昭和四四年須崎高校校長退職)

(三十年誌より転載)

学校火災

昭和二六年機械科卒

西森 正 忠

須崎工業高等学校が本年度創立五十周年を迎えることになり、記念事業の一つとして、記念誌の発行に際して卓球部の創生期に遭遇した学校火災と云う不幸な出来ごとを記録にとどめておきたいという森岡校長先生の要請から重いペンを執りました。

昭和二十三年七月二十九日午後一時頃、南館校舎の二階東端教室から燃え広がった炎は瞬時にして校舎を全焼してしまいました。今から四十四年前の不慮の災害とはいえ、四十四年間七月二十九日が来る度に思いだして沈痛の思いであります。その時は十六歳の少年でした。戦時中に入学した私たちは敗戦とともにやりきれない気持ちの吐け口としてスポーツに熱中しました。

卓球は少数の人間で、しかも用具が簡単、練習場に大きな面積を必要としないことから県下の中学でたちまち隆盛をきわめました。須崎工業は郡部校でありながら脚光を浴びるようになって来て居りまし



学校が焼けた！ 呆然自失！

た。そんな時でした。で私たち卓球部は故千頭先生を部顧問に福島・川村両先輩

と同僚の池君とで夏休みと同時に合宿練習に入りました。終

戦後間もないことで食糧事情がきびしく、皆それぞれに家

から持ち寄った米や副食を小使い室のおばさんをお願いして賄ってもらって居り

ましたが、食べ頃の少年の練習による空腹は補うべくもなく、やるせない毎日でした。

その七月二十九日は私から金時豆を持参して二階の東端の教室（合宿所としてその教室で宿泊して居りました）で電熱器で炊きはじめました。一時間程たつて教室の窓ガラスの下の張り板の間からうっすらと煙が出はじめて、びっくり、なんだろうかと思ふと窓から庇しを見ると陽炎日のような炎が見えました。

講堂で練習をしていた福島・川村先輩に急をつけ、作業道具室から「ツルハシ」を持って来て壁面を破ると教室の四方からいつせいに炎が立ちのぼりました。二階の教室の西の端まで廊下を必死の思いでか

けて行きましたが、すでにその西の教室も煙が充満して居りました。夢中で一階に下りて校舎をみると火の手が校舎全体から上がり、あっという間に二階の校舎が一階に崩れ落ちるようにつぶれて炎に包まれました。

運動場の北の隅で裸足、パンツひとつで燃えつきる校舎を呆然と見て居りました。その間どれくらいの時間がたったか確かな記憶はありません。間もなく須崎署の署員が来て同行を求められ夜遅くまで取り調べがありました。

翌日無惨な焼け跡の現場検証も行われましたが原因は分かりませんでした。戦時中に嵐部隊の通信隊が駐屯して居ったので、電気配線が複雑化し、その結果漏電によるものだろうと結論づけられました。

この不慮の災害から須崎工業高校の復興の歴史がスタートします。卓球部では川村先輩が焼けた校舎の残骸を集めて須崎の浜で塩を炊きはじめました。また、私たちはアイスクャンデーの販売をして復興資金に充てました。いかに漏電とはいえ、学校を焼いたという出来事はそれ以後の在学中、心に重くのしかかり誠に辛い学生生活でした。

創業五十年を迎えることは感無量のものがあります。改めて申し訳ないとお詫びする次第です。

更なる百年に向かって須崎工業高等学校の発展を念じてペンを置きます。

創立十年の危機

第四代校長 前田 健 造

昭和二六年はまだ占領軍の軍政下にあつて、凡ての行政がその指導と監督下に置かれていた時代であつた。私はその年四月一日付で窪川高校長より須崎工業校長に転補の発令を受けた。

当時、工業学校は永い歴史と伝統を誇る高知工業と、創立後一〇年の歴史浅い須崎工業の二校のみで、然かも須崎工業は、昭和二三年火災に遭いその復興も遅々として進まず、加うるに戦後の不況と郡部校という地域性より、年々志願者が減少しその存続が危ぶまれていた。

昭和二四年九月公立高校の再編成が実施されて、同課程校の統合と共に普通課程校と実業課程校の合併による総合制高校への移行促進が軍政部の指導方針でもあつた模様で、私が須崎工業校長に転補発令を受けた時、同じく須崎高校長の発令を受けた県教委指導主事の北代周三氏と共に総合制高校への編成替の検討が非公式に内命として指示されていた。

然しながら高知工業満六年、続いて大阪府立西野田工業満一三年、計一九ヶ年間の工業学校在職の経験もち、且つ戦後農業課程と普通課程の総合制の窪川高校での経験をもつ私は、この指示とは逆にむしろ須崎工業の独立工業高校として、将来の発展対策は如何にあるべきかを検討すると共に、これが実現をひそかに使命と考えて赴任したことであつた。私がこうした使命感を抱くに至つたのは、須崎工業学校の設立創始は高知工業出身の寺尾豊先生（元郵政大臣）の郷土の子弟

教育と工業立国に寄せられた熱意による莫大な私財提供によつたものであること。

初代故中内知章校長、三代故小林秀雄校長は共に、かつて私が高知工業在職当時の同僚であり畏友であつたのでその意志を継ぎ飽迄も独立発展を願つたこと。

昔の高知工業の校歌にあつた様に、「富国の礎は工業」にありで、敗戦によつて打ち挫かれたわが国の生産工業界は、その興隆のため独立工業高校の設立を国家的要請として益々強く求めてくる時代が来るであろうこと。

実業教育は、総合制高校では充分に教育効果を挙げ得ない。専門教育面からも、生徒指導面からも、教育施設面からも種々の問題があり、特に工業教育に於ては独立校であらねばならない。等々の理由からであつた。

然し校内には総合制賛成、反対の二つの流れが対抗し必ずしも樂觀は許されない状態であつたが、兎にも角にも校内の統一が先決と考えて、独立の旗印を明かにして方針を確立し、当時の県教育長杉村盛茂先生（現高知学園短期大学長）、教学課長楠瀬洋吉先生（現塩見文庫館長）にこうした私なりの考えを披瀝して了解を求めた。丁度その時分、須崎電報電話局の新局舎落成式に参列のため寺尾先生の御帰省があり、直接お目にかかつて須崎工業の現状と将来に対する私の構想を述べ、先生のご意見をお聞きしたところ、全面的賛成を頂き更に積極的に援助するので努力せよ、との激励を受け意を強くしたことであつた。こうした背景のもとに私は県に対し具体的な独立発展策として次の提示をした。即ち、

「須崎工業が機械科と造船科の二科であつて機械科は伝統と歴史ある高知工業高校にもあり、造船科は県内に鉄鋼造船の企業工場なく県民の造船工業に対する認識も極めて低く、且つ郡部校であることと相俟つて応募者の減少傾向も当然のことと思ひ、この際今後時代の脚光を浴んであろう魅力ある科として、弱電関係の電気通信科の設置と、その完成年度に工業化学科を設置し、更にその後将来の国土開発事業に備え土木科を増設すると共に、従来の機械科は工作機械を主軸として特色ある科とし、更に一層造船科の内容の充実をはかる」という構想であつた。

県教育長、課長共々これを了解され、教育委員会にはかり、これが実現のため努力するとの意を示してくれたので、ここに須崎高校との総合制構想は一転して、従来通り独立工業校として存続するとの見とおしが明かになつたので直ちに電気通信科設置のための準備工作に着手した。

一方私は須崎工業の将来を考え、生徒の愛校心の涵養と青年学徒の心身の鍛錬による剛健な精神の育成を指導の中心課題とし、伝統的な特色を培養してゆく必要を痛感し、全職員賛同を得て、クラブ活動として相撲部を設けることにした。熱心な水野正治先生（現四国予備校英語主任）を顧問に体育の田原敏雄先生（現高知工業教諭、県高体連理事長）を監督指導コーチとして発足することとなり、乏しいPTA経費の中より捻出して土俵を構築し、水野先生より朱塗の優勝盆の寄贈も受け、最初は三、四名の生徒によつて放課後熱心な練習が開始された。これが今日の相撲部の創始である。

時たまたま私は戦時中と戦後の過労がたつた大患に罹り、後事一

切を教頭の野中健一郎先生、機械科主任田村隆徳先生、造船科主任の竹村義典先生を始め当時の全教職員に託し、不本意にも休職の上療養生活に入ることとなり、随分当時の先生方にご迷惑をかけお世話になつたことであつた。約三ヶ月間校長舎宅に起居して増設科準備の推移を看まもり、後髪をひかれる思いで高知市民病院に入院、当時在校生であつた松岡直人君ら三人の教え子達から手術のための尊い若き血液の供与を得、輸血しつつ無事大手術を受けて病根を断ち快癒への第一歩を踏み出すことが出来た。その年二月の県議会で電気通信科新設の予算案が可決承認されたので、安心するようにと杉村教育長自ら来院されて病床にお知らせ頂いた時の感激は私の終生忘れることの出来ないことである。

その後県当局は勿論五代校長故森岡貞篤先生、六代校長松岡常雄先生をはじめ歴代の校長先生、全教職員、地域の関係当局の不断の苦心努力の継承によつて、隆々発展の道を辿りここに三〇周年を迎えるに至つたことは歡喜の極みである。

爾来二〇年を経た今日、私は古希の齢を重ね今もつて老軀を掲げて教育の道にご奉公出来ている身を日々感謝しつつ過している現状である。

創立三〇周年記念誌に稿を寄せ當時を回想し誌面を借りて当時お世話になつた数多くの方々の限りない友愛とご恩に改めて感謝の誠を捧げ、歴史の流れの一齣を記して備忘の資とすると共に、今後更に須崎工業の校運の弥栄を切に祈念するものである。

（遺稿・三十年誌より転載）

電通科設置の頃を顧みて

元校長事務取扱 野中 健一郎

電気科の森先生が見えられ、「創立三〇周年記念誌」を発刊するから、電気通信科が発足した「いきさつ」について書いてほしい、とのおこたひでした。

須崎工業高校で私がご厄介になったのは、昭和二四年から三三年までの九年間でした。同一校在職九年というのは、私の全教職生活を通じて最も長いものでしたが、それは単に長かったというだけでなく、私の「人生アルバム」のなかでは、後年特に印象に残るような経験や、出来事が、この間に集中しているように思われます。

勿論、ここで申し述べる「電通科設置運動」をめぐる諸々の思い出はその最たるものでした。その理由は、予算を伴う新規事業は一切とりに上げないという県当局の考え方と真向うから対立したため、大変多き運動に終始したからの一語につきると思えます。

本校に「電通科」が設置されたのは、昭和二七年四月でしたが設置運動の発端は一言にして言えば、生徒の漸減傾向への対策だったといえるようです。

当時の生徒定数は、機械科二四〇名、造船科七五名でしたが、敗戦後の一般家庭の経済事情の不如意、教育に対する理解度の不徹底、産業界の不振による卒業生の就職難、等々種々の悪条件もあったかと思えますが、高校課程への進学率が極めて低く、ために定数に充たぬこともあり、生徒数三〇〇名を割るような事態に立ち到っていたのであ

ります。

そういう次第で、生徒数減少への布石として、科の増設を考えねばなるまい、というのが校内の一致した空気だったように思いますが、この課題を「電通科新設」という、はっきりした形でとりあげられたのは昭和二六年四月、前田健造先生が校長として就任されたときに始まるのであります。

前田先生は、特に終戦後における本校生徒数の逐年減少しつつある事実非常に心を痛められ、是非とも科の増設をもって臨まねばならぬ、そして新設の科は、現在高知工業高校に設置されておらず、且つ未来への展望につながる魅力ある科でなければならぬ。などの原則に立って検討を重ねられ、その結論として「電気通信科設置」という具体的な提案が先生によってなされたのであります。それは先生御就任の翌月、五月の初旬頃だったと記憶しております。

早速、全国の電通科既設校全部に依頼状を送り、①電通科の教育課程表、②当面必要な施設々備および教材、教具類、③電通科を新設しようとする後進校へのアドバイス。などを求めましたところ、期せずして、北は北海道、南は鹿児島に到る各校から続々……と申しまして僅か九校位だったと記憶していますが、詳細な資料に加えて力強い激励のことが寄せられ、これによって自信を得、事実上、設置運動への第一歩が踏み出されたことになりました。先ず手はじめとして、それらの資料を照合、比較しながら本校の理想とする「教育課程の試案」をはじめ県、県議会、県教委などに出す陳情書と、これに添付すべき科設置に伴い当然必要とする教職員の増員、校舎の増改築をはじめ施設、設備など詳細にわたる書類の作成にとりかかりました。

この頃から、PTAの坂本会長が殆んど毎日のように学校に見えられ、前田校長先生との間に要談を重ねておられたようでした。

六月になってからはPTAの総会など矢継ぎ早に開催され、学校の体勢としては「新科設置」対外交渉への足固めが、大筋においては大体出来上がったと思います。

ところが、大変困ったことがおきました。それは七月も夏休みに近い頃だと記憶していますが、前田校長先生が突如病気になるので、少し立ち入って申しますと、これは勿論、校長先生から後になって伺ったことなのですが、去る六月に実施された教職員の健康診断で、先生の胸部に少々異状が認められるということで、その後更に須崎保健所などで精密検査の結果、矢張りご病気だとの判定がなされたのであります。私は内心困ったなと感じながらその後も従来通り、必要事項に関しては校長先生の指示を受けながら、校務の余暇を駆使し、準備作業を続行していったのであります。

それは、夏休も漸く終りを告げる頃の午後でした。校長先生から、直ぐに学校へ来るように、との連絡で、急いで校長室に行きますと、県教委から汲田主事が見えておられ、ご二人でご歓談中の様子でしたが、校長先生は、私の顔を「いちべつ」されると同時に、「あ、野中君です、野中君に後事を託して行こうと思つて」といつもと少しも変らぬ屈託のない表情で、兩人に諒解を求めるような調子でいわれ、改めて私を顧みられながら「実は、近いうちに入院しなければならなくなつたんです。」と、さり気なく言葉を続けられました。私はこの一瞬に受けた衝撃を今もって忘れることができません。この人の教育理想実現のために全力を挙げてお助けしようと思つていたのにと、悲

しさと、くやしさが一遍にこみあげてきました。

九月一日付で私への「校長事務取扱い」の辞令が出ました。八月末をもって、書類の準備は概ね終っていました。そこで、対外的な仕事として、高吾両郡と幡多郡東部の町村長及び中学校を訪問して陳情書に署名をして頂くこと、今一つは、今後の運動を効果的に進めていくためには是非とも事前に、県教委事務局に陳情の趣旨を好意的に理解しておいてもらう必要があるので、適当な機会に教務課長を訪問して内容を詳細説明し協力を求めておくこと、以上二つの仕事が一〇の二ヶ月間のスケジュールに予定されていたのであります。

私は校務のすきを見ては、地元須崎町とその周辺を手始めに比較的乗物の便利のよい久礼、上の加江方面に脚をのばし、中学校と役場で署名をもらって廻りましたが、ここでははしくも私が、痛切に思い知つたこと、それはこの仕事で、授業などを抱えながら、片手間にできるような、生易しい仕事でないということでした。

私は学校へ帰ってからも種々考え悩んだ揚句、入院を一兩日後にひかえ、構内の住宅にご静養中の校長先生を病床に伺い、「電通科設置の運動は校長先生が御全快の暁、改めてやられるようにされたら……」という意味のことを進言したのですが、上半身を起き直られた校長先生から「弱音を吐いちや駄目だよ、もう、ここまで来たんだから、この位のことには僕がいなくても出来なくては……」という厳しいお言葉でした。

私は、退くに退かれぬ現在の立場をしみじみ自分自身に言いきかせながら辞去する外ありませんでした。

翌日の職員会議で事情を訴え、週十時間の私の授業を五時間に減ら

して頂くことに先生方の快諾を得、それ以後私は文字通り寸暇を惜しむようにして署名をいただきに廻りました。役場などによつては会談に熱が入り過ぎて思わず、長談議をしたり、中学校のなかには、バスの道路から一キロ以上も入った所にあつたりなどで、署名の途中は、バスに乗るなど思ひもよらぬことを私は経験から教えられました。

朝、始発のバスで新莊川筋を上り、白石の近くで下車して上半山、下半山、上分と川沿いの真白く乾いた道路を歩いて各役場、中学校と歴訪して帰つたこと、影野で汽車を降り、(その当時は汽車は影野まで)往きは興津までバスに乗れたものの、役場で以外に手間どつたため、運悪く帰りのバスに乗りはぐれ、止むなく、影野までの山坂一〇数キロを歩いたことなど、時に思い出しては、若かりし日の自分をいとはしく思つたりしています。

次に、楠瀬教務課長を県教委事務局にお訪ねしたのは一〇月の末も押しつまつた頃だつたと思います。私は持参した書類を課長の机上に置き、須崎工業高校がこの度、電通科設置の要請に踏み切るに至つた「いきさつ」を詳しく説明し、この運動の成否は一にかかつて事務局の方々、とりわけ、教務課長の御意向によつて決まると思つたので何卒よろしく、という意味のご依頼を申し上げたのであります。

すると、私の話を終始、黙々として聴いておられた課長は冷然として、次のように言われました。「私はそうは考えない、もし電通科の増設が時代の要請であるとすれば、郡部の須崎工高ではなく、県の中央部に位置し、より設置効果の期待のもてる高知工高に新しい科を設けるとするのが私の意見である」と。私は課長の予想だにしなければ冷淡なこの態度に、全身から発する憤りを抑え得ませんでした。私

はここで自分なりに、教育者の良心として自負している立場から、課長の考え方の誤りを指摘し、次のように反駁したのであります。曰く、ここにあって教育基本法などを持ち出すまでもないのだが、教育の機会均等、ということばの意味を課長はどのように解しておられるか、いまは正に新時代への幕明けともいふべき重大なときである。旧制中学校の標札を「何々高等学校」と書き替えただけで、何等為すところを知らず、万事、事なかれ主義、でその日、その日を過しているのが昨今の県教委の実態ではないか。

実業教育の振興策こそは教育行政当局として即刻取り組まねばならぬ最優先課題であるを疑わない。その意味からも差し当たり東は安芸に、西は幡多地方に工業高校を各一校新設し、過去、長きに亘り不当に放置されて顧みられなかつた僻地の子弟に対して、等しく実業教育の機会を享受しうるよう、教育行政当局者の良心の名においても、即時措置すべきは当然なのに、それをなんぞや、須崎工業高校に電通科設置の配慮方を要請したのに対し、「郡部の学校には新しい科は置かない、増設の必要あれば市部の高知工業高校を考える」など時代錯誤も甚だしい……など、自分としては課長の発言に対して、思つたことをそのまま言葉に出して言い、全く妥協ないまま帰つてきました。

後日、城西病院に、前田校長先生の病床をお見舞いしたとき、はからずも、校長先生から前述の話が出ました。

「二、三日前、楠瀬課長が来てね、イヤー野中君というのは随分気の強い男だね、と言つたから、いや、あれで案外さっぱりした男だよ、と言つておいたよ」と先生は可笑しそうに話されました。

奇妙なもので、楠瀬課長との一件が、私の心を刺戟し、この運動は

是が非でも勝たねばならぬわい、という新しい闘志と使命感のようなものが湧き、運動に関連する仕事に一段と身が入るようになりました。

一月には会期中の県議会を訪れ、休憩時間に議員さんの後を追いかけて、一名でも多くの署名をもらうことに努めました。特に教組出身の高橋敏明議員から受けた親切なご配慮、幡多郡選出の小島小太郎氏の示されたご好意など忘れません。

月末には愈々県と県教委へ陳情に行くことになりました。一行は地元の笹岡助役、佐川の森田町長、浦の内の上田村長（後の須崎市長）、坂本PTA会長、学校側からは橋田事務長と私、外に久礼、窪川からも行つて頂いた筈なのにどうしても思い出せません。

最初、知事部局と議会議務局を廻り、型通り陳情をすませてから教委事務局に行きました。折から委員さん達は会議中でしたが、区切りがついたところで私共の陳情を受けて下さることになり、先ず坂本会長から陳情の趣旨について述べられ、細部にわたつては私が専ら説明に当たりました。委員さん側から二、三の点について質問があり、それにお答えしたのですが、その内容などは全然憶えていません。それなのに、ある委員さんから「この種の陳情に学校長が自ら先頭に立つて来るのはどうだろう。」と発言されたのが私の、「糊の虫」にさわり、二〇年の歳月を経過した現在、なお忘れることが出来ないとは、私など随分罪深い厄介な人間なのかも知れません。

さて、これで一応陳情活動は終わったものの、なんといつても最終段階においては、教育長の意見が決定的な力をもつ、といわれていますので、教育長にいま一遍お会いして、最後の駄目押しをしておかねばと思い、陳情の日から数日たつて県教委へ参りました。教育長には

来客中とのことで、控室に入りますと、折から来合せていた教育委員長とばったり顔を合せました。先日の陳情で、お互い顔見知りになっています。彼は無論私の来意を百も承知です。「これは現段階では個人の意見としてお聴きねがいたいですがねえ」と前置きして早速、話を切り出してきましたが、氏の意見というのは、要するに、電通科は新設するとして、その交換条件といつては悪いが、現在不振状態にある造船科を廃止するという案は考えられまいか、というのです。

私は、ついこの間の楠瀬課長との一件を思い出しながら、「ご指摘の通り造船科は現在、二五名の定員を割るような状態ですが、戦後の船腹不足は世界的な問題だと思えます。いまに本校の造船科が時代の脚光を浴びる時が到来することを私達は疑っておりません。どうか、造船科をどうこうするとお考えにならずに、電通科の新設を御配慮ねがい度いと思えます。」そんな意味のことを汗を拭き拭き申し述べるところへ、来客を送り出した教育長が同席されました。「やつぱり駄目か」ぽつりと一言された教育長の赤ら顔はいつもの温顔そのものでした。

それにしても「トップクラス」の間では既に通じ合っていたようです。豪放らしい落な教育長が加わられたことで私は気分的にも「らく」になり、「教育の仕事は、眼先の利を追う際物商買などとは本質的に違うから、造船科の廃止などいわずに、是非とも電通科の増設を認めて欲しい。」と、乏しい知恵をしばらくながら、嘆願これ努めました。

教育長は、私の話の終わったところで、

「よし判った。然し、造船科の現状は教委内でも話題になつてはいる折りだから、将来の見通しについて学校側の『長期計画書』のようなも

のを出してもらおうか。」と言われました。私は肩の荷が幾分軽くなつた気持ちで辞去了ました。

翌日学校で造船科の竹村義典先生にこの次第を説明し、造船科の長期計画書の作製をお願いしました。更に数日後、先生の苦心に成る部厚い書類を携えて、兩人で県教委に出頭しました。細部にわたっては、竹村先生から熱心に補足説明をされました。やがて、杉村教育長のお顔の表情に、私達の不安や焦りに対し以前にも増して、ほっとさせるようなものを感じとることができました。

かくして、その過程においては随分と紆余曲折をたどりながらも、数多くの人々の善意と援助に支えられて、遂に翌二七年四月、須崎工業高校は既設の機械科、造船科に加えて、電気通信科の増設に成功し、ここに宿願を果し得たのであります。

(三十年誌より転載)

須工の思い出

電気通信科卒 宮本 恵美子(旧長山)

入試があつたのかな?… もう随分古い話で忘れてしまいましたが、大学へは行きたいと思わないし、かといって何となく高校に行くところも…と迷っていた時、「これからの女性も手に職をつけて置いた方がいい」との父の言葉で方向は決まりました。目指す学校は、その年より初めて女子生徒に門戸を開いたばかりの須崎工業高校でした。中学担任の先生から「十名程の合格者(女生徒)の中にお前の名前も有るぞ」という話を聞き、まずは一段落、いざ入学の日が近づくと、



本校唯一の公式女子運動部(ハンドボール部)
前列左端が宮本さん、中央左が田原先生(コーチ) 右が前田先生(顧問)

一学期も終わりのころではなかったかと思えます。

思い出してみますと、今、現在の私の生活基礎を作った一番大切な時期が須工時代だったような気がします。色々なことがありました。教室の横手に土俵が有りました。走り抜けようとした途端、「コロナ女は土俵に上るな!」どこからか大声が飛んできました。(スママセン)女性も土俵に上れないなんて知らなかったんですよ。相撲部は強かったです。それに部員の人たちの大きいこと、よく優勝していたように思います。

私が二年生になった時、先輩が十名入学、やれやれ一人ではないぞ、十一名、そこで「ハンドボール部」ができました。今、テレビなどで見る試合とは大違い、私たちのは「サッカーコート」を走り回る「ハンドボール」でした。練習相手は我校サッカー部の選手、体当たりで

一人抜け、二人抜け、最後は私一人になってしまったとのこと。今さらそんな…。「気楽トンボ」の私は、事の重大さも考えず入学してしまいました。当たり前のことですが、どちらを見ても男子ばかり、やっと、私は思い切ったことをしたのだなと気が付いたのは



年1回開いている趣味の作品展のスナップ

ボールを取るなど、当たりのきついチームと他校から恐れられていたのではないのでしょうか。その反面、女性らしいことの勉強をと、校長先生の計らいで先生の奥様には生け花を教えていただきました。今、玄関に花をと思う時、自然にその時の基本を思い出して生けて居ります。

汽車通学の私には、また別の楽しみもありました。隣の商業高校の

女生徒と仲良くなり、列車内でのおしゃべりや、道中でのみかん取り……。今は電化されましたが、そのころは石炭？、トンネル入り口や、山坂になると、ユックリ走ります。そこで取れたてのみかんを投げてもらったり、鼻の穴は真っ黒だったり……。のどかな話ですね。のどかついでに、二年の時だったと思います。父が学校の教材にでもと、十何センチかの大きなラジオ部品を集めて来ました。クラス仲間の何人かで作ってくれたのですが、大きな真空管がたくさん並んでいて、その当時としてはまずまずの品でした。今の人たち、真空管なんて知らないでしょうね。

なつかしいことはかりです。女性も手に職をと勇んで入った学校、卒業後、知り合いの会社に入社、生意気にも図を書いたりしていました。専業主婦となった現在、何らかの形で社会とつながっていたいと、学生時代に鍛えた体力にものをいわせ、体育指導員や、地域のボランティア活動に時間の許す限り出かけてお手伝いをさせていただいて居ります。卒業してもう三十年余りになるんですね。書いている内に何だか今浦島になったような気がして居りますが……。

後輩の皆さんは、二十一世紀に向かって、大きく歩み、はばたいていかれることでしょう。頑張ってください。

(編集註・宮本さんは、本校初の女生徒として入学された。)

栄冠の陰に

— 機工クラブ顧問としての思い出 —

元教諭 広瀬雄助

明治一六年「農学校通則」、一七年に「商業学校通則」が公布せられ、一応わが国産業教育の礎石がすえられて以来七〇周年、その記念式典が昭和二九年一月一日、東京都日比谷公会堂において挙行せられた。当日は両陛下ご臨席のもとに、三五年以上産業教育に勤続された先生方、又産業教育に特に功勞のあつた方々の表彰、つづいて記念講演があり、わが国、産業教育の夜明けを祝福するにふさわしい式典が盛大に行なわれた。

その記念行事の一環として、全国高等学校の生徒作品展が、一月九日から一四日まで東京三越本店の七階で開催せられ、本校からも機工クラブ製作による「三馬力船用石油機関」を出品、予備審査、会場審査と二回にわたる厳正な審査の結果、機械部門で第一位に選ばれ、通産大臣賞を受賞した。

又この年は本校相撲部も、一月に行われた選抜高校相撲高知大会において、宿願の全国制覇の偉業をなしとげ、今日の相撲部に確固たる礎を築いた年でもあつた。時を同じくして体育と文化、両面で全国的にその知名度をあげ、多くの人々から賞賛をうけたことは、本校三〇年の歩みの中で、忘れることの出来ない足跡を残した年ともいえるのではなからうか。

昭和二二年の学制改革により、新制高校として発足してからは、自

主的な生徒会活動の下に、おのずから各クラブの活動にも活気が見られるようになり、学年当初に新入生を対象としてのクラブ紹介、入部勧誘等もその当時から盛んに行われるようになった。

機工部もその例外でなく、それぞれの活動目標のもとで自己研鑽につとめ、三年に一度の文化祭の時などは機械科の原動力となつて活躍してきた。日頃修得した、実習、実験、その外の専門教科で学び得たことを、現場で応用、再現して創造的能力を養い技能の向上につとめる。これが機工部の活動の目標であるが、同時にグループ活動を通じて「協調と責任」のある幅広い人間像を求めめるための努力も欠かしてはなるまい。旋盤を使って丸棒を切削するにしても、如何にすれば、正確に、出来栄よく、早く出来るか、創意工夫をし日常の練習を積み重ねることによつて、工作活動が行われるわけであるが、静よりは動、とでもいおうか、発動機のような動きのあるものを製作してみたというのは人間として本能的な欲望ではないだろうか。

機工部で、石油機関を製作する以前、私たちは人力による小型船の推進機をつくつたことがある。それは主として自転車の部品を利用したもので、ペダルを踏みチェーンギヤを廻し、後部の傘歯車に連結して二枚羽根のスクリューを回転、船を推進させる幼稚な方法であつた。出来上ると早速、造船科で造られた五メートル余の木船に取付け、学校の西にある糺の池で試運転を行った。着想が奇抜であるものだけに当日は、地域の人たちも見物に来るなど池の周辺は賑わいを呈した。大勢の人が見守る中で、最初にペダルを踏んだ時の気持は、期待と不安でいっぱいであつたが回転をあげて加速すると、二挺櫓を使って漕ぐよりも速く、その点ではまずまずの成功であつた。と同時に水の抵

抗がいかにも強いものであるかを改めて痛感した。

はずみ車をさらに大きくして、惰性を増大さすとか、回転部の円滑方法など、まだまだ考慮すべき点もあったが、所詮は人力によるものとその後は改良を中止した。このニュースを高知日報（当時の地方新聞）が記事としてとり上げ写真入りで報道され人気を呼んだ。それから数ヶ月して、これと同型式の機械が名古屋で製作され、長良川で実用化されたことを新聞で知らされた。それは私達のつくったものより数倍も性能的にも優れたものであったと思うが、着想においても、又時期からいっても、あまりの偶然さに啞然とさせられた。余談であるが、この試運転中に、スクリーンの波に驚いたものか、池のボラが数十尾進行する舟の中に飛び込んできて、思わぬ収穫にありついた。

こうしたことが契機となって、機工部で船用石油機関を製作することになった。戦前、高知工業では船用焼玉機関を製作して、海運に、又漁業の振興に貢献したという話を聞かされていたが、高知工業高校の場合は実習を中心として製作する、すなわち生産実習であったようである。だがこれをクラブ活動として始めた場合は、その製作工程においても多くの困難が予想され、機械科内で相談した結果、試みに他社で製作しているものをつくらしてもらい、その上可能であれば本校独自の型式に改良してゆく方針で出発した。

当時、県下の小型機械船といえば殆んどがガソリン機関か、石油機関を使用しており現在のようにディーゼル機関万能の時代ではなかった。それだけに県内の各鉄工所でも、ガソリン機関や、石油機関を製作していたが、中でも安芸市の笠井鉄工所、高知市の山中鉄工所などの機械が評判も良く、全盛をきわめていたようである。

最初の足がかりとして、私は山中鉄工所を訪れ事情を話すと、学校でやることであれば協力しようと、快く承諾していただき木型を借用さしてもらった。当時はまだ本校で鑄鉄の溶解を行っていなかったのが高知市の鑄造工場に依頼し、軽合金や砲金鑄物等は、洪谷先生のご指導を得て学校で鑄造することにした。それまでガソリン機関の模型などを製作していた部員も、いよいよ実物の製作となると全員張り切り、それぞれの分掌のもとで活躍したものであった。

だがはじめての試みだけに中々当初の計画通り作業は進行せず、その都度、山中鉄工所に向いて指導をしていただいた。生産現場でその作業工程を見学すると、「ああ、この部分はこうすればよいのか」と納得出来ることも多く「百聞は一見にしかず」の諺どおり得るところがあった。学校での製作過程においては、市販のものを買えば安く購入出来るボールトやナットの類まで部費の節約と、工作練習を積重ねる意味で出来る限り部員達の手でつくるように指導した。旋盤をはじめ諸機械の殆んどが、ベルト掛けで、精度においても現在とくらべると問題にならない状態で、ネヂ一個切るのにもその都度、替歯車を取替えるなど不便さがあった。だが全員、これの完成の日を追いながら汗と油にまみれて頑張ったものである。

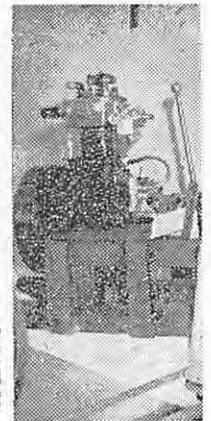
物事に熱中して、他事にあまりかまはない人のことを世間ではよく『あの男はなににの虫だ』などと表現するが、部員一同がこの『虫』的存在となつて全力を傾注し、二八年に二・五馬力石油機関第一号機の完成を見ることが出来たのである。試運転で最初の爆発音を聞いた時の全員の喜び、と同時に、やれば出来るという自信と、勤労の尊さをこの一瞬にして知らされた。だがこうして製作された機械も、鑄物を

代やその他の材料費を支払うために売却しなければならなかった。安価で、責任保障という点で地域の漁業関係者から製作を依頼されたが、クラブ活動の範囲では、これ等の要望に応じて量産することも出来ず二・五馬力の製作も三台で中止をし、その後は本校工作機械で出来る最大の機関、三馬力石油機関の製作に切替えることとなった。

その間、キャブレター、クラッチなど改良を行って機工部独自の機関をつくるための努力を続けてきたのである。丁度その頃、本校五代目校長であられた森岡貞篤先生から、産業教育七〇年の生徒作品に製作し出品してみたら、とのお話があり機械科の先生方、機工部員とも相談の結果、二九年九月から本格的に製作に取組んだのである。

機工部々長、横山英昭君（三年）を中心に三年生、二年生の部員一名、それに機械科長、田村隆徳先生はじめ機械科の先生方の側面的なご指導を得て、この作品展に臨んだのであるが、従来製作してきた二・五馬力と異り全体の構造が大きいために、機械加工の場合、予想外の難事に直面するなど限られた日程の中の作業は生やさしいものではなかった。その上学校行事の多い二学期とあつて、時には日曜、休日も返上しこれまでの経験を活かして頑張った。一〇月末には完成させて一一月五日までに、予備審査会場である都立工芸高校に必着させなければならぬ。それだけに一〇月下旬の中間テストの発表から試験終了までの約一〇日間の活動中止期間は大きな痛手であった。一〇月末の残された数日間は徹夜をしたこともあつたが、それでも塗装に要する日程が無く、錆肌には直接黒のラッカーで塗装を行ない、速成の機械台に取付けて発送の運びとなつた。

だが運の悪いことは重なるもので、季節はずれの台風のため発送ま



須崎工に通産大臣賞

船用内燃機関、東京で好評

【東京電】須崎工業高校が、産業教育七十周年記念展覧会（東京日本橋三越本店）に出品した三馬力船用内燃機関は、精密な製作を高く評価され、通産大臣賞の殊誉を勝ち得た。会場は連日押入を押すまで、同内燃機関は特に学生工業関係者などの間に人気を呼んでいる。写真を通産大臣賞に輝く須崎工業製作の三馬力船用内燃機関

当時の朝日新聞記事

でに更に二、三日駅で留められた。その間、校長先生から延着理由について打電してもらうなど、あわただしい毎日であつた。

機械の東京に到着する頃を見はからつて私も上京、その足で都立工芸高校を訪れ、延着の事情を

説明し期日に遅れたことの不手際を詫言した。そしてすでに到着していた、石油機関を体育館の一隅で見た時はいい知れぬ安堵感と、同時にいよいよ作品展のスタートラインに並んだという強い緊迫感を覚えた。荷造りをとくと早速四、五人の審査員によって審査が始められ、その間製作過程における問題点など色々質問をされ、最後に運転をするようにいわれた。

一振り一発を心に念じ、始動コックにガソリンを注入しホイールを振れば、パンパンという排気音が屋内にこだまして、低速、高速と機関は順調に運転され、その規則正しい爆発音は機工部員全員の今日までの努力を讃美するかのごとく、私の胸に響き感無量であつた。

展示会場にあてられた、日本橋三越本店は、都内でも中心地にある上に、全国高校生徒の作品展とあつて連日、一般の人や学生で賑わい大盛況であつた。出品総点数は三百余点、工業高校で出品した学校は六七校、出品点数一二四点、その中で機械科関係は二三点であつた。



この年体育・文化の両面での日本一は多くの人々からの賞賛を受けた。校内教職員による祝賀会（校長官舎にて）

各校の主な出

品機械は、都立北豊島工業高校の卓上ボール盤、大阪府立淀川工業高校の農業用発動機、長野県立長野工業高校の卓上旋盤等、いずれも、外見、精度、共にメーカー品に劣らぬ優れた作品ばかりで、生徒作品展というよりはむしろ産

業教育博覧会といった感じさえ受けた。それらの作品にまじって、本校機工部作品の船用三馬力石油機関も展示され厳密な会場審査の末に、機械部門で第一位に選ばれ、黒光りする機体に「金賞」の二文字が貼られた時の感激は筆舌につくし難いものがあった。他校にくらべて、只の一点しか出品しなかった本校の作品が全体でも数少ない金賞の榮譽を獲得したことは、まさに一発必中の悲願が成就したともいえるよう。

では、この金賞は何によって得られたか、関係者の声や、又私達の

判断を総合して考えられたことは、

- 一、作品全体に生徒の作品らしい素朴さが見られた。
- 二、比較的安い経費で実用性がある。
- 三、郷土の特色が活かされていた。
- 四、出品期日が遅れながらも、最後までやりとげた努力と誠実さが認められた。

以上のような事柄が今回の受賞の要因であったようである。

一月一〇日、日比谷公会堂、記念式典の場で、機工部門第一位、通産大臣賞受賞の報に接した時は、長く苦しかった昨日までの努力が大きく報いられた感激に胸も一杯で、ただ一刻も早く帰校して部員一同にこの喜びを分かち合いたい衝動にかられた。

校長先生にこの旨を打電し、即刻帰校の途について。当初の予定では到底入賞など予想もしていなかっただけに、作品は展示会場で売却し折返し帰校する予定であったのが、この度の入賞で変更され上京以来、一〇日近くも在京したため懐中は乏しくなったが、何物にも替え難い貴重なものを手にした喜びで胸は一ぱいであった。

ふり返ってみれば辛苦の多かった数ヶ月間であったが、この榮譽へのチャンスと原動力を、機工部に与えてくださった森岡貞篤校長先生の温情あるご指導とご鞭撻、又機械科諸先生のご理解と、側面的ご援助に改めて心から感謝するものである。

以来一七年、産業教育の振興も日進月歩の歩みをつづけて来た。実験、実習等の設備も年と共に充実され今や地域社会との格差は縮小されたが、教育の多様化の問題など、今日の産業教育に大きな課題を投げかけている。

経済成長によって生じたともいわれる「断絶」という現代用語が巷でよく聞かれるが、何事を行うにも、グループの一人一人が結束し、思考し、自信と信念を以って事に臨めば、充分といえない機械設備、又不利な条件があろうとも、所期の成果は挙げ得るものと確信するものである。

當時を回想しながら、現在の自分をふり返った時何かと反省させられる今日である。

(四六・九・二)

(三十年誌より転載)

特集

相撲部OBキャプテン座談会

平成三年一月五日 於・須崎工業高等学校 会議室

(出席者) (敬称略)

進行と解説

田原敏雄 昭和二四年～三九年・体育科教諭

昭和二五年 相撲部創設・顧問兼監督

(OBキャプテン)

岡林幸保 初代主将

相撲部OB会 会長

昭和二八年・造船科卒業

高山三郎 第三代主将

昭和三〇年・電気通信科卒業

秋山正元 マネージャー

昭和三〇年・電気通信科卒業

浜口一 部員

昭和三一年・造船科卒業

中井幸増 第六代主将

昭和三三年・機械科卒業

中川浄 第七代主将

昭和三四年・機械科卒業

中川健三 第九代主将

昭和三六年・機械科卒業

中井博重 第十代主将

昭和三七年・機械科卒業

森田明郎 第十一代主将

昭和三八年・機械科卒業

木下肇 第十三代主将

昭和四〇年・化学工業科卒業

林 和夫 第十四代主将 昭和四一年・化学工業科卒業
中川 守 第十五代主将 昭和四二年・化学工業科卒業

〈学校側〉

森岡 清 校長 昭和二六年・機械科卒業
森 峯雄 教頭 昭和二七年・機械科卒業
高橋 三雄 教諭 昭和三二年・機械科卒業
岡崎 明 教諭 昭和五七年・機械科卒業

第三十代主将

相撲部の歴史

(年度) (主将) (特記事項) (選手名)

二五 岡林 幸保 相撲同好会として発足

二六 岡林 幸保 相撲部として正式発足

全国高校相撲選手権県予選 初出場

岡林幸保・松本尚介・藤原昌弘

二七 岡林 幸保 全国選抜高知大会初出場 団体・ベスト16

高山三郎・岡林幸保・藤原昌弘

二八 藤原 昌弘 県高校相撲選手権大会 団体・初優勝

金沢大会 団体・準優勝 最高得点賞

三本木大会 団体・準優勝

全国高校選手権大会(大阪) 初出場

団体・予選二勝八点・一七位

高山三郎・長山 正・藤原昌弘・山崎 満

二九 高山 三郎 全国高校選手権大会 団体・準優勝

高山三郎・長山 正・岡崎嘉男・山崎 満
全国選抜高知大会 団体・優勝
個人・優勝 高山三郎

三〇 岡崎 嘉男 高山三郎・長山 正・岡崎嘉男・中井規三男
十和田大会 団体・第三位
個人・優勝 岡崎嘉男

第一回 高校相撲東西大会(札幌)

(個人戦) 岡崎嘉男 のみ参加

個人・準優勝 岡崎嘉男

全国選抜高知大会 個人・準優勝 岡崎嘉男

高山東一・中井規三男・岡崎嘉男・中井幸増

三一 高山 東一 十和田大会 団体・準優勝

全国高校選手権大会 団体・優秀校(ベスト8)

高山東一・甲把辰男・岡崎憲史・中井幸増

三二 中井 幸増 金沢大会 団体・優勝

個人・優勝 岡崎嘉史

最高得点賞

全国高校選手権大会 団体・優勝

個人・第三位・中井幸増

岡崎憲史・中井幸増・甲把辰男・中川 淨

三三 中川 淨 金沢大会 個人・第三位 中川健三

全国選抜高知大会 団体・準優勝

中川健三・中川 淨・橋田昌和・大谷尊由

団体連続入賞・六年

三四 津野 和正 東西対抗(伊勢) 個人・中川健三 出場

個人・第三位 中川 守

個人・優勝 中川健三

全国選抜高知大会 個人・優勝 中川健三

三五 中川 健三 全国高校選手権大会 団体・第三位

中川健三・中井博重・南部裕祐・津野昌

秀・竹下勝之・森田明郎

東西対抗(伊勢) 個人 中川健三 出場

個人・準優勝 中川健三

全国選抜高知大会 団体・優勝

中川健三・中井博重・竹下勝之・森田明郎

団体・個人連続入賞・八年

三六 中井 博重 十和田大会 団体・ベスト8

三七 森 田 明郎 金沢大会 団体・第三位

森田明郎・浜吉武男・浜辺和俊・酒井 泉

三八 浜 辺 和俊 金沢大会 団体・準優勝

浜吉武男・浜辺和俊・木下 肇・酒井 泉

東西対抗(伊勢) 個人・浜吉武男 出場

個人・準優勝 浜吉武男(軽量級)

全国選抜高知大会(新人戦) 団体・優勝

浜吉武男・林 和夫・木下 肇・酒井 泉

三九 木 下 肇 金沢大会 団体・決勝トーナメント

四〇 林 和夫 全国選抜高知大会(新人戦)

四一 中 川 守 インターハイ(十和田) 団体・予選

東西対抗(伊勢) 個人・中川 守 出場

座 談 会

(進行 田 原 敏 雄先生)

(敬称略)

〔田原〕 皆さん、今日はお忙しい時に集まっていたいで、どうも有り難う。

実はこの話は、皆さんの母校である須崎工業高校が、今年創立五十周年を迎えて、その記念誌を出版するというところで、私にも原稿の依頼がありまして、それに、先般岡林君など、何人かが集まった時に、当時の相撲部のキャプテン会をして、それを須崎工業の一つの歴史として、記念誌に載せてもらったかどうかという話もできていまして、森岡校長に話をしたところ、それは願ってもない企画だということで、今日の集まりになったわけです。

学校のほうには、体み中ですのに場所の設定など、大変ご苦労をかけたと思いますが、こうして当時のキャプテンのほとんどが集まってもうることができました、大変うれしく思っています。

それではこれから、須崎工業高校相撲部、OBキャプテン座談会を始めたいと思います。

まず、森岡校長からあいさつを一つ…。

〔森岡〕 はい、それでは…、皆さん明けましておめでとうございます。

今日は、本校の栄光の一つであります相撲部の皆さんにお集まりいただきまして、ただ今、田原先生からご説明のありましたとおりの主旨で、本校創立五十周年記念誌へ掲載するための座談会を開催していただくことになり、誠に有り難うございます。

私としましても記念誌につきましては、何か特集として座談会を載せたいと考えていた矢先のお話で、渡りに船と、大変うれしく思っております。お願いをした次第です。

記念誌と申しますのは、やはりその学校の歴史を後世に伝えるという、大きな役割を持つわけでありまして、そうした意味からも、本校の名を全国にとどろかせたこの相撲部の活躍は、それにふさわしいものと考えています。

今日は、生みの親であり、育ての親でもある田原先生に直接お越しいただき、進行役までお引き受けいただけるこのことで、まことに有り難うございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、ご出席の皆さんも昔を思い出して、お話をしてくださいます。簡単ですが、ごあいさつといたします。

〔田原〕 それでは続いて、OB会の会長、岡林君から一つ…。

〔岡林〕 明けましておめでとうございます。

今日は年初めて、皆さんにはお忙しいところを多数お集まりいただきまして、有り難うございました。

現在の相撲部は、岡崎先生が色々とお指導してくれておるわけですが、世の中の移り代わりとでもいうところでしょうか、なかなか選手もいないとか、周囲の状況も昔とは違っています。輝かしい成績を残した相撲部が、今はちょっとさみしくなっている感じもします。

まあ、そのことはさておきまして、今日は我が相撲部の創設時代からのことを、皆さんに振り返っていただいて、それぞれの思い出話を聞いていただき、五十周年記念誌に載せていただこうと思えます。どうかよろしくお願いします。

〔田原〕 それでは早速話し合いに入りたいと思います。

実は昨日の午後から、古い資料や写真をひっくり返してどうにか作ったのが、今お手元に配ってもらったものでして、一つは各年度とその時のキャプテン、その下にその年度の活動の中の特記事項を書いてあります。そしてもう一つの方は、団体の入賞記録と、その時のメンバー、それから個人の入賞記録を拾いだしてあります。

一応相撲部の歴史をということですが、何もないと話の進めようもないと思って作ってみましたので、この資料を参考にしながら話を進めていきたいと思います。(本稿頭「相撲部の歴史」を参照)

〔昭和二五・二六年〕

〔田原〕 まず岡林君から話を始めて欲しいですが、その前にちょっと当時のことを話しますと、最初の年(昭和二五年)は、岡林君が一年に入学してきた年です。同好会として発足して、その時のメンバーが、確か、岡林・松本・国広、それから竹崎の四人じゃなかったかと思えます。まだ屋根もない土俵で稽古稽古を始めたのですが、その同好会が次の年、昭和二六年に、相撲部として正式にスタートしたわけです。その辺りのことから岡林君に話してもらいましょうか。

〔岡林〕 はい、昭和二五年に入学した当時のことです。糺の池のほとりに学校があつたんですが、本当に土俵といっても、まあ、屋根も



昭和28年ころの田原先生。手に持つのは全国高校相撲金沢大会最高得点優勝杯

無いし、雨が降れば小さな石ころが土俵の表面に浮いてきて、その石ころを、はね除けはね除けしながら四股を踏んだり、田原先生の胸を借りたりして練習をしてみました。

ところが、その土俵の丸の外側は、もう石ころを除けないのでそこへ打ちつけられると、もう、この腕の外側ですか、それから脛すねなんかは、その小さい石ころが食い込んで、夏なんかはもう膿うみだらけのよくな状態でした。

その年が明けてから、正式に相撲部になったということで、それから後輩も何人か入ってきて、えーと、当時入ってきたのが、藤原昌弘君に、もう一人の藤原君、名前をちょっと忘れましたが、それから吾桑の堅田五郎君などの五名ほどだったと思います。

それから、須崎の町の有力者にお願ひして、後援会を作ってもらって、これで、まあ、いよいよ相撲部としてせにゃあいかんぞというこトでした。

それで、もともと須崎というところは相撲の盛んなところで、毎年

お正月には、大きな「火鎮祭の相撲」をやっていましたが、二六年には、その火鎮祭で使った土俵の屋根から土までの一切を、田原先生のお力でもらい受けることができました、それまでの土俵の横に新たに屋根付きの立派な土俵を築きまして、それから本格的な練習を始めたということですよ。

その当時の部長先生は、水野先生といって英語の先生で、部長兼監督として見ていただいておりますが、練習のほとんどは田原先生の胸をお借りしてやっていました。

それから、大会にも出るには出ましたが、それほどの成績もよう残さずでした。しかし、ついてきてくれた後輩の方たちが、我々が卒業した年からもう全国に名前が出るような活躍をしてくれるようになりました。

【田原】 岡林君から、創設時代の話してもらったわけですが、最初の同好会の時の顧問としては、先ほど名前の出た水野先生と、それから機械科の広瀬先生のお二人で、私がコーチという形でした。

というのは、その二五年にやはりバスケットボール部をスタートさせていまして、丁度ここにおいでで校長先生が、その当時はまだ生徒でして、その最初の部員でしたが、そのバスケット部の顧問を私がやっていたので、相撲部のほうを水野・広瀬の両先生にお願ひしていたわけです。中村の一条さんの大会には、広瀬先生の引率で行ってもらったこともあったはずですよ。

それから後援会については、岡林君も生徒の時代だったから詳しくは分からなかったと思うが、初代の後援会長は当時のPTA会長の坂本さんで、消防団長の田川さんと須崎町体育会長だった井上さんが副

会長ということでしたわけです。

火鎮祭の土俵をもらうまでは、夏休みの合宿の時なんか、雨が降れば鋳物工場で稽古をしたが覚えがあるじゃろうと思います。

それから、これは二代目キャプテンの藤原君がいると面白い話じゃけん、二六年に初めて全国大会への県予選に出場したわけです。

先鋒が岡林、中堅が松本、大将藤原で、この時は団体戦は全敗じゃった。全敗じゃったところが、高知商業と当たった時に、藤原が「かわずがけ」で高知商業の大将の町田をこかしたもんで、この「一点」で高知商業は、高知農業と同点で争いよった全国大会への出場権を失うことになったわけです。

うちとしては、たしか全敗中の一点だったと思うが、その一点が高知商業の出場を断念させたと、そういうことがありました。

【昭和二十七年】

【田原】 それから二十七年には全国選抜高知大会に、須崎工業が初めて全国大会という名の大会に出た年です。

その時は、予選を勝ち抜いて、決勝トーナメントの一回戦で、先鋒の高山が高知農業の中尾に勝って、こりゃあひよつとしたらベスト8かと、期待を持ったわけですが、二対一で全国大会への初出場はベスト16で終わったわけです。

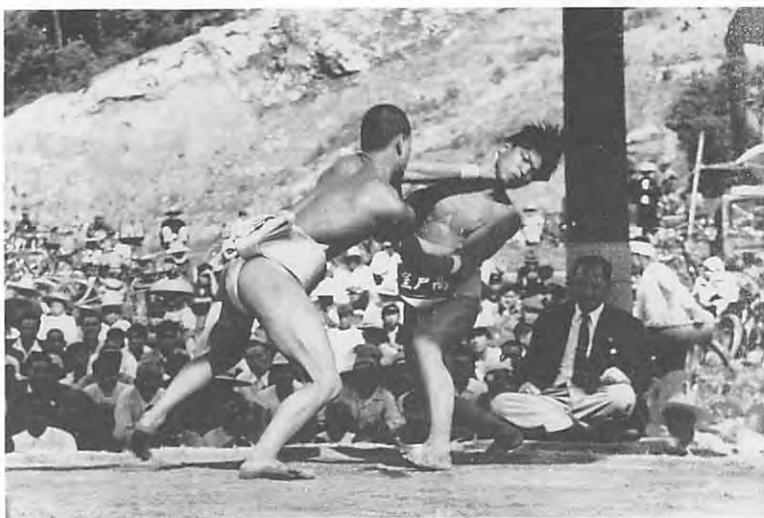
この時の思い出で今でも腹の立つのは、この全国選抜大会初出場の時の、大会ポスターへ「補欠校・須崎工業」と書いてあったのですが、堂々と選抜されて出場できるのに「補欠校」とは何ぞ！ということだ。これは、高知工業の当時の監督じゃった土居さんがやったことで、



昭和27年度相撲部 前列左端が水野先生・その後ろが田原先生、後列右端は浦先生

それ以来、土居さんが死ぬるまで私との因縁が続いたんですけれども。...

【岡林】 土居先生の話が出たから。言われんと思っていたんですけれども。まあ、当時は郡部校が市内校（高知市内校）の監督さん連中に、何か非常に敵対視されたというか、見下げられつつあったように、我々選手自身も感じておりましたねえ。



県下高校相撲選手権大会 団体優勝戦
3：3の大將決定戦で、本校大將藤原が室戸高校大谷を突出して破り初優勝を遂げる。

とにかく郡部校に対する扱いが、まったく厳しく、もう少し温かい指導が欲しいと思うことが何回もありました。まるで「全国大会に出るのは市内校だけじゃ」とでもいうようなふうで、試合に出ても妙な感じの時がありましたねえ…。

【田原】 いやねー、それはやはり土居さんとしては、先を見込んでの心配があったと思うわけです。

というのは、そのころ全県下の選手を集めよった高知工業にとっ

て、この高吾地区・幡多地区から須崎工業へ選手が行きだしたら、高知工業の地盤が危ないという気持ちで土居さんにはうんとあつたらうと思います。

【岡林】 あつたんでしょかねえ…。

【田原】 んー…、ほんでやっぱり余計にやしたようなことをしたろう。選手が感じるほどやから、かなりなことじやつたと思いますねえ…。

【昭和二八年】

【田原】 藤原君がいないので、続いて話をしますと、この二八年になつて須崎工業の相撲部の勢いがついたのでと思います。

初めての県外遠征 須崎駅での歓送



まず、県の選手権大会で優勝して、「県で優勝したのだから、それなら全国大会へ行ってみるか」ということで行つたのが金沢大会で、そのあと三本木大会への招待状ももらつたり、県大会優勝だから当然全国選手権にも出場というように、それまでの二年間は、おおかた負けてきたのに、これで勢いがついたのでと思います。

その時のメンバーは、先鋒が、高山三郎（二年）、

二陣が山崎満（二年）、三陣が中井規三男（一年）、中堅が長山 正（二年）、三将が岡崎嘉男（一年）、副将が長 信仁（二年）、大将が藤原昌弘（三年）の七人のメンバーでした。

それで、高山、なんぞ話はないかなあ…。

〔高山〕 はい、その一年に入ってきたのは、今先生の言われた四人のほかに、葉山から大黒、上ノ加江から藤原・蛭子と全部で七、八人でした。田原先生が「うちにはダイコクとエビスがおるきに縁起がいい」ということをいわれましたねえ…。（笑い）

その優勝した県の選手権ですけど、面白い話がありましてねえ、長という選手ですけれども、試合の時丁度肩の脱臼かなにかで、いまだいうテーピングをしていましたが、それがまた腹をこわして下痢の真っ最中で、試合をしては便所へ行き、便所から帰ると相撲を取りゆうというところで…（笑い）、それでも勝るとか優勝するとかの見込みは全くなかったのですが、ただ、とんとんと優勝してしもうたという状態だったですねえ…。

練習も、うちの練習だけならそんなにきついとは思わなかった。

しかし、いかんせん伝統というものが無い。稽古にしても、ブツツカリにしても、受けてくれるのは田原先生一人だった。

ただ、練習が始まる時間になったら、近所の人や須崎の町の相撲好きの人やら後援会の人なんかが見に来てくれて、それで、練習がものすごく元気づけられたですねえ。

それから選手権の前になると、消防署の消防長ですかねえ…、橋本隆さんという方が来て、一週間ぐらい胸をかしてくれて…、その当時高知県の高校相撲というたら、高知商業、高知農業、高知工業なん



稽古で受けてくれるのは田原先生一人だった。卒業式の後、最後の稽古の時記念に。（昭和30年3月3日）

か、まあ本手（プロ）まがいの専属のコーチの人がおつて、私が国体へ向けての練習の時、高知工業で合同練習をやった時じゃったと思うが、そういう人に、まあ、ブツツカリ、ブツツカリ、ブツツカリじゃったねえ…。

須崎じゃあやったこともないブツツカリをぎっちりやらされて、これはうるさいと思うた。普段やってないきねえ…（笑い）。

とにかく高知のレベルは高くて、高知で勝てば全国大会に行っても何とかなるという時代でした。

〔田原〕 それはそうと、この県大会初優勝の時は、試合の立ち合い



昭和28年度相撲部 卒業の藤原主将を中心に

をやかましゅういい始めた時で、手を下ろして立たざつたら負けるというのを、東京の日本相撲連盟から審判講習会にきて厳しゅうに言うた大会で、ちょうどこの優勝戦は、室戸と須崎工業でしたが、この試合の主審を私がやりよつたわけです。それで、先鋒戦で一方が立てらんもんじゃから、いながら「東の勝ち」とやって、見てみたら東は高山じゃ、自分の判定勝ちにしたわけで、これは妙にノーがわるい

にやあと思ったが…（笑い）、副審の物言いもつかずに先鋒の一点が取れて、そのあと3対3の大将戦で藤原が勝って優勝したわけで…。

〔高山〕 その時、サツと手をつけて、スツと出て行って相手の肩をボンと突いた時、相手がこう、よろよろと出てきた、それで向こうは待ったのもりよ、そしたら先生がこうやるけ（手を上げるふり）勝ちよ…（笑い）。それが最初で最後の判定勝ちという決まり手でしたすねえ。

当時はまだねえ、土俵へ上がったもねえ、相手もはっきりよう見なし、無我無中、自分でどう相撲を取るか、どうやって勝つたか、内容も全然分からざつたすねえ。

〔田原〕 まあ、二八年はそういう形で、金沢大会で二位、そのあとの招待で行つた三本木も第二位ということでした。

この三本木大会への招待というのは、金沢大会の予選で、須崎工業が三本木農業に3対0で勝つたために、三本木農業が予選落ちになつて、それで、ぜひ須崎工業も三本木大会に参加してくださいという要請が向こうからあつて行つたわけですが、今度は優勝戦で、三本木農業にお返しをされたということです。

それから、次に全国選手権大会への初出場ですが、予選を四回やって、二勝八点の一七位で予選落ちをしたわけです。

この時大阪の会場で、当時後援会の役員をしてくれよつた鳴岡さんに「田舎の草相撲しかよう勝たんか」いわれたのが腹がたつて腹がたつて…、「田舎の草相撲」というのは、金沢とか、三本木大会のことを指しているわけで、檜ひの舞台の全国選手権で予選落ちしたというので、たいていわれた思い出があります。

【昭和二十九年】

【田原】 いよいよ二九年、全国選手権で、あの和歌山の中尾という超高校級のおった和歌山商業に、優勝戦で二対一で負けて二位、それから全国選抜高知大会、これは宿毛でありましたが、同じ和歌山商業と準決で当たって、あれは…、ん…、やっぱり中尾には岡崎が負けたねえ…、けれども2対1で勝って、優勝戦で金足農業に、これは3対0で勝って、ここで初めて全国大会で優勝したということです。



宿敵和歌山商に2：1で無念の敗退第2位の表彰を受ける。

まあ、二七年

に全国大会に出始めてから、予選落ち、三位、四位、二位と頂点に立てなかつたので、この初優勝の感激というのは非常に大きかったですねえ。

その中で思い出すのは、一日目に、個人戦で高山が優勝した時に、宿毛から須崎の高山の家



全国選抜高知大会 個人入賞者 右から優勝高山(須工)、2位貝崎(宿毛)、3位中尾(和歌商)

に優勝を伝えるのに電話を入れたんですけれど、その電話にお父さんが出て「優勝した」というと「そりゃいかん」と、「明日へとちよかないかんがやに」と…。

て、高山のお父さんにしても、とにかく個人より団体で勝たなければいかんという気持ちが強かったようで、「明日もまたやりますから」といって電話を切りましたが、これまでずっと応援してくれていたお父さんにとっても、とにかく団体で勝たしたいという気持ちがそのまま出たものと思いますが、非常にうれしく今でも記憶に残っています。



全国団体初優勝・個人優勝を遂げる。
遠路宿毛にはせつけた応援団と選手団

【昭和三〇年】

【田原】 三〇年は、四代目キャプテンの岡崎君に連絡が取れなくて、代行で同年の浜口君が来てくれますから、浜口君から何か。

【浜口】 はい、私は全国大会に出たというのではなくて、連れていってもらったのですが、記憶に残っているのは、県体の個人戦で高山さんが野中（高知工）に負けて残念に思ったことでした。

それでうれしかったのは、今、田原先生のいわれた宿毛大会で、和

歌山に勝って優勝した時。あの時は僕らは二軍（補欠）やって、僕と、東一君（高山）と、一、二年の合計五人が応援に行きましたが、勝った選手と一緒に須崎へ帰ってきたところが、町の人やら、学校の関係者がいっぱい迎えに来てくれちゃって、びっくりして、あの時はうれしかったですねえ。。。

それから、夏の合宿、あれは長いことやりましたねえ。。。

【田原】 そう、一週間ばあやったるうか。。。

【浜口】 そうでしたねえ、皆が米を持ってきて炊いて、肉を炊いて、それで、高山さんが「うちの親父が、肉はこうゆうように炊いたらえい言いよった」いうて教えてくれて、そのとおりに炊いたら皆がうまいいうて、たいてい食べましたねえ。。。

それから、マネージャーの秋山さんが色々とうしてくれよりましたねえ。

【田原】 この三〇年で思い出すのは、第一回の東西対抗を札幌でやったことです。

この大会は、東西対抗というものの、東軍は北海道だけで、青森以西の全部が西軍で、その西軍は、三本木大会に出場した選手から選ばれた混成軍というわけで、私はその西軍の副監督でした。

その三本木大会では、須工から、高山東一・中井規三男・岡崎嘉男・中井幸増の四名が出て団体三位でしたが、岡崎が個人優勝して、東西対抗の西軍メンバーに選抜されて、三本木から直接札幌へ行くことになったわけですよ。

それで、私は副監督だし、その時三本木大会へ連れていった選手の、残りの三人をそのままおいちよくわけにもいかなので、一緒に連れて



昭和30年度相撲部

いくことにしたのですけれども、札幌に着いたものの、岡崎は試合だし、私は西軍の面倒をみないかんし、「もう三人は、まあ北海道までくることもめったにないきに、どこぞ行ってこいや」いうて市内へ出たんですが、一体どこへ行ったと思いますか？

三人が帰っていうことに、「映画を見てもってきて」(笑い)、映画を見て、「おまえらあ、なんぼいうたち、札幌まできて、せめて市内観光とかなんとか」というたことでした(笑い)。

まあ、そういうことで…。
三一年は、東一(高山)がおらんので…、それでは、中井(幸増)が三一年・三二年とやってくれるかね。

【昭和三十一年】

【中井幸増】 はい、三二年に入って、この年から全国大会の日程が変わりまして、八月に集中して試合が行われるようになりました。

それで、もう大会ごとに学校へ帰れんようになって、試合をやっては行った先で合宿をし、また次の試合に出ること、一〇日以



31年度金沢大会 団体・個人・最高得点と完全優勝を果たした。数々の賞品を前に須工土俵での記念写真

上遠征して、最後のほうではええ加減体重のない私が、もう六〇キロを割るばあに細うなった(笑い)のを覚えています。
この年は、十和田大会が第二位でした。

【昭和三十二年】

【中井(幸)】

次に三二年ですが、同時に入部し



全国高校相撲選手権大会 開会式。
いよいよ本番、緊張高まる

た部員が三年間で半分になっていました。やはり練習も厳しかったと思います。

今では本当に良い思い出になります。私たちが三〇年に入部した時、田原先生が「おまえらが三年になったら全国優勝するがじゃ」「選手権で優勝するがじゃ」ということを絶えずいわれて、頭の中へぎっちり詰め込まれて練習をやった記憶があります。二年になっても、三年になってもいわれ続けました。

その手始めが、五月の金沢大会でした。これまでの二年間、あんまり「優勝優勝」といわれるものですから、金沢に行く前に、田原先生に「先生、その金沢大会というが、非常に、あの一、賞品がよけじゃそうですので、選手が持つて帰るようばんゆうがやったら勝ちましょ



我が校OBの応援席

う」というような、偉そうなことを（笑い）いいました。

そしたら先生がおっしゃるのに、「優勝と最高得点というのは、今までに一回もない、その二つをやる自信があるかや」ということで、合田

先生はじめ、大挙して応援に来てくれました。

何がどう間違ごうたか、話が本当になりました。それに岡崎君が個人優勝もして、団体と個人の優勝、最高得点と、この時は本当の完全優勝を取ったわけです。

それ以後は、何か取り付かれたようになって、大阪の選手権に臨んだわけですが…。

この時は、前に話のあった二九年当時の和歌山商業のOBのメンバーがそっくりそのまま応援に来ていて、うちもまた、その和歌山商業に負けた時のメンバーがそっくり来ていて、両方のOB同士は応援の戦い、選手は土俵の戦いと、土俵の上と下の両方の戦いという感じでした。

それで、私ら選手同士の話で、「おい、ひよつとしたらあ、おれら優勝するかも知れんぞ」「ひよつとしたらじゃないぞ、本当に優勝するがぞ」というようなことを話し合ったことでした。

ところが、そう思うたとたんに、私が全然相撲に勝てんようになり



優勝「やったぞ！」選手権制覇

ました。全部の試合が「2対1」

「2対1」で、その「1」は私

がずっと負け

て、もうこれは

あ相撲が嫌と思

うたことはあり

ませんでした。

幸い後の二人

が頑張ってくれ

まして勝ちまし

たが、優勝戦の

相手は高知高校

で、これは3対

0で勝ちまし

た。

まあ、ほかの二人はともかく、私はもともと素質があるわけでもなく、ただ、一年に入部の時多くの人数が入りましたので、一生懸命やらないと取り残されるように思って、練習だけはとやっていると、うちに、じこじこ自信ができてきたように思います。それに優勝するということは、力がないと勝てんと思いますが、運もすごく左右すると、この年の二つの試合でつくづく思ったことでした。

今考えると、チームの三人の中では随分迷惑も掛けましたが、どう

にかキャプテンも務めさせてもらって、幸せじゃあなかったらうかという気持ちです。

「田原」しかし、高山・長山・山崎あたりがつくった伝統を岡崎・

中井・甲把を中心に守り、花開いたということですね。

この年のチームについては、三人とも先鋒型の選手で、オーダを組むのに随分苦労したことでした。それで、時々オーダを変えてもみましたが、なかなかうまくみ合わん。特に岡崎というのは、もう前が負けたら目先が暗がってどうにもならん。

色々考えた末に、岡崎は前の端で気楽にやらさには自分の力はよいう出さんと……。中井はこう非常に冷静なので、たとえ前の岡崎が落ちてしても取り返せると……。

さあそうなると、大将に甲把を使わにやらんが、相撲は甲把が一番弱かったんで、1対1の大将戦で果たしてどうだろうか……。と、心配したのですけれども、甲把が「先生、僕に大将をやらして下さい。

1対1じゃたら必ず取りますから」いうて、また事実、金沢でも大阪でも、1対1の大将戦は全部取りましたねえ。

その代わり、前の二人が勝って、2対0になつたら、もう遊びゆうわけよ(笑)、それで、金沢でも3対0で勝つたのが少ないのは、ほとんど甲把が落としたわけで、2対0じゃたら大将戦はもう遊びゆう(笑)、まあ、そんな性格じゃつたから、ここの一番という時の集聚力が強かつたですねえ……。

それから、全国選手権大会では、今いった和歌山商業と、優秀十六校で、一発でくじを引いて、しもうた、これは大変なことじゃ、やっぱり優勝候補同士じゃつたですからねえ。



校長室を埋めた賞品の数々

たほどの非常に強い選手でしたから、これはさすがに甲把が部が悪いと思いつたところが、集中力で一発で寄り切ったきねえ。そうしよったところが、準決で高知工業と当たった時、先鋒の岡崎が負けて、ああ、これで済んだと思いつたら、中井が決勝トーナメントに入って初めて勝って、それでまた甲把が大將戦を取っ

そらもう、さつき中井がいうたように、決勝トーナメントに入ってから、中井が全然勝つことをやめて、これは本人が分かんようになって、前日の個人戦の準決で、中井が完全に勝ったというんじゃないし、前日の個人戦の準決で、中井が完全に勝った相撲に物言いがついて、それも、十五分くらいかかったと思うが、その審判の明らかな見間違いで、負けになってしまった。やっぱりそれが後遺症になって、後へ尾を引いたと思うがねえ。

そういうことで、中井が相撲を落とすもんじゃから、1対1の大將戦を甲把がぎつちりとった。特に、和歌山商業の「開」という大將は、身長も一八〇ぐらいあって、その後の高知大会で個人優勝し

て、優勝戦でも先ほどのように3対0で勝ったということですが、この優勝戦でも、甲把は2対0になったらはや遊びよって、それでも勝ちましたけど、甲把に「おまえ、優勝戦いうがは記録に残るんじやが、何によ遊びよらあ」というたら、「もう前の二人が勝ちよったらえいじやいか」(笑い)……と、まあ、そんな調子じゃった。

甲把は、1対1の大將戦では本当に集中したと思うねえ。

まあ、これで初めて須崎工業が全国選手権で優勝できたということ

です。

それじゃあ、三三年に入って……、中川(浄)君一つ……。

【昭和三十三年】

「中川 浄」 はい、今、中井先輩からいわれたとおり、三二年というのは、須崎工業相撲部の名前を名実共に全国に不動のものにしてくれた年でした。

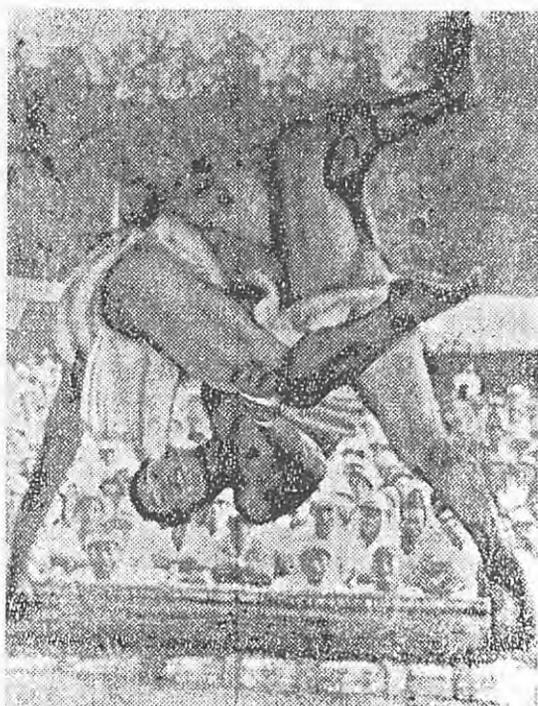
ということ、自分の代になって、これはもう大変なことになったと思ったことでした。校長室に、大きなカップと優勝旗が、入り切らんばああったんですが、それを全部僕が戻したわけです。

最初の金沢大会では、なんとかベスト8までいったんです。

それから個人が、健三(中川)と僕がベスト8までいって、健三は次も勝って、これは優勝するかも分かんと思いましたが、たしか準決勝まででしたね……。

次が選手権で、これも団体ではベスト8まででした。

まあ、その当時健三は、全国の先鋒では絶対やと、だから先鋒の健三が一点とって、あと、中堅の僕と、大將の橋田とで、どちらかが一



第10回全国選抜高知大会 団体決勝須工先鋒
中川健三快勝の後の中堅戦、須崎工優勝の瞬間、中川浄「やぐら投」で大西（高知工）を破る！が…大西「あびせたおし」中川という審判の判定…。土俵に手を付くのが大西（翌日、高知新聞掲載の写真）。

大西じゃったろう、浄が土俵の真ん中でがちり頭を付けて押さえて、「やぐら」にいった。それで、大西の両足は宙に浮いて手から落ちたわけです。

「よし、勝った」、「優勝した！」と、その時、化学の田所先生も私の横で「よっしゃ勝った」というたとたん、その田所先生が「田原さん、おまん、反対へ上がっちゃうぜよ！」というて…。

その主審が、中野の啓郎（笑い）、もう高知工業一辺倒でやりゆう男じゃったから、それがまた翌年須崎中学へ替わってきたから大変なことよねえ…。

それから高知新聞がその写真を「高知工業優勝」ということで新聞へ載せて、写真では大西がはつきり両手をついちゅう、浄はまだ完全に担いで残っちゅう。あとあとまで非常にもめて…。

ところがその後、別のことがあって大西は富山の国体に出場できないようになってしもうて、その時の理事長の坂本博行さんが「須崎工業の中川健三を国体へ出してくれ」というてきたけど、私は「絶対行かさん」といつて突っぱねたことでしたが、結局理事長が「今後たしかに審判研修に努める。このままでは高知県から国体に出れんようになるきに、どうぞ健三を出してくれ」ということで、まあ、最後には了解したんです…。

しかしあの時はどういうところじゃったろう、その高知工業は中京（愛知県）との試合でも、先鋒戦で高知工業の梅原が、完全に負けちゃう相撲を取り直し、取り直して三番やった。三番目にこれは物言いが付いてもよいという相撲がやっと取れたところで、梅原の勝ちにして、

点とつたらいいですけど、それを、肝心な時にどちらも負けましてねえ…。

それで残ったのは最後、全国選抜の高知大会…。

これはもう一生よう忘れんですが、それまでに優勝旗を全部戻して残りの一本、やっと優勝戦まできました。そして、その相手は高知工業でしたが、まず健三が一発でもつていったです。

それで今度は、僕が勝てば絶対ですわねえ。この一番が、どうしても忘れられません。そこまでいって、審判に負けた！…。

結局、また二位で終わったですわ。

カップも優勝旗も全部戻してしもうて、ここぞというところで、相手でなしに、審判に負けた。という、悔しい思いがあります。

〔田原〕 今の優勝戦ですけれども、中川（浄）と、相手の高知工業は

それで高知工業が優勝戦に上がってきたわけです。

もう完全に無理やり高知工業の勝ちにしたという相撲やったですねえ…。

中川浄は、その前年度までの先輩が取っていた優勝旗を戻すという負担を感じて責任感に燃えておったから、あの相撲が取れたと思うが、その肝心の相撲を負けにせられたということで、これは本人にとっても最も悔しい出来事ではなかったかと思うのです。

まあ、あの時の審判長の森田富明以下、主審から副審まで、私もどうしても忘れることができませんねえ…。

そういうことですが、ここで、昭和二八年に藤原・高山・長山で団体入賞を始めて以来、この年で団体の連続入賞が六年になったわけですね。

〔中川 浄〕 それからこれは余談になりますが、この大会で橋田が個人戦三十二選手トーナメントで負けた鎌谷（倉吉農）はのちの横綱琴桜（現佐渡ヶ嶽親方）です、また中京商の中堅神谷はのちの幕内力士栃王山です。

〔田原〕 鎌谷は柔道部だったが倉吉農の大将で参加しておったですね。

それから三四年は、その団体入賞が切れて、まあ、個人で中川（健三）が二つの優勝をとって、団体個人を通しての入賞は続くわけですねえ…。

えー、津野がおらんから次の年も含めて健三、何かないかね…。

〔昭和三四年〕

〔中川健三〕 はい、そうですねえ、僕はまあ、金沢大会で個人三位になったんですが、この時は個人優勝できると思っていたのが、はたかれて負けて、あれが一番悔しかったですねえ。

〔田原〕 そうじゃねえ、あの時はねえ、あの時は健三は一年じゃったかねえ、けんどの個人の記録を見てもうたら、健三の名前が四つ、一番よけ載つちゅうぞ…。

それで、個人戦のことでは、須崎工業が一つだけよう取らざったのが全国選手権での横綱（個人優勝）です。

三二年の時には、中川（幸増）が物言いで負けて、次に一番近いのは健三じゃと思いつたけれど、選手権では妙に、やっぱり芽がでざったねえ。

〔中川（健）〕 そうですねえ。

〔昭和三五年〕

〔田原〕 さて、三五年ですが、この年全国選手権の準決で、清水（高知県）に負けたということが何といつても悔しい思い出になるわけです。県の大会では、予選リーグを4対1で、決勝リーグでも4対1で勝っておきながら、全国選手権ではねえ…。

そのあたりを中井（博重）、ちょっと話をしてみるかね。

〔中川博重〕 はい、三五年というのは僕が二年の時のことです。

日本一の健三さんが、まず先鋒で勝って、それで僕も何とか勝つてというのがうちのパターンじゃあなかったかと思えます。

それが、今、田原先生のいわれたように、県大会で楽勝した清水に、

全国選山権では準決で当たって負けてしまいました。

実は、その前日の個人戦の時、健三さんがどうも調子が悪くて、僕だけが準決へ残ったのですが、その前の準々決勝の時僕に水を付けてくれたのが、清水の「橋本」で、僕に水を付けてくれながら「中井、おんしゃあ二年じゃけんど、今日はおれが優勝するぞ」というた。

「おんしが優勝するやったらおれが先に優勝しちゃうあ」という気持ちで水を受けました。

それで実は、この全国選山権の前に、愛媛県の宇和島東高校から菅原さんという選手が、うちの合宿へきていまして、これは、菅原さんとしては、うちの健三さんに勝つことが、全国選山権の個人戦で優勝することだという気持ちで来ていたわけですが…。

話がまた戻りますが、選手権の個人戦の準決に残ったのは、一方がその菅原さんと清水の橋本、もう一方が僕と石川県の「坂井」（泉ヶ丘高校）です。

僕は、仮に坂井に負けても、一方は絶対に菅原さんが勝つ、そうすりゃ橋本には絶対勝てるから、悪くても三位にはなれると計算したことでした。

そのとたん、坂井に僕が負けて、それでもまあ何とか三位にはなれるという気持ちで土俵の上を見よったところが、何か分からんうちに、目の前で菅原さんが橋本にうち掛けてひっくり返されて、三位決定戦は、菅原さんと僕とで、これはもう話にならないで、僕は四位になってしまいました。

その後遺症があつてかどうか、次の日の団体戦の準決で、やはり清水と当たりました、まず健三さんが先鋒で一点取って、二番手が僕で

すが、相手はその橋本ですわ。二年生ということもあつたかもしれませんが、「橋本に負けてたまるか」ということで、気負いはっかりで行ったところが、うち掛けて負けて、これでもう完全に清水にしてやられました。

もう選手権では、たるばあ泣かしてもらいました（笑い）。

ところが、その清水ですが、次の優勝戦の相手は青森県の木造高校でしたが、この大会の予選の時に、清水は木造に4対1…、

〔田原〕 5対0

〔中井〕 ええっ…、

〔田原〕 5対0で清水が勝っちゃった。

〔中井〕 5対0で勝っちゃったですか！、そうですか、そんで、清水はもう優勝戦に臨んだ時は「優勝した」「優勝した」といいよった。

それが逆に木造が3対2で清水に勝って優勝したんです。

〔田原〕 まあ、とにかく格下の相手という気持ちもあつたんじゃろ

うけど、あそこで清水に負けるとは思わざつたなあ…。

〔中井〕 そうです。

〔田原〕 そういうことで、結局高知は二位・三位ということで終わったことじゃった。

この年からしばらく高知県が、選手権の団体で勝てん時代がずーと十年続いて、それから四四年に高知工業が、あれが一年目の優勝じゃつたわけです。

しかしあの時は、中井もたいて気負うちよつたなあ。

〔中井〕 はい。

〔田原〕 この時はもう森田が団体へ出よつたらう。

〔森田〕 そうです、僕らあは本当に付録で連れていってもらうただけで、雰囲気にもまれて相手に点をやるばあでしたよ。

〔中井(博)〕 会場は、冷房も何にもしてなかったけれど、二年いうたら震うたもんねえ。

〔田原〕 まあけど、この全国選手権で優勝を逃したことで、そのあとが大事じゃったわ。

〔中井(博)〕 三五年の高知大会ですか？

〔田原〕 ー、予選のしょっぱつが桃山で、二番が五所川原で、それで三番目が宇佐で、この後の二つがなかなかうるさい相手やったが、しょっぱなの桃山に負けてしもうて、後の二つを考えると、こらあ予選落ちになりやあせんろうかと思つて…。

この時も私は、大会で主審をやりよつたけれども、その、須崎工業の試合のことばかり考えよつたから、主審をやりよつても、相撲を見どころじゃない、気がついたらもう勝負はついちゆう、えーい、こつちよと上げたら(軍配を) 反対へ上げて(笑い)、手が四本上がる(物言い) … (笑い)。

三回ばあそれがあつて、もうこらいかん、これで続けよつたらどうなるか分からん。それで、大会本部へいうて主審を下ろしてもらつたことでした。

それというの、須崎市内の本屋の尾崎さん(相撲部の熱心なファンだった)が、全国選手権の後で「何んぼいうたち、あのメンバーで選手権で清水に負けたあどうしたことならあ」、「今度の高知では必ず勝つきに」、「勝ついいよつたち、当てにやあならんぞ、負けたらどうするぜよ」、「負けたら私が坊主になる」いう話をしちよつて、その

ことばっかりで、今もう桃山に負けて、この後…、と思ひながら主審をやりゆうから、一つも相撲を見よらんきに、気が付いたら、勝負は終わつちゆう、上げたら手が四つ上がる… (笑い) と、… (大笑い)。

まあそんなことじゃつたが、五所川原にも宇佐にも勝つて決勝トーナメントへでたわけです。この五所川原の時の竹下(勝之)の相撲が最高じゃつた。



昭和35年全国選抜高知大会優勝記念
松岡校長先生と共に、前列右中井、左森田、後列右中川(健)、左竹下のメンバー

決勝トーナメントに入ってから、危なげのない相撲で結局優勝できたんですけどねえ。まあ、その大阪の全国選手権で負けたということとは、かなり大きかったねえ。

それで、団体・個人の連続入賞が一応八年続いて、三六年には、結局その記録が切れたと…。

【昭和三六年】

【中井(博)】 この三六年というのは、大阪の全国選手権では予選で負けて、それで十和田へ行くことになって、そこでも準々決勝で宿毛に、前年清水に負けたと同じパターンで負けて…。

【田原】 そんなで、私が監督をしようとした期間の中で、初めて全国入賞をした二八年から三八年までの間で、この年だけ団体・個人とも入賞なしということでした。そんなに弱くはなかったけどなあ、やっぱり、勝てん時には勝てんかなあ…。

まあ、そういうことで、次は三七年の森田君。

【昭和三七年】

【森田】 はい、僕は一年・二年と、まあ強い全国的な先輩がおったお陰で、一緒に連れていってもらいましたけど、ほんの自信もないままにキャプテンになって…、それで金沢大会で、思いもかけん浜吉の武男が、本当に活躍してくれまして、まあ団体で三位になることができました。それから宇佐大会にも参加しましたが、優勝できなかつたですねえ。

【田原】 ベスト8じゃったろう。須崎工業が宇佐へ行ったのはその

時だけじゃった。

【森田】 そうでしたか。早実(早稲田実業)の巨漢ぞろいに負けて、まあ僕らはもう、辛うじてこの先輩の築いた伝統を、後輩に譲り渡したということ、どうも、一つも満足できん格好やったです。個人でも、高知大会で準決に残ったのが最高で、その時も三位決定戦で石尾(和歌山・耐久高)に負けて入賞できなかったです。

【田原】 まあ、この年の金沢は冷やかたわなあ、雨が降って。

【田原】 冷やかたですなえ。

【田原】 浜吉が一年生で、まだ五月じゃから、全国では通用するようなどころじゃなかったけどねえ、予選のしょっぱつの組み合わせがよかって、高岡商業(富山県)と当たって、浜吉が一発で押し出して勝って、「先生、高知の県内大会より、ずっと楽やいか」いうて、「あほう、ありやお前が強いがぞ、お前が強いから一発で勝ったがぞ」いうて、それから乗ったねえ、個人も一六まで残った。

【森田】 そうです、結構強い相手に勝ったですなえ。

【田原】 そうねえ。

この時のチームは、当てになるのは森田の一点だけで、浜辺もあまり当てにならなかつたし、三二へ残れたら上等と思えばよかったら、今の浜吉がそういうように活躍してくれて、あの三位(団体)になったのは上出来じゃった。

それに、早実やら、地元の選手は寒さを防ぐのに、もう、毛布をふり掛けて、身体を暖めて土俵へ上がる。うちは雨にぬれてぶるぶる震えもつての試合、コンディション最悪のなかで、まあ、よう頑張ったと思います。

さあ、そうしたら次へ行って、まあ、これが私の最後の時になりま
すけれども、浜辺がおらんから木下から話してくれるかね。

【昭和三八年】

【木下】 はい、そうですね。

まあ、三八年と三九年は、天国と地獄みたいなもんでした。
三八年のメンバーは、浜吉が先鋒、三年の浜辺さんが中堅、僕が大
将でして、先ず金沢大会では、その二年の二人がずーっと勝って、決
勝は報徳学園でしたが、ここで今度は二年の二人が負けまして、最高
得点もまた報徳学園とやりましてこれも負けて、結局二位ということ
でした。

それで、高知大会では、あれは須崎でやったですねえ。

【田原】 そう、うん…。

【木下】 富士ヶ浜ですねえ。

あの時は、まあ、おだてられて、「絶対勝つんだ」ということで結局
予選決勝を通じて、一点落としただけじゃなかったですか？

【田原】 それは、林が知つちゅうろう。

【林】 はい、あの時はねえ、決勝トーナメントの一回戦で、和歌山
商業とやった時に浜吉さんが一点落としただけです。

それ以外は全然負けてなかったです。

【木下】 あとは全部、3対0、3対0で勝っていったねえ。

ところが、その三九年四月に、田原先生が高知工業へ転任されたた
ころが、監督がまあこれはあ大事なことかと思ひ知らされたの
が三九年でした。



全国選抜高知大会優勝記念 浜吉・林・木下のメンバー

【昭和三九年】

【木下】 前の年、金沢大会準優勝、高知大会優勝した自分らあのチー
ムが、この年には、金沢大会は決勝トーナメントの一回戦で負け、イ
ンターハイの県予選では、田原先生の率いる高知工業に四対一で負け
てインターハイに行けずという状態で終わりました。

【田原】 あの、県のインターハイ予選の時には、決勝リーグの最後

に高知工業と須崎工業が当たることになっていて、それまでの試合で、須崎工業が中村に一敗、その中村は高知工業に一敗、高知工業が全勝になつちよつて、最後の高知工対須崎工の試合で、高知工業が負けたら得点差で高知工業が一位、須崎工業が二位になるところで、まあ、全国へは二校行ける時じゃったから、もし高知工が負けても須崎工と一緒に行けるわいと思うちよつた。

私が悪かったのは、高知工業の選手が「リーグ戦の最後は須崎工業と当たりますが、どうしますか」というてきた時に、「お前らあは優勝じゃきに、須崎工業じゃたらおれもいにくいきに、気楽に行け」いうて、何も注文付けずに出したところが、たまあ気楽にいて4対1で（笑い）勝つて、力からいうたら須崎が上じゃったがねえ。

〔木下〕 新聞の予想には「インターハイの優勝候補の筆頭は須崎工業で別格」と出とつた。それが、予選落ちでインターハイへも行けざつたですからねえ。

〔田原〕 あの時、林が一点取つただけやつたらう。

〔林〕 はい、そうでした。

〔田原〕 それでは次に、中川守君が一年へ入学した時に、私が高知工業へ移つたので、それから後のことは分からんが、一応締めくくりを中川君に頼もうか……。

〔昭和四〇年以降〕

〔中川 守〕 はい、キャプテンでは、私の前が林和夫さん、その前が木下肇さんということになります。

私の時には、一つ上に林さんがいましたので、全国大会は宇佐大会

でした。あの時強かつたのは大分県の中津工業の「今地」で、優勝しました。

自分たちについては、今もよう忘れんことは、もう部員が減つておりました、私と岡村が須中から、葉山から川上君がいて、この三人が三年でした（昭和四一年）。それで、二年がいなくて、一年に須中からの、前田・市川・寺村の三人がいます、中井博重さんがコーチで来てくれて引つ張つてくれました。

丁度私たちが三年の時に、大阪での全国高校選手権がインターハイに変わりました、やっぱり私たちには全国大会の力はなかつたですが一年生の前田君がうんと頑張つてくれました、県大会で二位になってインターハイに行きました。その時は、十和田でやりました。

その時も新聞では「名門須崎工業」と書いてくれました、僕らあ補欠みたいなもんじゃが、こそばいなあ、という感じでした。

夏でしたけれども、寒かつたことを覚えています。

それから、有り難かつたのは、東西対抗のほうで、田原先生に西軍代表で出していたこと（編集者・註、田原先生が西軍の監督、宮崎県の選手が棄権してその補充に中川を起用した）。

その当時、中井幸増さんところが近所でした、中川健三さんに、東西対抗やあつちこつちの大会の優勝・準優勝のトロフィー・楯などを見せていただいて、自分もそれにあやかりたいと思つていました。

木下先輩にもいわれたことですが、私たちも、どうも、須崎工業の相撲部を強くようせずになつていった、寂しい時代じゃなかつたらうかと思ひました。

しかし練習は、やっぱり、ずうっと受け継がれてきたものを自分ら



左から中井 (60kg)、甲把 (65kg)、
岡崎 (72kg)、平均身長164cm

なりに、こう、一生懸命やっていたように記憶しています。

それからもう一つ、いつも思うことですが、須崎工業の歴代の相撲部員の体重の大きさですよねえ、今では全国的に選手が大型になりましたがねえ、例えば、全国優勝した時の岡崎・中井・甲把といった先輩たちの体重はどのくらいだったんですか？

【選手の体重の話】

〔田原〕 はい、その今出た選手たちで、平均身長が一六四センチかな、それで、岡崎(憲)の体重がまあ、七〇キログラム…。

〔中井(幸)〕 そうです、七〇キログラムをちよつと超えたくらいでした。

〔田原〕 あの当時、一番大きかったのが岡崎で、七二・三キログラムじゃつた。それから甲把が六五キログラムはあじやつたかなあ…。

〔中井(幸)〕 そんなもんでしたねえ、それで私が六〇キログラムちよつとばあでしたから、平均で六七から六八キログラム、七〇はなかったです。

〔田原〕 毎日

新聞の全国大会の予想記事で、やっぱり優勝候補の筆頭は須崎工業であるが、それに全幅の信頼を置き難いのは、いずれも小兵だ。というよ

うに書いてあつたねえ。

まあ、平均身長・体重でいうたら全国的にも下のほうじゃつたろう…。高山らあの時もあんまり太うはなかったらう。

〔高山〕 はい、僕が七〇キログラムばあでしたねえ。

〔田原〕 長山は七〇キログラムあつたかね。

〔高山〕 ええ、長山はもつと目方はありました。

〔中山(守)〕 健三さんほどればありましたか？

〔中川(健)〕 えーと、太い時で一〇〇キログラムちよつとばあじゃつたらう。

〔中川(浄)〕 いやー、高校時代は、それほどはなかったらう、九〇

キログラムあつたかなかつたばあじやないかえ…。

〔田原〕 そうねえ、三けたにはなつてなかつたらう。一〇〇キログラムは大學へ行つてからのことじやらう…。

(編集者・註) 体重の話がしばらく続き、大きいほうでは中川健三

さんの九〇キログラム弱、そのほか竹下・岡崎・木下さんあたりが八〇キログラム前後と、いずれにしても全国的には小さいほうだったということになりました。

〔中川(守)〕 けんど、あの須崎での選手権の時(三八年・須崎大会・

須工優勝)僕はまだ中学三年で、名前張りをしていましたけど、木下さん・林さんの時でしょう、細かつたですよ…。

それから周りは太かつた。その時、うんと思いましたねえ、あの、大相撲へ行った輪島とかねえ。

〔林〕 あの時は須工が練習会場になっていましたねえ、輪島も来て、

僕らあも一緒に土俵で「しこ」を踏みよったがねえ、あの輪島なんてのはほら、またからむこうが見えよった(笑い)。

あれがいっしょじゃ、同級じゃいうて(笑い)、そんながとやらなあいかんろうかと思うて、びつくりしたことよ(笑い)。

けんど、強かったねえ輪島は…。

〔田原〕 たいていの相手は一発で持っていきよったもん。

〔林〕 何か違っていたです、やることがねえ、化け物じゃあないかと思つたですよ。

〔田原〕 あの時は林が最高の相撲を取つたなあ。

〔二同〕 そうでしたねえ。

〔林〕 あのと僕が、一六〇^セ、六〇^キでしたよ。今はこの学校にもそんなのはおらん。それでもあのころは、木下さんも僕らあも、よう練習はしりましたねえ。

【練習の話】

〔田原〕 稽古といえは、健三は稽古が好きじゃつたが、市川の等が嫌いであ、胸を貸したら「先生、はようこかしてください」いうて(笑)、ねばられたらしんどいもんじゃきに…。

〔高山〕 健三の場合もそうやったがその前の三人(岡崎・中井・甲把)が、あれだけ強かつたということは、やつぱり稽古をしたわねえ…。幸増に五回稽古を付けたら、岡崎が六回する、そうしたら甲把がまた計算したようにそれ以上やる、それぞれが一回でもよけいに稽古をしようとしたねえ。

そのころ僕は大学やったきに皆よりは強い、夏の合宿に戻つてきて



岡崎の「つきたおし」、中井(幸)の「つりだし」、甲把の「つきはなし」、大会初の快記録を樹立した金沢大会の一瞬

皆と一緒に稽古をしたが、申し合わせでもやったら、もう一丁、もう一丁と、はてしがない。とにかく僕が負けるまではやめようとせざつたきねえ、こつちが負けて「よし」いうたら、そんならいうて、やつとやめてくれよつたもんねえ。

そういう調子で、三人が競争のごとく、一回でも多く練習しようという意気込みがあつたねえ。

〔森田〕 よう投げられよつたですなえ、浦の内の合宿の時、僕はまだ中学生でしたけど、毎日見に行きよつたですよ。

〔木下〕 僕らあの時は、台(稽古台)がこじやんといましてねえ、夏の合宿いうたら、憲史さん・健三さん・竹下さん・博重さんと、台のほうは疲れんうち



浦の内での合宿（須崎市南中学校にて）

に代わって、もうこっちはもたなあねえ（笑い）。

【田原】 木下は稽古が好き（？）でなあ…（笑い）。

もうやめたいうて、逃げて帰ったことやった（笑い）。

【中井（幸）】 浦の内では…（笑い）。

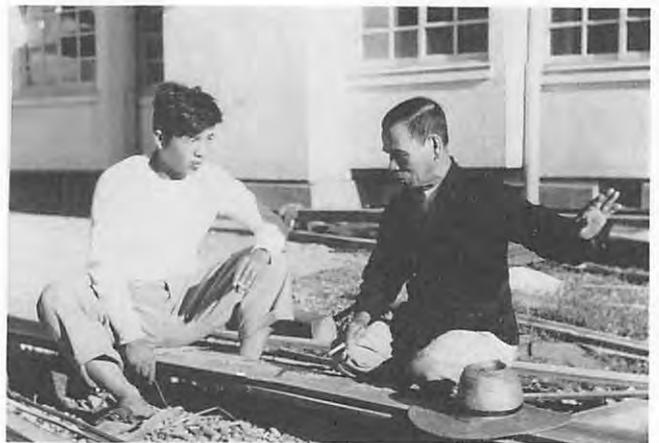
【田原】 浦の内の合宿では、高山がどっさり長太郎貝を取ってきて、よっ

しや食えいうて、その貝殻をおいちゃあつたら、明るる日中学校の校長さんがきて「先生、あああ、どこで取ってきたがぞ」「こうこうして…」いうたら「あああ、養殖で飼、ゆうがじゃ」（笑）「はよう穴を掘っていけてくれ」いわれた（笑い）。

【中井（幸）】 「石室みたいに盛ってあって、それを潜って…、バケツに一杯…（笑）。

【土俵と風呂の話】

【木下】 先生、相撲の話じゃないですが、向こうの（札の元校舎）



昭和29年台風15号により土俵全壊再建を急ぐ「大工と問答」の田原先生

僕らあのやった土俵はいつごろできたのですか？

【林】 そうそう、それからあの風呂、汚い木の風呂は…？

【高山】 あれは、僕らあの時にできた。それで、あの風呂は、かなり長いこともっちゅうろう。

【岡林】 その話はねえ、ちょうど相撲部ができて、それで、

【林】 そんなに古いのですか…。

陰の力としてやってくれた秋山マネージャーがねえ、そここのところは。

【田原】 その、土俵のほうは高山が二年…、三年の時か、たしか二九年じゃったろうか、試合で高知へ行った時、丁度台風に遭うて、あの台風が例の洞爺丸が沈んだ時の台風よ、その台風の時高知で泊まって、次の日に試合をして帰ってきたら、柱が四本ともねじ切れてなくなっちゃって、それで造ったがじゃ。

【林】 僕が一年の時、一年じゃから飯を食って風呂に入るのは最後で一人だけでしょう、そしたら、先輩が入った後はもうお湯は少ないし、汚れてきたないし、周囲はもう真っ暗いしねえ…。

【先置連中】 だれもそらあ一緒よ…(笑い)。

【林】 そしたら、あのころ阿曾のおじさんいうて、おんちゃんがおつたでしょう。

【一同】 そう、おつたねえ。

【林】 その阿曾のおんちゃんが来てくれて「おう、まだ入りゆうか、沸かしちゃろう」いうて、火をたいてくねえ、あのおんちゃんのこととは、よう印象に残ってます。

【秋山】 私は丁度、岡林の幸ちゃん・藤原・高山の時代に、マネージャーをやらせてもらっていましたが、その風呂のことを少しお話ししますと、丁度後援会ができて間もなくのころ、その後援会の田川さんという方が、「おい、どこやらで風呂を調達できちゆうきに、それを寄贈するきにやあ」いうて私のところへきてくださいます、池の内のほうへ行って、風呂をもらってきました。

その風呂へ第一号に入ったのがこのOB会の岡林会長でした。

幸ちゃんは、その当時、佐川の黒岩というところから通っていましたが、今でこそJRになって、列車も多いですが、そのころは、一つ乗り遅れると、次は何時間も列車がなくて、しかも、次の列車になると、佐川駅からの連絡バスがないので、家まで帰れなくなるということで、とにかくその列車に乗らないかと、気もそぞろでして、それで、「おい、秋山、はよう沸かせや」「そんなら幸ちゃん、はように入つて座りより」いうて(笑い)、まだよう沸いてない風呂へ入ってふたをしめたわけです。

ふたをしめんと沸きませんからねえ(笑い)。それから、「幸ちゃん、もう沸いたろう」というような調子でした。そうやって、あの風呂が

できたわけです。

【林】 最初からぼろかったですか？

【秋山】 いいえ、それはもう檜のまつさらでしたよ。

それで、初めは木がはしゃいじよって、水が漏りまして、空だきをせられんというので、水をどんどん入れて、漏らんようになってから火を入れたということでした。

まあ、僕は、この輝かしい一〇年余りの、田原先生をはじめとする当時の相撲部の皆さんとこうしてお話を聞いていまして、皆さんのこの熱い気持ちを感じています。勝ったうれしさや、負けた悔しさを感じるのですが、実際には試合にでなくても、心では試合に参加した気持ちでした。これからの須崎工業相撲部が、また活躍してくれることを祈っている一人なんです。

【優勝パレードの話】

【森岡】 それはそうと、全国優勝の時には提灯行列をやりましたねえ、あれは中井(幸)君たちの時でしたかねえ。

【中井(幸)】 はい。

【岡林】 そう、旗行列もやりましたよ。高山君たちのときは旗行列でした。

【森岡】 ああそうでしたか、それじゃあ二回やったのですか。

【高山】 あのころは、行列もオープンカーがなかったので、消防車に乗せてもらいました。

あの時は、須崎駅から出発して、市内行進をして、一度学校へ帰って一休みして、夜になって提灯行列をやりましたねえ。



「オープンカーがなかったので消防車に乗せてもらいました」

【中井(幸)】

僕らあの時は、
一・二・三位と
も高知県が取っ
たもんじゃか
ら、それで、一
度高知で降りて
くれといわれま
してねえ、それ
で、その当時の、
先代の森岡校長
先生が高松まで
迎えに来てくれ
てまして、私の
座席の横へ座つ

て、「君はキャブテンであいさつをすることになってるが、ちゃんと
いえるかね」「私がちよつと原稿を書いてきたから、高知までに読ん
で覚えて、高知ではこれをいいなさい」というて原稿をもらいました。
【高山】 そうか、優勝したら校長先生は高松まで行つたか、おれら
あ、準優勝じゃつたから、佐川からしか乗ってきてくれざつたぞ(笑)。
けんど、ちゃんと同じように原稿を書いてきてくれちよつた。須崎の
駅前、皆が迎えに来てくれちよつたに、これを読んであいさつをせ
えいうて、原稿をくれた。

けんど、頭が悪いところへ覚えなにかんし、佐川から：えーともう



須崎駅前での高山さんの挨拶

斗賀野辺りへ来
ちよつたらう、それ
で、それを覚えるの
に便所へ入つて(列
車)のきつちり覚え
た(笑い)。

【中井(幸)】 僕ら

あは高知で一廻やり
ましたからねえ。

【田原】 そうそう。

【中井(幸)】 それ

から須崎へ帰つて、
駅前であいさつ
して、夜は提灯行列
でした。

【森岡】 なかなか大勢の方が参加してくれましたねえ、随分長い行
列でしたよ。あの当時は田原先生をはじめ相撲部の皆さんが、須崎の
町の皆さんに絶大な人気を持っていましたからねえ。

【田原】 あの時は須崎の町中が沸いたねえ…。

【森岡】 そうでしたねえ。

【むすび】

【田原】 そうしたら、時間も予定を大分過ぎましたので、最後に現
監督の岡崎(明)君から現状報告と併せて今後の抱負を語ってもらいま



高知県が1・2・3位を独占した32年度全国選手権、高知県主催の歓迎会に臨む優勝の須工中井(幸)さんが代表でありさつした。前列右端が安岡教育長、三人目が溝渕知事

しよう。

〔岡崎 明〕

はい、あのう、監督というても部員がもう三年生で、卒業しますと後がおりません。

先ほどから先輩のお話を聞いていまして、まあ、すごい歴史をつくってこられて、自分もこの学校の卒業

だから、その三人とも中学校での相撲の経験は全くない状態から段々と成長していったわけです。

それから後は、やはり中学校の先生とのコミュニケーションをよくすることでした。例えば、仁井田中学校の先生などは、相撲に関して、うちが須工の附属中学校やからと、いつも言ってくれていて、それで岡崎などは、市商へ行って野球をしたいといいたのを須工によこしてくれたりしたことでした。

そういった中学校の先生との意思の疎通が、まずは大変大切だと思いますねえ。

それから、中学校の大会を須崎工業でやっています、これもやっぱり中学生の須工の土俵に親しんでもらえるというわけでよかったです。思います。

この中学の大会の運営費も、金がなかったですがプログラムの広告を皆で町を回って、あの時で一軒五〇〇円くらいじゃったと思います。それを、四〇軒も五〇軒もとってきて、それで旅費などをつくっていました。学校からは一銭も出ませんから、選手の手づくりで大会をやっていたわけです。

どうかこれからも色々工夫をして、頑張ってください。

それでは、皆さん、本当に長時間有り難う。

以上で、初めての試みでしたが、相撲部歴代のキャプテンによる須崎工業創立五〇周年記念の座談会を終わりたいと思います。

須崎工業もますます発展されることを祈っています。

(拍手・散会)

ですけれども、それに一歩でも近付けるように、これからもまた精進して、先輩方のお力をお借りしながら頑張っていきたいと思えますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

〔田原〕 なかなか、今の状態の中で相撲部の再建ということは大変

じゃないと思いますけれども、初めにもいいましたように、最初のころは中学生が、どうせ相撲で工業に行くなら高知工業へというようなことで、選手集めに苦労したことでした。それで、一年生の最初の体育の時間に、一〇〇回を走らせて、それで、身体が中以上で足の速いのを集めたのが、長山とか山崎とか長あたりでした。

化学工業科のできた頃

元化学工業科教諭 田所靖通

私は、昭和三〇年から同六一年までの三一年間、須崎工業高校に勤務し、当初は理科を担当していましたが、昭和三四年に化学工業科の増設に伴い、その方の担当になり、以後定年まで勤めさせていただきました。

須崎工業は、多くの皆さんが既にご承知のように、寺尾豊先生の多額の浄財をきっかけに、昭和一六年四月に、機械科一・二種の単科工業学校として創立されたのですが、機械科だけではということもあつてのことでしょう。昭和一九年には全国的にも少ない造船科が増設されました。

第二時大戦の終結後、日本はこれまでに味わつたことのない混乱と苦難の時代となりましたが、昭和二〇年代半ば過ぎには、早くも工業界には復興のきざしがみえはじめ、本校にも昭和二七年に「電気通信科」という電気系の学科が増設になりました（この電気通信科が、後の昭和三八年に「電気科」となつて現在に至つてゐる）。

三〇年代に入り、高校進学希望者は急激な増加の傾向を示ははじめ、特に工業界の本格的な活動に合わせるように、工業高校への進学希望者が集中するようになってきました。丁度、中学卒業者が「金の卵」といわれて、各地方から都会の企業に続々と就職していった頃のことです（就職して行く中学卒業生の団体を乗せた列車を「就職列車」と呼ぶほどだった）。

こうした時代を背景として、本校でもさらに学科増設の動きが始まり、それでは「何科をつくるか」で、化学・土木・建築・情報等の科が検討されました。

当時の第五代校長であつた森岡貞篤先生の構想の中には、工業の基本として、機械・電気・化学の三本柱という考えがあつたと思ひます。それやこれやで、結局化学系学科にすることになつたのが、昭和三年のことでした。

そして次は、科の名称をどうするかということでした。

その頃の工業界では、自動化・オートメ化ということが盛んに論ぜられるようになっていまして、化学系でも石油コンビナートを代表とするプロセス工業が花を開き、基礎化学の分野と装置化学工業の分野で異なつた歩みを始めた時代であります。

本校の新化学科は、基礎分野はもちろんですが、そうした時代の変遷にも対応できるようにと、科名を「化学工業科」と定めたのです。

工業に関する学科の新設にあつては、普通科のように単に「一学級増やします」というだけでは何にもなりません。そこには教室だけでなく、実習室や実験実習設備も伴ってきます。新科を設置するにあつては、そうした施設・設備の準備がより大変な仕事なのです。

その準備に際しては、先輩校である高知工業化学科に、随分お世話になりましたし、また、大阪市立都島工業高校や滋賀県立瀬田工業高校などの先進校には、色々の面で多くのご指導を賜つたことでした。

こうして、昭和三四年二月の県議会において、本校への化学工業科設置の認可が決まり三月には第一回生の募集・入試を行い、四月に同

第一回生が入学して、いよいよ本校化学工業科がスタートしたのであります。そして同科の設置によって、本校も機械・電気・化学という三つの基本学科の揃った総合工業高校になったといえます。

ところが、今では考えられないことですが、本校の創立当時と同様に、生徒を迎え入れたものの、HRとしての教室もなければ、実習・実験室もなし、まして実習設備もまだというありさまで、やむなく図書室を教室にし、実験実習はもちろんできないので、必然的に専門科日はすべて講義ということにならざるを得ませんでした。

急増する生徒をとにかくにも収容することが先決ということだったのでしよう。

しかし、このことが逆に生徒を理論的に鍛える結果となり、卒業後の活躍、発展へとつながったのではないかと思います。

増設後二年間でようやく教室や実習室も建築され、本格的にカリキュラムに添った授業や実験・実習が行えるようになりました。

化学科の実習室は、他の学科にくらべると電気・ガス・水道・排水処理と多くの設備が必要です。特にガスについては高知市内であれば都市ガスの引き込みも出来ませんが須崎ではそれもなく、プロパンはまだまだ普及していない頃ですから、ガソリンを気化させてガス化させる「エアガス装置」も取り付けられました。この装置で使用するガソリンは特殊なものが必要で、市内の平田石油さんにお世話になりました。

昭和三十六年四月には、高知工業高校工業化学科の科長を勤めておられた、小松一夫先生が第七代校長として本校に赴任されました。

小松先生は、高知工業高校工業化学科に長年ご勤務になられ、高知

県内はもとより、県外の多くの企業とのつながりもおありの先生でしたので、丁度第一回生が三年生になり、就職の時期を迎えるという大切な時期に先生をお迎えできたことは、百万の味方を得た思いでした。

そのお陰をもって、第一回生の就職は順調に進み、県内外の名の知れた企業に進路を決定してゆき、まずは順調な滑り出しとなったわけです。

振り返ってみますと、昭和四〇年代の前半までは工業高校の全盛期だったと思います。その後、高校への進学率は益々上昇し、また高学歴志向の風潮もでて普通高校優先の時代になってきたのですが、現在の日本の豊かさをつくり上げたのは、他ならぬ日本の工業界であり、その基盤を支えてきたのは何と云っても工業高校の卒業生であります。

資源の少ない日本の国が、これまで同様の豊かさを維持し、更に発展を続け、急変する世界情勢のなかで日本の国の果たすべき役割の大きさが論じられている現在、工業高校の存在価値は益々再認識されるであります。

本校化学工業科の設置は、すでに三十数年前のことになりました。

その間本校は、相撲部の全国優勝、機工部製作の船用機関の全国第一位など、また放課後は生徒と一緒にのホームマッチと、数多くの思い出がありますが、今回は化学工業科設置当時のことを思い出すままにいたしました。

須崎工業高校の今後益々の発展を祈っています。

移転新築への胎動

移転新築期成同盟会
副会長 長

古谷 義 計

県立須崎工業高等学校創立三〇周年に際し記念誌を發刊せられますことは誠に意義深いことと存じ衷心より賛意を表する次第でございます。

私は昭和三十九年五月より昭和四二年五月までの三ヶ年間PTA会長として、また現在工事が進められて居ります学校移転新築期成同盟会の初代会長として用地買収や県当局との交渉等に当たつて参りましたのでこの機会に当時の記憶をたどりまして移転新築に関する経過の一端をご報告を申し上げたいと存じます。

昭和三十九年一〇月のPTA役員会で当時の西本校長先生より学校の実状についてご報告あり、同時に将来の我国の工業界に役立てる技術教育のためにはどうしても学校の整備拡充が必要である旨力説せられました。以来何度か会合して研究を重ねた次第でございます。その結果第一案として現在の校地を西側へ三千坪程度拡張して鉄筋四階建の校舎と各科の実習設備を充実する方法について検討致したのでございます。

丁度その少し以前、西側の隣接地を国道（五十六号線）が開通したため地価の値上りが甚だしく拡張用地の買収が困難となり第一案は実現不可能となりました。そこで抜本的に計画を変更することとなり市当局及び議会のご協力を得て移転新築について運動をおこそうということになりました。これが実現のために市長、議会、教育関係者及び各層の有志の方々のご参集をいただきまして移転新築期成同盟会を結

成致したのでございます。会長にはPTAとの関連もあり、私が兼ることになった次第であります。

当工業高校は参議院議員寺尾豊先生のご寄附によって創立せられたものでございますので、移転新築について寺尾先生のご了解を得、更にご援助をいただくため昭和四〇年一〇月末、西本校長先生と共に上京しまして、寺尾先生に事情ご説明申し上げご了解をいただきました。

以上の手順を経たうえで県及び教委に対し陳情を重ねた次第でございます。そうして漸く期成会の手で運動場用地を買収することを許可いただきました。昭和四一年二月頃のことでございます。早速候補地（角谷）について地主との交渉を始めたのでございますが、何分にも広大な用地を必要と致しますので関係者は数十人に及び用地買収の交渉は困難を極めました。その間、西本校長先生は小津高校にご転任になり後任として現校長沢本先生をお迎え致しまして気分を一新して交渉にのぞんだのでございますが、結局角谷地区は不成功に終わりました。続いて須崎市に至るところ候補地を物色し検討致しました結果、幾多の困難と紆余曲折を経て大間西方地区の用地買収交渉が成立致したのでございます。

これが昭和四二年四月で、これを機会に私は会長をひいて副会長となり、新会長には須崎市長天野剛利氏が就任され現在に至っております。高台の新校地、あの風光明媚の地に立派な校舎の新築を見るに至りまして誠に感無量でございます。長い間この問題と取組んでこられた沢本校長先生を始め関係の方々に敬意を表し、学校の益々の発展をお祈り申し上げる次第でございます。

新校地への陣痛

校長 澤本 豊

昭和三九年四月八代目の校長として着任した西本澄雄氏は本校の校地があまりにも狭く、これでは工業教育の現代化に即応する施設や設備をととのえることは到底不可能であるという見解のもとに少なくとも一万五千坪（約五万㎡）程度の校地を求めて移転しようと決意された。

翌年一〇月寺尾豊氏を名譽会長、当時の須崎市長上田辻益氏はじめ周辺の町村長を顧問、古谷義計氏を会長、又川瀨氏、矢野亀雄氏（本校第一回卒業生で同窓会副会長）と学校長を副会長、須崎市在住の識者、有志で本校にご厚意をよせていただいております方々を理事とする「高知県立須崎工業高等学校校移転新築期成同盟会」（以下期成会と略称する）を結成した。

この事業は教育に理解があり、本校にご厚意をよせていただいております多くの人々の善意と援助とによって成就したものであり、これらの方々に限らない感謝の念を捧げるものである。特に本文中にお名前の方々には東奔西走わがことのようにご尽力いただいたので皆様の理解を深めるために前もって簡単に紹介しておくことにする。

上 田 辻 益氏

初代須崎市長、期成発足当時推進役としてご尽力いただいた。

天野 剛 利氏

二代目及び現須崎市長、四二年四月より本会の会長として大変ご尽力いただき、特に対県交渉において独特の政治力を發揮され、困難な諸問題を次ぎ次ぎ有利に解決していただいた。

古 谷 義 計氏

元本校PTA会長、発足当時の期成会会長としてその基礎を確立され、とくに用地さがしには東奔西走多大のご尽力をいただいた。

平 田 寛氏

元須崎町長、須崎高校振興会長、対県交渉において力強いご指導やご援助をいただいた。

川 村 為三郎氏

元PTA会長、対県交渉や地主との困難な折衝、更に土地造成工事の会計として重要な役割をお願いした。

中 田 稔氏

元PTA会長、対地主交渉に独特の説得力でご尽力いただいた。

井 上 繁 馬氏

用地探しや対地主交渉にご尽力いただいた。

梅 原 里 吉氏

最終的に決定した大間地区地主との交渉に絶大なご支援をいただいた。

明 神 高 志氏

梅原氏と同様、最終決定地の地主及び不成功には終わったが多ノ郷地区の地主との交渉に絶大なご援助をいただいた。

元県議会議員

藤原 登氏

P T A支部長、のち同会長、関西土木須崎営業所長、地主との交渉、校地造成の設計、施工など多大のご支援をいただいた。

又 川 瀬氏

元P T A会長、本会発足当時の副会長、現常任理事、用地の探索をはじめ対県、対地主交渉に奔走され、新校地造成の大きな推進役を果された。

広 瀬 一 喜氏

土地売買仲介業、新校地の用地買収に当り地主との交渉に奔走され、短期間に妥結に導いた。

結成後直ちに対県交渉に入ったのであるが、先づ本校は運動場が狭いので少なくとも一万五千坪位の運動場を造成するというのを正面に押しだして交渉した。これは賢明な作戦であった。というのは当時県の教育委員会では須崎工業高校は現在地で改築するという方針をたてており現に昭和三八年から三年間の継続事業で機械科、造船科、電気科の実験実習棟（鉄筋コンクリート二階建、延一、一六〇㎡）を建築中であつたので移転だとか、新築だとかの話をもつていつては一顧だにされなかつたことであらう。

こうして対県交渉をすすめる傍ら角谷地区を候補地として地主との交渉に入った。計画の概要は用地代一、〇〇〇万円（同地区は水田としての価値が乏しいので反当りⅡ約一、〇〇〇㎡当りⅡ二〇万円、五町歩で一、〇〇〇万円）埋立工事一、〇〇〇万円（当時建設中であつ

た国道五六号線のトンネル工事から出る廃土を利用して格安に仕上げるとして）合計二千万円ということであつた。二千万円で一万五千坪が出来れば坪単価一、四〇〇円足らず、当時としても格安であつた。これが昭和四一年頭初のことである。この話が県、地元ともに十分実らないうちに西本校長は同年四月の異動で小津高等学校長に転補され、後任として私が着任しこの仕事を引継ぐことになった。

五月上旬期成会の役員会（出席者、古谷会長、上田市長、橋田須崎助役、武内教育委員会、又川氏、井上氏、川村氏、中田氏、田川氏、私、河内教頭、斉藤事務長、浜田教諭）を開き既定方針Ⅱ運動場造成↓移転Ⅱを再確認した。

席上古谷会長より角谷地区の地主のうちに反対意見の強いものがあり前途樂觀を許さない旨の発言があつたが話し合の結果、角谷地区には関係の深い古谷会長になお粘り強く交渉していただくことにし、角谷地区不調の場合の代替地についても逐次検討しておこうということにして散会した。結果的には、代替地の一つが最終的に移転地となり現在校舎が建築されつつあるが、当時は一応検討してみようという位の軽い気持であつた。

以後、六月から翌年三月までの間、ある時は灼けつくような炎天下に、またある時は冷たい秋雨の中を山に登り、谷間を抜渉して黙々として現地を調査していただいたり、寒夜おそくまで地主との交渉にご尽力いただいた古谷会長をはじめ又川氏、川村氏、平田氏、中田氏、井上氏、明神氏達のご厚意に対しては、ただただ感謝と感激があるのみである。

こうするうちにも古谷会長の対角谷交渉はつづけられたが地主との

話し合は進展せず、七月上旬に至って遂に角谷地区は断念して候補地から外すことになった。もつとも角谷地区については運動場専用としてなら問題ないが移転を考えた場合、あまりにも海に近く潮風の関係もあつて工業高校の敷地としては好ましくないという意見も少なくはなかつた。

そこで代替地候補の三ヶ所について造成可能面積、土地代金と工事費を含めた総事業費などを試算することになり藤原氏に依頼した。その結果一方は一万坪、五千万円、他方は一万二千坪、六千万円という結果がでた。これはもとよりあら算用であり若干の動きの生ずることは考えられるが角谷地区の一萬五千坪、二千万円に比べると可成りの高値となる。然し当然の事情からみておおよそ妥当な線であつたと思われる。

こうした土地調査を行なう傍ら対県交渉は中断することなく行なわれた。

土地調査のため度々開かれた役員会において運動場作りを移転新築の隠蓑にする作戦をすてて移転新築を正面に押し出すべきだという意見が次第に強くなり、七月以降そのように改めて、交渉することにした。その理由としては、

一、会の名称が「高知県立須崎工業高等学校移転新築期成……」であり県当局も当方の肚は見抜いていること。

二、県は現在地で改築するというが、現在地で改築するとすると産業教育振興法に基づく基準の六割に押えるとしても校舎の多くは鉄筋コンクリート四階〜五階建にしないとおさまらないが、それが可能な建築用地は二、〇〇〇坪そこそこである。そのうえ機械科、

造船科、化学工業科の実験実習場の中には平屋建てなければならぬものがあり、その建築用地は一、〇〇〇坪に近い。更に屋内体育館やプール用地を考えると運動場は今よりも狭いものになってしまう。

三、移転すれば現在の校地を売却することができる。坪二万五千円(當時)としても一億五千万円の財源となり新らしく校地を作つても一億円の余裕がでる。

などであつた。このような方針のもとに古谷会長、平田氏、又川氏、川村氏達にご同行を願い、時には河内教頭と二人で、何度となく委員会を訪れ、またある時は知事を公邸や知事室に訪れて直訴に及んだことも一再ではなかつた。

こうした努力を重ねておるうちに県の教育委員会においても地元の熱意と移転の必要性や可能性を認識し、期成会が現在地を坪三万円以上、総額一億八千万円以上で責任をもって売却するならば移転も考えられるという意向を示すようになった。然し経費の総額については明確な線を打ちださず、時には四、八〇〇万円、またある時は四、〇〇〇万円という具合であつた。これには随分悩まされたが委員会としては無理のない点もあつたようで、本校の移転が年度初めから決定していたわけではなく、許される起債の枠内で他の県立高校からも要求されておる用地の取得を考へる場合、須崎工業高校にいくらあてることができるかというところは容易に決定できなかったことと思われる。

ともあれ現在地を売却することによって財源ができるから一万二千坪位の用地を作つて移転することしよう。ただし校地造成の総額は四、八〇〇万を越えることはできないぞ。という大きな方針が決定し

た。これが昭和四一年一月末頃のことである。

他方移転候補地については、その一（多の郷和佐田地区Ⅱ移転先）は東西にある小山とそれに挟まれた深い谷間からできていて、七月頃考えた方法は東側の小山の谷側の大部分と西側の山の谷側の一部を削りとして谷を埋め九、〇〇〇坪位の土地を作るという案で用地に一千万円、工事費四千万円というあら見積りであった。

この案に対し県では造成面積の割合に経費の多いこと、東西に山が残って盆地の形になること、などの理由で難色を示した。もともとその当時委員会は移転という線は決定しておらず、むしろ反対の意向だったので何かと口実を設けたのはむしろ当然であったかも知れない。

その一と殆ど平行して検討を加えてきたその二（岩永地区）は一と似かよった地形であるが、ただ異なる点は谷が一とは反対に南に開口しており、谷は遙に浅くて広い。従って土地代は高くなるが工事費は少なくてすむ。

造成面積一万二千坪、買収用地一万三千坪として用地代金三千五百万円（水田相当八〇万円、畑同三〇万円、山林同二〇万円）、造成費二千五百万円、合計六千万円というあら見積りである。経費の点で問題はあがあるが、いよいよとなれば面積を減らしてもよい、とにかく調べてみようということになり人を介して地主と交渉に入った。四〇名余の地主のうち三〇名近くは同意を示したが残りの一部は態度保留、一部の地主の中で蜜柑の木一本につき二万円の補償を要求する人、水田については予定価格より遙に高い価格を希望する人などあり、これらの要求をすべて呑むとなると総額で七千万円近くなる。そのうえ予定

区域内に墓地が多く墓石が二百柱程あってこの移転先、及びその経費をすべて引受けるとなると経費は更に嵩むことになる。このような事情のためにこの地区もまた断念せざるを得なくなった。

一、二と殆ど同時期に第三の安和地区も候補の対象となったが須崎市を中心からあまり離れすぎること、台風時に通学路が波に洗われること、角谷地区と同様潮風の影響が心配なこと、などのため一応候補地から外すことにした。

このようにして候補にのぼった土地がつきつぎ不調に終り役員の間にも漸く失望と焦りの色が見えはじめた一〇月末頃、関西土木KKの笹岡氏（当時専務・現副社長、かつて本校で学ばれた）から、国鉄多ノ郷駅南方の水田地帯を検討してみてもどうか、反当り四〇万円、高くて六〇万円位で買える筈だが……との提案あり、早速調べてみたところ水田としての価値は低く反当り五、六〇万円位で買える見込みである。第一の土地に比べるともとより地価は高いが山地と異なり造成費が格安となる。そのうえ山地での造成地は形が不整形となつて土地の利用率が低くなるが平地ではこれを整形にすることができるので殆ど全面積を利用できるなど利点が多い。とりあえず地質を調査することになり藤原氏のご厚意で専門の業者に依頼した。これが一月中旬のことである。明けて昭和四二年一月上旬、『地質良好』との結果がでたのでここを候補地として申請した。

前述したように教育委員会の肚は決定していたが知事部局との事務的処理に時日を要し最終的に知事の決裁が下つたのは三月に入ってからであった。

委員会は三月一五日までに土地購入の契約をし年度内に着工して遅

くとも五月中には工事の目鼻をつけて欲しいという要望である。ことは急を要す。県から最終的な認可が下るまで、期成会としてはあまり具体的な話しもできず、それとなく地主の意向を探る程度であったが、今やそんな悠長なこととはしておれない。三月七日役員会（出席者、古谷会長、平田氏、中田氏、又川氏、井上氏）を開き協議の結果三月一日土崎の公民館で地主との話し合を行なうことになり直ちにその手筈をととのえた。三月八日には楠瀬技監、吉村事務官の二人が現地視察に来訪し月末までの細い計画表を示したうえ天野市長や竹林助役に面談して援助を懇請して辞去するなど委員会の動きも俄に活発になった。

私はその夜、明神氏に電話で事情を話して援助をお願いし快諾を得た。

三月一〇日の地主との会合の様様

一、日時場所 三月一〇日午後一時〜同五時土崎公民館

一、出席者

（県教委）落合課長補佐、谷内、吉村両事務官。

（期成会及び学校）古谷会長、平田氏、又川氏、井上氏、沢本、河

内、浜田。

世話人 明神氏、松浦氏（地元市議員）外二人。

地主 一一一名（三〇余名中）。

一、経過の概要

落合氏及び沢本より工業高校移転の必要性を詳しく説明、更に平田氏より長期的視野における地元にもたらす利益などを説き協力を懇請し、買い取り条件として若干の格差を設け、反当五〇万〜六〇

万円、登記面積でなく実測面積によるなど提示した。地主側より代替地の斡旋をして欲しいとか税金の肩替りをして欲しいとか二、三の条件が出されたが出席者の大半は協力的であった。然しこの話しは一人の反対者があっても成り立たないことであり、地主の出席者があまりにも少ないことなどより前途多難を思わせた。

地元出身市議員四人が手分けして各地区の地主を説得して回ることにして当日はさしたる成果もなく散会した。

中一日において三月一二日、日曜日であるが、明一三日からは入学者選抜の学力検査が始まり、三、四日の間は動くことができないので曜日のことなどはいっておられない。もう一度地主との話し合を行なうことにした。出席者、県教委より前回と同じ三氏、期成会より古谷会長、中田氏、沢本、斉藤、浜田、地主側は前回より更に少ない七名にすぎなかった。もつとも中には数人の地主の委任を受けてきた人もあったので実質はもつと多人数ということになる。

地主側は単価の引き上げ（反当六〇万円を八〇〜九〇万円に）と税金の肩替りを要求してゆずらず。県教委の三氏は協議の結果六六万円の線を出したが地主は納得しない。中田氏の長時間に亘る熱心な説得も遂に奏功せず。暗澹とした思いで夜一〇時すぎ散会した。

明神氏の要請で三月一四日夕刻世話人との会合をもつことになった。出席者（期成会及び学校）古谷会長、又川氏、沢本、河内、斉藤。（世話人）明神氏、武田、橋田両市議外一人。

明神氏より今夜もう一度地主を集める予定にしていたがどうも見込がないので中止した旨が述べられ、今回の交渉が不調に終わったことに対する遺憾の意を表わす発言あり、更に今一度岩永地区を当ってみて

はどうか、地主達の態度も大分變つておるようだ……との提案がなされた。

これに対し私は今回のご厚意に深く謝意を述べると共に県教委との約束の期日も明日に迫つておることではあり、岩永地区については明年度のことにしたいと答え、一同言葉少なうちに散会した。

三月一七日、今日は午後学校では学年末成績会議の開かれる予定であるが、私はあとを河内教頭に託し、古谷会長、又川氏、川村氏にご同行願つて、用地購入が不調に終つた経緯の説明と今後の対策打合せのため渡辺総務課長を委員会に訪れた。

渡辺課長（現・企業局次長）はこの問題に対する教育委員会の立役者で私共は過去一年近い間課長に無理を頼みつづけてきた。課長も期成会の考え方を理解され、知事部局の反対を押し切つて移転新築の方針を固めてくださったのである。そうして予算の獲得や、造成工事中続出した困難な問題、あるいは竣工した校地の買い上げなどに好意的な尽力をしてくださった方である。

私達三人は用地の購入が不成功に終つた経過を詳しく説明した。一部始終を聞き終つた課長は大いに困惑の体で、

大間（一）でもよい、安和（三）でもよい、今一度當つて検討してくれ、これ程さがしあぐねたことだから外に適地があるとも思われない。折角獲得した予算だ。第一この機会をのがしては須工の移転は当分見込はない。是非今一度當つてみて欲しいと声を励ませた。

私達は相談のうえ一度は候補地から外した土地だがほかにない以上安和を当る外はない。とにかく地主に会おうということになり地主の

家へ向つた。この人は高知市内で商業を営んでおるが古谷会長とは旧知の間柄である。古谷氏から事情を割つて頼めば応じていただけである。万一不調の場合は今一度大間について検討し直そう。私達は途中こんな会話を交しながら地主の家に着いた。然し、面談の結果は我々の考への余りにも甘かつた不手際に終つた。反当二百万円ではなくては手離せないという答である。私共は非礼を詫びて直ちに帰校することにしたが、残るは愈々大間を検討し直おすという極めて可能性に乏しい希望のみである。大間となればその地に詳しく前回にも検討していただいた藤原氏を加えなければならぬ。同氏に來校して待機しておつていただくよう学校へ連絡しておいて直ちに車を走らせた。

四時すぎ帰校、学校ではまだ職員会議中である。誠に申訳ないが出席できない。事情を河内教頭まで伝えておいて待つていくくださった藤原氏を中心に構想を新にして検討を加えた。前回は経費を押えるため東側の山の一部を残すことにしたため校地全体が盆地の形になつたが、思いきつてこの山を高さ四〇mの等高線で全部切り取つて谷を埋めるようにすれば土量も谷の部分とちよつと釣合つて概算一万二千坪の土地ができる。経費は委員会から示された四千五百万円（十一月頃示された四千八百万円はこの話しが煮詰つた三月段階で四千五百万円に減額の意向が示されていた）では到底足りないがその時はその時で対策を考えよう。今までは『総額』にあまりにも拘わりすぎて萎縮していたきらいがあるが、今やその段階ではない。

直ちに地主にあたらなければならぬ。ことは急を要す。この際は有力な仲介業者の力を藉るべきだということになり、大間の土地仲介業者広瀬一喜氏に土地購入の斡旋を依頼すること、二〇日夜八時から

大間の高橋食堂で地主との会合を行なうことなどをとり決めた。

こうして五人が追い詰められた気持のうちにもようやく愁眉を開いた頃は街はすでに早春の夜の帳にすっぽりと包まれていた。

翌一八日明神氏が他の用件で来校されたので昨日の経過を説明し再度のご援助をお願いしたところ大いに賛意を示され力強く快諾してくださった。

最終的にこの土地に決定するまでの概要を当時の日記で追ってみることにする。

三月一九日(四)

六〇余日振りに立田に帰宅す。正月以来二度目の帰宅なり。久しぶりに幾分か心の安らぎを覚える。夜一〇時すぎ公舎帰着。明日の会合につき細部の打合せをしようと古谷会長に電話したところ急用のため上京され帰宅は二七日頃とのこと：残念至極なり。

三月二〇日(用)

一〇時より小津高校において高校入学志願者の第二定員選考会議あり。高岡高校の山本明夫校長、小生の顔を見るなり歩みより『須崎工業の校地が中止になったから高岡高校の土地を買うことにしたい。すぐ地主との交渉をしてもらいたい』と総務課から連絡があったが、須工はそれでよいのか…との話なり。

私は大いに驚きただちに総務課の引地係長に事情を訊したところ、『総務課として万一を慮かってふた道を掛けておる。須工が買えればもとより須工にする。ただしこの場合、期日の限界を二二日にしたい。二二日中に成否いずれかの確実な返事をして欲しい』とのことであつたと一安心する。

夜八時すぎより大間高橋食堂で地主との初会合を行なう。

出席者(期成会及び学校側) 梅原氏、沢本、河内、斉藤、浜田。

(世話人) 明神氏、広瀬氏。(地主側) 一六名中一三名。明神氏が司会兼進行の役をつとめてくださる。同氏より須崎工業高校移転の必要性など説き協力を要請、つづいて小生より今日までの経過を説明し、最後の望みはこの土地だけである。価格は山林と畑は反当り三〇万円、田は同じく六〇万円、決して十分とは思わないが是非これで協力していただきたい旨を懇願した。

大半の地主は協力的であつたが三、四名の地主は応ずる気配なし。明神氏、梅原氏ごもごも、事業の公共性、学校完成後の地元の繁栄などを述べて説明に努めた結果、二名の態度保留を除き他の出席者は協力を約した。ただ用地の三割近くを所有しておる大地主の参加がなく、この地主一人の向背でこの計画の成否が決まることになるので不安が残らないではないが、先づ大丈夫という見通しで一〇時三〇分頃散会す。

散会後直ちに渡辺課長宅に電話連絡、今夜の会合の様子を報告し極力努力するから二二日まで待つて欲しい旨を懇請す。課長より地主の確約をとっておくこと、用地の外に進入路も同時に確保しておくことなど助言あり。

三月二一日(火)

天野市長訪問。天野市長は昨年一〇月以降上田市長に代つて須崎市長に就任しておられる。当然上田前市長のあとをうけて期成会の顧問をお願いしておるが従来からの経緯もあつてこの問題についてはあまり市長を煩わしてはなかつたが、事態がここまで着詰つた以

上、事情を話して今後の援助を願わなくてはならない。市長と親しい合田教諭を煩らわし、又川氏と三人で九時前私宅にお邪魔す。

多ノ郷水田地帯の用地購入不調以来、昨夜までの経過を説明して了解を得、更に今回の用地が成功した場合の進入路造成などにつき市の援助をお願いして快諾を得る。

市長は『自分も明日は上京する。東京で知事に会う予定にしておるので用地変更の経緯など知事に話して了解を得ておこう』とのこと。……有難し。

正午すぎ又川氏に同道願つて藤原氏宅に赴く。昨夜の会に参加しなかつた最も有力な地主との交渉の結果を広瀬氏にきくためである。待つこと暫時、広瀬氏来訪す。同氏の報告によれば『中々困難なり、朝から昼まで説得したが甲斐なし、ただし売らぬとはいわない』……とて先方の条件を話す。非常に重大で又川氏と私の二人のみで決断を下し得る程度の内容ではない。(その内容については触れないことにする) 井上氏、中田氏、川村氏の三人に連絡したが前二氏は不在、川村氏ただ一人急ぎ来訪してくださる。感謝の外なし。(平田氏はご病床にあり、古谷会長は上京中で誠に残念なり)

四人鳩首協議するも容易に結論を得ず、今日は三時に渡辺課長に会つて見通しを報告することになっているがすでに二時に近い。訪問の時刻を四時に変更したい旨連絡しておいて協議をつづける。……三時前、誰いうとなく『呑みましよう……今となっては仕方ありませんまい』といつて顔を見合せた。三人、三様いい表し得ない複雑な気持ちである。残るは態度保留の二人の地主の説得である。然し今日はその暇はない。後日どんなことがあつても説得しようと話し

合いながら又川、川村、藤原の三氏と共に車を走らせ県に向う。県では河内教頭、斉藤事務長の二人が待機しておることになっておる。四時かつきりに県に到着、渡辺課長に経過を報告する。

(沢本) 地主一六名中一四名までは確約を得た。残る二人は目下説得中であるが九分九厘まで間違いないと思う。

(課長) 価格は?

(沢本) 山と畑は一律三十万円、田は六十万円なり、ただし田は極く少なく殆どが山と畑である。

(課長) それは高い。山なら一〇万円が相場だ。

(又川、川村) 須崎は違う、山でも街に近いところは坪一万円で売買されておる。高知より高い位である。須崎の特殊事情を理解してほしい。

(課長) 一万二千坪可能か。

(沢本、藤原) 可能である。やりようによつてはなお余裕がでる見込もある。

(課長) 確実に買えるなら可なり。明日上京して東京で知事に会うから話しておこう。二四日には帰るから二時頃概略の設計と見積をもつて来て欲しい。

これで一応の方向はきまつた。然し心中甚だ複雑である。

三月二二日(水)

広瀬氏を通じ態度保留の二人の説得をつづける。

事務長が委員会調べたところによると土地の購入、校地の造成までの経費及び作業はすべて期成会の手で行ない完成後要した経費の額で県が買いあげる。ただし設計、工事請負業者決定のための入

札、工事の監督、検査などは委員会が行なう。……ことになるとのこと。

三月二三日(木)

夜八時より再度地主との会合を行なう。

出席者Ⅱ(期成会及び学校側) 川村氏、梅原氏、沢本、斉藤。

(世話人) 明神氏。(地主側) 一三名。(仲介者) 広瀬氏。

経過Ⅱ土地の売渡しについては、態度保留の二人を除き全員承諾す。ただ税金については地主の負担とならないよう処置してほしいと強く要求された。明神、梅原両氏からも厚意的な口添があつたので、川村氏と相談のうえ、極力税金のからないよう努力する。若しかかつた場合は期成会にて処理する旨を約す。出席した地主全員より用意した承諾書に署名押印をうけ一〇時すぎ散会す。

三月二四日(金)

昨夜の打合せにより明神氏、梅原氏にご同行を願って態度保留の二人の地主の説得に赴く。家には不在、ビニールハウスをあちらこちら訪ねてようやく面談、三人してこもこも地主全体の大勢、使用目的の公共性、完成後の地元に及ぼす利益など述べて説得すること一時間余、ようやく承諾書に署名をもらう。個々の地主については別に細かい条件を伴うものもあるが一応結着したことになる。お世話いただいた方々にただ感謝するのみ。

今日は課長に設計の概要と概算見積を提出する日である。午後一時すぎ川村氏、藤原氏、沢本、河内の四人にて渡辺課長を訪ね約束の資料を示す。造成面積一万二千坪、工事費五千万円、用地代金一千万円、合計六千万円。県から示された額四千五百万円に対し一千

五百万円の超過であるがこれについては期成会において処置し、県には負担は掛けないことを約す。これは無謀にも近い約束であるが、(一)工事費を切り詰める。(二)土地代金にも若干の余裕がみられる。(三)最悪の場合は造成面積で加減する。などの措置によって切り抜けるようにしよう。今更後へは引けない。ここであやふやな態度をとるとまた話しがこわれてしまう。

渡辺課長も我々の肚を読んでるらしく一千五百万円については深く追求せず一応了解。『明日午後一時知事が帰庁する市長にも来てもらって知事に会い承認を得るようにしてほしい』……のと。

帰校後平田氏を病床にお見舞し、かたがた経過を報告す『自重しですすめるように』との励ましの言葉なり。恐らく不足額一千五百万円に対するご配慮であろう。

『PTAであろうと期成会であろうと失敗した時は校長がその責を負わなければならない。万事自重するように……』私がこの問題で最初にお願いにいった時いわれた藤本教育長の言葉がまた頭をかすめた。この言葉は今までも何度となく思い出された言葉である。これからさきさきも忘れないようにしよう。

三月二五日(土)

九時より新入生の指導、一〇時井上氏を訪問し経過を報告す。

『金のことは心配するな……』という励ましの言葉なり。一時より校内移転新築委員会を開き多ノ郷以降の経過を説明し賛同を得る。一部委員より校長らの苦勞に感謝する意味の発言あり、思わず胸の熱くなるのを覚えた。

昨日の渡辺課長の要請に基づき知事の承認を得るため午後二時学校発願に赴く、同行者、竹林助役（市長所用のため代理）、川村、

又川、梅原の三氏に小生と矢野象一教諭を加えた六名。三時すぎ県庁着、渡辺課長と共に知事室に赴く。昨日電話で秘書へ連絡した筈だが通じていないとのこと。今日は知事予定が詰っていて会えないという。知事が室から出て来る機会を待つ外なし。一同待合室に待機す。四時半ようやく知事と面談が叶う。知事笑いながら『東京で天野市長が多ノ郷をよう買わなかつたと、いい難くそうにいうとつたぞ……マア委員会がよいところならエエ、然し総[。]梓は変らんぜよ……』といいながら両手で大きく輪を描いてみせた。知事の話総梓が四千八百万円の意味か、四千五百万円を意味するものかは明かでないが、今はそれを問い訊す時ではない。とにかく最後の断は下ったのだ。これからはつきつきともち上つてくることであろう所謂『土地の問題』につきものの困難で煩瑣な交渉や手続を根氣づくく処理して『校地完成』ただひたすらに校地完成を目指し、及ばずながら最善の努力を尽そう。

.....

以上が新校地の位置決定までの経過の概要である。以後七月一五日、関西土木株式会社の手で造成工事着工、翌年四月中旬完工、同月末県に売渡すまでに期成会対地主間、期成会対県教委の間に幾多の困難な問題がもちあがり紆余曲折を繰り返したが、それらには触れないことにする。

最後に祖先伝来の土地を学校用地として売渡していただいた地主の方々の氏名を掲げて謝意を表わすとともに校地造成に関する主要な数

字を記してペンを擱くことにする。

.....

一、地主 芳名（アイウエオ順、敬称略）

市川植太郎、岡田武富、岡田美恵子、川上清喜、北岡芳久、坂本常一、谷政一、谷花枝、谷脇秀樹、谷脇幸男、高橋泉、谷盛男、谷泉夫、能見鹿馬、能見和雄、明神栄。

二、校地及び校地造成に関する主な数値

(一) 校地面積 三、五〇〇㎡（実測面積）

(二) 購入した用地（進入路を含む）

(イ) 山林 一九、八一〇㎡

(ロ) 畑 四、六七〇㎡ 合計二八、七二〇㎡

(ハ) 田 四、二四〇㎡ (登記面積)

(三) 同右購入代金 合計 九、一四〇、〇〇〇円

(四) 造成工事費 三九、二三〇、〇〇〇円

(五) その他の経費

(イ) 借入金金利 一、九六〇、〇〇〇円

(ロ) 諸経費 二四〇、〇〇〇円

(六) 総経費 五〇、五八〇、〇〇〇円

(三十年誌より転載)

移転新築について

高知県立須崎工業高等学校

移転新築期成同盟会

1、趣 旨

本校の敷地は約二万㎡（六千坪）で、学校設置基準による基準面積一〇万㎡（三万坪）の五分の一にすぎない。これでは工業教育の現代化に應えることはもとより高校の基本的な教育さえ満足に行なうことは困難である。このような実状に鑑み最低四万㎡（約一万二千坪）（高知東工業高校と同程度）の校地を求め移転して充実した工業高校教育を可能ならしめるため。

2、経過の概要

前述の趣旨のもとに、昭和四〇年秋、学校及び須崎市当局、新旧PTA役員、その他識者有志をもって「高知県立須崎工業高等学校移転新築期成同盟会」を結成し（現会長・須崎市長 天野剛利、副会長・学校長 沢本豊、同元PTA会長・古谷義計）関係各方面の啓蒙に努めると共に、県当局に対し度々陳情や要請をつづけた結果、昭和四二年三月に至り漸く県当局においてもその必要を認め、現校地を坪単価三万円以上で売却し、その代金収入一億八千万円を建築費の一部に充当するという条件のもとに移転を決定するに至った。

3、校地の造成

昭和四二年度予算四千八百万円をもって約四万㎡の校地を造成するという基本方針が決定され、その方法として、期成同盟会長天野剛利氏（須崎市長）個人債務と役員八名の保証のもとに、四国銀行須崎支

店より必要資金を借入れ、用地の購入と校地の造成を行なったうえ県が一括買い上げることになった。四月～七月、用地購入、七月中旬着工、一月竣工の予定で工事を急いだが、二度にわたる設計変更や、追加工事などのため、工期は大幅に延びて翌年四月中旬漸く竣工した。総経費は土地購入代金、工事費その他金利等諸経費を合わせ、約五千六〇万円を要した。こうして一応敷地は造成されたが、その実面積は三万五千㎡程度にすぎず、決して十分ではないので将来何等かの方法で拡張を考えなくてはならない。

また校地としても未だ完成しておらず、進入路の整備、法の補強工事あるいは校地北側通路の整備や、御手洗川への架橋工事など完成までには更に二千万円程度は必要であると思われる。

4、校舎の新築

校地の一応の竣工に引き続きなるべく早く校舎の建築を行なうよう度々県に要請したが、県としては本校の新築も『高知県高等学校整備五ヶ年計画』の一部として計画しておくため、校地完成、即、校舎の建築と直線的には進展せず、昭和四三年度には建築の予算を獲得することができなかった。

然し期成同盟会の役員や地元選出の県議会議員の強力な対県交渉によって同年度末に至って昭和四四年度建築予算として五千万円余を（建築延面積として約千六百㎡）を獲得することができた。校舎の平面設計については教育委員会、土木部建築課、学校の三者連絡協議の上四四年度秋、最終案を決定した。

昭和四四年度工事（第一期工事）は種々の事情で着工が大幅におくれ、四五年三月に至って漸く起工し同年一〇月完工した。

四五年度工事(第二期工事)は工費一億九千三百万円(三千四〇〇㎡)で昭和四五年七月着工本年四月完工した。

以上で、総工事量の六割程度が終つたことになる。すなわち、管理部門、特別教室、各科製図室のすべてが完了、普通教室一室と化学工業科、電気科の実験実習室がその一部を残し殆ど完成したのである。

昭和四六年度の工事としては上記の残部と機械科、造船科の実験実習室、それに屋内体育館、格技場が予定されておるが水泳プールは含まれていない。

ただ体育館は県の直営事業として行なわず、期成同盟会の手で県委員会指導の下に建設し竣工の後県が買いあげるようになっておる。

5、第一期、第二期工事で竣工した施設の概要

- 一、本館(鉄筋コンクリート四階建、のべ三、八一一㎡)校長室、事務室、職員室等の管理室、物理、化学教室、図書館、視聴覚室、音楽室、各科製図室、およびこれらに付属する準備室と普通教室九室。

- 二、南校舎(鉄筋コンクリート三階建のべ二、九〇〇㎡)熱機関、流体実験、材料試験、工業計測、精密工作等機械科、実験実習室、船舶材料、電気、板金溶接、船舶建造など造船科実習室、電気工事、同計測、電子工学など電気科実習室、機器分析、化学分析、製造化学など化学工業科実験実習室及びそれらに付属する準備室と普通教室九室。

6、第三期工事(四六年度、着工四六・七・一〇 竣工予定四七・三・

三二)

- 一、一般施設

体育館兼講堂、格技場等(鉄骨二階建、のべ二、〇〇〇㎡、二階体育館兼講堂、一階格技場、生徒食堂など)

二、実験、実習施設

(一)「機械科」(鉄骨平屋建、九一五㎡、機械、鑄鍛造、仕上組立、板金溶接)

(二)「造船科、化学工業科、電気科」(鉄筋コンクリート三階建、のべ一、四三〇㎡(造船科)木工、現図、(化学工業科)物理化学、化学工業、(電気科)電気機器、電気応用、自動制御、電気工事)

(三)「造船科」(鉄骨平屋建、三〇〇㎡、実験水槽)

(四)「化学工業科」(鉄骨平屋建、九五㎡、製造プラント)

(三十年誌より転載)

創立三十周年記念誌と

新校舎への引越し

第九代校長 澤本 豊

「記念誌の思い出」

本校の創立は、昭和十六年だから、昭和四十六年で満三十年、同年五月二十五日が創立三十周年ということになる。

私は、昭和四十一年四月、第九代校長として着任して間もなくのこと、同窓生の矢野教諭からこのことを聞いた。

……早いものだなあ……。

……あれからもうじき三十一年か……。

……「須崎工業」……。この文字を見たり聞いたりすると、私は、ふっと昭和十五年の春を思い出す。

当時、私は広島県の広町（呉市の東5km、今は呉市広町）にあった広海軍工廠航空機部に務めていたが、その四月の半ば過ぎ、下宿へ帰ってみると中内先生（編集者・註、本校初代校長、澤本校長先生の高知工業学校生徒時代の恩師にあたる）から手紙がきていた。

高知工業を卒業してもう十一年、年賀状さえ途絶えがちになっていた私は、不審に思いながら、急ぎ開封してみると、「……こんな経緯で、今度須崎に工業学校が出来ることになって、私が校長に内定している。ついでには帰郷して教師をしてみないか……」というご親切なお誘いの意味が、先生の美しい文字でしたためられていた。

私はおおいに心動いたが、神戸工専（現神戸大学工学部の前身）に在学中から海軍造兵生徒に採用され、給費されていた関係で、進退の自由が許されず、丁重なお礼の言葉を添えて辞退したことだった。以来、「須崎工業」とは、何か気持ちの上で繋りを感じていたのだった。敗戦後の昭和二十五年、帰郷して教壇に立ち、城山高校を振り出しに高知工業十三年の勤務を経て、今、中内、小林、森岡、三先生の後を受けて、高知工業出身としては四人目（何れも奇数代）、第九代の校長としてここにいる。私は、私に課せられた使命を感じた。

私が着任した昭和四十一年は、学校にとつては二十五歳、私は五十四歳だから、もし定年までに特別の事情が起ころなければ、創立三十周年は、私の退職の前の年になる。

しかし、私に課せられた仕事はそれだけではなく、大仕事が待ち受

けていた。

それは、「校地狹隘」という如何ともし難い事情による、学校移転事業の話であった。

何はともあれ、本校の発祥の地である札町を後にして新校地を求め、移転をしなければならぬ。

創立功労者である寺尾豊先生、初代校長の中内先生はもとより、風雪に耐え、須崎工業を今日の姿にまで守り育ててこられた七人の校長をはじめ、多くの方々に申し訳ない思いがする反面、これが須崎工業と私のご縁、思い上がった言い方を許して戴くなら、私に課せられた「使命」のような思いであった。

私はなんとかして、四十六年の創立三十周年記念までに、この懸案の学校移転を完了したいと願い奔走したが、移転先の探索と用地取得、造成に二年余りを費やし、更に県予算の関係で校舎の建築は四十五年三月着工、四十七年三月竣工ということになった。

ここに至って新校舎での記念式典は絶望となり、式典を現在地で挙行するか、一年延期して新校舎、新しい講堂で挙げるかの二者択一に直面した。私は四十七年三月退職だから、前者を取れば退職の花道である。三十周年を祝う式典だから発祥の地、創立時の校舎で行つてこそ意義があるという見方もできる。

しかし私は、早くから移転完了後と肚を決めていた。

発祥の地で行うことの意義を否定する気持ちは毛頭ないが、この種式典の意義は過去を回顧懐旧すると同時に、将来に向かつての飛躍と発展を祝う重みが更に大きい。加えて移転完了後には、当然祝賀式典を行うであろう。そのときにこの式典を兼ねて行えば、経費の節約に

もなるし、将来の発展を期待し祝福する意義は一層の重みを持つことになろう。

以上が、式典は移転完了後と私が肚を決めた根拠である。

しかし、この種の式典はその名称からしても、同窓会が主役で、学校は脇役、私が先走ってはどうか……?、という配慮から、折に触れ校内の同窓生や同窓会長、副会長に軽い口ぶりで私の考えを話した。

こうして記念式典は、移転完了後ということが固まってくると、同窓会は手持ち無沙汰、当分は無用無しということになる。

そこで私は、田辺会長に創立三十周年記念誌の発行を持ち出した。

記念誌を発行しなければ……という私の気持ちは、現在地での式典を断念したときから、私の胸に芽生えていたことであるが、日増しにその思いが強くなっていた。

創立三十年にして、本校は発祥の地、札町から姿を消す。新校地には校舎も続々建ちつつある。

今こそ、発祥から今日までの苦難や栄光の跡を誤りなく綴って後世に残すべきではないか。「それは私の役目だ。札町時代の最後の校長は私だ。しかも、新しい校地を造り、新しい校舎を建てたのも私だ。

三十周年記念誌をつくることは、本校をここまで守り育ててきた人々を顕彰することであり、報恩の一端でもある。そしてそれは、私に課せられた使命だ……」とまで思うようになった。

私は、田辺会長に信ずるところを述べ、頼みこんだ。

「記念誌発行者は同窓会長になっていただきます。作ることは全部学校でやるが金がない、同窓会で資金をつくっていただきたい」。

田辺会長は快諾してくれた。

直ちに理事会を開いて賛成をとりつけると共に、「母校創立三十周年記念誌の発行について」と題した趣意書を印刷して、広く会員に配布した。

今その趣意書の一部を抜粋してみよう。「……いまや校地移転により、母校は西札時代に幕をひこうとしております。私共の懐かしい学び舎は永遠に姿を消して……(中略)……このような母校の歴史的転換期にあたり、我ら同窓会は何を為すべきか……」

と訴え、校史に残る記念誌発行の意義を強調し、協力を要請した内容であった。

誠に当を得て、水際立った対応であった。

今見るに、趣意書の日付は、昭和四十六年六月三日となっておる。

私は、このことあらんと密かに練り上げてきた腹案に基づき、主として校内の同窓生教員や、永年勤続の専門科の教員に分担を依頼して、旧師、創立当時尽力して戴いた方々、PTAの現旧役員に、原稿執筆依頼の文書を發送すると共に、創立当時は元より、過去の主な出来事を物語る写真の收拾と借り受けにつとめた。

寺尾先生には、私自身手紙で原稿をお願いした。

こうして、寺尾先生からは「回想―苗木を植えて三十年―」と題した玉稿五枚を、二代西森校長、四代前田校長、校章の図案者森光喜先生、太田幸吉先生(のち清水高校長)、池上健男先生(のち須崎高校長)の諸氏からも貴重な原稿を頂戴したが、中でも池上氏の「二昔半前の思い出」と題した、校舎の大半を劫火で失った手記は、悲痛な記録である。

八月六日には、校内で座談会(学校…澤本・久、同窓会…田辺・清

家・広田・橋本・矢野・海地、いずれも第二種(一期生)を開き、創立当時の得難い体験や思い出を語りあい、記念誌に花を添えることができた。

玉稿を戴いたすべての方々の紹介は割愛させて戴くが、五十三人もの方からご協力を戴き感謝の極みである。

私も、「新校地への陣痛」として、移転先の探索から校地造成までの経過と、高知工業での恩師、森岡、中内、小林、三先生を偲ぶ拙文を原稿用紙五十余枚に綴り、報恩と懐旧の思いを新たにしました。

表紙の図案は、追手前高校並びに、近年設立した高知南高等学校の校章を図案した金澤彌三平氏に依頼したもので、斬新にして温故、見事な作品であり感謝の至りである。

編集の実務にはすべて私が当たった。不備あらば責めは私にある。A5判版、百三十ページ、中央印刷株式会社、上梓は昭和四十六年十二月上旬だった。顧みて誇るに足る出来栄ではないが、創立三十年の跡を回顧するには好個の記念誌だと自負している。

尚、ご協力を戴いた五十三方の中には、既に故人となられた方も少なくない。謹んで御冥福をお祈りいたします。

【新校舎への引越し】

創立三十年記念誌の編集発行に並行して、新校舎の建築も進んでいた。学校では次にひかえる大事業、学校移転の実施計画が練られていた。

昭和四十七年三月二十日、新築移転事業も愈々大詰め、今日から全校挙げての「お引越し」である。

思えば長い苦しい道程であった。昭和四十一年四月「新米校長」と

して着任して以来、六星霜、いま漸く宿願のゴールに達したのだ。

午前九時半、クレーン車を含むトラック三台が機械科実習工場の入口、通用門から静かに構内に入ってきた。

私は、通用門に直面する一段高いところ、校長公舎へ通じる道の出口に立って、じっとこの様子を見守っていた。

過ぎ去った六年、特に用地購入が終わるまでの一年二ヶ月の出来事が、次から次ぎへと走馬灯のように浮かんでは消えてゆく……。

二転三転した移転先の探索、漸く移転先が確定し、用地購入に至るまでの一年二ヶ月、その間転寝にも頭から離れることはなかった。

それにもまして、ほんとうに皆さんよくやって下さった。八月のある暑いときに、何回も山を歩き回って下さった。我が事のように。

中でも、又川さん、川村さん(何れも本校元PTA会長)、平田さん(元須崎町長)、井上さん(元PTA役員)など、本当にお世話になった。

地主さんとの交渉で、「幅は六反だが実面積は倍以上ある。二倍の単価でないと売らん、判を押さん」と言われ、すったもんだの末、県にバレたら自腹を切る覚悟でその要求を呑んだこともあった。

いろいろと他人には解って貰えない苦労があった。しかし、用地の購入が終わってからは、この問題を夢に見たり、うなされることはなくなった。

用地の購入が終わり、造成工事は(株)関西土木が落札、着工は昭和四十二年七月十五日の正午過ぎだった。

私は、同社の藤原工事主任からの連絡で、現地に赴き大型のショベルカーが、校地になる山の東側斜面を突き崩し、次々に進入路を造っ

てゆく有様を感慨深く見守った。

工事は十一月竣工の予定だったが、二度の設計変更、追加工事、更に台風被害などのため大きく遅れ、翌四十三年四月に至って漸く竣工した。

校舎の建築は、予算の関係や用地の大部分が造成地であることなどから、二年間を置いて四十五年三月九日、第一期工事の起工式を行った。続いて同年七月、第二期工事を、翌四十六年七月には第三期工事に着工、本年（同四十七年）三月中旬、体育館兼用の講堂の竣工を以て、所期の建築工事の全てが完了し、待望の引越しを迎えた次第である。

引越し……。凡そ、一つの学校がその総てを挙げて引越しするということは、想像以上の大仕事である。

しかも、普通高ならまだしも工業高校となると、幾多の実習・実験用の施設・設備・備品、中には一トンに近い機械類もあれば、精密計器・器具なども多い、その総てを挙げての「お引越し」だから生易しい仕事ではない。全国的にもあまりその例を聞かないし、本県では昭和十五年頃に、高知工業学校が北与力町から今の棧橋通り二丁目へ移転した例がある。……その意味でも、本校は高知工業の弟校といべきか……。

本校の移転は、学校・地元の熱意にほだされて、県は不承々に承知したという経緯もあって、移転先の探索から用地の購入造成に至るまで、全部地元まかせ。期成同盟会が銀行から資金を借りて土地を買い、校地を造成し、その出来た校地を県が買い上げるといふことだ。その買上価格も二転三転、絞りに絞って最後にやっと四千五百万円以

内で一万二千坪造成せよとなったという具合だった。

好意的に見れば、地元の意思・手腕・力量を尊重したやりかたといえないことはないが、別の視点に立てば自分だけうまい汁を吸うともいえるやりかただ。

さらにまた、「校舎の建築までは県でみるが、最後の引越しは地元・学校でやれよ」という県の言葉もあった。

私は、県も相当無理をして校地の買上をするのだから、もうこれ以上県に移転費用を出して欲しいとはいえないだろうと、必要以上に弱気になってしまい、引越しの経費はPTAにお願しようかと心をきめ、四十一年度からPTA会費の中に新築移転用経費の項目を設け、月額一人三十円を積み立ててきたのだった。

昭和四十三年三月中旬、別の用件で教育委員会へ顔を出した私は、総務課の野田係長に声をかけられた。

「今度の異動で校長先生とての事務長が代わります。新しい事務長は、今高岡高校にいる伊尾木という人で、腕立ちです。将来事務長会を背負って立つ人物です。須工も建築その他、多事多難でしょうが、きっと校長先生の両腕になってくれる人ですよ。」

四月に迎えた伊尾木事務長は、まさに野田氏の言葉通り、柔和な色白の顔立ちの好男子、対県交渉でも譲れるところは譲るが、そうでない点については断固として主張を曲げない、頼もしい男だった。

校舎の設計図面など、県の建築課から送付されてくる度に関係者を集め、希望を聞き、その内容を取捨選択して取りまとめ、「校長先生、これでい겠습니까……」。私は現場教員と事務長のやりとりを黙って聞いていて、「いいでしょう、それ以上要求しても通るまい」と、

承認するだけで十分だった。

伊尾木事務長が最も手腕を発揮したのは、最後の、引越しの全経費を県費で出させたことであろう。

対県交渉の詳細については、事務長自らの手記に待つことにするが、「もう二年早く来てくれておつたら、私の苦勞も半分で済んだらうに……」と私に喋声を挙げさせたことであつた。

あの頃……、用地購入時、四国銀行から四千万円を借入、その金で、移転登記・土地代金の支払い、さらには出来高一時払いの造成工事代金の支払い、大小様々の承認作業など、それらを殆ど私一人で処理した。もつとも会計帳簿の元締めは、元PTA会長で、須崎市内で商業を営むその道のベテラン、川村為三郎氏にお願いをした。後日県に用地を売却した際、県の係員が、川村氏の記帳を点検し、「羽毛で突いたほどの間違いもなく、実に完璧だ」と賛嘆されたことだった。そうした頃、伊尾木事務長がいてくれたなら、随分助かつたらうにと思つたことであつた。

ふと気付くと、工作機械を五・六台ずつ積んだトラックが出ていくうとしている。

伊尾木事務長が各科との連絡話し合いの上、立案した引越計画、微に入り細を尽くし、水も漏らさぬ計画に基づき、三日間で予定通り完了した。しかも、PTAの経費は一銭も費やすことなく。

二十三日朝。昨日で総ての引越しは終わったはずだ。私は、一人で校内を一巡した。

校内は、文字通りガランとして物音一つしない。人気のあるのは僅

かに阿曾用務員の住宅だけである。

最後に私は校長室へ戻つた。

そこには、寺尾先生も八人の先輩校長の面影もない、十六坪の空間のみ……。

……そうだ、三千五百人の若人を世に送つた札町の須工は終わったのだ……。

翌二十四日、市の社会福祉会館において「移転の祝賀会」を挙行した。主催はもとより期成同盟会である。正式の移転新築の祝賀会は、新校舎で三十周年記念式典と併せて、盛大に挙行されるはずであるが、これは秋口になる見込みだから、建築も終わり、引越しも済んだ今、これまでお世話になつた人々、ご協力戴いた方々に披露とお礼の意味を兼ねて、名称も「移転祝賀」だけにしようということになつたわけである。

出席者は二十名くらい。会長天野剛利須崎市長の挨拶、伊尾木事務長の工事報告に続き、私が謝辞を述べた。

この移転問題に関し、校長として公の場に立つのはこれが最初でしかも最後になる。移転新築といえどもなげに聞こえるが、新築は問題ではない、移転先の探索と用地の取得、これが難事中の難事である。このことが叶つたのも、本校誕生の麗しい歴史が然らしめたことであらう。

私は、移転先の探索から用地取得に至るまでの一年間、ご援助いただいた方々、用地を分譲して下さつた方々に、心を込めてお礼を述べた（詳細は三十周年記念誌「新校地への陣痛」に記載してあるので、再録の煩を避ける）。

お礼を述べているうちに、段々と熱いものがこみあげてくるのをどうすることもできなかった……。

(編集者・註)

澤本校長先生の原稿は、これで切れている。

しかし文章からみて、先生の胸の中にはまだ最後の部分が、残されていたと考えられる。

先生は本校の移転事業に全力を傾倒された。そのお気持ちの総てを残せないのは誠に残念である。

ご承知の方もおられると思うが、先生は、この原稿をご執筆中の平成三年三月二十七日に急逝された。この原稿が未完成と思われるのはそのためである。

先生は、ご在職中、学校移転という大事業のほか、同窓会の立て直しにも極めて顕著な役割を果たされている。先生のご指導がなければ同窓会も今日のように強力な組織力を持つことはできなかったであろう。

先生のご功績をたたえ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

触れ合いの教育

六十三年度PTA会長 川上和男

須崎工業高等学校が半世紀の輝かしい歴史を記念して、ここに記念誌を発刊されますことは誠にご同慶にたえません。

又、意義深い記念誌発刊に際しましては不肖私に、寄稿のチャンスを得ました事は誠に光栄に存じ、ご配慮に心より感謝申し上げます。

いま教育の現場では、心の触れ合いが重要視されておりますが、そうした教育を愚息の体験を通して肌で感じる事ができました。不本意入学だとして進路変更、中途退学の一歩手前まで追い詰められた中で、ホーム主任の先生を初めとする諸先生方のご指導により見事に立ち直る事ができました体験を述べさせていただきます。

年号が昭和から平成へとかわり新しい年代を迎えた三月、私の一人息子も三年間の修学を終えて、須崎工業高等学校を巣立つ事ができました。

振り返って見ますと高校受験を控えた中学三年生のとき、担任の先生とそりが合わず、反抗してクラブ活動でソフトボールに熱中し、受験勉強には身が入らずに入試を迎えました。

「高校ぐらいは大丈夫」と言う息子の言葉に、私たち夫婦は安易な気持ちでおりました。そして入試の結果は第一志望校は不合格という知らせでした。

その時妻は、「目の前が一変に真つ暗くなり、心臓が一瞬止まったような思いだった」と語っておりますが、まさか落ちるなんて事は夢にも思っておりませんでした。

さすがに呑気な息子も「これで僕の人生終わりだ」と落ち込んでしまい部屋に閉じこもったきり、食事にも出てこようとはしませんでした。

二次受験の学校選定で須崎中学の校長先生から「須崎工業高校に決めたなさい、そしてトップを目指して頑張れば、大学への推薦入学も夢

ではない、君だったら必ず出来る」との激励、アドバイスを戴き須崎工業高校に決定し、化学科に入学する事ができました。

しかし、入学はしたものの自分の意に添わぬ高校だという意識が強く、進路変更の事ばかり考えて悩み続け、食事も喉を通らないような落ち込みようでした。

こうした実情をホーム主任の岡林先生に相談いたしました。早朝先生の自宅へ電話をしたり、学校へ出かけたり、夜間に先生の家庭訪問をお願いしたり致しました。

このようにして先生と連携を取りながら、学校生活や家庭生活を含めた適切な指導、助言を戴いてまいりました。愚息とも友人を交えて何度か話し合い、進路変更を思い留まるよう説得し続けました。

その結果、一学期の中間試験の始まる頃には、何とか落ち着きを取り戻す事ができ、進路変更は思い留まり、須崎工業高校で頑張ろう、という意志が固まったよう学習意欲も出てきました。

そして、クラブ活動はホーム主任の岡林先生の元でバレーボール部で、心機一転して頑張りたいとの強い意志表示してくれました。

この一言に私たち夫婦は救われた思いで、ほっと胸をなで降ろした次第であります。

以来、学業にクラブ活動にとエネルギーを燃やし、汗を流し、高校生活をエンジョイし、三年間一日も休むことなく皆勤で通学することができました。

そして、三年間には工業高校ならではの、種々の資格を取得することもできました。特に化学科から電気工士の資格を取得できたことは、本人にとりまして大きな喜びであり、意欲さえあれば何事でも

出来るという事の自覚を深くしたと思います。

こうした、須崎工業高校での三年間の修学を更に探求したいと進学を希望しましたところ、学校より特別推薦を戴き、日本文理大学に入学することができました。

それにしても、脱着者とならずにここに至るまでには、本人の努力もさることながら、岡林先生とのかかわりが大きく影響したことに間違いありません。ご指導戴きました諸先生方に深く感謝申し上げます。

愚息は、「一次試験に失敗したことが良かったと思う、尊敬できる先生にも巡り会う事が出来たし、先生のお陰で大学へも進学でき本当によかった」としみじみと語るまでに成長しました。

そして、卒業後も大学が休暇に入り帰郷すると、直ちに学校へと足を運び、未だに先生に甘えているようですが、そこには人間としての、心と心の触れ合いが、そうさせているのではないのでしょうか。

心の触れ合う教育が今求められておりますが、それは生徒をただ管理し指示するのではなく、どう勇気づけ、元気づけるかであります。

一人一人の気持ちをどう前向きに、明るく、積極的にしていくかであり、教師と生徒の間に人間として暖かな心の触れ合いが求められております。

そうした触れ合いの教育が、いま須崎工業高等学校では行われていることを体験させていただきましたが、創立五十周年を迎えた伝統ある須崎工業高等学校から、二十一世紀に活躍する数多くの人材が輩出されんことを念願し筆を置きます。

平成三年二月記

須
工
で
の
日
々
(
そ
の
一
旧
教
職
員
)

須工二ヶ年

第八代校長 西本 澄雄

昭和三十九年度の教員異動作業をすませ、ほっとしていたとき、私は自分が異動になつてゐることを知つた。県教委で高校を二年、続いて教育事務所で三ヶ年、計五年目の異動を終えたときだった。

突然、須崎工業高校長に補すといふのである。須工には二、三回行ったことがあつた。故寺尾豊先生のきもいりで設立され、造船科といふ特異な科目を持つ工業高校である。

学校までは汽車なら二時間はかかるといふので、愛用のバイクで行つてみた。土佐市は私の生まれ故郷であるから、気軽に出かけたが、五十六号線が改修中で極めて路面がわるい。それでも一時間少して着いた。途中須崎市と土佐市との境、名古屋坂の道端に植わつてゐる桜の花がすばらしく美しかった。

胸像

着任数日後、校長室戸棚に、寺尾豊先生の胸像が置かれてあるのを見つけ、事務長に聞いてみた。それによると、寺尾先生は学校創設に際して献身的なご努力をしてくださつたので、その功績を顕彰しようと胸像を作らせていただき、校内適地に台座を設けて安置しようとして、選定中であると。私は、早く実現しなくてはならないがさし当たつて、校長室の上座へ台を置いて安置した。敷地のせまい須工では適地が見つかからないのではと心配したが、校地の移転話が出はじめたので、そ

の際一緒に解決しようと考えた。今では新校地の玄関先で温顔を見せてくれている。

校長公舎

近くに校長公舎があつた。校地の南の畠の中へ建てたようであるが、周辺へ民家が次々と建てられたので、公舎への通路が曲がりくねり、幅せまいものになつてゐた。平屋で室数も多く、静かで陽当たりもよかつたが、私は高知に新築の自宅があるので、ここへ住むつもりはなかつたが、学校の校舎が大きくないから、来客や先生方と接したり交友するには都合がよからうかと思ひ借りることにした。

畑地であつたから雑草が生えやすい。きれいに抜いておいても、十日もたてば草ぼうぼう。家内を連れていつて草ひきをさせたがなかなか骨がおれた。

公舎は目的どおり使わせていただき、多くの方々と親しくすることができた。その後、新校地移転後も、しばらくは使つていたらしいが、今はなくなつてゐる。私には思ひ出多い公舎である。

キューポラとふいご祭り

私は理科教員だからといふのではなく、生まれつき工学関連のものに興味と関心をもつ。須工へいつてからも、ひまさえあれば、四つの科へ足を運び、ながめたりいじくつたりしたものだった。機械の鑄造工程も珍しく、故加藤先生からいろんなことをお聞きした。高校での鑄鉄鑄造はどこともあまりやらない。軽合金で間に合わすといいつつ、一度やつて見せてくれた。キューポラという名もはじめて聞いたが、

それとてかして砂の型へいこむのを見た。

またふいごまつりへは度々招待され、鑄ものに関して、けがれやよ
これを排除しようとする気もちを知って、大きな感動を受けた。

ダイヤル式電話器の自動交換機

須工電気科教室の隣室に、ダイヤル式電話器の自動交換機があった。
県庁の交換回路改修のとき、二〇個ぐらいのダイヤル式電話器と一緒
にもらったものらしい。古いものだったが、校舎内の各室に置いた電
話器の交換役を果たしていた。送信側のパルス電流に応じて、交換子
が上下左右に音をたてながら移動できていた。

電源として二〇ボルト二〇アンペア程の鉛蓄電池と充電用の電動発電機が
ついていて、先生方が交替で管理していた。懐かしい思い出である。

黄塵

旧校舎の北西側に運動場があった。北西の季節風が吹き荒れる冬期
には、運動場の土が大黄塵となって校舎へ吹きつける。あのあたりで
は頁岩^{けつがん}の風化した土が運動場の土として使われている。この土はきめ
が細かく、ばさばさしており、運動場用には最適であるが、飛び易い。
校舎の戸をどんなに閉めておいても、室内は黄土でまっ黄になる。化
学の実験なんか、とてもできなかったではあるまいか。
黄塵は校舎を越えてその先の住宅地域におそいかかる。まっ暗くな
るぐらいで、ひどいときは何百メートル東南方にも達する。公害にやま
しい今だったら、文句はいえないことになるだろう。

何とか妨げまいかと思ひ、須崎港内で浸水して、使えなくなった食

塩を五万円も買って、これを運動場にまきちらし、湿度を保たせよう
と試みたが、ほとんど成功はしなかった。

いつか東大の造船科教室で見かけた船体試験水槽のこと、先生方を
悩ませたアメリカ・シロヒトリ、校内体育大会の事など書きたいが。
紙面も尽きたので割愛させていただく。懐かしい須工、ますますの発
展をお祈りしている。

(昭和三十九年四月〜四十一年三月)

追 想

——しんまえ校長の七日間——

第九代校長 澤 本 豊

高知工業の教頭になって満二年が近くなった昭和四一年三月下旬、
修業式の翌日、私は定刻に出勤し竟いだ気分を腰を下ろした。

今日から四月まで朝礼はない。生徒は春休みだし、教員も「自宅研
修」という他の職場では考えられない休業期間で、殆どは出勤してい
ない。

一日の卒業式以来、入試、一次選考、第二志望者からの選考、委員
会への報告、合格発表等々、倉皇のうちに過ぎ去った二十日間余りが次々
と頭に浮かんで消える。

校庭の方で、いつもは聞こえない元気な声がある。何気なく行って
みると、一〇人ほどの生徒が大声をあげてボール蹴りをしている。

時は春、進級もした生徒達にとつては最高に楽しい解放された春休みだ。……そうさそうさ、今のうちだ、ウント遊んでおけ……。

と、「教頭先生、校長先生がお呼びです。校長室へおいでください」の校内放送が聞こえた。

急いでいってみると、午後委員会へ同行してくれとのこと……。

何事だろう？いぶかしく思いながらも、何か頭に閃くものがあった……。校長？バカな、まだ早い、第一俺は敗戦後の「デモ教師」の

端くれではないか、と打ち消しながらも閃きの余韻を秘めて……、

「承知しました。何時がよろしいでしょう……。」と、校長の都合のよい時間を聞いて引き下がった。

午後二時、校長（戸梶徳喜先生、のち教育委員長）に連れられて高校教育課へ出向いた。

道願課長（私の前任者で、二年前からの課長）は不在で、寺尾人事班長（現教育委員）と面談。班長は私達が腰を下ろすのを待ち兼ねたように、「戸梶先生のご推薦もあり、委員会としても先生に須崎工業の校長をお願いしたいのですがどうでしょう」という。

学校での「閃き」が現実のものとなった。途中でのそれとない戸梶校長の話ぶりからは察していたので、異議なくお受けした。

四月一日（三月末？）異動発令の記事を新聞で見、ほかの人達の異動もほぼ頭に入れて出勤。戸梶校長に改めてお礼を述べた後、事務室で二年前まで須崎工業にいた島内事務長に、学校の空気を聞いておこうと思つて話をしていると、澤本先生お電話です。浪越先生から……と誰かが取りついでくれた。

アッそうだ、浪越さんも須崎へかわつたと、今朝の新聞を思い

出しながら受話器を耳に当てると、途端に浪越さんの声、「校長先生ですか、電気の浪越です……。」……？、「イイエ、澤本です、校長先生は校長室ですが……。」と、笑いを含んだ浪越さんの声、「僕も今日から須崎です、今日から僕らアの校長さんですよ」。浪越さんのユーモラスな電話で自分の立場を改めて自覚させられた。

新任校へ……。今日から高知工業の人間ではない。一刻も早く須崎へ行こう。高知駅から汽車・徒歩合わせて一時間半、三時過ぎ学校着。南国から通える距離ではない、明日にでも転入手続きをしよう、須崎市民になろう。

何時か来たことのある木造で掃除の行き届いた校舎だ。

事務室で何人が雑談している。前任の西本校長は小津高校長に転補されたので今日は不在。事務室の人達に挨拶をして校長室に入ってみる。

一六坪、かなり広い。小会議のできる長いテーブルに椅子、応接セツト、校長用の備品、用具など全て整っている。校長の席の背後壁際には、創立功労者寺尾豊先生の胸像が安置されており、さらにその上の方天井近くには、南から北へ寺尾先生を頭に中内、西森、小林、前田、森岡……と、歴代校長先生の肖像写真を掲げてある。

校長室の雰囲気としては高知工業より優れていても劣りはしない。私は部屋の中央に立つて、暫くこれらの肖像や写真を凝視した。

美しい……。美しいというより何と美しい姿ではないか。

戦後、特に三十年代、教育の現場が荒れ果てた一時期以降、こうした麗しいすがたの校長室は数少なくなつたのではあるまいか、本校もあの頃は相当な荒れ方であつたと聞いている。にも拘らず、この麗し

いすがたを持ち続けた……。ご苦労さまでございました……。私は心の中で八人の先輩校長に話かけ、そつと頭を下げた。

初代 中内知章、三代 小林秀雄、五代 森岡貞篤(今の校長のお父上)のお三方は、私にとつて高知工業の大先輩である。森岡、中内両先生は機械科の一回と三回、小林先生は応用科学科の一回、しかもお三人とも、私が生徒の頃からの先生である……。出来の悪い生徒ほど可愛いときく、困ったときにはきつと導いて下さるだろう。身勝手だが、私は何となく心強くなつてきた。

今朝、島内事務長が言つた。須崎の用務員は申し分ないですよ。腰軽によう動く、気は利くし日本一ですよ……と。

そのご当人が、ノックをして入つてきた。「用務員の阿曾です。校長公舎へご案内しましょう」。挨拶がすむとこういつて先にたつた。なるほど島内氏のいつた通りだ。

市道を挟んで南側、校門から五十メートルほどか、森岡先生が終戦の前後、教授だつた多賀高専の官舎を模して建てた家だそうである。学校とは至近、庭は広く閑静、外部の騒音は全く聞こえない。最適の位置だ。しかも長として一校を預かる者は、至近の場所、許されるならば校地内に住まうべきだと私は信じている。森岡先生も同じお考えでここに定められたに違いない。

この公舎は、私がいた六年間、新年の祝宴や行事後の慰労会など教職員の友好親善の場としても大いに役立てた。

時計はもう五時近くを指している。今日はこれぐらいにして帰るとしよう。タクシーを頼んだが折悪しくないと返事、汽車に間に合ひそうにもない。そこへ運よく小松教諭が顔をだし、駅まで自転車で送っ

てくれるという。きけば進路指導の係りで、竹村教諭と二人が連日出動して求人書類の整理に当たつてゐるとのことだ。

ここ数年来、卒業生の就職は売手市場が続いている。道々の話によれば自宅は高知市内だそうだ。「今日受け付けた書類がまだ大分残つておる。明日は明日でまたドッサリくるから今日の分は今日中に片付けます。どうせ八時過ぎの汽車になるでしょう」と笑つた。「どうもご厄介をかけました。ご苦労さんです、早くお帰り下さいよ……」私はいつて引き返してゆく彼の後ろ姿を見送つた。

車中の人となつた私は、心地良い汽車の動揺に身を任せながら目を閉じた。慌ただしかつた今日一日が過ぎつぎと浮かんてくる。島内事務長の話、浪越教諭のユーモア、校長室でうけた強い感銘、竹村・小松両教諭の旺盛な使命感や親切……。

いつしか汽車は佐川について一休みしている。急行待ちらしい。遠く北の方に森岡先生が生前お住まいになつていた家が見える。

勤評闘争が過熱した頃、高知工業の校長だつた先生は、家に閉じこもつて苦慮されたことがあつた。先生のご健康を案じた私等独立教組の教員が二、三人でお見舞いに伺つたことがあるが、先生は泰然としたもので……「私のことは心配しないでほしい。それより学校の方を宜しく頼む……」と、逆に我々を励まされた記憶がある。

三六年三月、母校の校長を退かれた先生は高知学園の高知高専へ招聘され教授の職に就かれたが、翌三七年八月末急逝された。

巨星落つ。まさにその言葉そのものというべきか、享年六十五歳、全生涯を只管教育に燃やし尽くした先生。先生の死を惜しみ悲しむ人々の列は文字通りひきもきならず、式場に充てられたお家の前は東西

に延々と長く、黒一色に埋めつくされた……。

あの日は雨上がりで道がぬかるみぎみだった。ご健在だったら今日あたりご挨拶に上がった筈だが、何と言われたらう……。温顔に優しい笑みを湛えて、「おめでとう、おめでとう、暇があつたらゆつくり遊びに来なさい」と、ただこれだけいわれたに違いない。教訓めいたことをいわれる先生ではない。

……とつおいつ、いつしか汽車は高知駅に着いていた。

〔入学式〕

四月七日、今日は午前中二・三年生の始業式、午後は新入生の入学式だ。校長としての初仕事である。始業式のあと、早めに昼食を済ませてソファーに深く腰を下ろした。

校長は如何にあるべきか。好ましい校長像は……?。ここ数日来時々自分に問いかけてくる。

高知工業にいた昭和三十年前後のこと、校長の小松生幹先生(旧制物理学校卒、数学が専門だったが文芸の嗜みも深い知識人で、俳句を趣味とし六居と号した)と酒席を共にする機会が多かった。というのは、私も数学を担当していたし数学科の連中が申し合わせて度々先生を誘いだしたからである。そんな席の一夜、帰りの道々先生が話されたことが今頃になって蘇ってくる。

「校長なんていうものは、卒業式を立派にやることが一番肝心でそれさえできれば普段は教頭にまかせておいて、自分は校長室で遊んどつたらよい。居眠りしておってもいいんだよ」と、こんな話をされた。

敗戦後の一時期、「でも」「しか」教師という、教師を小馬鹿にした

言葉や耳にした記憶があるが、小松校長からこの話をきいたのは敗戦で職を失った私が、その「でも教師」になって間もない頃だったので、自分とは無縁、先生の自賛の弁として拝聴したことだった。

今度のことで義父に挨拶にいった。三十年近く小学校の校長を務めた義父は「生徒のことは全部先生達に任せておいて、豊は先生方が幸せになるように、そればかりを考えておればよい……。」と、こんなことをいった。

父は父で、「学校で何が起きようとも、責任は全部自分が負うという覚悟でやれ……。」と親父らしいことをいった。

六居先生の話も義父の教訓も、ともに立派であつて一脈あい通ずるところがある。

義父は、戦前戦中の校長であつて、現職のときはその言葉通りの校長だったと聞いている。小松先生も私の記憶ではあの言葉そのものだった。しかも校内は波一つ立たず、教育効果も上々だった。

しかし、今だったらどうだろう……?、校長を取り巻く内外の背景は、義父の時代とは比べるまでもなく、小松校長の時代からでも十年、この間の激変は筆舌のよくするところではない。昔の水とは水が全く違う。鵜でも泳ぎ辛かろう、真似は禁物だ、自分の持ち味でゆくしかあるまい。

時計は一時に十分前、もうぼつぼつだナ……。こう思う間もなく「用意ができました……どうぞ……。」との案内で私は式場に入った。

校門には阿曾用務員が大きい日の丸を掲げたが、式場にはなにもない。

〔開会〕

「ただ今より、昭和四一年度入学式を挙行します」……河内教頭の開会宣言によって、式は定刻一時に開始された。

〔入学許可〕

進行係の「入学許可」の声で、私は壇上にあがった。

演壇に近く、今日入学を許可される二百四十名の黒服が、数行の間隔をおいてほぼ同数の保護者とともにやや緊張の面持ちで私を見上げている。

竹村教諭のよく通る声が講堂一杯に響く……。昭和四一年度、入学を許可されるもの。機械科……池島良和、池田新一……。生徒は気持ちのよい返事をして次々に立ち上がる。続いて造船科、電気科、化学工業科の順に、新入生の全員の氏名が読み上げられ、「以上、二百四十名」で言葉をきった。

私は、左から右へ全員を見渡してから……。
「ただ今の二百四十名にたいし、本校への入学を許可します。」と、できるだけ力強い口調で宣言し、「生徒着席」の声を背に聞きながら降壇した。

腰を下ろす間もなく、再び進行係の声が凜然と響く。

「学校長式辞、新入生起立」

式は五日の職員会で決定した順序通りスムーズに進行する。

〔式辞〕

（これからが本番だぞ）胸のうちでつぶやきながら、私はゆっくりと壇上にあがった。全体を静かに見渡しておいて……、

「新入生の諸君おめでとう。ご父兄の皆様おめでとうございます。

新入生の諸君、諸君は今日から本校の生徒であります。今から私達と諸君とは、師弟という美しい絆で結ばれることになったのであります。このことをお互いに強く自覚し、大切にしていきたいと思います。

さて皆さん、高校は義務教育ではありません。諸君の中には、中学校を出たら自分は須崎工業へ行くんだと、一筋に本校を志した人も少く、二つか三つの高校を比べ考えた上で本校に決めたという人も少なくはないと思います。

その何れにしろ、最後に決定したのは諸君自身であった筈であります。自らの意思によって決定したことには責任を負い、それを果たさなくてはならない。諸君の果たすべき責任とは何か、いうまでもなく立派に本校を卒業することである。三年後の三月一日には堂々と社会へ一本立ちしていくことである。……中略……

最後にこの学校の歴史、他に例をみることの少ない麗しい創立の事情についてお話をしておきます。ご父兄の皆様も、殆どの方はご存知ないでしょうから、一緒にお聞きいただきたいと思ひます。

この学校ができたのは昭和十六年でありますが、当時中等学校、中等学校というのは今の高等学校のことで、農、工、商、それに普通高校の全部を指して中等学校と言っていました。しかし、その中等学校が、ほとんど高知市に集まっています。東は安芸、西は中村に、男子の中学校と女子の女学校がそれぞれ一校ずつあるだけで、他には全くありませんでした。

当時は須崎も市ではなくまだ町でしたが、時の町長であった池内実吉氏が非常に教育に熱心な方で、このことを残念に思い、須崎へ中等学校を設けようと有志を募って県へ盛んに運動したそうです。しかし

貧乏の悲しさ、中々実現しない。

それを聞いた当地出身の参議院議員で、後に郵政大臣にもなった寺尾豊氏が、郷土の少年の教育に役立つならお手伝いしよう。但し条件がある。工業学校を創ってもらいたい。中学や女学校でなく、工業学校を創るなら……、という条件で、今の貨幣価値なら四億円という大金を県へ寄付され、その結果この学校が誕生したのであります。

寺尾先生が、ぜひ工業学校をとという条件を付けられたことは、私がご本人から直接お聞きしたことだから間違いありません。また、その理由についても心境をお話しされましたが、今日は触れないことにします。

さて、ここ十年ぐらいの間に、高知県立高知何々高等学校という学校が随分できました。西に東に雨後の筍のようにできました。

しかしその総てが進学希望者の急増対策とか、全員入学の要望対策とかの産物であって、本校のように郷土を愛する人々の熱意と誠意によってできた学校は一枚もありません。諸君はこのことを肝に銘じ、大いなる誇りと希望とをもって、明日からの勉学に励むよう切に希望します。」

と結んで壇を降りた。

学校創立の歴史は、これからも毎年話すことにしよう。それはいくらか強調しても強調し過ぎることはない。先人に対する礼儀であり、同時に謝恩の一端でもある。

初仕事は終わった、まずまずの首尾か……。これから自分の持ち味で、好ましい校長像を追求していこう……。……。

(昭和四十一年四月〜四十七年三月)

思い出のままに

第十代校長 村木 威

創立五十周年を心よりお慶び申し上げます。

昭和四十七年四月一日私は須崎駅下車、川端通りから目鏡橋を渡り西糺町の旧校舎に着任しました。教育的環境を考慮されて移転先の校地の選定、新校舎の建設等、長年にわたる大事業を成し遂げられた前校長澤本豊先生の懇切なご説明で引き継ぎをお受けしました。

四月七日の始業式と入学式、八日には新旧生徒の対面式等あわただししい日程を終え、十日(月曜日)には、いよいよ大移動を開始しました。国道を当時八百名近い職員生徒が文字通り長蛇の列をつくってそれぞれに引越し荷物を持って黙々と歩く姿に、長年の歴史を経た思い出多い古い学舎を後にする一人ひとりの胸の中が伝って来る思いがしました。道行く人からも自動車の窓からも珍しそうに眺められ、手を振る人もいました。ようやく和佐田ヶ丘の上に到着した一同は南方に広がる須崎湾と北方の緑に萌える連山に囲まれた素晴らしい環境の新校舎があこがれと希望に満ちた我らの母校だという心境に一転したことでした。

実験実習室や備品設備の多い工業高校の移転が聞きしに勝る難事であることを痛感すると共に、従って出来るだけ早急に平常授業が行えるよう、放課後も遅くまで頑張って整備整頓に努めました。

十一月二十五日には移転新築落成並びに創立三十周年記念式典が挙行され、当日は校地の選定当時から現地視察等随分とお骨折りに下され

た溝淵県知事殿並びに多数の来賓各位のご臨席を頂きました。祝辞や感謝状・表彰状贈呈の式次第が進む中で、長年月に及んで非常に多くの方がたの物心両面にわたる多大のご支援ご協力の結晶が今日の盛大な式典に結びついたものと深い感銘を覚えました。

当日式典終了直後本校創立功労者寺尾豊先生の胸像の除幕式が同窓会の手により本校玄関前に於いて関係者多数参列の下に行われ、名実共に堂どうたる白亜の殿堂が和佐田ヶ丘に永遠の姿をとどめることになりました。

本校造船科は県内で唯一の科で私にとっては全く予備知識がなく関係書類に目を通しておりましたが、夏休み直前に造船科生徒数人が造船クラブで造った船で休暇を利用して四国一周したいと準備万端整えて申し出がありました。県外への旅行は県教育委員会の許可が必要であり、取り敢えず電話で連絡をしたが許可の見込みがないことがわかりました。さあそうなるかと説得をしなければならぬ……。生徒は今にも泣き出しそうな顔。充分に納得させることが出来なかつたこちらこそ泣きたい気持ちでした。あれから十九年を経た今でも、あの時の生徒諸君はどうしているだろうか時々思うことです。

本校の造船クラブはテレビや新聞にもその活躍ぶりが時どき報ぜられ、丘の上で造る船がだんだんと大型になり、海岸まで運搬するのに途中の民家の屋根に接触の恐れが出来てきました。そこで海岸の一角に臨海実習用地の確保と臨海実習棟の建設の予算要望を提出陳情していただきましたところ、ある会社から海岸の用地を貸して頂き実習棟は県が建てるとの内諾を得ましたが、その後世界的な石油ショックによる経済不況のあおりを受けて協力会社から辞退の申し出があり、再び出発

点に戻り要望陳情を続けましたところ昭和五十一年三月二十三日の高知県公報に次の記事が発表されました。

須崎工業高等学校(昭和五十一年一月十九日実施)

校地の確保について

本校の造船科は、本県唯一のものであり、定員の確保及び卒業生の就職においても、良好な成果をあげているところである。従来から、造船科実習棟の臨海建設が望まれており、適当な用地があるところから、その確保につき本庁の配意を望んでおく。

右のような誠に有り難い心強い公表を頂いたことでした。

本校在職中の思い出は数かずありますが、不慮の交通事故死をされた生徒のご父兄が、ある日トラックで大きな蘇鉄の樹二本を交通安全を祈念されご寄付を申し出られました。同級生全員がそろって放課後玄関前の庭園の一角に植樹をしました。下校する生徒たちの目にとまったことはもちろんです。それから確かに交通事故が少なくなりました。

先日卒業式にお招き頂きましたとき、玄関近くの茂った蘇鉄の樹を見て胸を打たれたことでした。

昭和五十年十一月二十六日から七日間連続で国鉄ストが行われました。本校生徒は他校に例がない程、国鉄利用者(四十三%)が多く、授業をすれば学期末試験前で出席できない生徒に格差がつくことは明白であり、無理してオートバイで遠距離登校する生徒の事故も心配で、職員会議にかけて国鉄ストが終わるまで臨時休校に決しました。

このことはテレビや新聞に大きく報道されましたが、必要授業時間確保という共通理解が互いに出来ていたので大晦日も近い十二月二十

七日に生徒は大手を振って登校し職員生徒一同爽やかな気分を終業式ができたことは忘れ難い教員生活の一コマでありました。

本校受け入れの教育実習生諸君のこと、徳島での工研会の折、港でみた本校造船クラブ製の「メイワライン」の面影、台風で学校へ避難して来られた老夫妻の温かいお言葉等など思い出は尽きませんが……。

それでは、遠くから仰ぎみる和佐田ヶ丘の懐かしい学舎が一步一步と立派な歴史を築かれてゆきますことを祈りつつ筆を擱きます。以上

(昭和四十七年四月―五十二年三月)

須工と私 —二度の勤め—

第十一代校長 大 島 正 賢

須崎工業高校創立五十周年おめでとうございます。

五十年前と申しますと、昭和十六年太平洋戦争の始まった年です。

私はその年三月に高知工業学校を卒業しました。卒業前にこんな話を先生から聞きました。

「東京で大成功している寺尾豊という大先輩が、本校の創立者竹内綱・明太郎両先生にあやかり、今度県に多額の寄付をしたので、寺尾さんの出身地須崎に県は工業高校を四月に開校するらしい」、「工業学校が高知にも、いよいよ、もう一つできるぞ」と我がことのように嬉しく心強く感じたことを今でもはっきりおぼえております。そんなわけで私達高知工業の同期生にとっても、卒業後五十年目を迎えるわけで、須工の創立は私たちにとっても忘れることのできないものとなっております。

十五年間住みなれた大阪から、家庭の事情で昭和三十七年に、土佐山田町に帰り、須工でお世話になったのも何かのご縁です。当時の校長先生は恩師の小松一夫先生であり、有り難いことでした。家庭の事情とはいえ、「ごめん」からの通勤列車はきびしく、毎日が憂うつで先生方にも生徒諸君にも随分ご迷惑をかけたことです。

赴任して間もない五月、開校記念日の校内相撲大会は忘れられませんが。新任の先生方がチームをつくり、生徒と対戦するという昔からの申し合わせにも驚きましたが、わが「機械二A大島ルーム」が小兵小島君らの活躍で準決まで勝ち進み、勝つ度毎にゴロ合わせのよい「オオバタケルームのコバタケ君」と社会科藤原脩先生の名アナウンスがあり、当時校内で話題になったことは嬉しいことでした。

相撲大会といえば、私が再度着任してきた昭和五十三年のことですが、そのころ新莊川に「カワウソ」が出現し、テレビの取材もにぎわいました。本校の相撲大会も取材され放映されました。「近ごろの相撲はトレパンの上に回しをつけるのですね」とアナウンサーがしゃべっていたことを思い出します。

最近はこの相撲大会もなくなり開校記念日は綱引き大会に変わったようで、時代の流れを感じます。

札町の旧校舍跡に立派な碑が建っておりますが、その傍らの現在の須崎商工会議所の建物には、私の若かりしころの思いがこめられています。と申しますのは、この建物は昭和三十八年機械科・電気通信科の実験実習棟の改築のため、加藤秀季・島崎良一・田村泰男・福富恒彦・吉岡善次各先生たちのご協力をいただき、鑄造・木型・鍛造・材料・精測の実験・実習室の間取り図面を苦勞してつくった思い出の作

品です。内部改造して商工会議所として生れ変わり現在も健在であることは、眺めるたびに胸の熱くなるのをおぼえます。

近くに校長公舎がありました。わずか二年間の生活でしたが、私が最後の住人であり、その後取り壊し、現在は須崎市に移管されたと聞いております。第五代森岡貞篤校長先生が、多賀工專の公舎をモデルに設計されたようで、間取りもゆつくりし、風格のある落ち着いた公舎でした。特に玄関から食堂までの長い廊下は気に入りました。週末には孫の「ハイハイ」にも格好の場所となりました。永く保存したい貴重な建物でしたが、何分道から玄関までが袋小路でもあり惜しいことをしました。

昭和五十三年からの再度着任は現在の和佐田の丘でした。「環境のよいこと県下一の高校だ」と、いつも生徒諸君にも話しておりましたが、わずか二年間の未熟な校長としては、私の高知工業時代の恩師でもある中内・小林・森岡・小松の歴代校長先生たちのあとを引き継ぎながらも、何も十分なこともできず、お恥ずかしい限りでございました。

いま、学校を訪ねてもお世話になった先生方がご健在であることと、二年間に手掛けたいくつかが現存して、息づいており嬉しくなります。プールの落成式は着任早々でした。中庭の防火池跡の花壇は生徒諸君から募集した入選作品をもとに造ったものです。渡辺辰夫事務長にご面倒をおかけした屋上の大看板はいまま車や列車から懐かしく眺めております。

昭和五十三年全国植樹祭が天皇陛下ご臨席のもとに、県立甫木ヶ峰森林公園で開かれたのを記念に、県下高校に桜の苗木が県から配布さ

れ、当時環境部長であった竹内良雄先生たちがトラックで土佐山田町までもらいに行き、グラウンド北側と校門までの通学路の坂道わきに植えたことでした。北側の分は「桜の名所」にとの夢もありました。竹村義典先生の夏休みの下刈り奉仕もあり、お世話いただきましたが、苗木の性もよくなかったのか、その後花を見ることができないようです。また、坂道の桜は生長すれば、生徒諸君の登校時、春は花吹雪、夏は涼しい木陰を提供してくれることを念じておりましたが、坂の下の人々からの安全上の苦情もあったとか、その後根こぎしたようではとうに残念でなりません。

昭和五十四年久し振りに野球部復活、機械科植田豊年先生監督のもと、初の公式戦出場は、その年の秋季大会、優勝候補明徳高との対戦で、はなばなしくスタートしたことも忘れられません。

いまはその後の野球部や他のクラブの活躍振り、須工の近況などをテレビや新聞で拝見するのを楽しみにしております。

何かのご縁で結ばれた須工と共に私も年を重ねていきます。

「須工よ！ 永久に幸あれ」と祈り筆を擱きます。

(昭和五十三年四月―五十五年三月)

須工三年間の思い出

第十三代校長 宮地恒雄

須工五十周年記念を心からお喜び申し上げます。

浅学非才の私がはからずも、昭和五十七年四月一日から三年間、須

工校長の椅子に座らせていただきました。

○私の信条

①多様性の中の統一 ②原則はかたく、事に当たっては柔軟に対応する。③教育の世界では、自主性・自発性が尊重されなければならない。④目的意識をしつかり持ち、活力に満ちた生徒の育成を図る。⑤生徒の心を引き付けてしつかりと指導し、むやみに生徒を叱りとはしたままにはしない。∴「子供叱るな、来た道じゃもの」などです。

初めての校長職だったので、多少の気負いもあったのは事実です。

これは校長が決定すべき事項だと信じたときには、信条に基づき肚を据えて差しきった事もありました。

○須工の危機

正直に言って、最初の始業式にのぞんで一部の生徒の頭髪(色ぞめ)、服装(ボンタン・ズボンや短ラン)には少なからず驚きました。休み明けの状態であるにせよ、これではいかん、何とかしなければいけない。全教職員が危機感を抱きました。職員会を開いて意思統一をし、正常化のためには「イカンものはイカンと、一步も引かずに指導するべきだ」という結論に達しました。

○授業放棄

五月七日に早速その反応がありました。三年生の一部の生徒に下級生なども同調して、学校側の生活指導が厳し過ぎるとして教職員に反発し、授業放棄に発展する騒ぎがありました。これは生徒会と直接関係のない行動でした。

その後、生徒指導部と生徒会が十分な意思疎通を図りながら、地道に学校の正常化に取り組みました。生徒には、要求があればクラスで

話し合い、その上で生徒会で練り上げて、提出して来るように指導しました。もちろん教職員一同が力を合わせて、ことにあたり、お陰様でPTA役員や保護者の方々のご理解とご協力をいただくことができました。

○県体で汚名をそそぐ

すぐそのあとの五月末の県体では、須工の入場行進が教育関係者等の注目の的でしたが、全員そろって短パンで一糸乱れぬ行進を見せました。「須工はえいじゃいか、たいしたもんじゃ」などと言われて、実は背中に冷や汗が流れました。

○門前指導の新方式

これは生徒指導部の提案で始めました。その期間中は毎朝七時四十分から八時半まで、門前で全教職員が交代でクラスごとに生徒の服装、頭髪、あいさつなどについて指導しました。六月二十六日は、例の五月七日の件以来の最初の門前指導とあって、谷口慶助PTA会長さんや本部役員さん、支部長さんにもご来校いただきました。新聞記者も来て取材するなど、やや緊張気味の感もありましたが、さすがに目立つた違反生徒もなく一月前とは見違えるようすつきりした生徒の姿に、見に来てくださった方は学校の指導と生徒たちを、再評価してくれました。

○遅刻指導の徹底

生徒部・正副主任などが、毎朝の遅刻指導に追い詰めをきかせ、三年目には、遅刻者が日に一名あるかないかになり、学校が変わりました。須工のやる気集団の先生方のお陰様です。

○交通安全指導

八月二十五日に全国高P連は、高校生のバイクによる事故激増を憂えて「免許をとらない」「乗らない」「買わない」の三ない運動を決議しました。そこで須工も前年度に発生した交通問題を分析しました。スピード違反が五二件など、年間の違反総数が二二五件にも達していることが分かり、指導の限界にきているとの結論になりました。新しく昭和五十八年度からは特別に必要な者以外の者には、免許取得禁止の方向を打ち出しました。

○バイクによる生徒の死亡事故

校長としては生徒の死亡事故ほど悲痛なことはありません。告別式には大勢の生徒と共に、涙でお見送りをしたことでした。

○初めて、全校挙げて地域清掃

生徒会(前田司会長)の活動の一環として、昭和五十八年六月二十九日全校生徒が実習服に身を固め、学校周辺の清掃作戦を繰り広げ、心地良い汗を流しました。市役所の応援を受けて、二台のトラック三台分のゴミが集められ、市民からも「炎天下にご苦労さん」と感謝されました。

○精勤賞・皆勤賞の新設

出席率向上策の一環として山崎生徒部長を中心に、生徒部が職員会に提案し、もみにもんだ末に決定しました。その結果、全校生徒で精勤賞又は皆勤賞をもらう者が五五割に達し、中には七〇割を目指すクラスもできるようになりました。正・副主任も毎日まいにち大変だったろうと感謝しています。

○フィールド・ワークの初実施

熱意あふれる同和教育部の教職員と全教職員のバック・アップによりまして、十一月十二月に初めてフィールド・ワークを実施いたしました。この計画の実施に当たっては、須崎市役所をはじめ市民館や漁協など、多くの方々や関係機関が協力して下さいました。

新庄漁港、須崎ニット工場、魚市場、シラサ加工場を現地学習をさせていただいて、これまでの学習を生徒自身の目で確かめ、肌で感じ、体験出来たまたたない貴重な機会でした。

○同和問題の正しい認識をと、初めて生徒が街頭に出る

昭和五十九年七月十九日、生徒が初めて街頭へ出てマイクを握り、ビラを市民に配って啓発活動を行いました。市民の方々からその勇氣と情熱にお褒めの言葉を沢山いただきました。

○列車ダイヤの改正に成功

昭和五十七年度から、初めて放課後の清掃を行うことになりました。授業放棄後の、生徒会の要望の一つとしてダイヤ改正の要望が提起されました。清掃のために帰りの上り、下りともに待ち時間が大幅に長くなるというのが、その理由です。

早速職員に諮り、代表には小松雅雅県議会議員さんになっていただき、谷口慶助PTA会長と私、須工石本勝広生徒会長、須高文野校長、同柳本PTA会長、同笹岡生徒会長、岸本佐賀町長、藤戸窪川町長、野口中土佐町長、谷須崎市長の連名で陳情書をつくり、国鉄四国総局長、高知運輸長、須崎駅長に提出し、その上でしばしば足を運びました。「なんぼやったち、どうせいくもんか、国鉄がどういて須工のため

にダイヤを改正してくれるぜよ」としばしば耳にしましたが、努力の甲斐あって、昭和五十九年二月一日付の改正で、ほぼ要望どおりになりました。特に佐賀町の生徒が「先生、やったやいか、ありがとう。ボクら毎日五十分ばあ窪川で待たされよつたがぜよ」と感謝されて、本当に良かったなあと思いました。

○授業参観で生徒が居眠り

指導は絶えず繰り返されなければなりません、言うは易く、行うは難しです。授業参観日に、石川PTA会長さんから「授業中にあるクラスでは、生徒が居眠りをしていた。前夜の夜更かしのために、あきらかに睡眠不足である。親もすっかりしななければならないが、先生方も鋭く注意を払っていただきたい」と厳しいご注意がありました。早速に職員会でもその指導をしっかりと話し合いました。私は生徒会新聞の「須工タイムズ」に「授業を大切にしよう」の一文を、トップ記事として掲載し生徒の奮起を促しました。

○初スキー研修旅行

これまでの修学旅行に替えて、昭和六十年一月二十八日に二年生を連れてスキーに行きました。長野県牧の入ビレッジの指導員に、「この学校の生徒さんは大変上達が早い」と褒められました。が、本当は無鉄砲な生徒が多いと言われているのではないかと勘ぐりました。しかし、たいした怪我もなく、生徒たちも大喜びで帰ってきました。

○須工の卒業式

敬肅で祝意に満ちた卒業式、そして涙して退場する卒業生を拍手で送り出すとき、私はいつも須工の教育は間違っていないと確信しました。

それぞれに 男ぶりなり 卒業す

つくし会第十二作品集 高橋海棠作より

私の好きな一句をご紹介します。

○私が非力のため在職中にはいろいろの事もあり、竹村教頭先生や渡辺事務長さんをはじめ教職員はいろいろにおよばず、同窓会・PTA・須崎市役所・同奨生親の会・補導センターなど地域の沢山の方々に、陰になり日向になりして大変お世話になりました。私の在任中に多少なりとも教育の向上があったとすれば、右記の方々のお陰様だと、今私は反芻して感謝しています。格別に校長が何をしたと言うわけではありません。振り返れば幸せでした。紙上をもちまして、有り難く厚くお礼を申し上げます。

なお、森岡 清校長先生は、皆様も既にご承知のとおり、須工出身であり、しかも親子二代にわたつての須工の校長先生です。学問の深さは、かつて文部省から依頼されて教科書を執筆されたこともあるほどです。企画力・手腕力量も抜群であります。どうか教職員も生徒諸君も、校長先生をもちたてて、五十周年記念を契機に須工がますます発展しますようにお祈りいたします。

(高知県教育委員会 教職員相談員)

(昭和五十七年四月―六十年三月)

須工創立五〇周年におもう

元教頭 田村隆徳

創立五十周年記念、この声を聞くと、嗚呼、もう五十年もたったか、早いもんだなあとと思う。はるけくも来つものかな、と思う。当時を思い出そうとすれば、眼前に展開する湾岸戦争と、当時の世相、大東亜戦争とダブッテ変な気分になる。それを振り払って、あえて駄文を呈する次第です。

私が須工に奉職したのは昭和十六年、二十六歳の初夏でした。須崎小学の裏庭で、一期生の諸君二クラスに、「これから皆さんと一緒に勉強できるのを嬉しく思います。よろしく」、とのあいさつが終わって散会、教室へ帰る数分間に、たちまち私の名譽あるシコ名「ダンゴ」が決まって、以来永年にわたって生徒間ではこれが通用してきたようであります。これは命名者自身(田辺前同窓会長)が卒業後相当たってから私に話してくれたことです。なお、このシコ名は三井玉野造船にも知られていることを知り、ちょっと驚きました。爾来私は私のシコ名に敬意を表して「ミスターダンゴ」ということにしました。

さて、恩師中内知章先生に拾われて須工の助手兼教授囑託となった私は、会社の垢にまみれた我が身を、きれいさっぱり洗い流して、これで少しは教師らしくなったと自ら思えるようになるには、約半年余りはかかったように思います。往時茫茫として夢の如しとか、どうも正確には思い出せない面も多々ありますが、以下失敗談とか、これだけ書いておきたいとかいうことをポツポツ書いてみます。

須崎小学校での間借り生活の時、生徒は一期生二クラス、専従職員は四、五人。授業は半分は教室学習、半分は校舎予定地の整地作業。何だか塾のような感じでした。

ある時文部省のお役人が三人くらい視察にみえました。私は用器画(製図の基礎画法)授業を割り当てられました。当時としては文部省の視学さん?(督学官?)の学校視察という是相当大変だったらしいですが、会社で毎日設計から回ってくる二、三十枚の部品図を見ていたんだという自負心があったらしく私は割合平気でした。ところがです。授業が終わって、小学校の放送室で講評(これが場所が悪い)という段になって、若いお役人が「あれはいかん、これはこうせねば」と散々でした。これを聞いて私も、この人若いに似合わんなかなか勉強しているなど感心しました。後で校長さんが気の毒に思ったか「皆が皆製図学校で勉強したわけじゃないからねえ」と慰めてくれたことでした。

後日、黒岩の本屋で清家先生著「製図考」という分厚い参考書を取り寄せて見たところ、批評の中身は全部この本に出ており「なんだこの本の受け売りだったか」とちよつと悔しかったのを覚えてます。以後何十年の間には、大小色々の失敗がありました。これが第一回の、高くもない鼻柱をヘシ折られた失敗談です。どっちみち自分の人生そのものが失敗の連続だから、前述のどうしても書いておきたいことをまずさせておきましょう。五代校長森岡貞篤先生のことです。

先生は高知工業第一回生で、校主竹内明太郎先生の囑望を受け、学校(高知工業)の将来を託すという意味で、校費で早大へ派遣され、理工学部卒業後帰校された方であるという話を、古い先輩方から聞いた。

てもいたし、自分が高知工業五年の時の主任先生でもあり、ご郷里が同郷でもあるというわけで、兼々深く尊敬申し上げておりました。

終戦後、多賀高専から帰郷された後は度々お宅に参上、夜おそくまでいやな顔一つなさらず何かにつけてご指導頂きました。夜十時を過ぎることもしばしばであったと思います。卒業生の就職の問題、入学生望者の数の問題、質の問題等々、自分が思い悩んでいたことどもを打ちあげてご指導頂いたと思います。時機がきて、先生が須工校長に発令された時、多くの先生方が心底喜んだことを覚えております。

昔習った歴史の中に、建武中興の祖という言葉があつたように思いますが、まさしく先生在校中の学校の状況は、戦後中興の時であり、先生がその祖であると確信しております。人によっては何だつまらないと思われるかも知れませんが、私の心に深く残っていることを二、三申しますと、「高知工業より劣つていると思われる生徒を受け入れて三年間にみっちり教育し、送り出す時には高知にまさるとも劣らない人に育て上げることこそ教員冥利に尽きるというものじゃないですか」。これが生徒の質についての考え方。入学志願者の減少に対しては、就職率を上げること。方法に関しては、高知工業の先輩とか県出身の縁故者を頼って極力間口を広げること、もちろんダイヤモンド社の会社要覧を利用すること。

これらのことは以前からやっていたが、就職後の定着性に関しては非常に重要なので在学中によく話しておくこと。等々手をつくしてやりなさいと教えられた。言葉だけでなく、先生が須工に來られてからは身をもって教えるという風で、私を連れて大阪・東京に開拓に向かれました。

今でもはつきり覚えておるが、大阪で宿に着いて、夜半かすかな物音に目ざめると、先生が地図を開き翌日の計画を立てて居られるのを見て恐縮したことでした。

先生は物事をいい加減にはせず、校長式辞等で原稿ができると私を前において読んで聞かせ、感想を求めるといふ具合に万事に慎重な方でした。

脱線するけれども、先生にもシノ名がありました。題して「バターン先生」、高知工業時代の悪童たちの間でもめつたには聞かれませんでした。

半世紀近くを経た今、須崎工業校長室で貞篤先生の御曹子清先生と共に、懐かしい中内先生・小林先生・前田先生・森岡先生等四人の恩師の遺影を拝する日の近からんことを祈ります。

須工に幸あれ！

卒業生諸君、在校生活諸君に幸あれ！

(昭和十六年七月～三十七年三月・四十四年四月～四十九年三月)

防火訓練の思い出

元教頭 久 正一

学校において学校長は政令により防火管理者を選任し、学校内における消防設備、消火活動上必要な施設の点検及び整備又は火気の使用取り扱いに関する監督を行うため火元責任者を定めて必要な指示を与えることになっています。防火管理者は自治省令で定めるところによ

り、消防計画を作成しこれに基づいて消火、通報及び避難訓練を定期的を実施することになっていきます。どの学校でも防火管理者は教頭が選任されています。私が昭和四六年教頭となってからも須崎消防署と協力して防火訓練を年に一回実施してきました。

昭和四七年四月、現在の新校舎に移転してからは消防施設設備も完備し管理も楽でした。防火訓練は本館又は南校舎の一階で発煙筒により火災を想定して、非常ベルを鳴らし事務室から消防署に連絡し、全校にマイクで発火場所を知らせ、授業中の教師により速やかにグラウンドに避難誘導する訓練と、グラウンドで火をたき泡消火器と粉末消火器による消火方法の実演をし、一部消火栓による放水訓練を実施してきました。最初の三年間は消防署の協力でハシゴ車により、本館屋上にいる逃げ遅れた生徒を救出する訓練も行いましたが、ハシゴ車が古くなり救出訓練は翌年から中止しました。

昭和五一年一〇月二八日(水)の五・六時限に実施した防火訓練のことです。造船科職員室に山崎吉広先生が漁船からもらって戸棚に保管していた、船舶が夜間遭難時に使用する落下傘付き信号が二筒ありました。このまま置いておくと発火した場合は火災の原因となり危険だから防火訓練の時使用すれば生徒への教育にもなるし、消防署も居るし度良くはないかと相談し、消防署長さんの了解も得たので、グラウンドに避難していた全員に事情を説明して実施することになりました。しかしこの日は曇っていて桑田山からの北風の強い日だったため、桑田山の頂上に向けて発射したが角度が低かったため、落下傘付き信号が北側の斜面に落ちて燃え残った発光剤が枯れススキに燃え移り燃え出しました。

これは大変と消防署の方や先生方が消火器で消火してくれたので、次は中止しようと思った途端、消防署のAさんが二発目を真上に向けて発射してしまいました。しまったと思いながら見ていると、一五〇メートル上空で開傘し北風に流されながら次第に落ちて、プールの南の山頂の檜の枝に引っ掛かりました。ところが落下傘の糸が焼き切れて発光剤が地上に落ち、枯れ草が燃え出して煙が立ち上り本当の山火事となりだしました。

消防署はプールの水で放水訓練をするためにホース車も用意していましたが、山の上までホースを引っ張って行って放水するまでには時間が掛かります。この強風だから大火災になると思い一瞬背筋が寒くなりました。しかし数人の先生と消防署の方が駆け登り木の枝で打ち消したり、足で踏み消したりして消火してくれ、大事に至らずと胸をなで下ろしました。後は残りの消火器を使って無事に消火訓練を終えることができましたが皮肉なことに終了後は北風がないで無風状態になっていました。

思わぬハプニングで防火訓練が本当の火災消火となり、火災の恐ろしさを痛感した訓練でした。渡辺辰夫事務長の話ですと、外部から学校の山から煙が出ているが山火事ではないかと何回も電話が掛かったが、事情が分からないから、ただいま防火訓練中ですというところと了解してくれたとのことでした。村木校長先生と渡辺事務長が後で山主にあいさつに行かれ、ご迷惑をかけましたが、消防署の方も胆を冷やされたことと思います。

翌年から消防署へ防火計画の許可をもらいに行く時はこの事が話題になり、語り草になりました。須工在職二六年間の強烈な思い出の一

つです。海上で使用する火器を陸上で使用したのが失敗のもとだったと反省しています。後輩の皆さん方も火の扱いには十分注意して、立派な校舎を火災から守って頂きたいと思います。

(註) 船舶救命設備規則

船舶救命設備規則

第二章 救命設備の要件

第一節 救命器具

(落下さん付信号)

第三十三条 落下さん付信号は、次に掲げる要件に適合するものでなければならぬ。

- 一 ロケット作用その他これに相当する方法により上昇し、おおむね高さ百五十メートルの箇所において開さんし、かつ、点火し、毎秒四五メートル以下の速度で落下しながら二万カンデラ以上の赤色星火を三十秒以上発することができること。
- 二 保存に堪え、点火に危険がなく、かつ、不時に発火しない品質のものであること。
- 三 短銃式その他これに類似する方式により発射されるもので、かつ、使用の際危険を生じないものであること。
- 四 防湿性包装材料で密封されていること。

(昭和三十一年四月～五十七年三月)

昔と今

前教頭 竹村 義典

昭和十六年から平成三年。須崎工業学校として創立以来五十年の星霜を経て、今秋には祝賀行事が行われる由、誠に目出度く、お喜び申し上げます。この間四〇年も勤務させていただいた者としましては、自分の人生とも絡み、誠に感慨無量です。

栄枯盛衰は世の常ですが、国の経済動向、科学文化の進展に伴う価値観の変化で、学校教育への期待、入学生徒の質が変化し、色々ありました。しかし過ぎ去った過去への回想は現在の隆盛をみる時、すべて楽しいものとなります。

寺尾豊先生の工業学校創立の精神と、地元の人々の尊い汗の奉仕で生まれた学校は、歴代校長先生を中心に教職員、地元有志、PTAの協力、そして高知市支部を核とする同窓会の強力なバックアップが伝統を守り、今日の姿となったものと慶祝の至りに存じます。

創立当時は半世紀前、人生五十年といわれていた時代で、今とは随分と違っていました。そこで昔と今を比較してみます。

「戦争」 創立時は大東亜戦から太平洋戦へ突入した時代で、校舎には予科練生が駐屯していました。私は学徒動員で働いていた三井造船の上司の弟さんに軍刀を届けるため訪問したのがご縁の始まりです。帰路、高知に降りると中心部は焼け野原。米軍のグラマン戦闘機に追われ、壕ごうの中で聞いたB 29爆撃機の落とした一ト爆弾の音をはっきりおぼえています。今、中東湾岸戦争ですが、日本は敗戦の混乱から立

ち直り、経済大国となり平和が長く続いたものです。今日は地上戦へ突入と報じられていますが、軍事教育を受け、戦争を経験した者として、一日も早く終わって欲しいと願うのみです。

「校地」 昔は札町。広瀬先生の造った足踏式スクリー船を札池でこぐと、ボラが驚いて船上に跳び上がった。そんなのきな話も。

二十三年七月の校舎消失によって総合制高校、造船科廃止論まで起こり、苦難時代を迎えますが、逆に科増設、発展のきっかけとなり、ついに現在地への移転新築となりました。移転候補地には安和・角谷・池ノ内・多ノ郷駅南・朝ヶ丘中南・松下寿電子工場地等が検討されました。

「貨幣価値」 創立は私財一五万円の提供によりとありますが、今時だったら幾らになるでしょう。当時の初任給一〇〇円、現在は一五万円ですから。四十七年の移転新築が約五億円とか。

「機械」 創立当時はやとと旋盤を据えても動力がなく、削る網材がなく、ベルトを手で回し木を削ったそう。今はNC(数値制御)で動くようになっていいる。計算尺から電卓、コンピュータへ。

「校章」 図案は森光喜先生が高知工業の近代的に構図され、校旗は高知工業同窓会から寄贈されたもの。新制高校となった際、工を高に変えた。最近CADにより原因が確定し、同窓会により校旗と標旗が新調されたと聞き、ますますの発展を祈念します。

「県体」 昔は軍事教育の時代だったので、県下的な行事といえれば部川を挟んで東西に分かれ、徹宵で教練をしながら、最後は空砲を撃ち合って、川の兩岸で遭遇するものでした。終戦後の教育でも段々に心身の鍛練がいわれだし、部活動が盛んになってきます。相撲部が電

気通信科増設とセットのような形で発足し、全国優勝となり、卓球、陸上、野球、ソフトボールその他の活躍が始まります。そして郡体から県体、更にIHへと発展してきました。

「アルバイト」 現在では個人収入の意ですが、火災後の校舎復興資金にと焼け残り材で塩炊き、日用品売り、久礼八幡宮祭でのアイスクリーム売り等。次には相撲部の遠征費にと映画を上映して回り、須崎興業といわれた事もありました。

「授業ポイコット」 初期は軍事教練とかかわり、先生、上級生には敬礼をしなければならなかった。そのため、一種と二種(高小卒入学)の間で、上級生とは、在校年数か年齢かが問題となったようです。五十七年五月七日には史上最強の生徒指導部ができた、前日報道機関に連絡して、全国的话题になりました。しかし本校に限らず、高校生の服装、マナーが批判を受けており、教員、生徒、保護者が十分に話し合うことで前進し、秋の県体では褒められました。

「女生徒」 二十八年電気通信科に宮本(長山)恵美子さんが入学された時には拍手喝采したものです。続いて現植田幸子先生ら九名入学、郡体にハンドボール部として出場したことは話題を呼びました。現在では珍しくないことですが、既に卒業生五三名とか、時代の流れを感じます。

「就職」 一期生は県内一名、他は県外軍需工場へ就職されたと聞いておりますが、終戦後は田村隆徳先生を中心とした苦労が続きます。毎年卒業生は出るのに、産業界の様子により大差があるのは担当者の悩みです。高知工業から転任された森岡貞篤校長先生が七年間にわたり、全国に通じる学校へとご尽力されたことは特筆しておかねばなり

ません。本年度は一三〇〇社から求人があったとか。工業技術者への期待はますます多くなってきております。

校長として、父上様の在職記録を破りたい意気込みの森岡清校長先生、コンビの森峯雄教頭先生を中心に、同窓会の強力な後押しで、今後更に輝かしいご発展を心から祈ります。

(平成三年二月二十四日記)

(昭和二十二年四月〜六十二年三月)

(現 高知情報ビジネス専門学校 副校長)

工業教育を考へる

教頭(昭和二十七年 機械科卒)

森 峯 雄

人間は物を作る存在である、記号を操る存在である、生活に適合、発展する自律を創造し自己実現する存在である等々言われてきた。確かに、ものづくりは、古くは狩猟、農耕、伝達等の用具に始まり、歴史上の各時点の必要と社会環境の広がりに応じて、上記三様態を繰織りなして内に秘め、人間社会の一定の時期、一定の部分に豊かさをもたらしてきた。

しかし今、世界に部分なく、大地・大気は汚染され、核にはおののき、兵器の行使は、力なき世の民を飢えと放浪へ加速する。国の際では、物流は変形し、幾億万の世界の民は飢えてやせ細り、弱き子らより死に至る様々、過剰製作により、乳と蜜の流れるカナンの地に飛着するどころか、我が子を失ったイカロスの警告は現代に活きている。

また、微細な情報のみへの関心の偏りは、神経を支える巨大なる筋骨力への無関心を呼び、現実の生と死を無視する傲慢を生み、未来を生む巨大なエネルギーの制御には、我々自身の開発への大きな労働力と実践のための筋骨力を必要とし、何よりも我々自身を統御する必要性のあることへの認識を欠く。世界的規模の時代精神を掲げての理念と、計画と、実践と、反照と、更に未来的な理念への還元という発展的なサイクルを支える人間としての遅しさが求められているのだと考えて、工業教育についての世の適切な認識と評価を求めたい。

このように考へるとき、微細の極限に迫りつつ、その故に巨大な平和産業を拓き、世直しのリーダーと期待されている日本という地域の果たすべき役割は誠に大きい。その中心的な担い手を育てる工業教育に携わる者の責務は重い。

国と民族の利益のいがみあいを捨て、国の際を取り払い、世界連邦の如き一字の息吹を感じとって、その芽を育てる以外に、お互いの幸せはないと考へる。

世界を幸せに導く方向の研究開発と生産に取り組まなければならぬ今、様々の人間存在観に加えて、工業は集団として過去の世界を生成し来り、展望ある未来を創る第四の人間存在理由そのものである。工業教育は、己の今の必要を満たすだけの姑息な手段であつてよいはずがない。自らのかわるべき工業が、未来世界創造の担う分の大きさに誇りを持ち、人類・地球そのものを活かすも、滅ぼすも我ら次第と、遠い彼方の方角に、広く高い理念を掲げつつ、身を引き締めて、何事によらず今の今に足をつけ、浮足立たず、逃れず、力いっぱい取り組む集中力と、その持続の忍耐を育てることが肝要と考へる。

己一人の舞でなく、世界史的現在に立脚し、国を超え、世界連邦的な視点に立って、粘り強く協議し、過去の文化は踏み締めながら、より新しい、より厳しいルールを措定しつつ前進する集団創りへの参加指導が求められていることをも考える。

生徒の身近な進路が、直接物の生産に携わるか否かのいかんを問わず、自らぎりぎりまで考え、己を超えて広く協議し、計画・設計し、より新しく有意義な現実を創り上げていくことを学び、行う中で得る実践力が、どの生徒にとっても、この現代に適合する真の能力開発と自己実現につながる自負心を育てることを、経験を通して認識するものである。

工業高校生にとっては、製図も含めて、実習教育の中で、今を踏み締め、未来を現実として設計する実践力を自己教育する点で最も利点を持つことを喜びたい。

工業教育というものは、単に物を作る力を育てるというのではなく、後期中等教育の時点から普通教育を基礎としながら、すべてのものを創る姿勢と感性を育てる総合力を感得させる教育力を持つものと見据えたい。

工業高校時代から、普通科目の学力を十分に身につけて、専門科目面への進学をするならば、その道に貢献する大変な利点があることを私たちは見取ってきた。この点で、身近くは本校においても、かつてのように取り組めることが求められ、期待もされている。

また、工業教育において身につける「考え・計画し・最善の具体的な結果を導く実践力」は、文学や、芸術や、その他の一見相反する領域でも、当然のことながら、その構築の確かさと不可逆的な持続性にお

いて優れた教育力を証明してきた。単に物ではなく、世にいう多面的な自己教育力を育ててきたのだ。

このことは、普通教育の今は超えなければならない非現実性と後進性を克服することのできる工業教育の存在意義と、教育の根本的改善に対する本質的側面の作用者としての暗示を提示している。工業教育に携わる者は、啓示者としてその普遍化に計り知れない重責を負うものである。

(昭和三十六年四月～四十二年三月・六十二年四月～平成四年三月)

(平成四年四月 高知県立佐川高等学校校長に昇任転出)

わが青春、その出会い

旧職員(国語科教諭) 市原麟一郎

昭和十八年九月三十日、その日、私は須崎工業学校の門をくぐった。思えば教員生活三十六年の第一歩であったのだ。草創まもないこの学校は教師も生徒も伝統づくりに燃えて、その熱気がむんむんと伝わってくるようだった。新米教師の私は教壇に立って教えるというより教わることの多い毎日だったが、授業は楽しかった。

何もかも新鮮な日々のなかで、ある日私は高知の町へ出かけ、とある書店で一冊の本に出会った。それは「肥後国昔話集」という題名の本だったが、これが後年、私のライフワークとなった民話との最初の出会いであった。折しも太平洋戦争は次第に敗色が濃く、書棚に並んだ本といえば、ミリタリズムのものばかりという暗い時代であった。

そんな中へ、まるで場ちがいのようにまぎれこんでいた昔話の本——そのおおらかで笑いに充ちた世界に魅せられた私は、これを生徒たちに語ってやりたいという衝動にかられた。

読むというより語り考えたのは、口承の文芸である民話本来の姿を私はおのずと感得していたものであるうか——。「食わず女房」「エシマ大王になった男」「屁っこき嫁さん」「どっこいしょの団子」「すいつこかあ」——これが私の語りのレパートリーだった。

そして私はこんな面白い話が、わが土佐にもありはしないだろうかと考えるようになった。二期の末、私は生徒に冬休みの宿題を出した。それぞれの町や村の昔話、伝説を集めてくるように命じた。

年があけて十九年の一月——およそ五十数編の民話が私の手もとに届いた。「日下茂平」（日下村）、「双名島」（久礼町）、「八百比丘尼」（須崎町）、「泰平さん」（中村町）、「お雪椿」（窪川町）、「耳なし地蔵」（越知町）など。当時、工業学校は高知と須崎にしかなかったので、幡多や吾北など遠隔の地からの生徒が多かった。

したがって、比較的広い範囲の民話が集まったので、私はこれを一冊の本にまとめようと思い、自家製の原稿用紙に清書した。ところが間もなく一枚の赤紙（召集令状）がやって来て、六月、私は九州小倉の部隊へ入った。そこから豊橋・宇都宮をへて二十年七月に大空襲のあとの東京へ移った。一面焼け野原になった品川で、たった一軒、ボツンと取り残されたように本屋があった。まるで奇跡を見るように中へ入ると書棚はガランとして一冊の本もなかった。

いや片隅に、本とはいえないような、印刷したザラ紙をとじ合わせただけの薄い小冊子が埃をかぶって置いてあった。手にとって見る

と、それは谷川徹三著「雨ニモ負ケズ」だった。これが私の宮沢賢治との出会いであった。まるで求道者のような敬けんな祈りに似た賢治の詩に私はたちまちトリコとなってしまった。

そして彼の詩や童話をもっと読みたいと願った。そうした私の祈りが天に通じたのか、それから間もなく茨城県岩瀬に転属した私は、そこで盛岡高農卒で賢治の崇拜者、Kと知りあい、彼のもっていた賢治の詩集や童話集を借りてむさばるように読んだ。

やがて終戦——私は九月に復員、学校へ帰ってきた。戦後、文化に飢えていた私たちは須崎工業の教員仲間（総合文芸誌「楷香鳥」（しながどり）を発行した。中沢竹太郎（故人）・橋本清美（故人）・鍵本正一郎、それに私といったメンバーで、画家の中沢先生が表紙と装禎を担当してくれた。変わっていたのは当時は紙不足で手に入らなかったし、印刷費の問題もあって、各人のナマの原稿をとじた、たった一冊しかない回覧の雑誌だったということである。

ところで生徒たちの採集してくれた民話の草稿は本にしようと思いつながら、書棚の一番下に置かれたままになっていた。そんなとき衝撃的な事件が発生した。二十一年十二月二十一日未明の南海大地震である。このとき高知県下を襲ったマグニチュード八・一の激震は死者六七〇人という被害をもたらした。わが須崎は津波におそれ五十数人の死者を出したが、城山の麓にあった私の家も津波の洗礼をうけ、家のなかは足の踏み場もない有り様であった。

ここで私にとって痛恨の一事は、民話の草稿が波にどっぷりとつかり、インキもにじんで消えてしまっていることだった。

かくてわが民話集も「まぼろしの本」となってしまったが、やがて

私は二十四年ごろから放送劇を手がけるようになり、もっぱら民話を素材にしたドラマを手がけた。本にはならなかったが生徒たちの採話してくれた民話は、電波に形をかえて人びとの心に語りかけてくれたのではないかと思っている。

そして再び民話が私を強くとらえ始めたのは四十年代に入ってからであった。私は滅びゆく民話を採話するため県内各地の語り部を訪ねる旅に出た。その旅の中で民話を愛する人たちとのめぐり逢いがあった。「土佐民話の会」が生まれた。その機関誌も月刊で二百三十五号(平成三年五月)を数え、今年六月には創立二十周年を迎えることになった。「継続は力なり」をモットーに続けてゆきたい。

ともあれ戦前から戦後にかけての疾風怒濤の時代——さまざまに出会いが、わが青春を駆けぬけていった。

(「土佐民話の会」主宰)

(昭和十八年九月〜二十五年三月)

時の流るるままに

旧職員(社会科教諭・校長事務取扱)

野 中 健 一 郎

県立須崎工業高等学校が昭和十六年四月、故寺尾豊先生の貴重な浄財をもとに、ここ須崎の地に旧制、県立須崎工業学校として創設されてから、早くも創立五十周年という記念すべき年を迎えたことは、往年本校に職を奉じた者の一員としてまことに感慨深く、慶賀の至りに堪えぬところであります。

本校で私がお厄介になったのは、昭和二十四年四月から三十三年三月までの九か年間でしたが、赴任当時の機械科、造船科に加え昭和二十七年四月から電気通信科(その後電気科と改称)が増設され、同科に初めて女生徒が一名入学してマスコミの話題になり、後年、工業高校への男女共学の口火を切ったことを覚えております。

昭和二十年代といえば、学校としては掃箒期ともいべき時期で、未経験のことのみ多く、学校運営や生徒指導の面でも、それなりに迷いや苦勞の多かった時代だったかと思えます。しかしそうした厳しい職場環境にありましても、生徒の学習意欲を喚起し、教育効果の一層の向上を目指し、あるいは卒業式を他校より数日ずらせたり、他校が毎年開催している学園の文化祭を三年に一回としたり、教職員一丸となって頑張った日のあったことを回顧し今更ながら老いの目頭を熱くしております。

九年間に三代の校長先生にお任せし、期間の長短はありましてもそれぞれ懐かしい思い出をもっております。小林秀雄校長先生には二十六年三月までの二か年間でしたが、折に触れ先生から真摯な「クリスチャン」らしい示唆に富んだお話を伺い、心の糧にしたことをいまだに忘れません。

前田健造校長先生は、高校教育の在り方について、遠大な抱負をお持ちの先生でしたが、ご就任の年の八月、ご病氣入院のためお志半ばにして休職とられました。つとに本校に電気通信科増設を提唱され、その基礎固めに尽力された先生として記憶さるべきだと存じます。私事ながら、長年にわたる私の喫煙癖がこの年限りぶつとりとやめられたのも、先生のご助言の賜と有り難く思っております。

森岡貞篤校長先生にお仕えたのは、二十七年四月から三十三年三月までの六か年間でした。単に期間が長かったのみでなく、温厚にして、自然と備わる先生の威厳と、教育者としての高邁なご識見に強く心をうたれ、ご無言のうちにも、無限のご教示を賜る機会の多かつたことを、ここに先生への心からなる感謝をこめて、指摘しておかぬ訳には参らないのであります。

「まっこと、工業が無うなつて毎日の生活のリズムが狂うてしまう」とは、本校が多ノ郷に移転した当座、糺町界わいの人々からよく耳にする言葉でした。事実、登校下校時における生徒たちの華やいだ三三五五の群れ、時間ごとにきまつて近隣に鳴り響くベルの音、これらがある日突然失つた周辺住民のわびしさは、当時の私をも含めてまこと言ひようのないものでした。でもこれは二十年も前の昔話、跡地の一角に建立された記念碑は道行く市民に対し、この地に集まり散じて行つた幾多青春の日々の哀歎を、やさしく語りかけてくれているようです。

お仕えた校長先生はお三方とも今や世に在さず、また、当時テールを囲んだ同僚の先生方のうち、数名の先生には最早や故人となられ、再会して旧交を温める術とてなく、ただただ衷心よりご冥福をお祈り申し上げるしかありません。

星霜五十年、時代は移り、世代もまた大きく変わりました。今やわが須崎工業高校は、機械科、造船科、化学工業科、電気科の四科を擁し、卒業生七千数百名を有する一大総合工業高校として躍進し、「工業報国」の建学の大理想を着実に実践しつつある事実は真に力強い限りです。今日も和佐田の丘上に、かつて糺の学び舎で共に肩を組んだ

教え子たちが、森岡清校長を先頭に同校の教諭陣に伍して、後進の育成に心血を注ぎつつあることに思いを馳せるとき、限りなき欣びに胸の高鳴りを禁じ得ないのであります。

(昭和二十四年三月―昭和三十三年三月)

「須崎工業高校相撲道場は 私の心のふるさと」

旧職員(体育科教諭)

田原敏雄

一、高校相撲の指導に魅かれて高校教員に

昭和二十四年四月新しい学年度がはじまり、二年生の担任で、張り切っている吾桑小学校に、須崎高校近森校長の訪問を受けた。「体育科担任教員として須崎高校に来て欲しい」との要請である。小学校教員を天職と考えていた私は即座に断つた。

その後教頭、再度校長と来訪が続いたが断り続けた。四月末四回目は教務主任の宮本正心先生が来られた。「私は高知師範の先輩だ、お前は劉備三顧の礼を無視するとはけしからん」と開口一番となりつけられた。当時の師範学校教育を受けた私には直系の先輩は絶対の存在であったが、ここで負けてはと、礼をつくして、私の心情を訴えた。

話し合ひは二時間以上続いたが宮本先生の切り札は「須崎は江戸時代から続いている火鎮祭大相撲に代表される相撲どころ、その須崎の高校に相撲部がないとは誠に残念、是非君に相撲部を作ってもらいたい」。高知師範時代相撲部に籍を置いた宮本先輩と青年相撲をとって

いる私との共通点は相撲でつながり須崎高校着任を決めた。

私の後任が発令になり、引き継ぎを終え須崎高校に登校したのは五月十八日である。宮本先生の準備した相撲部が私を迎えてくれた。露天の土俵と、禪一〇本、全日制一年一人、定時制一年四人の相撲部員、その日から稽古に入り、五月末の県選手権大会、六月全国選手権県予選と須崎高校として出場、だがこれで須崎高校相撲部の歴史は終わりとなった。

八月末高校再編成による教員異動が発表されて私が須崎工の森先生と入れ替えになったのである。宮本先生に約束がちがうと抗議すると「君は一人で出来る人間だ、本校は体育教員が確保出来れば良い。学区制のない須崎工が選手集めにも良い、須崎のためにも強い相撲部を創ってほしい」。私の転任により定時制四人は退学し、全日制の一人は翌年四月須崎工に再入学し相撲を続けた。

二、須崎工相撲部の創設

昭和二十四年九月着任当時の須工運動部は卓球、バレーボール、軟庭、陸上、野球の各部が活動していた。陸上部の顧問を引き受けながら相撲部創設についても準備を進めたが、おいそれとはゆかない。

更に高吾地区各校に働きかけ県高体連高吾支部の組織化を図り、推されて初代理事長に就任し、二十五年から春季大会（陸上、野球、卓球、軟庭、バレーボール、バスケットボール）、冬季大会（サッカー、ハンドボール、駅伝）の開催を決定したため、それに対応する選手づくりも急務となり、体育科教員一人で多忙をきわめた。

二十五年度はバスケットボール部を創設顧問を勤めながら相撲部同好会も発足させた。顧問水野(英)、広瀬(機)、コーチ田原であった。

二十六年から正式に相撲部としてスタート（当時の状況は別稿の歴代相撲部主将座談会の項を参照されし）。

三、飛躍のきっかけつかなかった二十八年県高校選手権大会初優勝

当時の県高校相撲界は高知工、高知農、高知商、宿毛高等全国にその名を馳せた強剛がしのぎを削り合い、相撲王国高知として全国に居臨していた時代で、創部以来常にたたかれました。

昭和二十八年五月開催の県選手権大会も高新予想記事には過去の戦跡から須工はダークホースとして取り上げられる程度であった。

須工のチーム事情としては、同好会として発足以来苦しい稽古を続けてきた岡林ら四人が学窓を巣立ったあとの新チームで、三年生は藤原一人、二年生が主力で高山・長山・山崎・長、一年生岡崎・中井の二人を加えた若いチームだけに期待と不安が半々であった。

大会は予選から七人の力が期待の方向へうまく転回し接戦をものにし決勝もくじ運に恵まれて一方のゾーンから勝ち上がってきた室戸高と対戦三対三の大將決戦で藤原が突出して快勝、高知県の頂点に立った。高知県の壁を突破した勢いでこの年金沢大会二位、三本木大会二位、全国選手権県代表権獲得と全国トップクラスに躍り出る契機となった価値ある優勝であり、須工相撲部黄金時代の幕開けである。

四、マスコミ評価は一年ごとの三段跳

創部三年目で県選手権初優勝を飾り、勢いによって初参加した金沢大会で団体決勝進出、あと一步のところで優勝は逸したが、相撲王国高知の「新鋭」須崎工として新聞に書かれ、翌二十九年が「強剛」、更に三十年には「名門」と表現された。これは当時全国高校相撲選手権大会主催新聞社であった毎日新聞の表現であったので、他紙もこれ

にならった。

創部わずか五年目の須崎工に名門校は早すぎると思ったが、スポーツ関係のマスコミは大体先物買いの傾向が強すぎるからこんな表現となったのであろう。本当に名門校の評価を須崎工のものにしたのは更に二年を経た三十二年全国高校相撲選手権大会優勝を果たし、名実共に全国高校相撲界の頂点に立ったときと考えるが、それでも創部七年目のことである。

私は高校相撲指導者として本当に恵まれていた。稽古の成果を大会で選手達がきちんと出してくれたことである。二十八年創部三年目で全国トップクラスに入り、三十九年四月高知工業に転出するまでの一年間、全国大会に団体・個人で優勝・入賞を重ね、最悪の年でもベスト8に進出している。

この幸運は高知工業高校にも持ち越され、全国高校選手権大会団体優勝を二校で体験している監督はいまだに全国で私一人である。

選手に恵まれ、学校教職員の温かい協力、同窓会の先輩の方々の応援、援助、後援会の物心両面にわたる激励、選手のご家庭のご理解、地域の方々のご声援等すべての方々に支えられた賜であった。

五、須崎の皆さんに恩返しできた全国大会須崎市開催と優勝

昭和三十九年一月三日須崎市富士ヶ浜特設土俵（須崎火鎮祭相撲ゆかりの地）において全国高校選抜高知大会（従来の大会形式を変更し新人戦とする現在の全国高校新人選手権大会の第一回）を開催した。須崎市開催にいたる経過は誌面の都合で省略するが、運営経費の造成、大会開催準備、選手の強化指導等、前年の九月から日曜、祝日も返上、大会が迫った年末、年始もかかりきりでの取り組みであった。

当日会場は超満員の大盛況、試合は須崎工団体優勝と大成功、予選、決勝を通じて失点わずかに一、決勝戦では優勝候補筆頭に挙げられていた大鉄（大阪）に快勝。超満員の大声援に後押しされて実力以上の力を出し切る地元有利を生かした展開であったが、地元開催の重圧を克服し平常心で土俵を勤めた選手も立派だった。

優勝にわく地元の皆さんの姿に長い間温かい応援をいただいた須崎の皆さん方に、ささやかな恩返しができ、本当にうれしい大会であった。またこの年三月末の教員異動で高知工に転出したので須崎工監督最後の大会になった私にも生涯の思い出の大会である。

す

私の相撲理論・勝負哲学についてもそれぞれ項をおこす予定でしたが、制限誌面をすでに超過しているので割愛する。

最後に、私は相撲指導を通じて曲がりながらも教師として成長することができたと感謝している。過日テレビでしいのみ学園長の昇地三郎氏が「心の時代」で「親は子を生み、子は親を生む（育てる）」と話をされていたが、私は本当に土俵を通じて教え子たちに育てられたと思っている。育てる喜びを肌で体験し、挑戦する姿勢の大切さを学び、愛情と熱意に感応する生徒に接し、辛抱の重要さを心に刻んだ。今私の手許に、長い間の相撲部員名簿があるが、その中には全国大会出場の間はなかったが三年間努力した部員もいる。更には自己の能力の限界を悟り相撲部を去って、名簿にも残っていない多くの生徒たちもいる。そうした生徒たちも、一人一人が須工相撲部の支えになってくれたと思っている。

須崎工業の相撲道場こそ私の心のふるさとである。

字数の関係で意図した文章にならず、箇条書きのようになり、読みとりづらいものになったことをお詫びします。

（昭和二十四年八月～三十九年三月）

雑感

旧職員（英語科教諭）

山田良幹

創立五十周年、お目出度うございます。

森岡校長先生から原稿の依頼があり、さて何をとを考えているうちに刻々と期限が迫り、今日はもう二十七日、「ままよ」と思い筆をとります。

私が須工に赴任したのは、戦後混乱した日本が、やっと立ちなおりはじめたころでした。当時の須工は大変活気にあふれていました。毎日放課後はクラス対抗の体育試合、もちろん教員も一チームとして参加し、私も随分と色々の種目に出場したものです。

特に思い出に残るのはラグビーです。肉弾相打つと申しましようか、生徒たちは日ごろの鬱憤を晴らすべく喧嘩腰でかかって来て、我々若手教員も、激しい闘志でぶつかり合ったものです。現森岡校長先生も、生徒と組んずほぐれつの試合をした仲間でした。

私が赴任して間もなく、当時名校長として評判の高い森岡貞篤先生が来られました。

先生が来られて、二、三か月後、私が家に帰ると、お目にかかった



「昭和30年ころの教職員」平均年齢は30歳代前半と若く、校内大会教員チームとして、また地域の職場スポーツ大会でも活躍した。相撲部の全国優勝、機工部エンジンの全国1位もこのころである。よく飲み、よく仕事をし、抜群のチームワークを誇っていた。

ことのあるような、ないような婦人と母が実に楽しそうに話して居りました。「どなたかな」と思つて居ると、母が森岡先生の奥さんだと紹介してくれました。土佐女子の同級生だとのこと。その時は、ただ不思議な因縁だと思つただけでしたが、この間現森岡校長先生から（貞篤先生のご子息）お電話をいただき、布団の中で色々思い出を探っているうちに、ふとある思いにかられました。

人類出現以来百万年。この私が二十世紀に存在する事自体、時間的にいって大変希少な確率である上、空間的にいっても、東京生まれの私が須崎と言う地点に在住していたことも、極めて小さい確率の上に立つていたと思います。その上、私が教師になつたことも大変な偶然であつたことを思えば、貞篤先生との出会い、しかも母と奥様が女学校時代の同級生であるなど、ただただ不思議としか言いようがありません。

当時、「デモ・シカ教師」という言葉がありました。「教師デモシカうか」、「教師シカできない」というほどの意味でしょうか。私自身典型的な「デモ・シカ」、教師でした。戦後発足した新制中学のため、教員は極度に不足しておりました。一方、日本は経済的にドン底であえておりました。折から大学浪人中の私は、寄宿先の中学校の教頭先生に誘われて、ほんのアルバイトの積もりで始めた教師でしたが、ついに本職となつてしまいました。「時間」、「空間」の上に職業上の「偶然」が重なり、その上、そのご子息から原稿を依頼される、全部を合わせれば、その確率は天文学的な数字になるにちがいありません。

しかし現実には確かにあります。こうなれば偶然というよりは運命、何らかの意志の存在が感じられます。が、よく考えてみると、これら

のことは何も森岡先生との関係ばかりではありません。私の生涯に出会つたすべての人々にいえることかもしれません。「一期一会」という言葉のもつ重みをしみじみ味わう今日このごろです。

若き日の九年間を過ごさせていただいた須崎工業高校に深く感謝致しますとともに、今後のますますのご発展をお祈り致します。

(昭和二十七年四月〜三十六年三月)

(県立梶原高等学校校長で退職)

思い出すままに

勤務職員(養護教諭) 野島 幸代

昭和三十年四月、歎びと不安の気持ちを交錯させながら、私は桜の花咲く川端通りを糺の池のほとりにある須崎工業高校へ向かつて歩いていました。あれから三十五年の歳月が過ぎ去りました。

学校の玄関に私を迎えてくださったのは、森岡貞篤校長先生でした。「お待ちしておりました」と声をかけてくださった温和な先生の眼差しに、私はほっとしたことでしたが、はじめて配置された養護教諭の赴任を期待されていたことを告げられ、新前の私に勤まるだろうか、どんな仕事をすればよいのか不安がいつぱいでした。当時の保健室はまだ設備が整つたものではありませんでしたが、森田鉄亀先生のご配慮で玄関わきの物置を整理して、私の仕事場をつくってくださいました。

狭いながらもベッドも一つ入り、生徒の休養もできました。生徒の



左から、内田・野島(辰)・森・田所・明神・野島(幸)・梅原・宮尾の各先生
(社) (機) (電) (理) (数) (養) (機) (国)

昭和30年ころ

検便をプレパレートグラスに塗布していると、狭い部屋ににおいが漂って、ベッドで休養していた生徒が逃げ出して行っただけがありました。

そのころの生徒の健康状況で特に目立ったのは、回虫、十二指腸虫、蟻虫などの卵の保有者が多かったことです。検便は学期に一回実施し、保健所の指導で駆虫薬も学校で配布されました。検便

を提出しない生徒に再三提出するように督促していると、友人の便を分けてもらって提出したところ、一人が回虫卵陽性であったためびっくりして、実は自分の便でなかったことを白状してしまった生徒もありました。そんな生徒も今はどこかでお父さんになっていることでしょう。

健康診断や予防注射、保健統計その他生徒の保健指導等は、大学の



女生徒と共に、(夏休み、校長官舎で)
左から宮本(長山)・野島先生・植田(竹内)・
光原(梅原)・飯島(岩本)の生徒たち

勉強のみではほとんど役に立ちません。困った時すぐにかけ込んで教えていただいたのは養護教諭の先輩であり、当時須崎高校に勤めておられた橋田美智子先生でした。また、保健体育の森田鉄亀先生をはじめ、同僚の先生方にはいろいろとお世話さまになり、私が泣きそうになっていた時も(ほんとうに泣いたこともありましたが)励ましてくださいました。

今日まで私が三十五年間養護教諭として無事に勤めることができたのも須崎工業高校の四年間があったからと感謝しています。お世話になった先生方にはもう故人となられた方もあります。森岡貞篤校長先生をはじめ大田先生、宮尾先生のお顔も浮かんでまいります。ご冥福をお祈りします。

当時の電気通信科に女子生徒が何人か在学习していて、この生徒たちと私は年齢も五つ六つしか違わず、男子生徒からの強力な味方になってくれました。

私は女子の体育の授業を少しだけ担当したことがあります。高校時代は陸上部を、大学時代はテニスや登山をやった私でしたが、授業と

なると困りましたが体育大会用に、ダンスや民謡舞踊の講習に出かけて、生徒たちに助けられながらそこそこ伝授？できたように思います。

須崎の富士ヶ浜まで生徒たちと一緒に走ったことや、女子ハンドボール部の合宿では、校長官舎で奥さまが母親のようにお世話してくださったことなど、青春真つただ中の私も生徒たちと一緒に楽しむことができました。

古いアルバムを開いてみれば、昨日のこのように懐かしい先生方や生徒たちの笑顔があります。電気通信科の女子生徒も今ごろは五十歳を過ぎたお母さん、ひよっとしたらお孫さんに目を細めているおばあちゃんになっているかもしれません。

須崎工業高校は、現在多ノ郷の太平洋を望む丘の上に移転し、立派な鉄筋の学び舎になっていますが、糺町にあった木造二階建ての校舎の温もりは、懐かしい人たちの思い出とともに今も私の心に残っています。

須崎工業高校は私の心のふるさとです。ますますのご繁栄を祈ります。

(昭和三十年四月―三十四年三月)

駈け出しの頃

旧職員(社会科教諭)

広瀬 典 民

教師を始めてまだ間もない昭和三十三年四月、清水高校から須崎工業へ転出し、何から何まで様子の違っているのには驚かされた。第一、

各課程ごとに職員室が分かれているから朝礼が終われば後は減多に顔を合わせない。しかも、普通高校と比べると生徒数の割に職員数が多く、こう離ればなれでは名前を覚えるのも大変だった。

工業学校に女生徒が居てもおかしくはないが、男ばかりと違ってただけにこれも奇妙に感じた。もつとも、全校生徒合わせて十人前後と極端に少なく、しかも熱心な者ばかりだっただけに、今でも大体顔と名前が一致する。

学校行事にしても普通校とは大違いだ。運動会の代わりに陸上競技や相撲大会、修学旅行でなくて工場見学といった具合に男っぽく、実際、陸上競技大会に女子の出る幕はなかったし、工場見学旅行もその名の通り、名所旧跡訪問などは全くの添え物に過ぎなかった。

ホーム主任も、普通なら正・副となるどころ、此処ではホームを真っ二つに分けて半数ずつ受け持った。生徒のほとんどは就職希望だから、書類作成上の事務分担をはかった措置だったようだが、これもまた、私にとっては勝手の違うことの一つであった。

その頃は、本県が、全国的にも有名だった全員入学制を廃止した直後でもある。しかし、まだしばらくは実業科優位の時代がつづき、進学校などに対するコンプレックスのようなものは微塵もなく、生徒たちは伸びのびと学園生活を楽しんでいるように見えた。無論、スポーツは隆盛を極め、田原敏雄先生の相撲、森寛先生の卓球が毎年のように県下で優勝し、わけても相撲は全国優勝するなど、遠く県外にも名をとどろかせていた。それだけに、練習を見ても、鉄砲・ぶつかり稽古など汗みどろ血みどろの激しさで、これなら強くなって当たり前と思ったことであった。卓球部も、毎日放課後よく走り足腰の鍛練に余

念がなかった。素人目にも、これらの選手は、それぞれのスポーツに適した身体になっているのがよくわかった。

後年、私自身、小津高卓球部の全盛時代に顧問をするようになったとき、選手の身体をひと目見て優勝を狙えると直感し、しかもその通りになったのだが、もとより当時の選手が目の中に焼きついていたからにはかならない。ただ、それも鍛え抜かれた選手についてだけであって、素材を見抜く力は全くなかった。

一方、相撲、卓球の華やかさに比べ、私の率いたテニスのほうはお粗末で、全国大会の個人戦へ出場するのがやっとの始末。だが、お陰で夏休みになれば毎年試合を兼ねた官費旅行が楽しめた。肝心の試合のほうは、勝った記憶が一度もない。



須崎工高へ着任して二か月後の昭和三十三年六月、教育問題では県下初の警官隊出動という異常事態の中で県教委による教職員の勤務評定実施が可決され、にわかに教育界が騒がしくなってきた。歴史的ともなった六・二六休職闘争には、県教組員の九割約六千人が高知市の城西中学校構内へ集結して「勤評撤回総決起大会」を開き、一方ではこれに対抗して反教組勢力が子どもを盟休を決行、教育界は大きな混乱に陥った。対立はその後ますます激化し、嶺原での住民による教員住宅クギ付け事件や来高中の日教組副委員長長らを襲った森事件などは、全国の注目を集めて国会で論議されるほどであった。

事態が事態だけに、当時は職員会や職場会が開かれないうちでも、よくストープの周囲へ集まっては状況分析から冗談に至るまで四方山話に花を咲かせた。どこの職場にも話上手な人はいるものだが、合田

正寛先生の話術は格別で、とりとめもない話に腹をかかえて大笑いしたことだった。

その時のストープというのが、また、今どきの職員室にあるようなスマートなものではなく、おがくずを入れる旧式タイプ。火がつきさえすれば後はよく燃えるのだが、それまでが大変だった。そこで、生活の知恵というか、新聞紙にガソリンを浸して点火することを覚え、以来、ストープの調子は満点、申し分なかった。

その日も普段のように点火しようとしたところ、後ろ向きに立っていた森寛先生に引火して背中がパッと燃え上がった。アツと思つた瞬間、女子事務員の中蔵さんが防火用に並べてあったバケツの水をたたきつけてくれたお陰で大事には至らなかった。居合わせた教頭がかわって校長に知らせたところ「それは良かった(大事にならなくて)」との返事。伝え聞いた森先生のほうは「ひとが火ダルマになりにかかったというのに良かったはないものだ」と笑いながらも気分よからうはずはない。「駄目になった洋服の代わりを戻したい」と申し出たが、「構わん、要らん」の一点張り、ついにそのままになってしまった。もとより、ガソリンを使つての点火は、以後ぶつたりやめた。考えてみれば、長い教員生活の中では大過小過の繰り返しだったが、これなど、私の犯したもので大過中の大過というべきだろう。それにしても、私の場合、ズッコケ人生を暗示するかのようには、波乱含みの駆け出しではあった。

(平成三年一月二十一日、広瀬典民著「生き方について」より)

(昭和三十三年四月～四十二年三月)

(県立高知北高等学校校長で退職)

思い出の須工

旧職員 橋田 美智子

昭和三十四年三月末の、或るおだやかな一日を忘れることができま
せん。その日思いがけなくラジオの発表で須崎工業高校への転任を
知ったのです。教師になって十年目、初めての異動でした。と同時に
私の長い須崎工業（途中で窪川高校五年を挟みましたが）の生活への
スタートでした。須高の離任式では惜別の思いがこみあげて思わず号
泣してしまいました。

しかし着任してみると男子校の伝統に培われた爽やかな生徒達との
出会いに、期待よりも危惧にかたむいていた晴れやらぬ思いは忽ち氷
解して、トイレの前の小さな保健室も苦にすることなく楽しい思い出
を重ねることになりました。

さて当時の保健活動の中心は未だ結核、その他の伝染病の予防、寄
生虫の駆除等に重点が置かれ、検便は学期に一回ずつ、年三回実施、
生徒たちには厭がられたのですが、之が効を奏して四十年を過ぎる
と虫卵の保有率が遂に一パーセント以下に減少しました。

その頃、男子に交じて電気科と化学科にセーラー服の可愛い女生
徒がいて、初めて体育の授業（お守り？）をさせて頂きましたが、バ
レー、バスケット、サッカーなど、一緒に遊びに遊び、今でも思い出
に花を添えています。

またある年の高吾地区の郡体に女生徒全体が出席、（三十五年度に
は女生徒が二十二名いました。）谷岡隆子さんが砲丸投げで三位に入

賞、窪田さんも走り高跳びで好成績を挙げました。

三年に一度の文化祭では、その数すくない女生徒の生花や、手芸が
好評で「明るく、きれいでほっとする」と皆様に、よるこんで頂きま
した。

その前夜祭の為に、六百名の生徒をグラウンドに並べてフォークダ
ンスの指導をしたこともありましたが、「ポリユームのネエは末だか」
と待つてくれたそうです。

当夜は須高の女生徒がパートナーとして来校、久礼分校からも生徒
会長が引率して来てくれましたが、男子は無茶苦茶よろこび、女子は
大変不機嫌でした。

もう一つどうしても忘れることの出来ないのは山岳部の発足と活動
です。着任のその年山岳同好会が結成され、翌三十五年にはクラブに
昇格、更に三十六年の総体登山には大山旺君が仙台の朝日連峰へ、三
十七年には西松忠義、横川大助の両君、小島朱美さんが谷川岳へ、三
十八年には小島さんと川田寿幸君、そして私が女子混成チームの監督
として阿蘇九重へ、三十九年には吉岡博君が、奈良の大峰山へと、連
続参加を果たしました。

これらの山行のなつかしい思い出は私の胸いっぱいいつまっています、
今でもその一齣一齣を鮮やかに引き出すことが出来ます。

四十二年から五年間窪川高校で過ごし四十七年三月新装なった和佐
田ヶ丘の校舎に帰して頂きました。狭い旧校舎の時代を思えば、すば
らしい校舎、環境、設備、何もかも夢のようでした。が一方胸中には
旧い時代の校舎のイメージが郷愁にも似た思いとなつてたどよい、か
つて常に先生方をも生徒をも身近かに感じ健康状態を把握し易かった

頃に比べると余りに広くて、生徒に接する機会も前より少なくなり、健康管理という面ではもどかしく思うことも度々でしたがよく先生方が助けて下さいまして感謝に堪えません。

またその頃はハングリー精神のなせるわざか狭い運動場で、暗くなるまでたくさんさんのクラブがひしめきあって運動場の奪い合いをするというような覇気に満ちていましたし、相撲部も四国の片隅から全国優勝の快挙をなしとげたりしました。恵まれれば当然かも知れませんが、この十二年、覇気が乏しくなったように感じるのは私の思い過ごしでしょうか。

更にこの十年、学校保健の重点も、検便時代から大きく変貌しました。心臓病、腎臓病、折れ易い骨、弱年の成人病、アレルギー、学習障害児、登校拒否、いじめ等々難問題が頻出していきます。おそらく、どの学校もその対応に苦慮しておられることと思います。

なお、特筆すべきは代々の保健委員の活躍です。保健委員会活動、健康診断、検尿の世話、その上、対外的には県や高吾地区の保健委員会出席、発表などよく責務を果たしてくれました。

中でも山中正博君は、三年間保健委員、保健部長として、その中心となり立派な発表をして人々の耳目を集めたことは忘れることができません。

私は教員生活の大半を工業で過ごし諸先生方のご指導、ご協力により、五十九年三月大過なく退職の日を迎えました。長い年月手ぬきしていた家事や夫、孫の世話、週に二日近所の子供達に習字や硬筆を教えたりしながらお陰様で元気に過ごしております。

今、開校五十周年を迎え多くの卒業生、教職員の想いをいっぱい秘

めた須工の輝かしい御発展を心よりお祈り申し上げます。

教材「三輪トラック」

旧職員（機械科教諭）

西川良治

私が須崎工業に勤務したのは四十年前も前の事で記憶もうすれ、また文筆の才もこれまた人一倍下手ときているものだから困惑したことです。が、当時は振り返って二、三、書かして頂くことにしました。

奉職したのは昭和二十年の初めて第二次世界大戦も終わりに近づいて都会は次々と焼土と化している時でした。当時校舎は木造二階建てで、別に実習工場があり、機械と造船の二科目でした。

当時の私が通動した時の風物詩を紹介します。須崎に下宿した事もあります。高知から通うのは国鉄の汽車を利用しました。それがまた、石炭が悪いのか、下りは良いが東向き上りは吾桑・斗賀野間のトンネルを抜けるのが大変でした。乗客が多いと、汽車はトンネルの上り勾配を上り切ることができず、トンネル内で立ち往生する始末。

夏はただでさえ暑いのに、石炭の煙がトンネルに充満し客室に入ってくる。皆タオル等でマスクして息をするといった状態でした。そのうち汽車は、後退を始めます。トンネルより相当下がった所で、今後はしばらく蒸気を蓄え力をたくわえて、一気に、がむしゃらにトンネルを駆け抜けるといった具合でした。時たま駅で機関車を降りた機関士を見ると、防塵眼鏡の周囲や鼻の巣が「すす」で黒くなっていました。当時はそれが当然だという感覚でした。

須崎には当時旧制中学校はなく、須崎工業学校が唯一中等学校でした。私は機械科担当で機械設計や原動機を教えておりましたが、その時分の学校の業務等はよく憶えていないのですが、ただ一つ、三輪自動車の方が頭に浮かびます。

昭和二十二、三年ころかと思いますが、進駐軍が使っていたフォードのV8エンジンを積んだ乗用車が教材用に払い下げになったが、大阪の木津川倉庫渡しだったので、校長が現場で売ってくるよう私が指示を受け、払い下げ書類を持って木津川に行き、業者に売ったまではよかったが、その代金でダイハツ単気筒の三輪トラックを買って帰り、校長に、お叱りを受けたが致し方なく、実際に動く教材としました。

特別の場所もないので、機械実習工場の一角に置き、放課後、興味を持つ生徒が集まって分解したり組み立てたり、また周辺を走らせておりました。そのうち走らせる方が面白くなり、当時入手困難なガソリンを、どこからか集めて始動時にエンジンが焼けてくるまで使い、後は灯油に切り換えたり、ご苦労なことでした。けれども、さすが機械科の生徒たち、弟子越して先生が習っているようなものでした。

機械操作になれてくると、羽目をはずして、遠乗りする者もいたようですが、その当時は、安和・久礼の海岸線等美しい自然があり、道路も一日数回の定期バスかトラックがまれに通るくらいで、走っていてほかの車に出会うことは、めったにありませんでした。そうしたのんびりした環境が三輪トラックを走らせたような気がします。

その時私が生徒に教えられた事は、「一人前の運転手とは、どこで故障を起こしても自分で直して帰って来ることだ」ということでした。生徒の方が先生よりしっかりしていたようです。

終わりに、半世紀近い日を重ねてそれぞれの分野で力いっぱい奮闘されている方たちのことを聞きおよび嬉しく思います。今後の、ご清栄と、須崎工業高等学校のますますのご発展を願いながら、五十周年記念のお慶びを申し上げます。

(昭和十九年一月〜二十八年九月)

回顧

旧職員(機械科教諭)

前田隆一

創立五十周年おめでとうございます。

昭和十六年、私が高知工業の三年生になる時に、一種(小学校卒業して五年間)と二種(高等小学校二年修了して三年間)の二つのコースのある工業学校として設立され、地元に学校ができたため、私の小学校の同級生も、二種に多数入学されました。

昭和二十年、終戦、私が工専二年生の時です。「こんな日本にだれがした、おれが政治家になって日本を建て直してやろう」と、大それた気持ちを持ったこともありましたが、種々の事情で、結局、昭和二十二年に工専を卒業して、須崎に帰って来ました。丁度その時、西森校長先生が拙宅にお越しになられまして、「須崎工業に来ないか」とお誘いがありました。そのころは、現在ののような教員採用試験もなく、そのまま採用、就任ということになりました。

その時の新任は、公文(現竹村)先生・安芸先生に私と同年齢の三人でした。年度当初の担任教科の話し合いで、体育の先生がおられな

く「若いだれかが体育の数時間を持って」ということで、私が担当することになりました。一時間生徒と一緒に遊ぶぐらいできるだろうと思って安請け合をしたのですが、いざ、授業となると門外漢の私は、どのように授業をすすめてよいやらさっぱり分からず、途方にくれたことでした。幸いに、早く、体育の先生が来られましたので、ほつと致しました。

当初は、私が須崎出身のため、昨日まで一緒に遊んでいた生徒さんも数多くおられ、どうかと心配しましたが、生徒さんは、兄弟のような親しみと同時に節度、礼をもって接してくれましたことを感謝致しております。諸先生方も（時々お叱りを頂戴いたしました）家族的で和気あいあいのよい職場でした。

その年に、工場開放（現在の文化祭）をやることになりました。当時の生徒さん方はバイタリティー旺盛で、種々の趣向をこらし、開催日が近づく、より良いものにするために、徹夜で頑張られました。私も生徒さん方に引張られ付き合いました。

昭和二十三年、恩師森岡先生が工専をご退官、佐川にご帰郷され、ご子息の現森岡校長先生が須崎工高に転入学されました。

その年の夏季休暇中に学校（現在の「ゆたか」にあった旧校舎）が火災に遭いました。その時、私は須崎橋のところの起洋館で映画をみており、火災のサイレンと同時に映画館を出ると「工業が焼けている」とのことで、懸命に学校に駆けつけましたが、もう一面の火の海で手のつけようもない状態でした（それまでに学校近所の方々の並々ならぬご助力をいただいたそうです）。不幸中の幸いというか校舎は全焼致しましたが、工場と講堂は災難を免れました。町の方々、後援会、

父兄会、卒業生、在校生、教職員一丸となって復興に懸命の努力を致しました。そして、授業は焼け残った講堂を板で間仕切りをして行いました。生徒さん方も隣の室の声がかましくて大変だったと思います。

それから思い出すのは、須崎工高独特の校内大会です。一日で行う数種目を除き、多くの種目の競技は、放課後一、二試合ずつ消化し、大体、一か月に一種目の割合で行われました。教職員も一ホームとして、この大会に参加して生徒さん方と、汗を流しながら技を競ったものでした。

次に、職業指導（現在の進路指導）のことです。最初は田村隆徳先



昭和30年ころの機械科の先生方
左端から、前田・野島・広瀬・田村・渋谷・竹内・島崎・後列松本の各先生

生がほとんどお一人
でなされておられま
した。その時代は、
現在のような好景気
でなく、高知県の工
業高校といえば「高
知工高」という状態
のなか、なじみの薄
い新設の工業高校な
どなかなか相手にし
てくれず、先生は随
分とご苦労なされた
ことと存じます。就
職斡旋の時期になり

霧の中の思い出

旧職員（機械科教諭） 島崎良一

ますと、わずかの費用で出張され、時には一か月近くも頑張っておられたように記憶しております。また、学校への連絡は経費節約のため、夜間電話を利用、時間を打ち合わせ、私が学校でこの電話を受け、校長先生や関係の先生方にお伝えするということもありました。後年、私も一度、先生のお供をして上阪したことがありました。大阪に到着しました時、運悪く暴風雨ぎみの天候で、今日は会社訪問はなさらないだろうと思っておりましたところ、先生は、「時間と費用がもったいない」と、二人でずぶぬれになって、会社を回ったこともありました。いずれに致しましても大変なご苦労だったと拝察されます。

幸いに私は、諸先生と生徒さん方に恵まれ、ほんとうに楽しい須崎工高時代を過ごすことができました。特に、恩師森岡先生（私には工專入試以来の恩師であり、また、須崎工高在職中は二度の校長先生として、筆舌に尽くし難いご高恩をいただきました）のご慈愛あふれるお姿と、田村先生の無私の情熱に、数知れないご教訓を賜りました。顧みる時、このご恩に報いることのできなかった自分が慙愧にたえません。

紙面も少なくなりました。須崎工高のますますのご発展を衷心より祈念いたしました。筆をおきます。

（昭和二十二年四月―四十二年三月）

多年にわたる須崎地区の人々の念願であった中等学校が、須崎工業学校として誕生してから今年で五十年になる。今その昔にさかのぼるうとしてもできず、また思い出そうとしても記憶は薄れる一方なので、わずかな記憶を手掛かりに在学中の日々をたどってみたい。

昭和十九年四月に入学。学校も新築の校舎が立ち並び、活気があり、機械工場に並んだ機械に心を奪われた。学校生活にもどうにか慣れてきた一学期終わりに、今年の夏休みは日章の飛行場での勤労奉仕に行くことになったと先生から指示があり、夏休みに入るとすぐに出発した。

参加したのは何クラスほどだったかは分からない。寝泊まりするところは、海軍航空隊基地の兵舎で、長い建物で両端の出入り口とつながるように中央に廊下があり、両側に広間がある。そこで寝て、また食事をしていた。

朝は起床の合図で起き、早々に食事を済ませて、外に整列して点呼、指示を受け出発、駆け足で行く。場所は遠くなく飛行場の囲い沿いに行くとはどなく民家が見え、その間を通り田畑の間を下りて行くと、そこは広く帯状に整地され、両端に肩ぐらいの深さの穴が掘られていて、これは大変だと思った。

皆早速穴の中に入ってスコップで更に掘り、その土を上放り上げ

る。そのうち暑いとしんどいので疲れてきて、仕事も長続きしない。初めの二、三日は飛行機の飛ぶのが珍しいので、閑さえあれば青空を見ていた。飛んでいるのは赤トンボといわれた練習機である。休憩の時に出された氷水に皆群がっていた。暑さで、のどが乾いているから、その味は格別。足りない者は近くの農家に行き、井戸水を飲ましてもらった。基地の構内は広く、散髪屋や他の施設があった。ようやく勤勞奉仕も終わり、八月半ばごろに皆帰る。

一年生の前半は格別のこともなく過ぎ、授業もどうにか受けていたが、後半は学校に海軍の部隊が駐屯することになったと、先生から朝礼で発表があった。この事から学校は重苦しくなつて来る。戦局は逼迫しているのだ。

機械工場の中に長腰掛を並べて教室代わりにした。先生方も召集令でだんだん少なくなり、授業にも支障が出てきはじめ、残つた先生に荷がかかるようになる。そしてついには学校を工場とする学徒勤勞動員が行われ、学校は軍需品生産の工場となり、部品や品物をつくる作業を行なつた。参加のクラスは一クラスで他のクラスは他の工場等へ動員されていた。学校の工場も準備ができ、指導員も来校して活動を始め、日の経過とともに作業に慣れて皆上手になつた。

二年になり、工場での仕事がほとんど毎日といった日々、高知市に大空襲があり、高知工業学校が大きな被害を受け、本校の工場の機械類も疎開する必要があるとのことで、早急に安全な場所として当時の加茂村に移すことに決まり、早速機械を撤去する。その機械を荷馬車に積んで駅まで運び、貨物列車で加茂駅まで行き、そこから目的地までは何で運んだか、恐らく荷馬車でないだろうかと思うが記憶して

ない。

小物は生徒が運んだが、重い物もあつて途中休みながら行く、プリーは転がして行く。じりじり焼けつく暑い道を往復した。機械を収容する先は元製粉工場で、その土の床に機械の据え付けをするため、一列に並んで足で踏み固めた。この作業も根氣強く続けたが、八月十五日の終戦で作業はそこまでとなった。だが疎開はどうなるか、戦争は終わっても機械は放置というわけにはいかない。加茂駅の貨物置場にプレナーのテーブルその他が置かれていた。八月か九月に台風が襲来して疎開先の小屋が倒壊し、中の機械も倒れていた。それには皆驚いた。周りに台風時の豪雨で水たまりができていた。

機械を運び出して、がらんとした本校の工場には各種の弾薬が収納されているようだった。この火薬も終戦後進駐軍の指示により海に投棄処分するため大勢の人たちが運び出し、大型のトラック(十輪といわれ一〇個の車輪があつた)に積み込んで棧橋まで運んだ。棧橋は弾薬類を船に積み込む人々の掛け声や、自動車の行き交い、見物している人たちのざわめきにつつまれていた。

弾薬を出した後の機械工場には、疎開した機械が元のとおり据え付けられていた。戦後の混乱もあつたが、中途半端な授業も平常に戻り、召集で不在だった先生方も復員、学校に帰つてこられた。だが、授業といつても教科書類はどうか手に入ったもののノート類は手に入れにくく、広告用紙をとじてその裏に書いていた。教科書も軍国主義的な内容の部分が墨で塗りつぶすようにということで、至る所墨だらけ。何もかも品不足で、つぎはぎの生活だった。

昭和二十一年になると学校内の雰囲気も大分落ち着いてきた。戦後

しばらくの間、グラウンドの片隅は野菜畑になっていたが、スポーツが盛んになると敷地整備をしてそれもなくなくなった。やがて入学以来、初めての運動会が、いろいろの種目で行われ、笑いとざわめきで一日が過ぎた。

年も押しつまった十二月二十一日未明、突如大地震が起こる。驚天動地とは、まさにこのことで、町は停電、断水となり、住民も困惑し切った状態だった。

年は移り二十二年となり、最後の期末試験も終わり、後は卒業を待つばかりの、のんびりした毎日だった。学校の周囲の壁はところどころ崩れている。学校の西側の田んぼには、トロッコ用のレールが敷いてあり、それにトロッコが乗せてあった。埋め立て工事でもやるのだろうか、ふと学校の敷地を作るのにトロッコを使っていたのを思い出した。周囲の景色も一段と春めいたようである。

(昭和二十三年二月―四十五年三月・四十七年四月―平成二年三月)
(昭和二十二年機械科卒・同窓会事務局長を勤められた)

回想十二年

旧職員(機械科教諭) 福 富 恒 彦

(はじめに)

私の須工在職は十二年間で、教員生活の約三分の一を勤務したことになります。年齢も三六歳から四八歳までの最も充実した時期でした。仕えた校長も七代小松一夫先生から十代村木威先生に至る四校長でし

た。札の木造の校舎で九年、多ノ郷の新校舎で三年厄介になりました。したがって、思い出も多いので、浮かんてくるままにあれこれと書き並べてみることにします。

(須工への赴任)

私が須工にご縁を得たのは、当時高知県内に東工業、幡多農工の二校が新設され、工業科教員養成の必要から、工業科の免許取得者を一年間大学で再教育して、工業高校の教員にするという内地留学制度が設置されたころでした。私もこれに応募し、一年間の留学を終えると須工の教員として配置されたからです。

(担任)

さて当時、実業校の入試は普通校より先に行われ、受験生はかなり成績のよいものが多かったように思います。また、入学生も目的意識のしっかりしている者が大半で、学校は就職指導を重点目標の一つにしていました。クラス編成にも工夫がなされ、教員は一年のクラスの担任をすれば二年、三年と卒業までそのクラスを受け持つという慣例になっていました。更に一つのクラスを二つのホームに分け、二人のホーム主任によって運営される方法がとられていました。

私は一年機械科A組の席番一から二〇までの主任となり、この二〇名の生徒を三年間受け持つことになりました。この長所は、生徒の学習面、生活面できめ細かい指導ができ、その上事務負担も軽いということでした。確かに生徒一人一人との接触時間も多くて、何でも親しく話し合えたように思います。このクラスの生徒は卒業して二十五年になりますが、お互い仲間意識が強く、クラス会も一年に二回もやったこともありました。昨年も高知で盛大に飲み、語り合ったことでし

た。

(授業)

須工に来るまでの十五年間、義務教育校での経験はありましたが、専門教科となると新卒教員と同様の不安がありました。ある時は一時間の授業に三時間から四時間の準備をして教室に臨んだこともありました。何年もやっているうち横着になり、よくないことは知りながら、準備なしで教えることも多くありました。とにかくこの一年は専門書や工業雑誌をよく読み、また、大阪で催された工作機械の見本市を何回か見学に行きました。そして、毎回大きく発展し、変化していく実状を目のあたりにするにつけ、教科書との余りの格差に自分の授業に疑問をもち、自信をなくしたこともありました。

当時、各校の交換授業や指導主事等による特別授業の見学参観等もなく、ただ指導書にすがって自分なりに教案をつくってやっていたのが実状でした。こんな時、十代校長の沢本豊先生は機械科出身でしたので授業を観てもらって批評をお願いしたり、私に代わって気安く授業の手本を示してくれました。温かい思い出として頭に残っています。

(計算尺)

私たちの学生のころから工業科生徒の必携道具の一つに計算尺がありました。当時、須工でも毎年二回の計算尺の検定試験があり、この四級合格が卒業条件の一つになっていました。私も指導上、夏休みに善通寺で催された四国四県の計算尺研修会に参加しました。一泊二日の研修会でした。暑い夜、お寺の大きな蚊帳の中で西森稔・堅田政雄両先生と雑魚寝したことが懐かしく思い出されます。この時もらった当時最新の計算尺も今は無用の長物になりましたが、我が家に大切に

保管してあります。数年後、計算尺から電卓へと変わりましたが、過渡期のせいか、何か空しさを感じ、率直に言って電卓は、計算尺の時ほどの研修意欲がわきませんでした。

(相撲)

須工といえは相撲の強いことで有名でした。全国各地で目覚ましい戦跡を残しており、当時は、それを証明する優勝旗や優勝カップが校長室にずらりと飾られていました。そんな背景もあって、開校記念日には校内相撲大会が開かれました。教員一チーム、各ホームから各一チームが参加して勝敗を競いました。私も教員チームの先鋒で出場しました。結果は三勝一敗、私としては上々のでき、教員チームも準優勝という立派な成績でした。後の慰労会の酒のうまかったことが昨日のこのように思い出されます。

私が生徒部長のころ、生活指導研修の目的で岡山工業、藤井寺工業等いくつかの学校を回ったことがありました。石川工業を訪問した時、校長さんは大変相撲が好きだったのか、生徒指導の本題は、そこそくに、須工の相撲部のこと、田原敏雄先生のこと、選手のこと等細かく聞かれ、返答に困り、こんなことならもっと相撲部のことを勉強してくればと残念に思ったことでした。今は当時の名声をしのぶすまでもなく、こうした思い出をつづりながらも大変寂しくなります。

(釣り)

日ごろの疲れを一掃するには、何といっても釣りが一番の妙薬でした。土曜日の午後にはよく行ったものです。当時、須崎の海はまだまだ美しく、魚も豊富でした。手押し舟で少し行けば、あじ・さば・うるめ等数十匹がすぐ釣れました。広瀬雄助先生、竹内真一先生の手

ほどきで「こせ」の大物を二枚揚げたあの感触は今でも忘れられませ
ん。また、釣りのベテラン田村隆徳先生・坂東長太郎先生について春
の海辺でキスの投げ釣りを楽しんだ気分は、それこそ、生きているこ
との喜びを存分に満喫した時間だったように思います。

(終わりに)

十二年間の往時を回想すると、すべてが懐かしく忘れ得ぬ思い出ば
かりです。当時から既に年移り世も変わり、私も市井の人となり余生
を生きる身となっております。筆をおくに当たって須工でご縁を得たす
べての方々にお礼を申しあげ、更に須工が今後ますます発展してい
けることを願ってやみません。

(昭和三十八年四月―五十年三月)

「須崎工業高校と私」

旧職員(造船科教諭)

合田 正 寛

須崎工業高校が平成三年度を目度く創立五十周年を迎えることに
なった。まことに喜ばしく心からお祝い申し上げたい。

須崎工業高校と私の縁は古くて長い。昭和二十六年春、造船科教
師として赴任して以来、平成元年三月定年退職するまでの三十八年間
の長きにわたるもので、私の人生の青春時代、壮年時代のすべてを過
ごしたことになる。

赴任時の校長は第四代前田健造先生で、現在の第十四代校長森岡清
先生まで一人の校長先生にお世話になった。その間に出会った教職

員の方々、卒業生諸君の数は驚くべきもので、その思い出は余りにも
多く語り尽くし難いものがある。

私が赴任した昭和二十六年の札町の校舎は本館、講堂、機械工場く
らいのもので、三年前焼失した校舎跡が痛々しく残されていた。焼け
残りの講堂を仕切った教室での授業では隣の教室に気を使ったもの
で、声の大きい私には気苦労した思い出も今は懐かしい。

当時は機械科、造船科の二科で生徒数も二百余名と小規模であった
が家族的雰囲気の中にも礼節を重んじ、プライドを持った生徒諸君で、
勉学に運動にと澁刺たるものがあり、郡下の体育大会では常にその雄
を任じていた。

一年を通じて各種目の校内大会があり、教職員も一チームとして生
徒と共に競い合ったものである。なかでも五月二十五日の開校記念日
に催される相撲大会は圧巻であった。勝ち進んだ教員チームと生徒諸
君との対戦の一番、一番は、正に固唾かたずをのむものであった。若かりし
ころの私もその一選手として出場したのは懐かしい思い出である。

クラブ活動も活発で各種目での名選手を輩出したが、なかでも相撲
部の活躍は一時代を築いたといえる。当時の相撲王国高知では「高知
県を制する者全国を制す」、とまでいわれていた。高知工を筆頭に高
知商、高知農、宿毛高等々の強豪の十数校が覇を競っていた。創部間
もない当時の須崎工は一勝をあげるのに懸命であった。名監督・名指
導者田原敏雄氏の敏腕はもちろんであるが、地元の方々の協力と選手
諸君の厳しい練習の成果が実り、昭和二十九年悲願の全国制覇を成し
遂げたのは快挙の一語に尽きよう。私も相撲部の裏方を務め、全国各
地大会で、あるいは優勝の感激を味わい、あるいは無念の思いを選手

と共にしたことは生涯忘れない。

昭和二十八年、全国の工業高校の中で当時造船科を設置するわずか一六校が一堂に会し、カリキュラムや研究発表等、将来への展望を旨指して全国造船教育研究会が発足し、毎年総会で決議したものを文部省に働きかけ、ついに造船科のシンボルでもある重錘式船体性能試験水槽が、長崎工業高校と共に本校に設置されることになった。昭和三十一年二月、水槽の工事も終わり、下関市の日本工作所製作の機械が据え付けられた。この実験を担当した私にとっては、正に心血を注いだ結晶ともいえる。日本では初めてのことで、アメリカでの資料をあさり、長崎工の先生方と連絡をとりながら手探り状態での実験が始まったのである。

最初の実験でのデータと、公式試運転の結果が一致した時の喜びは筆舌には尽くし難いものであった。以来、自信を持つての実験を続け、地域産業に微力ながらも貢献できたものと自負している。

昭和二十七年電気通信科(現電気科)、その後化学工業科が増設され、生徒数も七百余名となり、糺町の校舎では手狭となったため、昭和四十七年四月、現在の多ノ郷佐田の丘へと移転を余義なくされるに至った。

思い出多い糺の地を去るに当たっては、卒業生はもちろんのこと、私たちもい知れぬ寂寥さびしさたる感でいっぱいであった。

時折に訪れる旧校舎の実験室、製図室等が今なお商工会議所等に使用されているが、当時を思い出して懐かしい。

現在の寺尾公園の一隅に平成元年同窓会によって須崎工業高校跡地の碑が建立された。往時を知る者にとっては懐旧の念ひとしおのもの

がある。

昭和四十二年教職員による俳句同好会「つくし会」を発足させ、毎年数回の吟行を楽しみつつ、二十数年を経た現在も続けられており、転勤、退職した方々もこの句会には参加されるのはうれしく、同じ趣味を持った者の絆ゆずりの強さを改めて感じ入っている。

私が赴任した昭和二十六年は、創立十周年で、人間でいえば一〇歳の小学生であった。以来四十年を経てこの度創立五十周年を迎える事になった。思慮深い五〇歳の熟年の歳月には、その風雪に耐え抜いた強靱たくまなる伝統と歴史が深く刻まれている。これから更に磨かれた校風が樹立されることを祈念してやまないものである。

定年退職して二年の現在、和佐田の丘に建つ白亜の校舎を眺めたり、時折に訪れる学校内の一木一草に至るまで、その思い出は尽きない。

我が愛する須崎工業高校の限りない発展を祈りつつ、創立五十周年のお祝いの一文とさせていただきます。次第である。

(昭和二十六年四月、平成元年三月)

生と死のさすらい

旧職員(造船科教諭) 川島隆志

昭和十九年(一九四四)十一月十九日徳島高工(現徳島大)二年次の晩秋であった。三度目の診察で、せん孔性急性腹膜炎といわれ徳島市前川町原田病院に真夜中の十一時過ぎ、同宿生河西君・吉田君にリヤカーに乗せられて(布団の上に縁起かつぎの下駄あり)入院する。

たまたま来てくれていた父（当時小学校校長勤めで多忙であったが）のみ入室を許され手術に立ち会ってくれ好運であった。

三時間近く要しただろう。当時いまわしい戦争中とあつて、局部麻酔注射三回、全然効きめなく、既に一週間の手遅れにて化膿菌いっぱい、開腹するやバツと寝衣にべつとりうみの山であり、右腹七寸、へそ下三寸と頗る大きな傷口であつた。目にかぶせられたガーゼより腹の上ののせられた、うねりくねつた内臓の山そして鋸で切り刻まれるような痛みは忘れることはできない。手術中は完全に意識あり、痛いという言葉は一度もいわなかつたのに医師は驚いたと聞いているが、自分では唇が切れるほどかんでいた記憶が残っている。

手術後一週間は高熱に悩まされ、医師もさじを投げた状態であつた。腹上のリーカーには氷のう六袋をつるし二十分ごととりかえる忙しさ。時たま心臓の発作が起き、氷塊を心臓におくと段々落ち着く、まことに生と死の境であつた。自分には絶対に死なないという精神力はその中であつて強烈なものであつたらしい。

それから毎日腹の中に入れられた、長い長いガーゼの取り替えのみが行われたが、身体を動かすことのできない苦しみが続いた。特に頸の友浜田君、配属将校後藤中尉はよく見舞いに来て励まされた。友情の深さ。また母が天理教信者であつたせいで、前川町教会宣教師の必死のお祈り、二歳年上の姉もよく看病してくれ、常に二名の付き添いであつた有り難さには感謝の一言に尽きる。

入院中に同じ盲腸炎で五名みまかり、よく棺の出っていく音を聞くも自分は全然不安を持つたことはなかつた。

七十五日で休学と聞かされ、七十三日目に大きな傷口を縫合される

ことなく、腹にぐるぐる晒を巻き、左右から友人に支えられ通学する。無理しても歩幅三分一、みな振り返る状態で教室に入る。階段には苦労したものだ。その時世話をかけた友人も高校教師、会社社長と健在である。昔の紀元節（二月十一日）ころの退院であつた。満二〇歳まで病氣一つしたことなく皆勤で過ごした人生に、こんな試練に遭うとは。

それから三年進級の追試、これが大変だつた。なかでも独乙語は姉のお陰で単位修得、病氣あがりといつてもおれず、何とか必死になつて進級三年次に入る。

五月には難関の海軍技術部依託生試験に挑戦（香川大）、数学、物理、英語それぞれ三時間、設問五問であつた。自分では一〇〇割以上の力を出し切つた合格で、工作機械科六名中、小生のみ栄冠で、人間は努力すれば何でもできる気持ちになつたのもこの時である。それから的人生訓は「行ケ、突ケ、破レ」であつた。

浜田君と共に昭和十九年九月、海名海兵団学生隊に第三期海軍見習尉官として入団する。人生の岐路に立つことに、人生を渡り歩く気力、根性は培われたと思う。さまざまの思いを懐きつつの軍隊生活、会社生活、教員生活、そして退職十年を経過した現在六七歳の今なお青春を謳歌し、生きる喜びを感謝しつつ健康第一に過ごしている。

（昭和三十五年四月―五十八年三月）

余談の余談

旧職員（化学工業科教諭）

堅田政雄

三代校長小林秀雄先生に、旧制工業学校三年生の折、しばらく教えを受けたことがあります。長身白哲、謹厳実直そのものの感じでしたが、実に優しいお方で、かねがね「眠りは生理現象なのでやむを得ないが、私語は他への迷惑である」と申されていました。だれ一人眠るところか、整然と書かれた黒板の字に集中したものでした。

たまに、余談で「万物は流転す」「神は愛なり」など、一四歳の腕白にとつては摩訶不思議とも思える言葉をとおして、自然界の法則、宇宙の真理を、懇切丁寧に説いて下さったものでした。須崎工高で再度お目にかかり、お世話になるご縁を頂きましたが、教師対生徒ではうかがい知れない一面にも触れ、一層畏敬の念を深めたものでした。授業にとつて、適切な譬喩や余談の大切さを教えて頂いたわけですが、先生の碩学と力量とは、遠くかけ離れた蠅螂の斧の諺どおりで、なんともおほずかしい次第です（昨夏のこと、卒業生から当時私の仇名がカマキリであったと聞かされて、独り苦笑したことでした）。

退職後、もはや手遅れと承知しながら痴呆予防にと、パソコンをいじっていますが、ポーラログラフのシミュレーションをプログラムにしたくて、古い本を引っ張り出して読み返していますと、「……ちなみに中国ではポーラログラフのことを『極譜儀』とよぶそうで……」の一行がありました（武者宗一郎・現代化学シリーズ）。こういったたぐいの余談は中々楽しいものです。

中国語は表音文字を持ちませんから、外来語は音か意を漢字化するわけで、可口可樂（コココーラ）とか、汽水（炭酸水）、電視机（テレビ）という風になります。極譜儀の極は分極ないしは電極、譜は図表、儀は測定器具と独り合点して、中々含蓄のある訳語だと感心させられました。

このポーラログラフが、昭和三四年、化学工業科の新設に伴って設置されましたが、当時旧態依然の知識しかもっていないなかつた私には、記録ペンが描く鋸歯状の曲線は将に目をみはる衝撃でした。

爾來退職までの二十数年間、工業化学に籍を置くことになったのですが、その転機に「未知との遭遇」があつたことは、今思い出しても実に感慨深いものがあります。

化学工業科発足の際のスタッフト先生は、逸速く京大の館研究室へ新技術研修のため留学されましたが、そもそもポーラログラフの誕生は、館男博士の恩師、志方益三博士が欧州留学中、一九二三年チェコスロバキアのヘイロプスキー博士（ブラハ・カール大学）の門をたかれたことに始まります。両博士の共同研究は一九二四年、写真式ポーラログラフを完成、その命名は志方博士の発案によるそうです。かくして一九二七年に第一号機が京都のY製作所により発売されています。その功績によりヘイロプスキー博士は一九五九年、ノーベル化学賞を受賞することになります。

当初の装置は反照型検流計の光をドラムに巻いた印画紙に記録するもので、作業はもちろん暗室の中、調整は大層困難であつたといわれます。その後改良が進み、記録ペンによる自記式へと発展することになります。

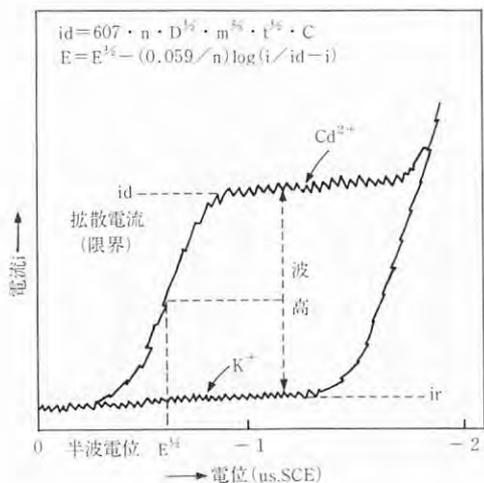
ポーログラフは電解分析の一種で、分極状態における拡散電流の測定装置”とでもいうもので、記録された拡散電流の値（波の高さ）から物質の濃度が求められるもので（定量）、これまたチエコの天才学者イルコピッチの理論式によるものであります。また、描かれた波高の二分の一に相当する電位から物質が特定されます（定性）。

*分極状態の電極として、滴下水銀電極が用いられます。毛細管の先から水銀を滴下させるもので、水銀粒の成長、落下の繰り返しにより、電流値が特長あるギザギザ（鋸歯状）に記録されます（図参照）。

現在、ポーログラフは、実験室の汎用機器であり、実習でも必須

項目に挙げられていますが、まだまだ未知の東欧チエコで、半世紀近くの昔、日本人の手による誕生のエピソードは、是非知ってもらいたい、心弾む余談ではないでしょうか。

その昔、悪魔に自分の影を売る「ブラーグの大学生」という幻想映



画がありました（ブラーグは現在のプラハ）、数年前、都合三回も観た「アマデウス」も仄間に誤りがなければ、プラハで撮られたそうで、共に濃い霧に包まれた中世のたたずまいが、なんとも妖し

にか志方博士とプラハの石畳の路がオーバーラップして胸に焼き付いて離れません。単なる感傷的な幻想だとお嗤いでしようが、脱線人生の終焉までにプラハを訪れたいと夢をふらませています。

（昭和二十八年四月〜四十一年三月）

追憶

旧職員（化学工業科教諭）

田所胤雄



ご覧のように私は今やどう見ても「ちんま」であるが、十七年前五四歳で本校に赴任した時、既に生徒たちは「おぢい」と私のことを呼んでいたようだ。随分老けた教師が来たものだと思つたことであろう。

昭和四十九年四月三日、

和佐田の山を登る男がい

た。彼はその春の異動で二十七年間勤めた高知工業を転出になり、この日初めて新任校へ出勤する所である。沿線の桜を見ても、大間の駅で春風に吹かれても彼の心は楽しまなかつた。足取りも重く坂を登り、玄関の胸像を横目に三階の化学工業科職員室に入って驚いた。

何という明るさであろう。春の太陽は部屋いっぱい降り注ぎ、眼

下には錦浦湾越しに太平洋の水平線が見え、港には巨船の出入りするの見える。ソファーに腰を下ろし、コーヒーを戴き、旧知の先生方とお話をしているうち、どうやら教師の私に戻ったようである。

翌日、組織職員会議に出席してまた驚いた。議長団には実に権威があり、校長たりとも遠慮なく注意を与えている。特に驚いたのは守衛の松本さんも出席して発言していることで、これなど前任校では全く考えられないことであった。今朝事務室で会った用務員の阿曾さんが、管理職かと思うほど元氣なあいさつをされたことと思いわせて、本校では教職員が分け隔てなく教育に当たっているのを痛感した。

五月二十五日の開校記念日には校内相撲大会があった。生徒のチームに伍して教員チームが裸で取り組む姿には感動した。相撲に限らずすべてのクラスマッチに教員チームが参加していたが、教師の真摯な姿は生徒に大きな影響を与えたことであろう。

当時の生徒の中には、かなり心の屈折を抱いて入学していた者もいて、校則違反を起こす者も度々あった。私も自分のホームの生徒の指導を定める職員会議に何度か出席したが、当時の日記を読んでも、次々起こる問題に振り回されている無能な教師の姿が浮かんでくる。教諭の論の字の重さを、これほど痛感したことはなかった。もう親の力を借りるしかないと思ひ、幸い学校に当時備え付けてあったバイクを借りて練習し、免許を取り、科の先生方の応援も得て、家庭訪問に取り組んでみた。

進路指導のこともあったので、須崎はもとより、窪川・久礼・安和・葉山・越知・佐川・戸波等々生徒全員の家を訪ねたはずである。しかし結果的には余り効果はなく、結局卒業式の前日まで家庭訪問をする

ことになった。ただ私の救いは、問題を起こした生徒が意外に明るかったこと、無能なホーム主任でも余り嫌われなかった事であろうか。このクラスからは妻が乳癌で入院した時お見舞いをいただいた。今考えみると、根本的には歪んだ教育制度の下で、生徒も教師も苦勞させられていたという気がする。

しかしこの一年の経験は、私にとって非常に良い勉強になったといえる。その後曲がりなりに二度のホーム主任を経験し、修学旅行にも二度生徒と行を共にした。退職の年、卒業式でホームの生徒の名前を読み上げたが、どうやらこれで私も教諭の卒業免状をもらえたかなと思ったことである。

ただ、私がここまで来れたのは、何といっても私を援護し、慰勞してくれた科の先生方のお陰であり、その背後に須崎工業高校全教職員の和があったことを忘れることはできない。

この年はまた、夏の風水害で多くの生徒の家が被災したり、国鉄ストで一週間も休校になるなど多難な年でもあった。

今こうして須崎の五年間を振り返る時、教育面の厳しさよりも、楽しかった思い出の方がはるかに多い。休暇にはよく、科の教員全員で一泊又は二泊の旅に出掛けた。阿南海岸や南紀白浜・勝浦など、また津野山郷の民宿で酔い覚めに戴いた冷たい熟柿の味なども、忘れることのできないものである。

須崎は新鮮な魚介類の多い所、^{かつお}鰹や浅鯛を肴に飲む酒は、やはりここならではのものであった。酒が回るとよく機械科の広瀬先生が演歌を披露されたものである。先生はレパートリーも広く、歌唱力にお

いても須崎で先生の右に出る者はいなかったであろう。

そして私にとって一番の出来事は、合田先生の俳句との出会いであろう。高知からの通勤一時余りの無聊むりょうを俳句のお陰で随分紛らわすことができた。俳句の目で見ると沿線の風景、特に四季の移り変わりは、まことに楽しいものがあつた。桜やつつじ・若葉・田植え・萩・コスモス・稲刈り・紅葉等々、毒だみや葛の葉・枯木にさえも風情を感ずるようになったのは、全く俳句のお陰とつくづく思うのである。現在でも須崎で御一緒だつた先生方との句会に出席して、一つの生きがいとなつている。

昭和五十四年四月十四日、もう校の散つた清美荘で送別の宴を催していたのだが、五年間親しんだ教職員の方々との惜別の気持ちと、五年前には予想もなかった充足感の中で、杯を重ねたことであつた。

桜咲く 和佐田の丘の 昔かな たねを

(昭和四十九年四月―五十四年三月)

回想記

旧職員(電気通信科教諭) 木岡 滋 雄

平成三年には創立五十周年の記念すべき年であり、半世紀を風雪に耐え幾多の卒業生を世に送り我が国の産業界はもとより、あらゆる社会で貢献している各位、今日教育の場にて精進されている皆さんに心よりのお慶びを申し上げます。なお、将来ますますの雄飛を望むもの

であります。

私が須崎工業高等学校へ赴任したのは、昭和二十九年一月八日、三学期の始業日のことでした。当時の学校長は森岡貞篤先生で新任教師として職員に紹介され、講堂で生徒にも引き合わされてあいさつしたように思います。以来昭和三十九年四月一日付高知工業高校へ転任するまで十か年の歳月を勤めさせていただきました。この間の思い出を「温古知新」の意味合いで述べてみようと思います。

この三学期という中途採用になった理由は、電気通信科の新設が二十七年にあつて、第一期生が三年生となり、学科の体制がようやく整いつつあつた時期であり、工業科の教員の充足を求めていた時で、校長の推薦にて県教委が発命を行う制度でありました。現在の採用試験の方法とは随分と違つていました。最初は前年の二学期からの予定でしたが、前任校での補充教員が見当たらず延伸してこのようになつてしまつたのです。

着任後電通科の教員として、中沢・加藤・堅田先生らとチームを組むことになりました。この状況で私は三年生の実習だけを担当することになつたわけですが、札町の旧学校で校庭に隣り合わせた木造平屋のしかも土間に実習机を並べ、実習用機器としては計器が二〇個、抵抗器が一〇個、外にバッテリーが数個で他に見るべき物はなく、三極真空管の特性試験を測定したと記憶しています。このようにして三月一日に一期生が巣立つて行つたのです。

またこのころは戦後の復興の兆しはありましたが、新設学科の第一期生の就職は困難な時期で、田村隆徳先生のご尽力が大きかつたのです。でも専門の技術者として企業への就職は極めてむづかしい状況で

した。だが、一期生は一期生としてのプライドとフロンティアスピリットを内に秘めてそれぞれの道へと進出して行きました。

さて、当時の学校は戦後火災に遭って中校舎は焼失しており、県当局は科の新設に伴い復興工事として完成した四教室を電通科へ充てられることになりましたが、それでもまだ教室不足で、講堂をベニヤ板で間仕切りして二教室分があり、電通科一年生、造船科一年生が使用していました。私の声は大きいほうで隣まで筒抜けの状態で隣の生徒は、国語と電気理論の二教科を聴いていたと述懐されました。

四月からの電通科第三期生を宮尾先生と私で二〇名ずつ分担して主任を受け持つことになりました。これも須工独特の制度であったと思います。少数の生徒をしかも三か年連続の持ち上がりで一層密着した師弟関係を樹立したと思っています。しかし一方では、あの教師とは「うま」が合わないと思われる面もあったかも知れません。これも一期一会の巡り合わせとして許してほしいと思います。

また、工業高校へ多数の女生徒が入学する機会が生まれ、科学技術立国への発足、女性の工業界への進出の芽生えとなったといえそうです。三期生には女生徒一名が学んでいました。その後も引き続き女子の卒業生が送り出されることとなります。

約三十余年を経ましたが、当時の生徒を振り返ると、良く学び・良く遊べの例え通り真剣さがよみがえり、隔世の感を覚えます。電気通信科の施設・設備はいまだ緒についたばかりで、その充実を計るためにも文部省の研究指定校を受け、「学校における生産実習について」をテーマに報告書の作成と発表を行ったことは思い出深いものであり、特別補助金として五〇万円程度を頂き計器や東芝製の八杉黑白テ

レビ受像機を購入しました。テレビは当時の価格で一五万円で随分高価なものでしたが、五台山からの電波は当地まで届かず、画面はスノー状態で受信不可能でした。備品も産振法の施行によって整いつつありましたが、郵政大臣となられた寺尾豊先生を訪ね教材用として電電公社の廃棄品でもよいから譲渡して下さいようお願いしご援助をいただきました。

電通科では初期のころ通信術の教科が組み込まれ、一、二年生で六単位履修していましたが通信士としての社会的要請もなく、学科編成も通信機器に重点を移すようになりました。就職面でも二期生から上場企業へも数名ではありましたが採用され以後継続して各方面の職域で活躍する伝統が生まれることになりました。

ここで教職員について記したいと思います。平均年齢二〇代後半の若さあふれる集団で、放課後季節に応じた多種目の体育行事に教員チームが編成され、クラス対抗マッチに全種目挑戦し、総合優勝を勝ち取るなどファイトに満ちていました。ソフトボールでは学校長が一塁手として出場し、地域社会との親善試合でも無敵を誇っていました。また、宴席もたびたび開かれ自由な雰囲気でも無敵を誇っていました。至ることもしばしばでした。二日酔いでも翌朝は定時に出勤するのだという気概を持っていました。まさに全員が和気あいあい協力態勢で校務に当たっていたと思います。昔から「天人」の格言のごとく人の和を持って尊しを最上となすと論されているよう、楽しい職場であったことに感謝し、また併せて懐かしく思います。時移り「勤評」など不幸な出来事が起こり不信感を助長するような教育現場は心に澱を残してしまいました。その後学制変更が県当局から出され、須工の

電気通信科も十余年の歴史にて終了し現電気科へと移行してしまつたのであります。

(昭和二十九年一月〜四十一年三月)

須工と私

旧職員(電気通信科・電気科教諭)

森 義 彰

開校五十周年をおよろごび申し上げます。今更ながら光陰矢の如しの感慨を深くいたします。私事にわたる追憶の記にとどまるかとも思いますが、ご依頼により何か書かせていただくこうとペンを取りました。

私が旧制高知工業に入学して間もないある日、当時高知市に住んでいた私は、たまたま須崎町の親戚を訪ねるべく須崎駅に降り立ちました。すると何故か高知工業の先輩に何人も会うではありませんか。けげんに思いつつも、当時は先輩に対して挙手の敬礼をもってあいさつすることがルールでしたから、生真面目に敬礼をしつつ町を歩きました。やがて全く答札のないおかしさに気付いて、よく見ると、帽章が違っているのです。相手は須工生でした。ほやほやの中学生には遠目に両校の校章の区別がつかかなかつただけのことで、我ながら独り芝居に苦笑しました。

後で知ったことですが、この校章のデザインは私の一年次のクラス担任だった森光喜先生によるもので、先生は当時県下屈指のイラストレーターでもありました。

やがて戦争が激しくなり、日本は一気に破局へとなだれこむ時代に

なり、私も昭和二十年七月の高知大空襲で家を焼失、郷里の須崎市で敗戦を迎えました。

その後汽車通学をしていましたが、三人の従兄たちが須工に在学していて、私の校外生活は須工とかかわりが深く、青春の懐かしい交友の一時期でした。休日に誘い合つて草野球をやるとなると、場所は問わずも「須工のグラウンド」でありました。A君は高下駄ばきでファーストに、B君は緋の羽織など着てレフトに球を追う等という珍風景を今の方は想像出来るでしょうか。

町民からも須工、須工と親しまれ愛された学校にとつて不幸な出来事は、昭和二十三年七月三十一日の火事でした。今も記憶に鮮明ですが暑い真昼でした。私が友人と堀川にはいつて眼鏡橋の下手で鰻を獲らんと延縄を沈めている時でした。けたたましいサイレンに驚き振り向いた空高く黒煙が渦巻いています。すわ、須工！とばかり岸を駆け上り走り着いたのですが、本館は既に紅蓮の炎に包まれていました。

北舎の階下に飛び込んで教室の机(当時は机、腰掛がセットになっていた重かつた)を幾つか運び出した所で、「二階に火がついたぞ!」という呼び声。もうこれまでと窓から飛び出し、グラウンドの北の端に座つて、茫然と校舎の燃え落ちるのを眺めるだけでした。白昼夢のような出来事でした。後日この教室の隣の理科準備室に、地学の先生の集められた貴重な教材資料等が置かれていて全焼したと聞くに及び、知らぬこととはいえ残念な口惜しい思いをしました。

やがて私は昭和三十年の春電気通信科に教員として赴任する事になり因縁浅からぬ須工となりました。まだ貧しい社会、経済状況下、施設設備はまことに粗末の一語。須工は特に先述の火災復興ままなら

ず、本館のみ復旧し普通教室は不足のまま、いい加減手狭な講堂を四分の一に仕切り、南が造船、北が電通というような教室配置でした。勢い授業は隣の授業の声に負けまいと段々と声高になり一時間を済ませて顔を合わせた同僚と健闘をたたえ合うという具合でした。

この状態は電気通信科校舎が完成するまで数年続きましたが、絶後の就職難時代で工業高校へは進学希望者が多く、優秀な生徒が集まり、文武両道をよくこなして高吾地区体育大会では常勝を誇りました。競争社会の昨今の趨勢を思うと今昔の感もありますが、放課後はグラウンド狭しと教師と生徒が気持ちのよい汗を流したことでした。

私もバスケットボール部の顧問として監督になって六年目の新人大会に、念願の県下初優勝を成し遂げ四国大会に臨みました。この優勝戦で高知商業と一点を争うシーソーゲームとなり、終了のホイッスルと同時にロングシュートが決まり明暗を分けるという強運に恵まれ、協会長から「市外校が優勝校になったのは協会初まって以来の事で云々」の祝辞を受けました。振り返るとその後高知工業監督時代を含めて三回の初優勝の喜びを経験していますが、須工の教え子と勝ち取ったこの優勝戦にまさる感激はありません。

学業指導面において特徴的だったことに、日本経済成長期に特に理工系の教員不足という現象があり、臨時教員探しに苦労しました。四国電力の配電課長、変電所長、自営の工学士、薬剤士、県の無線技士、大阪セメントの電気技術者等々、地元の名士に協力をお願いし授業の円滑をはかったことは、いま思うと生徒たちにとっては、異分野の人格に接する機会でもあったわけで、よい体験だったかも知れません。

ともあれ、県下の伝統ある工業高校として多くの人材育成をし、地

域を支えた存在意義は大きいものがあり、開校五十周年を契機として一層の発展がありますよう、須崎市の貴重な文化財として時代と共に新生しつづけることを切に希望したいと存じます。

(昭和三十年四月～五十二年三月)

須崎工業の思い出

旧職員(電気通信科教諭)

中 沢 恒 雄

須崎工業高校が創立され、以来早くも満五十周年を迎えますことは、誠に意義深いことであり、心からお喜び申し上げ、五十年の伝統づくりとその歴史を築かれた諸先生方並びに卒業生の皆様から敬意を表する次第であります。

私が須崎工業に赴任したのは、昭和二十七年、校舎は西糺町の旧校舎でありましたが、電気通信科が増設された年でした。この時が私の教師へのスタートであり、通算八年間を電気通信関係の科目を担当して勤務させて頂きました。昭和三十七年に東工業に転任となり、長い期間の勤務の後、一昨年、定年で退職しまして、現在は、自然に親しむ第二の人生を送っています。月日のたつのは早いもので、須崎工業時代の、ひとつの事柄を思い起こす時に、遠くかすみの彼方にあるようで、記憶の定かでないこともあります。

赴任の最初の年は、電気通信科一年生のホーム主任と、その専門科目を十三時間くらい担当したのですが、私も教師のかけ出しであり、生徒の皆さんから教師のあり方について色々と勉強させられたことで

した。

電気通信科第一期生の、私から見た生徒の印象は、田舎育ちであるためか純朴で、素直、親しみの持てる生徒たちでありました。私はこの生徒たちをいかに育み、工業技術者として社会に送り出すことができるかと、責任を痛感したことでした。

第一学期当初は、実習室と実習設備が完備されていないので、それらの設置から始まり、一学期末にはどうにか基礎実習ができる程度に設備は整いました。しかし、実習の担当者が初年度には少なかつたために、色々と工夫をこらした実習を余儀なくされたことでしたが、第一期生はこうした不便さの中でも、熱心さでそれを乗り越え、毎日の授業が充実したものとなることを感じ、若い教師の私も、教師としての心構えが序々に固まっていくのを感じたことでした。

実習設備は三年間が経過する中で、年次計画によって整い、教育課程と実習内容も、時代の要求に沿う内容となったのですが、この時代は、工業生産の面でも現代の技術革新の時代と比較すれば、大きな相違があり、教育現場の実状においても、この時代に即応した教育内容であったわけで、考えてみれば私共も、このような時代もあったものだと感じ深いものがあります。

しかしながら、この時代の卒業生の方々は、その後それぞれを経験をされ、新しい知識と技術を勉強され、産業各分野とその立場で活躍をされていることを思い、私も感慨無量であり、喜ばしい限りであります。

工業教育も、東工高に電子科と工業計測科が設置された後に、須崎工業の電気通信科は、電気科に課程を変更し、その教育課程も、発送

配電や電子工学を主体とした課程に移行し、また安芸工業高校に電気科が置かれ開校されましたが、これも工業技術の変遷と産業界の人材要求に対する対応であったと思われまます。

最近のエレクトロニクス産業は世界的に目覚ましいものがあります。この時代に卒業生の皆さんが、各界で活躍されていることを思い、また須崎工業高校が五十周年記念を迎えますことをお喜び申し上げます、須崎工業の歴史が、今後ともますますの発展の道をたどりまますよう、祈念しまして、私の寄稿とさせていただきます。

(昭和三十二年四月―三十七年三月)

私の須工時代と生徒たち

旧職員(電気通信科教諭) 島 本 理 夫



私の須工時代は、昭和三十四―三十八年(一九五九―六三年)の四年間でした。この時期は戦後時代からの脱皮の時期だった。――

日本のエネルギーは石炭から石油へ、マイカー時代が始まり、GNP

は一〇割を超えて「岩戸景気」。しかし政局は安保条約で大ゆれ、内閣は岸から池田へ。所得倍増高度成長政策で農村は「三ちゃん農業」、一方、東京都一〇〇万人の過疎過密が始まった。

黒四発電所、東海村の原子力発電が完成して翌六四年の高速道路、

新幹線開通へと続き、東京オリンピック、国際通貨基金八条国として日本は国際舞台へのりだした。

世界も、キューバ革命、李承晩退陣、ケネディ暗殺、地球は青かった”のポストークが宇宙へとびだした。その時期、高知県の教育は、勤評、実施、処分、撤回の運動と父母、生徒をふくむ大きなうねりから全入運動へという時代であった。

私は三三歳で教師、おそい出発だった。――

小学校から中学校、職業軍人の学校へといくうちに戦争は拡大した。

“大君の辺にこそ死なめかえりみはせじ”と二〇歳のいのちを“神国”にかけていたから、八月十五日に日本の歴史は急転したが、私は、“生ける屍”からの出発であった。曲げられた歴史の中から真実をつかみだすのは、骨の折れる作業だった。

やっと歴史の動きがみえはじめた時教師へのスタートをきった。この十五年戦争の私の結論、「どんな仕事をして歴史の真実だけは裏切るな！」に立っての出発だった。わけでも教師は歴史の真実を伝える大事な仕事。教育がどんな人をつくるのかは青春を戦争で奪われた私が生き証人でした。出発にさいし教育学としての知識は十分ではなかったが、この教育の原点をふまえて、あとは生徒と平和な青春を共につくろうと決意していた。

当時、須工は一クラスを二人の教師でもっていた。昭和三十四年入学の電通科生は、森田鉄亀先生のルーム二三人、私のホーム二二人だった。二二人中、父を亡くしていたもの六人（内戦死四人）どの生徒も戦争の傷をせおって育っていた。小中学校の昼食時、いつも校庭へとびだす弁当をもってこれられない友をおいかけ、自分のイモ弁当を分け

て食べるなどの体験はみなもっていた。

一年の九月、勤評で校長先生の処分をめくり生徒総会やホーム討議が続くなかで、「三年生の長いものにはまかれるとか、世間の目がこわいとかいう意見は不真面目だ。自分は勤評の問題はよく分らないが真剣に考えたい」…など、自分の目で確かめようとしていた。そして幼い時の戦後体験から「勤評は戦争への道というが、戦争をしようとしても第二次大戦のみじめさを身の中に深くきざみこんだ人々が戦争を望むはずがない」と国民的体験であった戦争をふまえて考えることのできる生徒たちであった。「…一心同体のクラスになると考えていたが…いまはリコイやつ、普通、バカと三つに分けられ…一番からケツまででき、聞いても教えてもくれん」という“友への手紙”がクラス新聞「自動制御」三号にのり、クラスは大騒ぎ。これを書いた自称ケツのTは、「ケツができたから一番ができた」とケツの存在を明記した。

育ちははじめた個性は、はやくも激しくぶつかり、からみあつてクラスは成長しはじめた。二年・三年を以下スケッチ風にたどると――。
二年の五月チリ地震津波。大間のNの家へ片付けに行く。八月夏休み生徒四人と四泊五日の足摺岬往復のサイクリング。九月校内弁論大会。クラス代表Hは須崎地域の独占資本の進出を論じ、以後は“独占資本”と呼ばれる。十二月冬休み。生徒五人、私の家から室戸復日帰りサイクリング。二月、下宿生の“やきいも会”始まる。三月、北九州修学旅行の取り組み、二時間続きのロングホームは角谷岬から富士ヶ丘へと続いていた。

三年になると、卓球、ソフト、駅伝などの校内大会で大活躍。クラ

スの力が一つになったハンドの優勝戦。計算尺検定一級合格。高新材料有限公司で八位になったNなどクラブ活動でも成果をみせた。十二月冬休み、須崎から南国の私の家まで生徒二人と走る。三三ニキトロ朝倉駅前でダウン。二月、卒業式後のお別れクラス茶話会の準備は、職員室で徹夜となる。

クラス会は感動で忘れられないものとなった。「三年間の想い出」文集で森田先生は、「この三年間皆の兄貴役として色々世話して来た私も、今迄にない感激を覚え多かった苦勞も楽しい思い出になりました。…ホームルームを良くしようと努力してくれた者も、反対にサボった者も、それぞれ違った収穫を得たようで、今思えばそれで良かったと思います。私達もガタ／＼の多いこのクラスを何とかしてまとめようと思った事でしたが、そのガタの中で皆は夫々自分の個性を充分に伸ばし得た点で良かったと思っています。」とまとめられた。

高度成長政策にのって地元に残ったものは一割、大部分が全国へ散った。社会へ出てからの生徒からの便りは「このひろいそのらのごっこで」の書簡集となった。「…俺達のクラスはいつまでも目にみえない綱でしっかりしばられている。先生みていて下さい。一人一人が人間らしい者になっていくのを!! 楽しみにまた心配そうに。」と製鉄企業へ行ったSは便りをくれた。

こうして記憶をたどれば、須工はやはり私にとつてういういしい、こわいものしらずの青春時代であり、初心を教えてくださいのところだった。年賀によれば、来年卒業三十周年記念会を企画中だとのこと、また初心にかえる機会を楽しみにしている今日このごろです。

(昭和三十四年四月―三十八年四月)

ダチュラの花咲けば

旧職員(事務職員)

吉村靖子

須崎で生まれ須崎で育った私にとりまして「札の須崎工業」は、小さいころから比較的身近な存在でした。

昭和二十三年七月須崎工業高校は、漏電により本館と第二校舎全焼という大惨事に見舞われました。その時私は小学生でしたが、真夏のキラキラした太陽が照りつける暑い日のその光景は、今でもはつきり思い出すことができます。

時ならぬ火事のサイレンに驚いて外に飛び出ると、池山の手前あたりから物すごい煙が上がっていました。そのうち「あれは工業じゃ。工業じゃ」という町の人々の悲鳴にも似た声が聞こえ、通りをだれ彼なしにバタバタと走って行きました。現在のように高い建物もなく、横町一つ隔てた我が家からも燃え盛る炎が見えるようになり、そのすさまじい火勢はただただ恐ろしく声もなく眺めておりました。

そのうちだれかが「あつ。中澤先生のお嬢さんだ」といっています。画家の中澤竹太郎先生は、当時須崎工業高校で教鞭を執っておられ、確かお住まいは学校の中にあつたはず。お嬢さんは、新莊川で水泳中に急を聞き走って帰るところでした。私は面識はありませんでしたが、とても美しい方で多くの下級生の憧れの的だとか。若しかしてその方のお家もと思うと、体中に戦慄りが走り、膝の震えがなかなか止まりませんでした。

須崎は古くから「火鎮祭大相撲」が行われていたこともあつてか大

変相撲熱が高く、好角家の多い土地柄でした。須崎工業高校に待望の相撲部が生まれ、高校相撲界で次第に頭角を現し、ついに昭和二十九年全国優勝まで成し遂げたものですから、市民の喜びはそれはそれは大変なものでした。地元を挙げての祝ぎ心は、須崎駅から西町までの祝賀提灯行列となりました。

相撲部主将の高山さんは同級生でもあり、その快拳は一際誇らしく思いましたが、何分にも純情な乙女は気恥ずかしくて、熱狂する人垣の後から闇に掃れるともし火をそっと見詰めておりました。

昭和四十一年に私が須崎工業高校に赴任しました時は、職員室北側の中庭に土俵があり、いつもきれいに掃き清められていました。放課後にはクラブ員の回し姿も見られ、激しい稽古の声が事務室まで聞こえてくることもありました。

毎年五月の開校記念日には、校内相撲大会が行われるのが恒例となっており、さすがはと思つたことでした。教職員チームも堂々たる出場振りで、なかなかの成績を上げておりました。その年四月に転入された先生の中には、早速選手として土俵に上がらねばならぬ方もありました。その少々戸惑つた表情なども今では懐かしく思い出されます。

土俵の少し西の方に夏から秋にかけて、花冠一五ほどもある、白いラッパ状の優美な花を付ける低木があるのに気がつきました。

今までに見たこともないその花木は、南米チリ、ペルーに分布するダチュラという名前のなす科の植物でした。種子と葉は薬効もあり、日本には大正初期に渡来し木立朝鮮顔ということのこと。筒状部が長く急にラッパ状に開いた花の形態から、一名をエンゼルトランペット

と呼ばれているそうです。木の高さは一拵半近く、長楕円形の大きな葉陰に白い花が垂下し、次々と開いていく様は本当に見事なものでした。

その小さな苗を一本分けてもらい、我が家に植えてから早二十年の歳月が流れ、今では夏が来ると二、三十もの花を咲かせるようになりました。強烈な日差しの下で、ダチュラの白い花が咲き始めると、私の脳裏には過ぎし日の須崎工業高校でのあれこれが、しきりによみがえつてまいります。それは男子校特有の妙に静かなざわめきであったり、実習服・実習帽で少し大人びて見えた生徒たちのことであつたり、あるいは工業学校ならではの鞆祭のことであつたり致します。

しかし何といつても、職員室や事務室で日々お世話になつた諸先生や事務の同僚の方々への思いは熱く、尽きることがありません。昨年「国際花と緑の博覧会」でこのダチュラの花を見かけた時も、旧知に突然出会つたような親しみを感じたことでした。我が家に根ざしたエンゼルトランペットは、これからも花開く度に、須崎工業高校の追憶の数々を奏でてくれることでしょう。

昭和四十七年に念願の新校舎が完成し、糺町から多の郷和佐田の丘に移転が行われました。狭くて古い木造校舎は一新され、広大な敷地に近代的な学び舎がそびえるようになりました。糺町の工業高校からも、多くの優秀な先輩たちが巣立っていったように、和佐田の丘からも新しい時代を担う、立派なエンジニアが飛び立っていることと思ひます。

南に錦浦湾を、北に森田山を望み、四季の移ろいが殊の外美しい高台は、そこを学び舎とした者にも、また職場とした者にも折にふれ懐

かしく思い起こされることでしょう。

半世紀の学校の歩みの中で、八年の長きにわたりお世話様になり、ご指導いただきましたことを、改めて感謝申し上げますとともに、須崎工業高校の今後ますますのご発展を心よりお祈り致しております。

顧みるタチュラの花の旧校舎

(昭和四十一年四月―四十九年三月)

(現県立佐川高等学校事務長)

須工と私

元職員 松本 亀男

昭和二十七年八月、私が須崎の職安に保険をもらいに行った時のことです。求人担当の中谷さんから「須崎工業から守衛の求人が来ています、あなただったら推薦しますが、どうですか」、といってもらいました。

私は、「そうですか、とにかく一晩考えさせて下さい」といつてひとまずその場は帰りました。どう考えても、あまり見込みはなく、毎晩学校で寝なければならぬなど、気は進みませんでした。とにかく願書を出し、面接を受けてみることにしました。

面接の当日学校へ行くと、既にほかにも五人の方が志願をされていて、私は最後の六人目になっていました。面接は、校長室で校長先生自ら行われ、形通り、氏名・年齢などの質問の後、大略次のお話がありました。

「この学校は木造で、二十三年には火災があつて一度焼けています。また、南海大地震で学校の周囲の塀が倒れてしまい、外部からだれでも出入りできるという用心なところもあつて、もし守衛をしていただくことになる、大変ご苦労がいくと思います」

このお話は、守衛はこういう仕事をしてもらうのだと、直接いわず、「ご苦労がいくと思います」と、それとなくいわれる、そのお話ぶりに、私はまず驚いたことでした。

次に、「これは何かご存じですか」と、そばに置いてあつた三本の、それぞれ種類の異なつた消火器を指していわれました。私は偶然のことながら、須崎市の消防団に所属していたので、一つ一つの消火器について、用途と使用法を細かに承知して、説明することができました。

校長先生は、大変驚かれ、「ほう、これはこれは、あなたは随分詳しく消火器のことをご存じですね」といわれました。私が、前述の消防団に所属していることを申し上げると、「そうですか、さすがですね……。それでは、後日、採否についてお知らせしますので、今日はこれで……。有り難うございました」といわれました。

この時の校長先生が、当時、県下でも名校長の誉れ高かつた森岡貞篤校長で、現森岡清校長のご尊父に当たられる、大校長先生でありました。私は、この面接の時、初めてお目にかかったのですが、実に温厚徳実で、その穏やかなお話ぶりにもかかわらず威厳があり、一目で信頼できる方という感じを受けました。数日後、思いがけなく採用の通知を頂き、それ以来三十九年間、ずっと勤めさせていただいております。

昭和二十八年の夏、学校のすぐ前に、校長公舎が新築され、それまで佐川のご自宅から通勤されていた校長先生は、ご家族共々この新築の公舎に移ってこられ、それ以後は、奥様にもご子息（現校長）にも松本さん、松本さんと、家族同様のお付き合いをいただきました。

守衛という仕事は、夕方から朝まで、学校の警備を担当します。その間、色々の苦勞もありましたが、三十九年間という、今考えても大変長い間、私はこの須工にあって、多くのことを学ばせていただきました。それは、単に私が守衛という仕事だけではなく、勤務期間のすべてにわたって、先生方が同じ学校の職員という立場で、お付き合いをして下さったからであります。

職員会にも出させていただき、意見を述べさせていただいたこともありましたが、県内のどこの守衛も、こんな扱いをさせてもらった人はいなかったと思います。その間、多くの話がありますが、私にとつて、ここでもうしても記録にとどめていただきたいのは、本校の「同和教育」の素晴らしさであります。

私が採用になったころは、まだ「同和教育」などという言葉すらなく、社会では公然と部落差別が存在していた時代でありました。昭和四十年に入つて、全国的によく同和教育の重要性が認識されるはじめ、学校でも生徒の差別発言が取り上げられて、職員会でその対応と、同和教育の推進について真剣な協議がなされるようになりました。

須工では、そうした協議の結果、本格的な同和教育の推進を図るためには、校務分掌に「同和教育部」を設置し、そこで、指導上の問題点を抽出し、その解決を図り、更に校内での指導方法の確立を研究するため、専門の部所を作ることになりました。この、本校の同和部

の設置は、県下でも最も早い時期であったと思います。そして今では、どこに出しても誇れるだけの機能性を持った同和教育部として成長してきたと自負しています。

これだけのことができたのは、何といつても、歴代の校長先生と各先生方が、同和問題に対し、強い関心と理解を持ち、一致協力して取り組まれた賜物と思つていきます。

同和教育も、一時は様々な障害もあり、理解されにくい面も多々あったと思いますが、須工の先生方は、そうした困難を次々克服し、今では、人権問題として、より理解を広め、たゆまぬ研鑽によつて、素晴らしい態勢を創られていることは、感慨無量のものがあります。

創立五十周年を迎え、この原稿のご依頼を受け、本当に光栄に思いますし、今後も須工が、ますます発展されますことを、心から祈つていきます。

（昭和二十七年十一月―五十八年六月）

（現 委託警備員）

須工での日々

(その二 卒業生)

機械科二種一期生

十八年機械科二種卒 西川 嘉明

昭和十六年四月、須崎に工業学校が新設されることになった、その生徒募集要項では、小学校卒業を受験資格とする五年制の一種と、高等小学校卒業を受験資格とする三年制の二種があり、いずれも機械科のみであった。二種は、三年制であるが甲種工業高校の資格（上級学校への受験資格）が与えられる、と云う新しいものであった。

私は、この二種に受験したが、受験者は定員四〇名に対し、一二〇名くらい、試験場は須崎小学校であった。筆記試験については、どんな問題が出たか、またあったかどうかも今では記憶にないが、口頭試問は、一人一人呼び出されて試験場に入ると、四人ほどの試験官が並んでおり、その前の椅子に一人座らされて、

「汽車は、どうして走りますか」と聞かれ、石炭を燃やして、蒸気を作り、シリンダーに入れて、ピストンを動かし、クランクで回転運動に変えて、車輪を回して走ります、と答えた。

次に、「汽車に乗った時、どのように感じましたか」と問われ、早くて便利ですが、振動がありやかましい乗り物だと思います、というような答えをしたように思う。

四月になって開校を迎えたが、先生は、専任が中内校長とほかに一名、兼任が数名、校舎は須崎小学校（当時国民学校）の東北の二階建て木造校舎一階の東端の二教室で、机は、椅子と一体になった一人掛けの真新しいものが並んでいた。

一学期の初めころは、機構学、力学、材料等の専門科目はほとんど校長自らの授業であったが、先生の授業は説明が分かりやすく、明るくて楽しかった。今でも、科学の法則を理解するには、「必要にしてかつ十分な条件」とか、「逆も亦真なり」、「逆は必ずしも真ならず」というようなことを併せて検討する必要があるということを教えられた。例えば「水は高い所から低い所へ流れる」ということは、「流れの上流は、下流よりも常に高い」ということで、これは逆も亦真なりということ、「雨が降れば傘をさす」これの逆は「傘をさしていると

きは雨である」となるが、日傘の場合もあり、逆は必ずしも真ならずということになるなど、非常に明解であった。また時には、乞食と何やらは三日したらやめられん、とか大人の世界を暗示されるような言葉も聞かされた。

工業学校には、実験・実習は欠かせないものであるが、設備がなかったため、一年生の夏休みには、高知工業の工場を借り、一週間合宿で、铸件の実習をしたことがある。昼は一日実習し、夜は高知工業の同窓会役員の方から卒業以来の体談を聞いたり、皆で余興会を開いて楽しんだりした。今から考えると、先生も生徒も、ご苦労なことであったと思う。

当時、学校の施設としては、糺に五〇〇坪の用地があった。用地の南側と東側は桑畑で、北西の残り部分は水田であった。桑畑は、桑の根を抜き地ならしをして校舎を建て、水田部分は、裏山を崩して運動場としたが、一年生と二年生の間は、モッコヤザルを担いで、埋め立て工事や資材運びに、毎日のように駆り出されたものである。

二年生になった時には、機械工場が完成したが、工場としての利用

はせず、板囲いをして教室とし、小学校の借り校舎から移転した。三年生になったころには、本館、教室棟もでき、ようやく学校らしい体裁が整ってきたが、講堂はまだ工事中であった。

振り返ってみると、昭和十六年四月から昭和十八年十二月まで、二年と九か月、校舎も設備もない学校に入学し、年中建設工事を手伝い、軍事教練や、麦刈り、草刈りなど農家への勤労奉仕に多くの時間を取られながら、不平不満もいわずよく頑張ったものと思う。

校訓が定められた時、担任であり、教頭であった太田先生からその説明を受けたがその中で、「勤労を尊び技術の練達を期すべし」という箇条については、諸君の今までの真摯な態度は他校では接したことのない立派なもので何もいうことはない、と褒められたが「明朗豁達にして明智の学徒たるべし」という箇条については、前半は良いが、後半はどうかあとにやっと笑われたことがあった。が後半については、一期生の上級学校受験の合格率は、二名中二名一〇〇割であったことからみて、他校に遜色はなかったのではないかと思っている。

私は、その後昭和二十二年九月から二十三年十月まで、教員として勤めさせて頂いたが、二十三年七月、校舎の一部が焼失し、その再建資金を稼ぐため、橋本先生の助手として、街頭写真を撮って、須崎・久礼・樽原・葉山・高岡等、秋の神祭を回ったことがあり、生徒、父兄の皆様方に大変お世話になったことがあります。このことについて一言お礼とお詫びを申し上げます。

(大阪府在住)

回想

—同窓会関東支部の発足—

十八年機械科第二種卒 海地 清 幸



私たちの母校須崎工業は、昭和十六年四月、高知県下第二校目の工業高校として開校し、須崎小学校を間借りしての発足だった。

校長先生は中内知章先生、生徒は機械科二種（高等小学校卒後入学）一組と、同一種（小学校卒後入学）一組の合計八十余名であったと記憶

している。私はその機械科二種一期生として入学した。

入学時の学校は、桑畑や池のあった旧須崎町札町地区に建設予定ということだけで、校舎も実習工場もまだなしという状況での開校だった。現在ではちよつと考えられないことだ。それでも先生も生徒も向学心と希望に満ちあふれていた。

しかし、校舎はともかくとして、せっかくの工業学校でありながら機械工場がなく、実習ができないのではいかにも片手落ちということであろう。入学後一年生の夏には高知城下の天理教会に合宿し、設備の整った高知工業学校に出かけ、機械操作の実習をさせてもらったりした。一方、学校では体育の時間等には校地となる桑畑の開墾も行ったが、この校地造成には須崎の町内会の方々も勤労奉仕に汗を流して

下さり有り難く思うとともに、私たちも自分たちの学校ができると思うと、かなりきつい造成作業にも力が入ったことだった。

一年経過した昭和十七年四月には先生方もそろい、校舎の一部ができて小学校の仮住まいから糺の学校へ移転し、真つ先にできた機械工場の内部を仕切つてそこで授業を受けた。

昭和十八年五月、待望の校舎がようやく完成した。

先生方もそうだったと思うが、生徒たち、殊に私たち一期生にとつてはそのうれしさは大変なものだった。しかし、学校らしいところで半年しか勉強できないかと思うとちよつと寂しい気持ちでもあった。

昭和十八年は戦時中で、どの学校も修学旅行はできなかったと思う。でも私たちは、母校創立の功労者であった（多額のご寄付を賜った）故寺尾豊先生のお計らいで、先生ご経営の「関東製作所」（東京都大田区千東にあった機械製作所）へ、勤労奉仕（実習）に行くという名目で夏に東京旅行ができ、浅草ではエノケン（当時の有名な喜劇役者）らの公演も見る事ができた。

そうして私たち機械科二種一期生は、昭和十八年十二月、三か月の繰り上げ卒業をしたのだった。

時代は下つて昭和三十六年ころだったと思う。母校の田村隆徳先生の助言もあつて、同期の箭野憲正氏らと相談して同窓会の関東支部をつくることになった。会費五〇〇円で発会式をすることになり、郷土のよしみから赤坂にある割烹「司」で盛大にやろうということになつて、二人で女将に交渉に行った。女将は大変気前のいい人で、「司」は会費一人二〇〇円以下は受けていないが、でもそんなめでたい会なら五〇〇円でやりましょう、サービスもしましょうと、気持ちよく

引き受けてくれ、発会式は盛大に行うことができた。

あれから既に三十年、昨年の関東支部総会は幹事さんのご努力で出席者百名余りという盛会になり、感無量であった。

昭和二十年の敗戦後、当時の同窓生は実に多方面に進出している。

私は弁護士という一見工業とは縁のないかみえる職業に進むことになったが、幾度か特許にかかわる事件を手掛ける機会があり、殊に機械部門では母校で学んだことが大変役にたった。勉強に無駄はないということをつくづく思う。

母校の創立五十周年にあたり、思い出すままをつづつてみた。母校のますますの発展を祈っている。

（平成三年二月二十四日）

（東京都在住、東京綜合法律事務所・弁護士）
同窓会関東支部初代支部長

思い出の実習あれこれ

十八年機械科二種卒 矢野 亀 雄

（その一）高知工業へ

昭和十六年四月中旬、我々は県立須崎工業学校の一期生として二種三八（？）名、一種四〇（？）名の合格者は須崎小学校の仮校舎に入学した。

時代は工業技術者の養成を急務としていた。今と違って当時は物資の足りない、少ない、何もかも代用品ばかりであった。工業学校といつても名ばかりで、何の設備もなかったもので、三か年の課程で卒業する

我々二種の一期生は、最初の夏休みを返上して高知工業学校を借り、初めての実習に行くことになった。うだるような猛暑の日、全員が重い荷物を背負って汽車に乗った。宿舎は高知工業学校近くの天理教高知大教会の宿泊所であった。明朝から登校、併設の高知工業青年学校の年上の人たちと朝の点呼を受けた。周囲の人はみんな「オンチャン」ぶっついて何だか恐ろしくて身が震えた。

実習は鑄造に使う木型の製作からであった。焔炉（ヒキ）のサナを作った。木型の先生は実にやさしく丁寧に教えてくれた。皆は初めての経験で真剣に取り組んだ。二日くらいして木型は完成し、次は鑄造場へ自分の作った木型を使って鑄型の製作。キューボラならぬ「ルツボ」にアルミ材を溶いて鑄込み、自作の七輪のサナが出来上がった。ほんとに感激であった。

夜になると、宿舎の大教会の祭場で教会の先生方から修養談などを聞かせていただき、その後宿舎ではよく演芸会が開かれた。下村英男君（故人）が吹くハーモニカの「いとしあの星」（映画「白蘭の歌」主題歌）は、ほんとにプロ級であり、拍手喝采であったことは今でも忘れられない。「馬車が行く行く夕風に 青い柳にささやいて いとしこの身はどこまでも 決めた心は変わりやせぬ」。

実習も七、八日たってからだろうか、夜中にトイレに走る者が多くなった。朝には腹痛の者が青ざめて寝ている。集団中毒であろう。実習は中止。そそくさと帰校し静養した。

（その二）憧れの東京へ

仮校舎での授業の一年くらの間に、西札町の敷地ではまず機械工場の建築が進められ、二年生になった時からこの広い工場内に移り、

一部を板壁で仕切って、一、二年生が授業を受けていた。工場の奥の方へは旋盤やボール盤などの工作機械、西半分は工作台にバイスなども取り付けられ、ハツリやヤスリの手仕上げの実習も始まりかけていた。

二年生の夏休みは、中内知章校長のご努力によって我々は本校の創始者、寺尾豊先生の経営する東京の関東精機製作所へ、勤労奉仕と機械実習を兼ね、当時他の学校では行われていなかった修学旅行も兼ねて上京させてもらった。暑い八月の某日、須崎駅から汽車に乗り一昼夜以上かかって憧れの東京へ。品川の駅では寺尾先生が黒いソフト帽をかぶって迎えに来ておられた。あたたかい歓迎のお言葉を聞き、今度は寺尾先生に引率され東京駅へ。ここから徒歩で皇居前まで、初めて見た二重橋に感慨ひとしおであった。

関東製作所に着いて旅装をとき、併設の青年学校で寺尾先生の訓話



右端が矢野亀雄さん 旧校舎第2棟東にあった足洗場で。

を拝聴し、翌日から関東精機の方で旋盤の実習を兼ねた勤労奉仕に参加することになった。会社では一⁺と六〇⁺の爆弾の外部を作っていた。材料は鋳物で、旋盤のチャックに材料を取り付け、心出しをして送りを掛けると荒削り中削りとも爆弾の型に削られるようになっており、すぐに仕事には慣れてきた。旋盤の実習は、初めてで、良い勉強になった。

東京ではその時分から食糧不足が目立ちはじめ、社内の食堂以外では飯にはありつけなかった。在京中に二度の日曜日があり、地図を頼りに友人たちと市電に乗って市内見物に出掛けた。品川の泉岳寺、銀座、浅草と見学、都会の人は歩くに早いことと、娘さんのモンペ姿が格好良かった。「俺は村中で一番 モボだと言われた男 うぬぼれのほせて得意顔 東京は銀座へと来た」。エノケンが歌う『洒落男』の一節を口ずさみながら…。

東京での生活も半月ほどで終わったが、二年九か月の在学中でも数少ない思い出の一つである。諸般の事情に厳しいこの時期に、この有り難い企画をして頂いた今は亡き中内校長先生のご恩に、今更ながら感謝のお礼を申し上げたい。

(その三) 安全頌

「大靈これを天地に受け肉身これを父母に嗣ぐ萬世一系の聖天子上におはし秀麗の山河永に存す…(中略)…天地神明も照覧あれ」。機械工場の西側の壁に神棚を設け、その下にかかっていた。この安全頌、終戦までの古い卒業生であれば、実習を始める前にだれもが朗読し皇国民たるの自覚を堅持した一節であった。大東亜戦争も一段と熾烈の度を加え、諸物資は不足し、国策は「ほしがりません勝つまでは」

の時代へと移って行った。その間に同級生の坂本忠男君は予科練に、広田四郎君は予備練にと勇躍須工を飛び立って行った。

工場の機械も据え付けは済んだが、当時は電力の供給が思わしくなく、回転できなかった。そこで待ちきれずに三人が一組になって、一人が旋盤を使い、後の二人が向こう側へ回り交替でベルトを手で引っ張って段車を回し、使う者はそれこそ一生懸命でバイト台を使っていた。ほんとにおかしな光景であった。

卒業の一月くらい前にやつのこと送電が始まり、工場はフル回転をさせた。ある日私が旋盤を使っていると、前の列で同じく旋盤を使っていた谷本茂一君(戦死)が悲鳴をあげた。腰を低く下げ、手で機械を突っ張っている。「スイッチ」「スイッチ」と大声をあげた。やっとメインの配電盤へ走り、元のスイッチを切った。よく見ると、作業服の上衣をベルトに挟まれ、腹部の皮がはげていた。

早く職場へと、学制の改革で三年の三学期は繰り上げ、二学期の末昭和十八年十二月二十五日、我々は初回の卒業生として須工の庭を後にして行った。今はもう昔。懐かしい青春の一ページであった。

(須崎市在住、矢野米穀店経営)

旧校舍跡地記念碑雑感

二十年機械科卒

梅原健一

創立五十周年、卒業生七千余名、そして白亜の四階建ての校舎。須崎の地に県下の工業高校として発展していく母校の姿を見る時、全く

今昔の感深いものがあります。

思えば学校創設期の苦難の時代、戦後の世相混沌とした時代、また不慮の火災による校舎の焼失、そして学校の存亡さえも問われた、正に累卵の危殆に類した時代等々、幾多の紆余曲折を経ながらも、化学工業科、電気科等を増設され、更にその校地狭隘となるや、多ノ郷、和佐田の丘に新築移転し、さながら不死鳥のごとく、あるいは校舎の両翼が表す、鵬のごとく逞しく飛翔する母校に心から「おめでとう」の賛辞をおくりします。

この母校に寄せる熱い想いでつづられ、創立五十周年を側面から語り眺めたともいえるこの記念誌を通じて、会員諸氏の在校したそれぞれの時代の、それぞれの物の見方、フィーリング等の違いはありまじょうとも、時を超え、感覚を超えた長い長い縦のつながり、切つても切れない横の強い絆で結ばれた、同窓会の和とコミュニケーションは一段と強く深まることと確信致しております。

よく時の流れを十年一昔といわれますが、長い年月の間には、記憶もとかく風化しがちで、幾星霜の間には、遠く忘却の彼方へと忘れ去られてゆくのが常であります。私たちの在学中の思い出は、比較的鮮明な記憶が多く残っております。何故だろうか。半世紀の昔にタイムスリップしてみますと、そのひとつは、開校二年目の入学であり、当時学ぶべき校舎もなく、わずかに工業学校という面目を保つかのように、機械実習工場が一棟だけ建てられていた学校創設期であったこと。もうひとつは、太平洋戦争のまったなかの入学であり、その戦雲急を告げるに至るや、学生の本分である学業をなげうって軍需工場へと学徒動員されていった、異状な事態の発生した学園生活だったた

めだと想います。

入学当初は、この機械実習工場を板で仕切り、明るい南半分には教室を作り、その一つが私たちの即席の仮教室でした。外の景色も手に取るように見え、春、うららかな陽気に誘われて、浮かれた蝶が教室に舞い遊び、夏、降りしきる蝉しぐれに、暑さに負けずに小さい命が躍動しているなあ、と思つたことでした。

それにもまして、実習工場のモーターやベルトの騒々しい雑音、旋盤で鋼材を削る金属音、鉄鋼をタガネでハツルかん高いハンマーの音・音・音……。仮教室に容赦なく響き渡るこの騒音の中、熱心に講義される先生方、私たちも一心に授業を受けたことでした。

この実習工場には、ベルト掛けの旋盤が六台くらいとフライス盤、ラジアルボール盤、それに仕上台が数台据え付けられていたように思います。このベルト掛旋盤は、ご存じのごとく、両手の巧みな操作が工作の必須条件ですが、生来至って不器用な私は、工作中度々バイトのハイスを飛ばし切削不能になり、先生に大目玉をくらつたことも、今では楽しい思い出になりました。

昨今の目覚ましいエレクトロニクスの発達によるマイコン時代、半導体を駆使し、IC制御により、人間の目に見えない精度まで正確に仕上げてゆく旋盤、NCやMCの設置された現在の須工の機械設備とは全く雲泥の差があります。

何はともあれ、須工最初の建物、機械実習工場での、機械実習とその騒音の中の仮教室で、普通科の授業を学んだことは、生涯忘れ得ぬ、懐かしい思い出として、いつまでも心に残っております。

この機械実習工場の跡地へ「高知県立須崎工業高等学校跡」という

立派な記念碑が、同窓会の手により、去る平成元年五月に建立されました。聞けば、創立以来三十年、三千余名巣立っていったこの学び舎の跡へ、須工発祥記念碑をといて、十年以上も前から持ち上がり、同窓会でも度々議題に取り上げられたようでしたが、いかんせん、当時は同窓会の力不足、先立つ資金が不如意とあつては、一時お預けするのでも致し方なかつたことでしょう。

しかし同窓会の役員の方々、事務局の諸先生方の一方ならぬご努力、更には学校当局のご配慮、それにも増して同窓会員諸氏のご協力により、組織もより一層強固に、そして資金的にも恵まれ、同窓会活動も本格的になりましたことは、誠に喜ばしく、お骨折り戴いた諸先生方、同窓会の役員の方々に、心より敬意と感謝を申し上げます。

そしてこの記念碑の建立により、須工の歴史の一端を永遠に伝えるとともに、この地に学んだ会員諸氏、あるいはまた、教鞭を執られた諸先生方の懐かしい思い出とともに、いつまでも心に残ることと思ひます。

今静かにこの記念碑の前にたたずみ、碑石を見つめ、碑文に目を移す時、さながらタイムカプセルをひもとくかのように、半世紀の昔、創設期だった須工の思い出が、我が青春の軌跡が、時には重なり、時には交わり、厚く薄く織りなすがごとく、昨日のようによみがえつてまいります。

開校当時、桑畑や湿田跡の敷地造成に、現在の機械力をもってすれば短時間でできるのが、スコップやトロッコ等ほとんど手作りの造成工事に私たち汗を流しました。また、須崎港に実習機械が陸揚げされれば、手押し車でこれ運び、据え付けを手伝い、そしてついに軍

需工場へ勤労学徒として動員されて行きました。現在では、想像もできない学園風景が、ドラマのごとく、次々と心の中にうつし出されていきます。

そして開校三年目にして竣工し、新緑の風薫る五月二十五日、盛大な落成式を行った思い出の校舎も既になく、スポーツに、戦時下なるが故に、配属将校による軍隊の基礎訓練に汗したグラウンドも、今はどこにも見あたりません。

ましてや、エンジニアを夢みて、機械実習に専門教科の勉学に励んだ、若い青春の群像は、もうそこには見いだすことはできません。

その跡には、現代の世相を反映して、大型のショッピングセンターが建ち、市内の消費者はもちろん、近郷近在からはマイカーを乗りつけショッピングを楽しむ人たちがあふれています。

彼を思い、之を見る時、正に「邯鄲一炊の夢」ではないだろうか。人の世の移り変わりに、無常の感がひしひしと胸に迫ってくるものがあります。そして、この記念碑も今後幾星霜、世のうつろいを静かに眺めながら須工のますますの発展を見守っていくことでしょうか。

母校の弥栄を祈り、同窓会の発展を願いながら、とりとめのない、つたない思い出の記を終わらせていただきます。

「平成三年二月 記」

(須崎市在住、梅原晴雲堂経営)

こんにちは。須工五十周年記念に寄せて

二十年機械科卒 林 弘 昭

汽車は一路大阪を指して、黒い煙を吐きあえぎながら走っている。その日、昭和二十年四月十六日は私の松下電器工場に就職する旅立ちの日であった。

疲れと不安と焦燥の谷間で、須工時代四年間の思い出が眼りの中を駆けめぐった。三月二十七日、四五名の卒業式あり（一年繰り上げ卒業）。記念写真には三四名の童顔がそろそろ。七つボタンの予科練八人は、松山航空隊で赤トンボの海軍飛行兵曹。蒙疆には大崎二郎あり、浜口義夫と浜崎誠一の二君は満州。共に異国の空で望郷の念に祖国を思い、そして涙した。

母校須崎工業は昭和十六年四月一日開校、式は同十九日。入学式と開校式典が知事と寺尾豊先生臨席して盛大に開かれ、昭和十八年五月二十五日落成式。この日が学校の、創立記念日となった。

当時、高知市から西には佐川高女しかなく、進学志望者は遠く高知へ通うのが普通であった。母子家庭、一三歳の私には小学生二人の弟がおり、とても高知進学は経済上無理であり、夢のまた夢であった。夫を早く亡くし、男の子三人を抱えた母。「賃縫いします」と私の書いた板切れが、夜半の風に音たてて鳴り何時に起きてても、火鉢に鏝を温め針スエを離さず縫っていた。

そうした状況の昭和十六年、須崎工業学校が、機械科を科目として開設された。寺尾豊氏の恩恵は深い。小さい星みつけたと心からうれ

しく須工の一種機械科を受験し、入学できた。月謝など、とにかく夢をかねてくれた母には、いまだに感謝の念が先走る。

開校しても校舎はなく、須崎小学校の東、裁判所の近くが仮教室だったように思う。大志も小志も秘め、時まさに戦局急を告げ十二月八日開戦。欲しがりません勝つまでは。贅沢は敵であった。鬼畜米英。進め一億火の玉となった時代。

学習は数時間、奉仕の方たちと学校建設用地整地作業に励み、北の山からトロツコの土運び。一旦緩急に備えて配属将校の教練は小身短軀の身にはこたえた。ゲートルがまず足元から崩れる。纏足ならずふくら脛がなく、短剣は地面を引きずった。「回れ右前へ」の号令が間に合わず植えたばかりの田んぼに入り、勇猛邁進と講評を得たが、後で断わりやら苗の整理に労を流した。やがて戦局急を告げた昭和十九年、四年制に繰り上げとなる。

一種、二種区別廃止でストを起こし、糺町の神社に集まり息巻く。須崎署で不忠者の思想犯扱いにされ、特高課で説教され停学三日間、全員処分を受け、開戦詔書を清書した悲しい心。アルバムに見る多くの郷神社での扱く鍛えも忘れ難い。やがて朝倉の四四連隊に学徒体験入隊はストの報酬か。三日間不寝番に立ち、状袋で寝、練兵場の匍匐前進等新兵並み。はるかに遠い馬上豊かな森田部隊長への捧げ銃。私の軍隊経験となった。

田村先生と運動場を一〇周したこと。学徒動員で後免・甲原・造船場等、また軍需工場へと銃後を守る産業戦士の一員としての役割は大きかった。昭和十五年雨は静かに降る、小雨の丘。湖畔の宿。白蘭の歌。予科練の歌等、懐しのブルースであり、別れのブルースでもあっ

た。

特に他界された同窓の友には、一頼り寂しさを感じるの寄る年波か。苦楽の追想で憶ぶ、物故者七人と、友人の一刻。同窓会の名簿老いてなお生きる（外山滋比古より）。

21・1・1 津野光康他界。母もその日、後を追う。故人の初めなり。合掌。無常を知る。

21・1・25 大崎二郎蒙疆より帰り初めて会う。精悍な彼。

21・3・3 新円切り替え通用。

21・4・10 衆院総選挙。自由党第一党に（林・氏原・寺尾・佐竹・

長野当選）。

21・7・8 浜口義夫・浜崎誠一、撫順より引き揚げ。

21・10・31 旧幣通用きよう限り。印紙貼り。

21・12・21 午前四時十五分。南海大地震、九十二年目の強震、津

浪の大被害。

22・4・29 一一会同窓会。安和海岸にて胸襟をひらく。

23・7・29 真昼の火事で母校校舎二棟焼失。漏電、損害一〇〇〇

万円。

43・2・6 田川晃死亡。起洋館で映画観賞。処分覚悟で名作を見

る。

46・7・30 井上博介、熊野灘で遭難、海に眠る。

53・5・15 宮本清、生存なら県の部長になれた男。惜別一入なり。

53・12・11 岡村真一、自宅で急逝。行年四九歳。一九七九年五月、

るねさんす追悼号。

大崎二郎しんいちを送るの詩。俺はさらばとは言わぬ／しんよ

ぐつすりとねむるがよい／妻子のむねのなかに／人々のおもいのなかに／ねむれおかわらしんいち（一九七八・一二・一三）

霊前には新刊書の一つに「教育は死なず」があった。

63・2・27 服部孝一郎、土佐市甲原で死去、冥福を祈る。

平成2・3・21 梶原誠幸、神戸に死す。七つの霊よ。安らかに。

合掌。

恩師では田村隆徳先生・山崎勉先生の健在を仄聞する。ますますのご自愛、ご健康を念願してやまない。

一種一期生は一一会便りを発行しており、一切は吉岡豊延氏に負うところ大である。感謝と信頼で彼に頼る次第。昭和二十二年定職につき、平成元年三月定年退職した。粗大ゴミ、濡れ落ち葉も職なく家にもる毎日（六二歳）。

終わりに須工創立五十周年を心から祝福し、健児団に学び、集い、友とつなぐ和と輪を更に広げ、母校を誇りとし努力して雄飛須崎工業高等学校の発展をますます祈って擱筆す。また逢う日まで、健康で。さよなら。

（高知市在住）

敗戦をはさむ二三年間

二十二年機械科二種卒

高橋典男

我が母校を卒業以来四四年を経ている。

卒業後数年間、地元須崎土木出張所に勤務させて戴き、時々学校に

行くことがあったが、こちらに来てからはごぶさたばかりしている。

私たちは学校から須崎駅までの道(堀川沿い)が一番楽しいコースであったように思い出される。移転後の母校には行く機会がない。ただ昔の記憶で「あのあたりに移転したのかな」と一人で考えている。記憶の内に生きる学舎が懐かしい。

入学当時の思い出は勉強のことでなく、校地造成中のために荒れはてたグラウンドを毎日のようにローラーで整備したり、鋳物の型作りの砂いじり?の実習や三八銃が子供心にやけに重かったことなどが思い出される。入学からしばらくは、はじめに勉強に打ち込んだのだろうか?

戦争がはげしくなるにつれて実習工場は軍需工場に変身していった。いながらにして学徒動員された形となった。寺尾先生の関東製作所の分工場のようになり、東京の工場から若者が帰り私たちの先生となつて工場で指導を受け、手榴弾、対戦車弾等が作られていた。私たちはそんな高級な物でなく、何に使われるのかピンセットやヤットコに近いものをフライス盤を使って作っていたが、本当に役立っていたかどうか分からない。

敗戦前後

いよいよ戦争の末期には学校とは名ばかりで、上級生は学徒動員で工場に出ており、私たちが一番上?といったところで我々は工具といった有り様。おおげさにいえば制空権はアメリカにあり、艦載機のグラマンやサイパンを発進した爆撃機はレーダーをさけて須崎港を目指して超低空で進入すると、あつという間に須工の上に来ていたうあんばい。時をかまわず飛来するので初めは防空壕に駆こんでいた

が、慣れるに従いそのまま外にいて飛行機を眺めている。相手も学校では?と考えたのであろうか、やられることは少なかった。時には後部銃座の機関銃を我々に照準を合わせているのが手に取るように見え、あわてて防空壕に飛び込んだものである。

当時正門入つてすぐの二階は軍隊の宿舎になっていたが、この人たちは敵機の飛来にも二階の窓からのぞいていたため、えい光弾の入つた機関銃がうなり、講堂をはさんで工場側の防空壕から眺めて私たちは生きた心地はなかった。ピューッと銃弾が風を切る音が近い時は危険距離にある。パーンと発射音がする場合は身に危険はない。弾が近くにある場合は音速より速くというべきかピーンと風を切る音がするわけだ。発射音の聞こえる時はのんびりと、気持ちの上でゆとりがあった。

グラマンが上空で攻撃態勢をとる場合は、スロットルをしぼるのか「バット」白い煙が見えて急降下してくる。仰角四五度の場合はやられる危険性があるが、そうでない場合はのんびり見物するようになった。機械の先生は、我々のこのような態度を大変心配され、恐ろしい顔でいつも防空壕に入るよう声を大にしておられた。我々はいつもの教室でしかつている先生を思い出しては、「少し恐ろしいのか?」と軽蔑の気持ちを感じていた。子供をもうけて上げて親となつた今では、大変失礼な思い上がったと、改めておわびをしなければと思つている。

ますます空襲が激しく、工場の機械類を加茂村に疎開することになり、加茂駅から田んぼの中の新しい工場(?)に移設作業を真夏の太陽の下で進めていたのを今も明瞭に思い出す。あの終戦当日の暑い長

い日のことだけは忘れられない一日である。聞きとれない雑音の多い天皇陛下のお言葉、なんとなく感じていた敗戦のくやしさはたとえようもなく、その田面にのめりこむような「慟哭」。さんさんと降りそそぐ夏の太陽、超低空で飛来するグラマンの勝ほこった姿、悪夢のような一日であった。仕事だけはそのままなしとげたように思う。それから数日、どのようにすごし学校に行ったか記憶がない。

新生時代

学校では教科書を黒くぬりつぶしたり、ガリバン切りのものや、模造紙に印刷したにわか仕立ての教科書で、先生方も大変だったと思う。我々は民主教育のために？いたつてのんびりした生活（ものはほとんどないのだが）、変わった処では少年兵から復員した者が復学（転入）して来たことである。一度シャバの空気をすった一見大人の彼らは新風を私たちに吹き込んだといえる。

また、先生方も敗戦により会社勤めができなくなり、我が母校に岡村先生などの若い先生に理数科目を教えて戴いた。国語のK先生は古文の徒然草などユーモアをまじえて講義され、仙人が「はぎの白きをみて通を失い」天空から落下したくだりなど、人間の「きび」にふれる話などを目がかがやかして聞いたりしたものである。おかげで国語で「秀」を戴いたのはあとにも先にもこの限りで、現在でも大変感謝している。

このような自由な雰囲気初めて味わい、文学青年の同級生の楠君や二、三の下級生をつのり回覧形式の同人誌「海峡」を当時高知文壇で活躍されていた市原先生のご指導で、巻頭の詩を掲載させて戴いたりして最後の一年を過ごすことができた。先生の特徴のある書体の詩

文が今でも目に浮かぶ。

須工の三年間の学生生活は、敗戦をはさんでの年月のために勉強らしいものはほとんどなく、戦後は先生方と共にとまどい、共に学び教えて戴いたものだった。昭和二十一年十二月の南海大震災のおまけまついて翌年四月、あわただしく社会にほうり出されたものである。

（茨城県在住、(株)キクテック東京支店）

望郷

二十四年機械科卒 上岡 親雄

昭和十八年四月、機械科一種三期生として入学致しました。堀川端の桜は既に散り、濃緑の葉叢に黄色の実をいっぱいにつけた夏蜜柑がそこかしこの庭先や空地に散見され、新莊川の河畔には今を盛りの菜の花と、穂を出しはじめた麦畑が広がる長閑な南国港町の春でした。私たちはそろいの国防色（当時は素晴らしい）の制服と戦闘帽に巻脚絆というミリタリールックのいでたちで、五十数名の同級生と共に入学したのでした。

当時日本は、太平洋戦争に突入して三年目を迎えており、勝った勝ったの大本営発表に私たち軍国少年は有頂天の毎日でしたが、実はもう既に悲惨な敗戦への坂道を駆け落ちはじめていたのです。それとも知らず私たちは小学校では教わらなかった工業学校のカリキュラムに、新しい世界を知った感激に浸りながら勉強に励んだものでした。当時の先生方がそのお姿や、お声や、階段を上って来られる足音や、そし

て懐かしい^{懐か}綽名と共に想い出されます。綽名、なんと人間的で、なんと適切表現で、愉快な中学生ユーモアでしょう(先生方ごめんなさい!)

翌十九年、二年生に進級すると勤労奉仕が多くなってきました。多ノ郷の田んぼの土壤改良工事、日章村の海軍飛行場(現高知空港)等へまいりました。飛行場へは二回行きましたが、二回目は確か八月ころでした。最終日は作業は午前中で打ち切り午後は身辺整理と休養となっていました。ところが、ちょうどその日サイパン島が陥落致しました。学徒勤労奉仕隊担当の海軍中尉が私たち全員を広場に集めました。「サイパン島は本日陥落し米軍の手に渡った。敵は我が玄関に迫ったのである。自分は男として諸君との約束を破ることは誠に残念であるが、本日午後の休養時間を返上して格納庫の整理をしてもらいたい。ここはもう第一線であり明日にでも我が戦闘機部隊を受け入れる用意が必要である」と熱弁を振るって要請されました。私たちは身の引き締まる緊張を味わいながら、貴重な半日を返上して格納庫の片付けに従事致しました。

勉学の生活は段々と少なくなり、年明けて昭和二十年一月、すなわち私たち二年生は第三学期から、当時新荘にありました松下電機の軍需工場に勤労動員されました。十四、五歳の中学生が軍需工場に動員されて夜勤までさせられる時代でした。このころからサイパン島、テニアン島を基地としたB29の戦略爆撃隊が毎日のように日本の各都市を爆撃するようになり、中国地方を空襲した帰りなのかB29の大編隊が毎朝のように須崎の上空を通過して帰って行きました。また、確か三月十日だったと覚えています。初めて艦載機グラマンの機銃掃射

を体験致しました。工場横の麦畑に身を伏せて仰ぎ見たアメリカ空軍のマークの鮮明さ、機銃掃射の迫力がいまでもはっきり脳裡によみがえります。

戦況は日を追って悪化の一途をたどり、私たちの身にも次々と変化がやって参りました。六月、松下電機は動員解除になり、一旦学校に帰りましたが、校舎は既に海軍陸戦隊の兵舎となっていて勉強のできる環境ではありませんでした。

一月ばかりたつて今度は高岡町(現土佐市)の町工場へ動員されました。ここでは燃料がなくて飛べなくなった飛行機から取り外した機関銃を対空射撃用に改造したり、また戦車地雷も製造しておりました。そして私たちはここで終戦を迎えたわけです。

思い出すままに戦時中のことばかりを書いてしまいました。私たちは二十四年卒業の人たちは、今ごろそれぞれの勤務先で定年の時期を迎えていることと思います。私もアサヒビールに四十一年間勤め、昨年六月定年を迎えました。今は顧問として勤めておりますが、昔大変お世話になった上司の方が「死の恐怖と飢餓の苦しみを味わったことのない者は駄目だ!」と語られたことを思い出します。この上司は、私たちのような内地の戦争体験ではなく、太平洋戦争の全期間を血みどろの南方戦線で過ごされた人格的にも立派な方でした。結局私たちは好むと好まざるとにかかわらず、人間成長の一番大事な時期を戦時中に送ったのです。

時は移り幾星霜、平和な日本の産業は栄え、経済は大きく発展致しました。かつての少年たちは例え学成らずとも、それぞれに生きる道を見つけ、そして相応の伴侶を見つけて結婚もし子供たちも育ててき

ました。いまではそれぞれの生活の基盤で全国に散らばって暮らしていることでしょう。でも、それでも、どこに暮らしていても、どんな生活をしていても、いつでもあの学び舎が心の奥にあるのです。あの先生方のお顔が浮かんでくるのです。あの小生意気な同級生の面が、^{しづ}皺もなく白髪も見えぬ昔のままに^ま眼に浮かぶのです。

噫、茫漠の四十年

噫の街や学び舎の

泪に霞むたはずまい

母校の発展を祈るや切。

(東京都在住、アサヒビル(株))

三枚の卒業証書

二十五年機械科卒

竹内良一

開校五十周年おめでとうございます。

もうそんなになるのかなあ……。自分の年齢を物指しにすれば五十年前、糺の池の畔にトロッコのレールが北の山から何条か下の田に向かつて敷かれていた。それが母校の敷地造成工事だと知ったのは後のこと。それよりも休日にはそのトロッコに乗りに行き、脱線さしたり、下の田んぼに振り落とされたり、当時乗り物といえれば須崎にハイヤーが一、二台しかなかった時代だったので、車上の人間の味を楽しんだことでした。

その後、須崎工業学校第一期生の方たちが、私たちの下の教室で授業が始まっていた。須崎小学校の東の端で……。休み時間には、鉄製の台車でよくふざけているのを、二階の窓から小学六年生たちが眺めていました。

昭和十九年須崎工業学校に入学。敬礼から始まって、軍事教練、そして防空壕造り。今ではシェルターというらしいが、当時の防空壕は二、三階の縦穴を掘って、板上上部、周囲の土止め、支柱は松の丸太、今のシェルターとは雲泥の差。これも半世紀の科学の差だろう。運動場はイモ畑に変わり、校庭には壘一、二枚ほどの防空壕が何か所か……。米軍のグラマンによる機銃掃射も何回か受け、防空壕にも在校中に世話になったことでした。

入学時は全日制五年卒業でしたが、戦時特例とやらで四年修了時に卒業証書を頂きました。ところが、終戦に伴い、また旧制の五年修了に復帰、五年修了時にも一枚卒業証書を手に……。だがこんどは学制改革で、六・三・三の現行の学制になり、校名も高知県立須崎工業高等学校と変更され、もう一年通学させて頂き、結局六年間在学、卒業証書は三通。

だが、最後の一年で自動車受験の年齢に到達し、運よく一回でパス、須崎工高の中で先生も含めて第一号の自動車免許を手に入れることができましたが、夕方帰宅すると、母が「オマン何か悪いことをしたのでは」と、きつい顔、「どうしたぜよ」と聞くと、今日警察官が来て、私本人に会いたいと言って帰ったとのこと。翌日いわれるように早めに帰宅していると、警察の方がわざわざ待望の免許証を持って、「本人に手渡さないとイカンキニ、そして人に借されんぜよ、運転には気

をつけよ」と注意されて……。

終戦直後も良き時代でした。それを肝に銘じて、今のところ現在まで無事故、無違反で来ることができましたので、いつまで続くかと安全運転に心がけている昨今です。

創立五十周年と同じくして、我々クラスメートも還暦を迎えることができるのは、筆では表せないよろこびを感じています。

最後に五十周年記念誌に寄稿として戴く機会を与えてくれた関係諸氏に心から御礼申し上げ、愚文に目を通して頂いた方にも御礼を申し上げます。

追 伸

土いじりの好きな方で、ロマンを求められる方で御希望があれば、三千年前?のツタンカーメン王陵から発掘された「王の豆」の子孫が当方で三株ほど花をつけ出しましたので、見事実ればおすそ分けします。花は赤色で、さやが鮮やかな紫色だそうです。

(高知市在住、サンライト機工経営)
(現・同窓会高知支部長)

「ありがたきかな母校」

三十一年機械科卒 安 井 護

「ガラ ガラ ガラリは 下駄の音 アラアラ あの方造船ネ」
イト 作った チョイと作った……。

私は、機械科卒業ですが、現在造船会社に勤務しています。須崎工

業在学時代の、三年間のことを、三分の一白くなった頭をかきながら思い出してみたいと思います。

須崎工業高等学校創立五十周年、本当におめでとうございます。心よりお祝いを申し上げ、本式典に大変な苦勞をしていただきました関係各位に對しまして、心より厚くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

私は四国のチベットといわれる、櫛原で生まれ育ち、小学校の修学旅行の時まで本当の海を見たことがありませんでしたので、須工卒業と同時に、あこがれの海辺の近くの高知市浦戸湾入口にあった造船所に就職させていただき、以来三十数年間造船一筋でして、その間に世界の海に送り出したいろいろな船は、八〇〇隻余りになり、現在も須崎工業同窓二三名と共に、高知の造船の灯を守り続けております。

全員元気で、チームワーク良く毎日仕事に追い回されている現状です。私が須工に入学させていただきましたのは、昭和二十九年でして校長先生は、現森岡校長先生のお父さんでした。場所は当然糺町で、思い出しますと、校舎の一部が火災に見舞われた後で、焼け跡のコンクリートの基礎だけが頭に焼きついています。そんな状態で、私たち前田ルーム・森田ルームは、広い講堂が教室です。そして、私たち同期に、須崎工業高等学校初の女学生、長山さんも入学されました。私は在学中の三年間で、一度も彼女と遊んだり、話をしたこともなく卒業した次第です。当時は男女共学の学校でも、男女の会話が何となく恥ずかしい時代だったように思います。そんな時代に、ただ一人で入学され、そして立派に卒業された彼女は、本当に偉大で、私たち同期生一同の誇りであり、また後輩たちの鏡であったと、今あらためて懐

かしく思います。ご健在で活躍されておられる彼女に、今一度拍手を送ります。

当時の生徒は、ほとんど坊主頭に制帽をかぶり、最初の書き出しのように、ボクリ(下駄)を履き、教科書はブックバンドで十字にしぱり通学したものです。また、通知簿には成績の順位を記されていましたので、家族に見せるのがつらくて隠し回ったものです。

クラブ活動や校内大会は、今でも懐かしい思い出として私の生涯の一ページとして整理されています。校内大会の駅伝で、札の池一周があり、我が前田ルームは優勝候補ナンバーワンでした。私は中学時代はもとより、長距離など一度も経験したこともないのに無理やり選手に引き出され、一位で受け取ったタスキを、三〇〇メートルのところで竹村先生にお先にと行って抜き去られ、次々と他チームにも抜かれ、結局一三位で次走者に渡した時は、鼻血が噴き出し、しばらく意識不明だったと聞きました。しかし、さすが我が前田チームは強く、ゴールインは一位で優勝してくれ、この時ほど同僚に感謝したことはありません。ありがとう前田ルーム同輩たち。

また、面白かったことは、クラブ別リレーで陸上部より相撲部が早かったこと。当時の相撲部はいつも全国大会で優秀な成績を残していました。全員スマートで、現力士の霧島や寺尾を一回り小さくしたように全身バネでできたような体格でした。

次に恩師の体格を、一口に紹介させていただきますと、大きい先生と、小さい先生に二分されていたように思います。まず大きい先生は、田所先生・橋本先生・高橋先生、小さい先生は、中岡先生・前田先生・竹内先生が代表でした……。

有り難きかな母校、お世話になった恩師の方々、私が現在生活できているすべての基礎と、三年間の良い思い出を本当に有り難う。

須崎工業高等学校創立五十周年を、一つの折り返しとして、更に、五十年後の百周年の式典はどんな世界になっているでしょう。須崎工業高等学校の永遠のご発展と、同窓の皆々様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

(高知市在住、新高知重工㈱)

通学の思い出

三十二年機械科卒

矢野 敦

原稿寄稿の依頼を受けて色々考えたけれど、結局「思い出」を書くことにした。

私は昭和三十二年度の卒業だが、その時代学校は須崎市の西方札池の近く、須崎駅から西の方へ歩いて二、三分の所にあった。私は佐川町から汽車(今のJR)で通学していた。今はディーゼルエンジンを動力としているスマートな自動車であるが、私たちが乗っていた時は、石炭を燃料として蒸気を発生し、その力で動く蒸気機関車で客車を引っぱる方法をとっていた。

そのため煤煙がすごいものつて夏は大変だった。客車に冷房装置はついていなかったもので、窓を開けて風で冷を感じていたため煤煙がそのまま窓から入り鼻の奥真つ黒の毎日であった。特に斗賀野駅と吾桑駅との間の斗賀野トンネルは、吾桑から斗賀野へ行く方向、すな

わち上り列車はかなりきつい上り勾配になっていて、時々トンネル内で立ち往生してしまうことがあった。

その時は最悪、窓をしめれば暑いし、開ければ煤煙の山、息苦しいのなんのって、「おまん顔が黒いぜよ。」「おんしも黒いわや。」これは本当の話で、今ではとても信じられないことだと思う。だから私は、蒸気機関車に郷愁を感じるなどの心境にはとてもなれないというのが本音である。

須崎駅から学校への道、朝の通学時には我々学生の道なりと、道幅いっぱいになり、ワイ、ワイ、ガヤ、ガヤ。それに私たちが三年生の時には高下駄を歩いて通学するのが流行していたので、カランコロン、カランコロンが加わりそのにぎやかなこと。通学も結構楽しいものだった。先生も数人同じ列車で通勤していたので、色々と会話を交わしながら、またおこられながら道を歩いたものだった。

ともかく、車がほとんど走っていないなかったので、のんびりと道路が歩け、交通事故の心配なんか考える必要がなかった良き時代であった。

学校の近くの糺池、今は埋め立てられて形は小さくなっているが、かなり大きな池であった。秋にはボラ、ハゼ釣りで連日大にぎわいだった。私も学校の帰りに地元の同級生と釣りを楽しんだものだ。

この池を一周すると約三千五百ほどであった。冬期、体育の時間にはこの池一周をランニングするのが常で、それも時間をきめられていたので、長距離を走るのをにが手としていた私は大変だった。そのつらかったことはいまだに忘れられない。走るのが速い人をうらやましく思いながら、いつも最後のグループで学校に戻ってきた。

学校の外ばかり書いてきたので、ぼちぼち教室の中に入ることにし

よう。一年生の時我々機械科B組は、講堂の一部を一〇メートルの木板で仕切りただけの仮教室で授業を受けていた(学校火災で本館等教室が焼けて、復旧の途中だった)。だから隣の教室の声が少し大きいとそのまま聞こえていた。隣は造船科の一年生だったが、自習も静かだった。それにくらべると我々の自習時間は、ワイ、ワイ、ガヤ、ガヤ一枚だから隣へ筒抜け。特に私の声は大きくカン高かったのでよく目立ち、「おまえは学校をやめる。」と一番はじめにいわれたことがあった。入学して一か月もたっていないなかった。「学校の設備が悪い。おこるな。」と、カゲでブツブツいったものだった。

二年生になって正規の教室になってうれしかったこと、これでおもいきり「ほたえられるぞ。」といったものだった。休み時間教室の後で相撲をとったものだった。床が木板だったので、倒れてもそれほど痛さも感じなかった。勝った、負けた、ドタバタ、ドタバタ、よくやったものだ。教室に板のぬくもりがあった。冬場は掃除にぞうきんがけがあり、冷たくて大変だったが、今の教室より私は好きだ。今の教室は立派できれいだが……。

立派といえれば現在の製図コピー技術の進歩は大したものだ。この技術ができたことよって、機械製造納期がすごく短縮されていると思う。工作機械の発達もあるが、私は特にコピー技術に感心している一人である。学校で図面を書いていた我々の時代は、まず厚紙にエンピツで図面化して、それをトレーシングペーパーへ、カラス口で墨を入れて写しとり、それを青写真にしてコピーする方法だった。墨入れしている時、時々ミスをする。それも仕上がり間近にミスをする。またやりなおし。くやしい思いをしたものだ。今はコンピューターで図面



昭和31年11月3日
文化祭の前夜祭、仮装行列で須崎の町を
ねり歩いた時のもの、女装が筆者、相棒
は山中正郎君。

「卓球人生」

三十九年機械科卒 鍵本 肇

私は、東京オリンピックの年である一九六四年卒業です。丁度五十周年の半分という折り返しの時期に在籍したことになります。

私の場合は、学芸高校から転校しましたが、その際には、各先生方のご協力をいただきました。機械科に編入したわけですが、教科書は、卓球部の先輩からいただき、在学中は、それを眺めたものでした（勉強したとは、とてもいえない内容でした）。

中学卒業まで住んでいた須崎から佐川に引っ越したため、汽車通学となりました。やはり、最初は大変でした。その当時、東は佐川、西は窪川あたりが通学圏内でした。

在学中には、これといって思い出ありません。ということとは、かなりネクラの高校生活だったと思います。その中で救いといえば、当時の機械科は製図を書かないと卒業できませんでしたが、その製図が書けなく困っていた時に学友の手助けを受けやっとなし、卒業できたこと、そしてその学友とは、今も交際していることです。というような状態で、からくも落第を免れやっとなし卒業できました。無事早稲田大学に入学しましたが、入試や入学手続きのため卒業式には出席できませんでした。卒業式は別として、その後のクラス会には出席して同級生といろいろ話ができなかったことが残念でした（現在の卒業式はどんなものか興味があります）。

早稲田大学に入学したものの、一九六五年には学生運動が始まり、

が自動的に書けるようになった。だがそれを作るのは人、また扱うのも人、基本は人間、学生諸君多いに勉強して下さい。

我々の時代は、今まで書いてきたので少しは分かると思うけれど、道路を歩くにしろ、学生生活全体がのんびりと、のびのびとしていたように思う。クラブ活動にしても、そんなに勝つことに集中することなく、のびのびやっていた。だから勝てない時もあったが。そのことが良い悪いは別にして、今は我々の時代のことをやっとなしは生き残れないかもしれない。我々の学生時代の方が良かったなあとつくづく思う。

卒業して三十数年、白髪も増してきた頭をなぜながら、私の甥が須崎工業高等学校の教壇に立たせていただいているのを考えると、歲月が本当に走り去った、色々な出来事があったとつくづく思い出しているところだ。

（高知市在住、四国建機株）

学校閉鎖になったりと、本人の意志(?)とはかわりなく、勉強には縁が薄いものでした。

その代わりについては語弊がありますが、高校時代から続けていた卓球の練習が豊富にできました。高校時代の戦績は思わしくありませんでしたが、諸先生方のご指導及び卓球部の仲間の励ましにより、基本練習とトレーニングを重点的に積んでいたため、練習にもついていくことができ、結果も少しずつよくなりました。深く感謝をしております。

海外遠征にも何回か参加することができましたが、印象に残っているのは、やはり初めての遠征で中国に行ったことと、一九六七年にスエーデンで行われた世界選手権に参加したことです。その中国遠征は一九六五年八月に約一か月間、北京に主として滞在しました。ご存じのように今では四時間三十分くらいで行けますが、その当時は、日中間に国交が樹立されておらず、香港でビザを取り、南の大都市であります広州市を経由して北京に行くため、三日から四日もかかりました。トイレットペーパーと石けんが携帯必需品で、日本を出発する時沢山持って行ったものでした(念のため、現在ではその必要はありません)。

世界選手権出場の際には、学校関係者及び諸先輩方には、物心両面において多大なご援助をいただき、心強く感じるとともに、感激いたしました。本当にありがとうございます。

現在は、時々高知に帰省した折に、友人に会って飲食するくらいで、東京では全くといってよいくらい交流がなく、残念に思っております。この機会に関東地区の卒業生の横の連絡方法が、確立できたらよい

なあと期待しております。

(東京都在住、(株)ジャス)

プレイバック STHS

四十三年機械科卒 川上 清 義

母校の創立五十周年、誠におめでとうございます。私は昭和四十年から三年間、機械科A組に在籍しました。私の場合「須工」で教わったことが職業に直結しておりますので、私の現在あるは、まさに「須工」のお陰といえます。二十年余を経るもご恩返しの一つもできていないことが恥ずかしく、また心苦しくもありましたが、五十年の慶事に当たりこのような私にお声を掛けて頂き、二重の喜びであります。

私は機械いじりや木工細工が好きだったことと、家の経済的事情などで、中学生のころから高校は「須工」、そして即、自動車か飛行機の整備士と決めていました。この夢がかない、日本航空(株)に入社、以来「鶴丸」の翼をつけた日航機の整備をしております。私は陸の孤島、土佐のチベットと形容された禰原の、そのまた小さな村落に生まれ、須崎の大きさにびびくりしたことが、昨日の出来事のように思えます。とはいえ、何かを思い出そうとしても断片的で、記憶も不正確な現実 に歳月の流れを感じます。

在学当時は、「須工」が県下で二番目に創立された伝統ある工業高校であったこと、また火災に遭ったり総合高校の岐路にたたされたことなど気にもとめないで過ごしたように思います。幾多の先人、諸先

輩の汗と先見性のお陰で「須工」が生き残り、それを維持する職員・同窓会役員の皆様のご努力で、五十年も続いていることに改めて感謝申し上げます。

私の生まれ故郷は櫛原ですが、青春時代を過ごした須崎はもう一つの故郷です。当時の校舎は札町にあり、小高い山を背にして左手に市街地、右手にのどかな田園を臨み、その中央にはボラヤコイの釣れる池がありました。私は、校門を出てすぐ右の森光さん方に下宿生としてお世話になりましたが、下宿からも目と鼻の先にある、この池の周りの田んぼ道を散歩することが大変気に入っていました。殊に定期考査期間中など、勉強疲れの頭を休めるには格好の場所でした。森光さんは大間の方に転居されましたが、この辺りの景観も大きく変貌していることでしょう。現在の「須工」とともに是非訪れてみたい所のひとつです。

私はスポーツが大好きで、「須工」では、バレーボールに汗を流しました。そのようなわけで、新聞で「須工」の名を見つけると食い入るように記事を読んでいます。当時無かった野球やヨットの記事には母校の発展を感じ、うれしくなってきました。

ここで少しバレー部の話をします。顧問の先生方は西森・津野先生、それに順天大で現役だったばかりの中島先生と多士済々でしたが、部員ときたらどんぐりの背比べ、人の良さだけで仲間ができたようなチームでした。東京オリンピックの女子チームが「東洋の魔女」と呼ばれて回転レシーブ全盛の時代でしたので、我々もまねをしてユニホームはいつも泥で真っ黒でした。

隣の「須高」へよく練習試合に行きましたが、ある時、先生の粹な？

計らいで女子と試合をしたのですが、何と負けてしまいました。「本気でやれるかや」と吐きすてるように言った仲間の声は今も耳に残るほどの事件でした。これを機に部を解体→再結成というショック療法を試みたところ、全員復帰で大感激、鬼の工業生の目に光るものがありました。しかし、この年女神は一度も微笑まず、ついに公式戦無勝利の大記録を残したのです。但し、こんなに弱かったのは私が主将の一年間限りであったことを、申し添えます。

他の部については、ソフトボールはいつも優勝争いに加わり、卓球や相撲では、全国レベルの選手が活躍していました。それにサッカー、ハンドボール、柔道、テニス、陸上、体操部等があり、クラス仲間は大半がどれかに入っていたように思います。これらの部はブロック大会等においても互角以上の戦いをしていましたので、スポーツの盛んなことも「須工」の良き伝統のひとつでしょう。私のバレー部は惨憺たる戦績でしたが、当時グラウンドにはいつくばったり、須崎の浜を走ったりして体を鍛錬したことは大きな財産です。若さと筋力が残っているわけはありませんが、鍛錬の習慣・方法を知っていることが現在の健康づくりに生きているのです。

整備の現場は、大きなドックのうえを上がったたり降りたり、即席の足場の上に乗ったりしますので、体力はあった方が有利で、更に機敏性が有れば、思わぬ災害から身を守ることもあります。

最後に在学中の皆さん、私は昨年、米国シアトル市のボーイング社に出張し、日本が購入を決定した政府専用機の領収検査の一部を担当して参りました。チベット生まれの私ですから随分遠くへ行ったことになります。巷では、日系人やアジア諸国の単純労働者の流入が話題

になり、千葉の田舎町でも外人が珍しくありません。好むと好まざるにかかわらず、世界は狭くなり、国籍や言葉の壁を超えた交流がますます盛んになるでしょう。皆さんは、この辺を視野にすえ大いに心身を鍛錬し、勉学に励んで下さい。また、今を大いに楽しんで下さい。実社会は学校の延長とはいきませんが、ある人の生きざまは、大体高校時代ころに形成されると私は信ずるものです。

「須工」と皆さんの前途に榮えあれと念じつつ、とりとめのない話を終わります。

(千葉県在住、日本航空㈱)

思 い 出

四十四年機械科卒 岡 田 雅 幸

八時零分起床、朝食をすまし、八時十二分家をゆつくりと出る。校門の前でベルが鳴る。教室へ入る。先生が来る。以上が、私の須工時代、三年間の朝であった。ずいぶんゆつくりしたなまけ者のように思われるが、家においても学校のベルが、聞こえるぐらい近所に住んでいたのではないと思うことにした。そのかわり、他の生徒は通学の楽しみがあったのに、私にはなかったため、その分損をしたのかもれない。

高校時代の思い出というと、なんといってもクラスマッチである。

テニス、バレーボール、ハンドボール、ソフトボール、サッカー、バスケットボール、相撲、卓球、陸上、駅伝の一〇競技を一年間を通じ、

一、二、三年クラス、教員が、スポーツに汗を流して、競技するのは他校にはないすばらしい行事であったと思う。

一年生のクラスは、初めは上級生のクラスには勝てないけれど、三学期近くになると、時には勝つこともあり、上級生から反感を買ったりもした。また、教員チームとの対戦もすばらしいもので、日ごろの教室での、「うらみ」に対して、「渾身」の力をぶつけたもので見ていてほえましいものだった。私としては、一〇競技のうち、テニス、卓球以外は、三年間を通じてすべてに参加させてもらったように思うが、そのころの私は、自分中心で、自我が強く、他のクラスメートのことも考えず、楽しい思い出を創り出してやれなかったと反省もしている。

また、文化祭では、仮装行列、「世界の美女」ということで女装したが、自分の地元であったので、市内パレードの時は、小中学の同級生や近所の人たちがひやかすので、その恥ずかしさと緊張の連続であった。それから、出品物として、ゴーカートを製作出品したが、エンジンは単車から、フレームはパイプその他いろいろのものを集めて造ったが、失敗作品であった。特にハンドルが重く、切れが悪い、タイヤが横すべりをする(カジ取り装置のバランスが悪い)、振動でフレームの溶接が取れる(溶接技術が未熟)等の結果であった。当時、車に関する知識もなく、製作日数二週間という短時間であったため、試運転が本番をかねてしまったことが失敗の原因でなからうかと思うが、失敗も勉強の一つとして、自分の思い出として残っている。

サッカー人生

我が須工サッカー部の歴史は古く、聞くところによると昭和二十四年ころだそうだが、残念ながら現在までに県大会を勝ち進み、四国大

会へ出場したのは、昭和四十二年春のインター杯県予選で二位となり、四国予選へ県代表となったのが唯一ではないだろうか。当時の県下の高校サッカーのレベルは、高知市内校、高知農などが、どの大会においてもベスト4を占める中であって、我がイレブンが強敵高知高校を破ったことは、新聞にも「番狂わせ、高知高敗れる、須崎工勝つ。」の見出しで載ったほどであった。

その試合には私も二年生でゴールキーパーの補欠として参加させてもらったが、前日からの雨のため、小津高校のグラウンドはまるで田植え前の田んぼのようだった。その中で我がイレブンは、自慢の体力とパワーで、一対〇で高知高を破った。日ごろは、我が校の狭いグラウンドでの練習であるが、雨の日は、他のクラブが休みなので、よく自分たちで紅白試合をして練習を積んであったのと、「サッカーの試合の勝ち負けは、技術と運が七対三である」ということがよくいわれ、まさにそのとおりの試合展開だったように思う。ちなみに、四国大会では、それが通用しなかったけれどチームメイトにはこの大会に出場したことが、大変な自信になっているし、また良い思い出の一つでもある。

現在、私は、須崎FCという、一般のクラブに所属して、サッカーを楽しんでいる。このFCは、昭和五十一年に須崎工業OB会として発足し、現在まで続いており、発足当時は一八名程度のクラブで、メンバーがまだ若く成績も良かったけれど、一時期人数の集まりも悪く低迷もした。でも、最近では、世代も代わり、若いメンバーも集まり、上位入賞をねらってがんばっている。

須工を卒業して早二十三年の歳月が流れ、職業高校の在り方も、い

ろいろと考えなくてはならない時期にきていると思うが、我が須工には、すばらしい歴史と、りっぱな先輩方がいろいろな面で活躍されている。そういう人材を活用して、なんとかこれからも一人ひとりの個性を大切に育て、またフロンティア精神を育てる学校になるよう期待している。

(須崎市在住、朝ヶ丘自動車)

思い出の記

四十七年機械科卒 中間正志

母校創立五十周年おめでとうございます。

昭和四十七年三月、三年間の楽しい学園生活を思い出に卒業以来、早十九年、振り返ってみればまたたく間にすぎ去ってしまったという感じがします。

当時の学校を思い出せば、古い木造校舎で窓ガラスは所々割れ、廊下には油のようなものがひいてあり、歩けばミシミシと音のするおせじにもあまりきれいな校舎ではなかったと思います。

現在、旧校舎跡には、ワンフロアーでは県下最大のショッピングセンターが建設され、高幡地域の商業の中心的な場所となっており、昔の面影が残っているとすれば、電気科(?)の実習室の建物が、現在は商工会議所として利用されているような状況であります。

私自身、高校生活三年間あまり目立ったこともせず、クラブ活動もせず、また勉強もせず、ただただ平凡な生徒であったと思います。そ

れでもよくクラス対抗のスポーツ大会等には出場させてもらった記憶があります。今もこの行事は続いているでしょうか。今思えば学生時代には、勉強でもスポーツでも、何か一つでも目標を持って努力していたらと、今になって気が付き後悔しております。

今高校生のバイク通学等の件が新聞紙上、またこれに関する件が裁判にもなり注目を浴びておりますが、この件の是非はともかく、私たちの学生時代には、免許取得年齢の一六歳になると、皆先を争うように免許を取りに行ったものです。私自身も、友人と二人で東津野村舟戸の自動車教習所(当時は自動二輪の試験も行っていた)へ免許を取りに行ったものです。朝暗いうちに起き、自転車で二十数^キの上り坂の道(自宅は須崎より葉山方面に二〇^キくらい^キの所)、あの布施ヶ坂を越え舗装もしていない砂利道を……。

今仕事の関係で時々この道を通るたび、よくここまで自転車だと、自分でも感心致します。この国道一九七号線も大部分が改良され平成四年度あたりには、現在の布施ヶ坂も昔の思い出の道となることでしょう。

免許を取ると通学は自転車からバイクに変わります。九〇CCのバイクを親に買ってもらい、喜びいさんで通ったことでした。また、休日には、クラスの友人と足摺岬等ヘツーリングにもよく行き、楽しくすごした思い出があります。やはり交通事情の差でしょうか。当時は幸いなことに、あまり大きな事故等のことは、学校内では耳にすることがなかったように思いますが、現在高校生の交通事故等を新聞紙上で見るたびに胸が痛みます。二度とない青春を交通事故等で無にしないで下さい。

私の就職した職場(高幡消防組合)には、昭和三十一年E科を卒業された消防長、山下英作氏をはじめ先輩、後輩を含め現在一七名の須工卒業生が在職活躍し、非常に心強く思っており、また同期の卒業生は葉山村の岡崎好友君(E科)、大野見村の市川直孝君(M科)が勤務をしております。

後輩らから、旧校舎の時代と違って母校の施設、設備の充実を聞いております。在校生諸君が勉学だけにとどまらず、先生、友人との触れ合いも忘れることなく、有意義な三年間を過ごし卒業されることと、母校のますますの発展を祈つてやみません。

(須崎市在住、高幡消防組合本部)

「ちよつとした苦勞」

五十四年機械科卒 坂本定浩

母校創立五十周年おめでとうございます。

この五十周年記念文集の依頼を受けて困っていたところへ、先生が、野球部の運営資金のためのハゲの干物を持って来ました。

母校に野球部が昭和五十四年に発足して数年後、運営資金が他のクラブに比べて非常に多く必要ということで、夏はミカンジュース、冬はハゲ・うるめの干物などを売って資金を作るようになり、その営業マンとして活動するようになったわけですが、夏のジュースは一ケース一二本、三六〇〇円で簡単に売ることができ、後からも追加注文が来て、あまり営業活動をしなくてもそこそこ売れるのですが、問題は

冬の販売品うるめの干物で、二〇〇〇〇×二五〇〇〇〇×二五〇〇〇〇くらい
の箱に入って二五〇〇〇円。その道の好きな人は何気なく買うかもしれ
ませんが、一般の何の興味もない人にとっては、すぐに買ったがるも
のではありませんでした。

そのため、やじられることの多かったこと多かったこと。その一部
を書きますと、「それ売って、お前いくらもらえるが?」、「ネコも振
り向かないネコまたぎのうるめ」、「辛くて一匹でビール三本飲める」
などなど、いろいろ言われ、これはあまり売れないと判断し、会社の
中でも、文句を言いながらも買ってくれそうな人のロッカーに一箱ず
つ入れておきました。

そして一週間後、もう返品できる状態ではなくなったところに、代金
の請求に行くと、「あれはだれかからのお返し物かと思つて食べた」
などと言いながらも代金を払ってくれました。けれども、こんな方法
が毎年通用するはずがないので、次の年の冬からはハゲの干物の販売
だけにしてみました。

しかしながら問題点がもう一つ。品物を渡しても代金が来るのが三
か月、四か月と遅い人がいるため、全員の代金を回収して先生の方へ
渡してはあまりにも遅くなるので、自分の貯金から二、三万円立
て替えることもあり、その未回収分が入金してくるのが、二、三千元
ずつということもあつて、ついつい自分の小づかいになり、貯金も減つ
てしまう。好きこのんで買ってもらったわけではないので、あまり催
促もできないし、仕方ないかもしれない!

しかし、買う人よりはるかに大変な思いをしているのは売る方だ。
そんなことは分かっているのに、なぜこんなことをしているのだろう

か。それは、人の役に立つということと、「売ってくれてありがとう」
の一言と、あとはボランティア精神だろうか。

以上に書いた内容は、ノンフィクションではありませんが、決して販
売元であります先生に対するいやみではなく、今後の販売に対するご
協力を広くお願いするためのものです。今までご協力頂きました皆様、
大変ありがとうございました。また、これからも温かいご支援ご協力
をお願い致します。

(須崎市在住、森精機器(株)須崎工場)

わが母校

五十九年機械科卒

広瀬

剛

突然、工業の思い出を書いてくださいと言われても、何から書い
たらよいか分からないので、やはり悪いことをしたのが一番先に思い
出されます。

通学の汽車の中でタバコをすったこととか、授業ボーイコットして、
体育館へ集まりテレビを見たり、女の先生の時間に泣かして授業でき
なくしたり、一時間目の休み時間に食堂に行つて、今きたばかりのパ
ンを買って食べるとか、いろいろな思い出があることが、じっくり考
えると思ひ出されます。

入学の時は、これからの三年間、この校舎、グラウンドでどんなこ
とがあるのか、わくわくしていたことを思い出します。また、中学校
とは違いあちこちの町や村から、いろんな人が集まり、一クラス、一

つの学校となつていたので、少しの不安と多くの友達ができる楽しみで複雑な気持ちでした。

自分は中学の時から工作や何かが好きだったので、工業のこと、機械のことが大好きだったので、工業では実習とか、機械の科目などは、好きで面白かったです。工業関係の仕事へついて学校で習ったことがすぐ役に立つと思つたけど、勉強したことはすぐ役立つことは少ないということが分かりました。学校の成績で仕事が出来るといふわけじゃないことも、少しずつ分かってきました。

つらかったのは、六月の寒い水泳と、冬のマラソン、年一回の校内マラソン大会です。マラソン大会では、学校の周りを一〇キロも走らなくてはならないのに、それを二時間という時間制限までつけてくれて、うれしいやら悲しいやら、マラソンは大の苦手でいやでいやで、三年間いつも時計を見ながら、二時間ぎりぎりまでゴールしていました。近道して見つかり、ちがう日にやりなおさせられたり、途中で買ひ食いしたりマラソンがいやだったせいもあり、とてもつらい思いをしました。

高校を卒業してからは、会社でソフトをしていて、練習で走るのはそんなにつらくは思わないのに、いやいやだとつらく感じる。だからいやだと思わないように、何をやっても楽しくできるようにして欲しいと思つてます。

楽しいといえば、三年間夏休みにアルバイトをしたことを思い出します。一年の時は蕎麦のアルバイトを十日間ぐらいだったけど、朝は五時に起きて夜は七時まで、一日四食ぐらい食べて、すごく一日が長く感じました。それと、ものすごく暑い思いもしたし、とてもしんど

かったです。

そして二年と三年の夏はコカ・コーラでアルバイトをしました。その時は、少しくらい暑くても一年の時にくらべれば、らかなもんでした。トラックでスパークを回り、一日ジュース三〇個入りの箱を、多い日は三〇〇個くらい倉庫へ入れたり、スパークへ陳列したり、わりと楽しいアルバイトでした。けど車で回るので、雨が降る日も濡れながらとか、少しはつらいこともありました。

三年の文化祭はとっても楽しかったです。仮装行列では、白いぶかぶかの服に一本足の下駄を履いて、学校からユタカまで、歩きました。クラスの出し物は教室で喫茶店を開きました。教室にステレオを家から運び、暗幕で暗くして蛍光灯にゼロハンで色をつけたり、机でカウスターを作り、アルバイト先のコカ・コーラでジュース類を安く買い、水もクーラーに入れて買ってきて、そして当日はステレオをガンガン、ポリウムをいっぱいにして、ディスコののりで思いっきり楽しんでしまったことでした。けど今はすごくよかったです。

最後に、高校の時間が一番青春していると、今は思うようになりました。だから、今高校の人は、自分に悔いが残らないような生活をしてくださいね。

(高知県日高村在住、(株)ササオカ)

「選 択」

六十年機械科卒 井上 澄 男

私は中学校の時から陸上をやり始めたのですが、そのきっかけは何とたわいなく、同じクラスの仲の良かった友達が陸上部へ入ったので、私も一緒に入ってしまった。今思うと本当、自分でも意志のはっきりしない、何をやりたいのか分からないから入部してしまいました。

それでも何とか三年間辞めずに続いたのは試合の楽しさを味わったからだと思います。それはコンマ一秒でも記録が伸びたり、又は練習の成果が試合で出た時などは、もっと練習して次はもっといい記録を残そうと自然に考えられたからだと思います。

そして高校の受験のシーズンになり、私の場合、学業の成績は全然よくなかった点、一番競争率の少ない須崎工業を選ぶことになりました。案の定競争率は〇・八倍ぐらいですんなり入学でき、良かったです。

高校に入ってから私の私は迷うことなく陸上をやり続けていました。しかし私の足では県体のレベルでは通用しないのを分かっていたから、何か外に自分に合うものはないかと、毎日練習しているうち、砲丸投げと円盤投げを本格的にやってみようと思いはじめました。

一年の時などは、とにかく先輩と滝先生とについて一生懸命練習をやったけど、記録は伸びないし練習はつらいし、少しスランプに陥って辞めたいと思ったこともありました。そして二年になり、冬場のトレーニングの効果が始まったのがこのころでした。

このように、少しでも記録が伸びる時というのは、少々練習が、らくても長続きするように感じました。そして就職という大事な選択を迎えた三年の県体では、一〇〇㊦、円盤投げ、砲丸投げに出場し、意外にも好記録が出たのは今でも忘れません。一〇〇㊦で見ると、一一秒九でしか走れなかった私が、予選で一一秒七で走れ、喜んでいました。そして準決でいきなり一一秒四で走ったことは、自分で自分が速くなったなど実感し、またこの時の優越感も陸上やって良かったなと思いました。でも一〇〇㊦走ったうち五〇㊦までは満足したけど、後半五〇㊦は体のバランスをなくし、少し後悔したりしました。

そして部活も終わり、私は就職という選択に対して、高校卒業したら働かないかという固定概念があり、大学受験とか振り向きもしなかったのですが、それが今では少し悔いが残ったりしています。だから今の高校生たちも、三年の段階であの会社に入りたいとか、機械をつつく仕事をしたいかある人はいいけど、何をしたいのか、何が自分に向いているのか分からない生徒たちなら、専門校、大学進学の話がまだ良いのではないのでしょうか。

高校三年間、陸上をやって記録が伸びたことはもとより、三年間辞めずに練習して来て本当に良かったと思えました。

(高知県窪川町在住、窪川町農業協同組合)

「ダイジェスト」

二十四年造船科卒

森 久 敬

私たち造船科一期生を語るに、華々しい事柄は何もない。昭和十九年四月入校、二十年八月十五日敗戦。二十一年南海大地震、息つく間もなく学制改革に校舎の焼失。惨たんたるものであった。

第一に専門の造船科教師がいなかった。初代担任の桑原章師先生は公民科の教師（これがたたって、いわれなき戦犯として学園追放の憂き目にあつた）。この熱血教師は新妻を残して、戦禍渦巻く横浜大学造船科へ三か月の留学。その間、私たちは機械科の各教科を授けられた。

鋳型実習に木工実習、機械工場の掃除。あげくに総員バッテリーで尻を引っぱられた。もつともバッテリー食つて気絶した奴もいなかったから、尻のカップで毛筋ほどの恨みもない。今ではバッテリー専門の竹内今男先生は「陸船会」の常連で、あのころの思ひ出話の結構な酒の肴になって、「若気の至りじゃ、許せゆるせ」と、先生の周りに爆笑がわく。当時の須工にあつて造船科は戦争の落とし子、鬼子の有り様。

新知識をギョロ目いっぱい仕込んで横浜から帰校した桑原先生の講義が始まった。これまでの教科に加えて新しく船用機関、船体構造、擬装、製図などなど。与えられた新兵器が六〇〇分の一、四〇〇分の一の物差し。ヨーダイをいいながら製図中、他の奴の物差しと取り違えて、段々と船体断面図がひん曲がってしまう面白さがあつた。

造船実習は須崎造船所と大間造船所でやった。現場監督から、「オ

ンシラアが手伝うたら、船が壊れるケ。何ンちやアするなッ」。仕方がないから悪たれ口をたたき、工場の隅で弁当食つて茶をガブ飲みし、戦時標準型三六〇トのお粗末な木造船を眺めていた。

これらの船は粗末ゆえに東南アジアの各港で積み荷中、バラバラに壊れてしまったという。私たちが手伝っていたら進水式るとき、須崎湾内でバラバラになったかも知れない。だから実習をサボった悔いは全くない。全く妙チキリンな造船野郎の集団であつた。

という次第で珍妙な思ひ出話は数々あるが、なんといつても最高の珍事は、終戦の翌十六日、日本最後の戦徒動員令で、先輩や軍人たちが続々と帰郷、復員して来る中を逆行して造船一期、二期の八十余名は、まるで賭殺場へ引かれる牛の格好よろしく、大野見村高野の溜池構築現場へほうり込まれてしまった。またまた桑原先生は須崎の町へ愛妻と愛娘を置いての出征？であつた。もちろん作業が進ちよくするはずがない。八月末日、私たちは宙を飛ぶ思ひで須崎の町へ生還したのであつた。

現在、「陸船会」が連続二二回の総会で大いに飲んでいる最大の原因は、逝去と発表されていた桑原先生が生存されていたことと、大野見村での集団生活があつたからのように思える。ここで、二、三のことと触れておきたいことがある。

その一、須工相撲部は昭和二十五年に創立された、と記録にあるそうだが、実際は二十二年二学期に相撲部は創立されたのである。部長は桑原先生で、どこからか禪（まわし）一〇本を調達。造船科では私、農本利男、間島完介。機械では西内（故人）、依光などがいた。あと横山というテッカイ男が入つて来た。

その二、弁論部が桑原先生によって発足した。造船では私、田所、山野上、機械では藤本などがいた。二回の弁論大会を催したが、桑原先生の学園退去で消滅してしまった。

その三、陸上部である。機械の北村凡^{ひつし}が、「棒高跳び」をやりたいと言いつ出した。ただ一人では部活の対象とならないと断られてしまった。そこで私に助っ人を頼んで来たのでOKした。竹村義典先生が他部を説得して、赤と白のんだんだら模様^{まよう}の棒を一本買ってくれた。私はいまもあの長い棒の正式名称を知らない。その時は「祭り竿」と命名してやった。あのオミコシの紅白の網と同じようなものだと考えたからである。

放課後、だれもいなくなった校庭の隅の砂場で、北村は一本の祭り竿に精力を傾注していた。私はその横で三段跳びを黙々として跳び続けた。二人共、ワラゾウリである。

戦中は剣道と銃剣術に精出していた私は、敗戦後、ボクシングに熱中したが、ひどい脚気を病んで中断してしまった。武石英男、福永徳七郎らは西町の喫茶店でシャンソン、ブルースのレコード鑑賞をやっていた。山野上殿のグループは浜の方にあったセントラル劇場へ通って、「英語の勉強会」をやっていた。同じ洋画を見ても私は、拳銃の早業と、撲り合いのテクニクばかり研究したから、英語は駄目である。

今、学校時代を振り返ってみるに、立体的な造船や工学をダイジェスト的に学んだだけのように思えるが、物事を立体的に組み立てて考える習性が身について、随分、得をしている。工業をやった者は視野が狭くなる、という説を口にするものもあるが、それは視野を広める

努力を怠っているからであろう。そういうのを専門バカというらしい。立体的に物事を思考し、心豊かな社会生活を送ってこそ、工学を学んだ者の幸せだと私は、開校五十周年の年に当たり、更に思いを深くしているものである。あと三年で造船科開設五十周年がくる。

今、「陸船会」では、「造船科物語」を企画していて、この一文もまたその物語のダイジェストである。

末尾で失礼だが、五十周年記念で、特に第一期生の諸先輩に心からおよろこびを申し上げます。

(高知市在住、宗教法人御祖教本部大教会・神官)

思い出、そして今

三十一年造船科卒

藤田 国基

須崎工業高等学校創立五十周年をお祝いして、記念誌の発刊にあたり、投稿のお薦めを頂きましたので粗筆を顧みず、往時を偲^{しの}びペンを走らせました。昭和二十八年四月からの三年間が、我が蛍雪の時ということになりましたが、あのころの高校生活は「良く学び、良く遊び！」の言葉は、すっかり「良く遊び、良く遊び！」の悪童共が大勢をしめ、糺池でのヨット遊び、新莊川原での水泳、映画館への日参等々思い出は教室外のことばかりです。

当時造船科の実習場には、帆に須工の校章を大きく染め抜いた一隻の木造ヨットがありました。今から思い出すとお世辞にもスマートとは言いが数少ない遊具の一つで、人文地理の授業を抜け出して糺

池に浮かべて快走(?)中に操作を誤り、冬の湖水を泳いだ寒い思い出もあります。夏の「海の記念日」を中心に開いた「造船科展」の企画演出等々、担任の先生は、我がクラスをスラッグ(溶滓)と称してはばからなかったが、そんな思い出づくりを許してくれました。

電気通信科が新設されたころでもあり、校舎焼け跡に教室や実習場が次々と復旧されました。初めて女生徒が入学、生徒会役員としても活躍され、新しい校風の芽ばえに花を添えつつありましたし、機械科では小型の船用エンジンが、産業教育実習作品展で一位入賞、通産大臣賞を授与された事もありました。いずれにしても、どの科にも受験戦争や塾通いという語は須工にはなく、皆至っておおらかでアンパン帽子に朴歯の高下駄をトレードマークに狭い須崎の町を流していたことでした。

私が一五名の友と共に造船科を巢立った昭和三十一年は、日本の造船量が世界一位に躍り出た年でもありました。以来船を造り続けて三十有余年、構造不況という造船苦難の日々もありましたが、今は何とかトンネルの向こうに灯が見えてきました。昨年は七年振りに高卒新人を募集したところ我が母校からも二人のフレッシュマンを迎えることができ、既に現場の第一線で活躍してもらっています。

少なくなつた高校造船科も、また業界の注目を集める時がきたようです。私が初めて手掛けた船は既に廃船解体され、その名を残すのみとなりましたが、長い経験をもとに、若者たちにも負けまいと頑張っている造船の現場から、創立五十周年を迎えた母校のますますのご発展を願いつつこの記を終わらせて頂きます。

(岡山県在住、三井造船株)

みちのく一人旅

三十五年造船科卒

増田 浩

皆さんお元気でご活躍のことと存じます。私も遠く土佐を離れ、みちのく仙台で、大自然と共に日々徒然なるままに過ごしております。

東北はまだ自然に恵まれ、山々は雄大で現在日本が失いつつあるものをまだ残しております。朝日に映える雪どけの春の山、夏の三大祭り、青森ねぶた、秋田のかんとう、仙台の七夕と八月の初めから八月にかけては大変なにぎわいです。青森ねぶたは、三五〇万人の人出で日本最大のお祭りです。仙台七夕も八月六、七、八日の三日間で二七〇万人の人出となります。

秋の東北は山いっぱいの紅葉で絶景です。また、冬のスキーは良質の雪に恵まれ、長く広いゲレンデはゆうゆうと滑れて大変に素晴らしい所です。私もそろそろ来年あたりは国体に高知県代表で出場しようか?と思っておりますが、腕の方は、いや足の方が上達しません。

振り返れば早いもので、卒業してから三十一年が過ぎようとしています。造船王国を誇った日本がたちまちのうちに崩壊し、今日の日本の繁栄を築きあげた我ら造船マンは、陸に上がった河童となりかけましたが、そこは土佐のいごっそう根性で、皆それぞれにご活躍との報を聞き、安心するとともに、私もみちのくで頑張っております。

ガムの水門営業をしている関係で、現場は山の奥深い所であり、十二月ともなれば大雪にあい、寂しい雪道を一人車を運転する時は、故郷の土佐を想い出します。そんな時、車の中で一人歌って一人で元氣

づけをしています。「須崎工業高校の教えの庭に身と心」……。こんな時、つくづく故郷はいいなと感じます。今度土佐に帰った時には同級生はじめ、皆様方に是非お逢いしたく存じますが、きつと白髪に、ハゲにデブの好々おんちゃんばかりのことと期待しております。

さて、本題のみのく一人旅に入らなければいけません。仙台は天下の副將軍、伊達正宗公によって開かれた六二万石の城下町で、宇和島一〇万石は仙台の飛び地です。「伊達者」といわれるように派手好みで、商店街は大理石敷き、からくり人形にからくり時計、街灯はガス灯で公園はコンクリートブロックでなく御影石といった所です。

奇しくも須工の校歌は仙台出身の土井晩翠の作です。また、宮城県は鯉の水揚げ量は全国の五六割と日本一とのことで驚きました。次に戊辰戦争の地、会津若松市です。我が土佐の英雄、坂本龍馬の仇ぞと板垣退助が指揮して鶴ヶ城を攻めて、白虎隊の悲劇を生んだ所です。しかし今日では会津若松市の人々はお盆には土佐烈士の供養をして過ぎし日の苦い想い出を消しております。

私が龍馬の次に尊敬する野口英世も近くの猪苗代で生まれております。きつと雄大にそびえる磐梯山を朝夕眺め、「きつとこの山より大きい人間になろう」と思つて育つたことでしょう。

北に入って「北上川夜曲」の北上市を経て花巻市に入ります。「雨にも負けず、風にも負けず」の宮沢賢治の里です。宮沢記念館には「銀河鉄道の旅」で一気に宇宙飛行士です。農民と共に生き、農民のために命を落とした賢治もまた、尊敬すべきみちのくの偉人です。

引き返して、源義経が弁慶と共に命を落とした黄金の国、平泉中尊寺へ参りたいのですが、先を急がねばなりません。芭蕉の奥の細道の

一句「夏草やつわ者共が夢のあと」の碑を後に十和田・八甲田山へと入ります。秋の十和田湖は絶景で紅葉に映える湖、奥入瀬の溪流美、日本最高の自然美といわれております。冬の八甲田山は厳しく小説「八甲田山」のとおり雪中行軍の悲劇の地です。

津軽海峡を見てりんごの里、津軽平野と入ります。りんご追分で有名になった岩木山を見て日本一おいしい黒石のりんごを食べるのは最高です。遠く竜飛岬が冬景色でかすんでいます。夏は日本最大の祭り「ねぶた祭り」でワッセラ、ワッセラと老いも若きもお祭りさわぎです。吉幾三の雪国の歌を聞きながら秋田へ入ります。

秋田は佐竹藩で、戊辰戦争の時、東北で唯一の官軍です。秋田市にある平野美術館は大変に素晴らしく、藤田嗣治画伯の世界一の壁画、「秋田の四季」や、マチス、ピカソ等々の名画が沢山展示され目を奪われます。二月三日節分の日に行われる雪のドーム、横手市のかまくらを楽しんで、いよいよみちのく一人旅も最終の山形路へ入ります。

山形は「京の紅」として使用した紅花（べにばな）とサクランボの産地です。紅花の関係で京の文化が入り込み、東北で一番関西的な所です。六月の末から七月にかけて実るサクランボは甘ずっぱい味がして大変おいしいものですが、一ツから二万円もする高価なもので、中々口に入りません。

とうとう最終の山形の立石寺に参りました。芭蕉の「しずけさや岩にしみ入るせみの声」をもってみちのく一人旅も終点です。このようなコースを、ダムを求めて日常の営業活動をしております。

船を忘れたといえば嘘になりますが、もう忘れるしかありません。次は自分の設計したファインシップで七ツの海をヤレサノサと参りた

く思っております。今夏あたりは大阪に帰りたいと思っておりますが、いましばらく、みちのくの大自然を楽しみ、皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。

昔聞長者言、掩耳每不喜、奈何五十年、忽已親此事、求我盛年歡、一毫無復意、去去轉欲遠、此生豈再值、傾家持作樂、竟此歲月駛、有子不留金、何用身後置 (陶淵明)

この心で頑張ります。

(兵庫県在住、(株)丸島アクアシステム)

「一枚の賞状と靴べら」

三十七年化学工業科卒

橋田 泰

私の数少ない宝物のなかに、一つの古ぼけた賞状と靴べらがあります。これは三十年前に、母校須崎工業に、学んだあかしの品物です。賞状はクラス対抗の校内スポーツ大会、全種目出場を称える内容のものでした(成績は別として、今から考えると、ただ単なる目だちがり屋だったのではと反省している)。

しかし多くの種目に出場できたことに対して、ほこりを持っていません。とりわけ、すもうに至っては……。

この当時のすもうは、常に全国大会で優勝・準優勝の常連校だったのです。当校の黄金時代だったように記憶しています。このなかでも、中川・竹下両君は個人的に、常に上位になっていたように思います。こういう彼らとも対戦したのだから、結果は明白でした。しかし、彼

らもその辺は私の実力を心得て、試合内容に配慮してくれました。この点大いに感謝しています。この時に培ったスポーツ好きは、現在に至るまで続いており、何をやらせてもうまくはないが何でもこなします。スポーツは人間関係を良好にするため、社会人になった今も大いに役立っています。

次にもう一つの宝物である靴べらですが、これは化学工学の実習の折に製造したプラスチック製のものであります。私は、一期生であったので、どんな実験器具・装置もすべて、新品でした。この時使用した、射出成型装置もその一つでした。昭和三十年代の前半は石油化学工業のはしりりで、高度成長の到来を告げるように、工業の全盛でした。現在のように化学製品、ことにプラスチック製品があまり市販されていない時期だったので、私たちは得意でした。

化学の実習ではこのほか無機・有機化学も行いましたが、化学反応の進行に伴い、色が変わったり、ガスが出たり、発熱したり、はたまた沈殿したりと、無知な私は、その都度興奮したものでした。座学と実習がうまく、カリキュラムされていたので、亀の子も知らない、私も理解できました。

ベンゼンを原料として、安息香酸やニトロベンゼンを、製造したこともありました。ベンゼンの、あまい、芳香性に酔いしれながらの実習も楽しい思い出でした。

化学とはあまり関係のない造船所勤務ですが、須工で学んだことは大いに役立っています。今後とも、この宝物を大切に保管し、青春の思い出にしたいと思います。

(香川県在住、川崎重工業(株)坂出工場)

「祝創立五十周年」

四十二年化学工業科卒 青木 鎮（横畑）

化学工業科、多田和子先生より、劣等生だった私に、創立五十周年記念誌原稿執筆の依頼があった。四十二年に卒業、京都染色工場に就職、二か年で退職、二〇歳で家業である建築業大工に就く。二五歳で姓、横畑より青木となる。いわゆる私は養子なのだ。劣等生だった私が、大工をしていることを知った多田先生から、家を建立してほしいと依頼があった。私は涙の出るほどうれしかった。学校の夏休み中、仕事をさせてもらった楽しい思い出がある。以来私は、時々先生の自宅に、寄せてもらうようになった。執筆のいわれは、分かっていただけだかと思う。

現在私は、生姜、苺、文旦と、農業に従事している。家を建立するもしいが、自然、季節を見極めながら作物の世話をし、収穫の喜びはまた格別のものがある。

さて、四十二年化学科卒には、一人のマドンナがいた。中山理恵さん。ここで私たちの同志会須崎市組のメンバーを紹介しよう。ガソリンスタンド経営の青木文男さん、県職員である笹岡哲司さん・秋沢秀昭さん、大阪セメント勤務の渡辺和博さん、香長建設勤務の細木正明さん。このメンバーがマドンナを囲んで一年間に二回あるいは三度の同志会である。須崎市内で集結するので「須崎組」と称する。新年会、花見時、忘年会などの季節になると、だれともなしにマドンナの所に「もうまあ、集まろうや」と話があると、すぐに乾杯となる。話題は



マドンナを囲んで。同志会須崎組
前列左から細木・中山・青木（鎮）
後列左から秋沢・青木（文）・笹岡の皆さん

在学時の先生方の身振り、手振り、口癖などまねしながら、思い出話を、酒の肴に、実に楽しい。

六〇歳になると、年々弱り、七〇歳になると月々弱り、八〇歳になると日々弱り、九〇歳になると、お迎えをまつばかりとか。結構、馬鹿な事の話もあり、できるだけ長く続

けようと思っている。高知市内に居る皆さん、市内で同志を集結してはいかがですか。そして二年、三年に一度、四十二年化学科卒の同志会をしてみませんか？。

何かまとまりのない執筆になりましたが、最後に母校のご発展と同志会の皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

（高知県在住、建築業自営）

我が就職変遷

四十六年化学工業科卒 松坂博史

須崎工業高等学校創立五十周年を迎え、誠にお喜び申し上げます。

私は、昭和四十六年に化学科を卒業し、畑違いではありませんでしたが、日本国有鉄道、東京南鉄道管理局に国鉄職員として就職いたしました。

昭和四十六年の就職状況は少ないとはいえ、諸先生のご指導により、たくさんの企業を紹介していただきました。しかし、父親、叔父、親戚等に国鉄職員を持ち、私も鉄道の世界に感心を持っておりましたので、国鉄への就職の道を希望しておりました。当時、国鉄四国総局は求人ゼロという回答でありましたので、やむなく従兄や知り合いのいる東京南鉄道管理局を受験いたしました。

級友の就職が次々に内定していく中、国鉄からの便りのないもどかしさに意気消沈としていた私に、諸先生から何度となく斡旋の電話もいただきましたが、国鉄に決めた以上、可否の結果を待つことにしました。ようやく採用の通知を受理したのは学校卒業後一月を経過した後のことでした。

遠距離の就職という未知の世界に向けて、不安と希望を抱きながら上京し、埼玉県の鉄道学校で一か月間基礎教養を受けました。初めは都心のある駅に配属されましたが、何と二日で転勤となり、次に配属された駅もわずか五か月で転勤となりました。少々のことでは帰らないと心に誓った気持ちもわずか半年足らずで三回もの転勤に会い、度重なる不安と寂しさで一か月内の休みを全部まとめて帰省するという

情けない形態をとったこともありました。

三度目は、工業地帯の中の操車場で構内作業係という、いわゆる貨車の入れ換え作業を行う職種でしたが、あまりの危険な作業に不安を抱き、内部上級試験を受けて転勤し、本来の駅員としての道を進みはじめました。

営業部門としての出・改札等の業務を重ねて行くうちに、国鉄職員でありながら司法の世界との両面をもつ鉄道公安の世界に興味を覚え、同僚、上司等の勧めもあって、鉄道公安の部門を受験し、今度は鉄道公安職員としての道を進み始めました。

東京駅・品川駅周辺を管轄地と置いた私は、毎日が犯罪との戦いでした。不特定多数の人の集まる駅は正に犯罪等のルツボであります。

喧嘩、酔客、迷い子、スリ・不正乗車の取り締まり、雑踏警備等々、さらにそのころは成田空港開港に伴い、ジェット燃料輸送警備に明け暮れ、一か月まるまる成田周辺の各駅の警備ということもありました。

ご存じのとおり国鉄は、昭和三十年末以来赤字経営を続けておりましたが、時は既にピークに達し、実質年二兆円の赤字、累積債務二〇兆円を超えるという正に天文学的な数字の出る状態にまで発展してしまいました。

政府は既に電電、専売の両公社を民営化し、国鉄もまたその流れに逆らえず、その道を進んでおりました。

昭和六十年七月、政府の国鉄改革法案の答申により、「国鉄の公安制度は廃止する」、東京中央鉄道公安室で集められた職員の前で室長から法案の概要を聞かされ、予想したとはいえ、組織がつぶれた現実

に全員不安と動揺は隠せないものがありました。この機会に国鉄から

離れていこうとする者、新体制の組織に残ろうとする者等、さまざまなきがでてきました。

公安職員は、都道府県警察が受け入れるということに救いもありましたが、私は好きで入った職業であり、長年親しんだ組織から簡単には離れられず、即断できずに迷う毎日でした。しかし事態は間違いなく民営化への道を進んでおり、地元の警察が受け入れてくれるなら、また、組織は違っていても目的の同じ職種で仕事ができるなら、しかも、長年希望していた地元での仕事ができるならと、心は次第に郷里に移っていきました。

昭和六十一年十一月、政府はその翌年四月をもって民営化移行に決定しましたが、私はそれを待たずして高知県警に採用され、民営化移行と同時に引き続き県鉄道警察隊で警察官として勤務することになりました。

学校を卒業し、倒産することがないと思われた企業に就職し、天職と定めた企業がいとも簡単な結末を迎えたことは驚きでもあり、絶対はないということを改めて認識したものでした。

国鉄生活十五年、正に油が乗ろうとしている時に転職をよぎなくされた私ではありますが、やむなく国鉄を去っていった旧友たちを見るにつけ、帰高して同様の職種に就けた幸せと、同高を卒業して県警に就職されている先輩、後輩と共に仕事ができる喜びをかみしめ、県内の治安維持に力を傾けていきたいと思っています。

(高知県南国市在住、高知警察署)

マラソンに賭ける青春

四十九年化学工業科卒 黒田 一福

日本では、ここ数年前から、マラソン大会や駅伝大会がブームになっていることはいまでもありません。近くの公園へ砂浜の海岸、そして一般道などでも、ジョギングを楽しむ光景が目に入ってきました。特に冬の日曜日ともなると、全国各地で数多くの大会が行われています。時には、世界のトップランナーが世界記録を目指して、あるいは、ジョギングを楽しむ市民ランナーが額に汗を流し、五キロ、一〇キロをひた走る。ランナーたちは、自分の体力に合った距離をマイペースで目標を目指して走る。こんな光景は、同じ趣味を持つものとして、健康である喜びと同時に、走ることに對しての意欲をますます掻き立ててくれます。私も、こんなランナーの一人なのです。

私は、マラソンと出会って約二五年が過ぎ去りました。最初は、趣味の一つになればと始めたマラソンも、今では、生活の一部となっています。学生時代は、これという成績や実績もなかったのですが、走ることだけは、人一倍好きでした。

一六年前、故郷の高知を離れ、神奈川県東燃化学川崎工場に就職しました。当時は、社内の年末イベント駅伝大会に参加すること、年に一、二度の市民マラソン大会に出場し完走することが、唯一の楽しみでした。それが、社会人としてのマラソン人生の始まりだったのです。丁度そのころ、何かスポーツに打ち込んで青春の一ページにでもなればと思い始めたころでもありました。

それからは、毎日、ただひたすら走っているうちに、マラソン欲に変わっていったのです。四、五年は、市民マラソンを続け、社内の同僚たちと走る喜びを体験しながらも、マラソンの基礎体力だけは養っていました。その時、フルマラソンへの転向を考えたのです。

当時、瀬古、宗兄弟、伊藤、喜多各選手が、世界の強豪ランナーと競り合う姿が茶の間に流れ、背筋がゾクゾクする体験を味わったことをハッキリと覚えています。

ある時、私も是非フルマラソンに挑戦してみよう。という気持ちになり、フルマラソンへの第一歩を踏み出したのです。しかし、四二・一九五⁺という距離は、そう簡単には走れなかったのです。まずは、今までの練習ではとても完走などできないと思い、従来のトレーニングの何倍もの練習量を消化して、体力、筋力、精神力の強化に努め、忍耐力を養う方法しかないと感じたのです。それには、時間も必要だし、内容ある練習方法を取り入れなければと考え、自分自身で年間計画を立て、朝、昼、夜と練習に励んだのです。そして、やっと、念願のフルマラソンに初挑戦しました。結果は二時間五〇分と散々でした。同時に、苦しさで忍耐不足、肉体的疲労を痛感しました。

その後、私は、吉田さんという、日本のトップランナーとの出会いを迎え、疑問や悩みを相談し、適切なアドバイスを受けることができました。「走るだけでは駄目だ、人間の身体に周期があるように、練習にも周期を付け、壁を克服しないと記録は望めない」と教えられました(現コーチ)。

そこで、年間のメインレースを、一、二本と決め、季節や仕事、時間を考慮した練習方法に切り替えたのです。そして、約二年間の厳し



1990年東京国際マラソンで、世界記録保持者デンシモ選手

い練習を消化し、精神的、肉体的にも一段と力を付け、自分なりにある自信が持てるようになり、再びフルマラソンに挑戦し、ついに、市民ランナーの夢である二時間三十分を切ることができました。

それから今日まで、記録はまだ伸びているところですが、苦しい練習にも身体は慣れ、今日では、日本の四大フルマラソン(東京・福岡・別府大分・琵琶湖)にも参加する機会が巡ってきました。東京国際マラソン大会にも、三年連続出場し、世界記録保持者デンシモをはじめ、イカンガー、日本の中山、谷口各選手と一緒に走れるまでに力を付けることができましたのです。

時には、私が世界の強豪ランナーと競り合う姿が、テレビ放映されるなど、ここまでマラソンに打ち込んできたことが、夢に見たマラソンが現実になってしまった今、喜びと満足感で胸が熱くなるのを感じたこともありました。

これまでにマラソンへ打ち込んだ陰には、幾つかの障害もありました。腰や膝を痛め、一週間や一〇日間も走れない日々が続いたり、夜も痛みで眠れない日も多くありました。それでも、筋力強化のウエイ



1991年東京国際マラソンで、旭化成谷口選手と

ト・トレーニングを行ったり、心肺機能の維持のため通った水泳などで、故障を乗り越え努力してきたのです。

一般的に、一流ランナーは何かの故障を持っていて、故障するのは、一流ランナーの証だといわれていますが、私も一日でも長く走れるよう故障を考慮して、月間当たり、六〇〇キロを総距離の

目安に現在も練習を続けております。時には、一日五〇キロから六〇キロを走る日もあれば、一〇キロ前後の軽いジョギングで上がる日もあり、また、週に二回程度のタイムトライアルを取り入れるなど、練習内容を密度の濃いものにして、ここ数年継続しています。

平成三年二月には、故郷の高知で四五回の歴史を誇る高知マラソン大会にも出場しました。当日は、寒さと強風に阻まれ、結果は、平凡な記録で二位と苦い屈辱を味わったのでした。

今回のフルマラソンで、節目の二〇回を走ったことになりました。この二〇回の出場で、一番痛感しているのは、忍耐力で、自分との戦いであるということです。

「忍耐無くして、マラソンは無く、勝負も無い。」これは、人生でも、



1990年筑波マラソンで、自己ベスト、2°25'19"、4位入賞

同じことがいえるでしょう。私は、これからもマラソンを人生の活力として、生活に刺激を与え、マラソンをエンジョイして生きる人間でありたいと望んでいます。また、マラソンは、私の青春そのものなのです。

三分の一は過ぎ去ってしまった私の人生ですが、マラソンのゴールは無限であることを確信してやみません。

これからも、体力の続く限り、国際舞台を目指して、頑張りますので、ご指導、ご声援をお願い致します。私のマラソン人生が、皆様の人生に微力ながらも、刺激になっていただければ、有り難く思います。

(神奈川県在住、東燃化学(株)川崎工場)

七 年 前

六十二年化学工業科卒 林 大作



須崎工業高校創立五十周年おめでとうございます。早いもので、僕たちが卒業して早四年が過ぎようとしています。

六十二年四月に窪川郵便局に採用され、現在、須崎郵便局に勤務しています。では、そろそろ四年前、いや、原稿用紙を多く使うために、入学した当時、そう、七年前を振り返ってみましょう。

中学三年のころ、個人面談の時に、自分は電気科を志望し、第二志望に化学工業科を希望していました。が、しかし、先生の顔が微笑ましくありません。つまり、「電気科は無理だ!」と言いたかったにちがいないけれど、親がいたのではつきりとはいわなかったが、僕にはそういうふうに聞こえたのです。もともと勉強ができる方でもなかったから、自分でもそう思いました。だけど「第一志望、電気科、第二志望を化学工業科」と書き、願書を出し、入試も受けました。

いよいよ合格発表の日、クラス全員が集まり、一つの新聞を見ました。しばらくして友達が「化学工業科」ということを教えてくれたけれど、それを自分の目でたしかめたら、やはり電気科に名前はなく、化学工業科に、「林 大作」と名前が載っていました。で、ほかの友

達の名前を見ていくと同じ科に友達の名前がありました「M、K」君。本人のプライバシーを守るためイニシャルにしておきます。この男とは小さいころからずっと一緒に、従兄弟でもあります。

そして、中学を卒業し、須崎工業高校に入学しました。クラスメートを見ると、今まで見たこともないような背の高いやつ、夏でもないのにやけに色の黒いやつ、つっぱったやつ、うるさいやつ、その他いろいろとてもユニークな仲間が集まっていました。そのころクラスではなぜか「腕ずもう」がやはり、みんなそれぞれ打ちつけてきました。

何日かたつたある日の休み時間、廊下で「ドタ、ドタ、ドタ」で、「こらー!」とあとから追っかける先生の怒鳴り声……。こういう光景がたびたび見られました。そういえば、この三階は朝と昼休み、たまに休み時間、便所のあたりで霧が発生していました。これは校舎が山の上にあるせいでしょうか?。

この霧は、たまに教室にも発生し、先生に窓を明けられ、真冬の寒い中、こごえながら午後の授業を受けたこともあり、たまに弁当を食べ終わると、クラスのだれか一人が「帰るぞ」というと、半数以上が意味もなく早退したりして、残っている者が一〇人をきったこともあります。全員が残っている時は、午後に体育とか、実習がある時で、実習中先生のいない時、蒸留水の入った容器を水鉄砲にし、全身ずぶぬれになって、後でおこられたN・S君、寒くなかったですか。

クラスが一つになる時といえば、体育祭、校内大会、三年の時の文化祭でした。クラブをやっても長く続かず、N・T君、T・H君と三人が、漫画に影響され、剣道部に入学したこともあります。結局長く続きませんでした。

突然話は変わりますが、遠足もあまり制服でいった記憶がなく、ほとんど全員私服で、かならずパーベキューをして、すごしていました。

三年の二期期、進路指導が始まり、ほぼ全員進路を決めたころ、たつさん（担任の先生）が、「大作は残って全員帰れ」と言った後で「障害者手帳を持ちゆうか」と聞いた。言い忘れていたが僕は、右足に障害があり、話によるとその手帳を持っていたら、トヨタ自動車が身体障害者を雇うということでした。で、手帳を交付し、試験を受けた。ほかの先生たちも友達も受かったかと思っていたらしい。が、結果「不合格」だった。ほかの者はほとんど就職が決まっていました。僕は最後の最後まで就職が決まらなかったが、運よく窪川郵便局に就職することができ、現在にいたっています。

最後に、N・T君の話「修学旅行の時、残っている先生に土産をかうのみんなから集めたお金、ゲームで使った。」とっていました。するとあのとき買って帰ったお土産は何だったんでしょう。

（須崎市在住、須崎郵便局）

「たら」と「おかげ」と

三十年電気通信科卒 野並允温

須崎工業高校、昭和三十年の卒業であります。

当時、大変な不況で、卒業と同時に就職が決まっていたのは、私のクラスで三人だったと思います。好況だった「たら」私は今のペガサスミシンに就職していませんでした。何故なら、私は電気通信科の

第一回卒業生なのです。不況の「おかげ」で、須工の電通としての初めての卒業生を快く迎えてくれる会社は、ほかになかったのです。

私は、だんご先生（田村隆徳先生）に頼んで、どんな会社でもいいから、大阪に就職をと頭を下げ、現在に至っています。機械科の三人と合わせて四人でした。「おかげ」で大阪に行ける。この喜びは小さなものではありませんでした。須崎発午後四時十二分、大阪行き急行に機械科卒の高野照男君と、柳井克巳君の三人で乗り合わせて大阪に向かったのです。

ところで、私が須工に入った「おかげ」、だんご先生の「おかげ」を感じるのには、単に就職できたかどうかにとどまらないものを感じているからです。何回となく掛けそうな心に、つかい棒のように後押しをしてくれるものがあつたとすれば、それは、先生の言われた「後輩のために四年間は絶対辞めないでほしい」が、今もって消えずに残っているからでしょう。

運命を逆算すれば宿命に変わるといわれますが、先生の言葉を聞くことなく私が今日に至ったとすれば、もし自分が普通高、芸大の道を進んでい「たら」、名だたる芸術家になっていた「かも知れない」…などと、自分の生きざま、生活の有り様を、他の責任にすることなく生きられたかどうかは疑わしいところです。須崎工業をでた「おかげ」で迎えた出会いの数々や、今日の生活を思えばこそその「おかげ」なのです。

東京芸大を出たために、自分より数段上の芸を見て挫折した話は七割を超えるといわれるくらいです。芸術大学に行かなかったから、名人や達人に会わずに生きられ、好きなことを好きに続けてこられた「お

かけ」の大きさは、「もし……たら」を理由にして努力を怠る人には分らないことかも知れません。

「だんご先生」の「おかげ」、須工の「おかげ」で、ペガサスミシンに三十七年、そこで見初めた妻と寄り添って三十二年、学校も先生も会社も友人も合わせて幾百幾千、もしかしたら幾万の良き師を得てきている生活と、自分のなりあいに喜んでる毎日です。

須工創立五十周年万歳。

(大阪府在住、ペガサスミシン製造株)

電通科を卒業した女生徒の一人として

三十二年電気通信科卒

上野富美子(西村)

私が、電気通信科を卒業してもう三十年が過ぎようとしています。

だのに私は、生活のためとはいえ今日に至るまで電気通信業界の中で生きています。在学中熱心な生徒でもなかった者が何故?と、時々思うことがあります。また、出入りの業者や息子たちにまでなんぞそんな昔に女でありながら電通科などに進学したのかと聞かれたりします。この機会にその辺を思い返してみたいと思います。

高知県でも辺地といわれる檜原町で生まれ育った私が、高校進学を迎えたころ、当時中学で数学を担当されていた先生が家に来られ「お宅の「優秀な」お嬢さんを是非須工に進学させて下さい」と両親に話されました。

三十周年記念号に野中先生が、電気通信科の設立や生徒集めのご苦

勞を語られています。時のOBにも生徒集めの指令が出されていたのでしょうか、そんなこととは知る由もない人の好い父親はその「優秀な」と言う言葉がいたく気に入って反対する母に相談もなく承諾してしまつたのです。当の本人は、村の小さな学校に行くより「かっこいいかな」くらいの気持ちで入学したように思います。

入学してからの思い出はなかなか勉強について行けず苦勞したところ、それでも電通クラブに入って五級スーパのラジオを組み立てたり、無線通信の授業では「トンツートン」とモールス符号の練習に取り組んだり、また一〇名もの女子学生が入学したというので新聞に載ってちよつぱり得意だったりと、それなりの高校生活でした。

しかし、いざ卒業を迎えたころは、今日のように男女雇用機会均等法なるものもなければ、人材不足という言葉もなく、優秀な男子学生でさえ好きな職場を選ぶことができない時代で、電気通信科卒の女生徒を採用してくれるような物好きな企業など見つかるわけがありません。かといつて、話題になるほどの遠くの学校に進学しながら就職もできなかった田村隆徳先生に何とか入社できる会社を見つけて欲しいと涙ながらにお願いしました。田村先生が「苦勞の末見つけてきて下さつたのが大阪の(株)山西という通信材料卸と通信設備の二〇名くらいの会社でした。

この会社はその後急成長をし、サンテレホン(株)と名を変え、現在は東証一部上場となつて新聞の経済面に登場することもあるほどになりました。そのお陰で私共は各出先等勤務のあと地元の四国で、関連の小さなサービス会社を設立させることができました。

思えばいろいろ苦勞も重ねてきましたが、五〇歳を過ぎた今日まで生活のためとはいえ、現役で専門業界で過ごすことができるのも須工の電気通信科を卒業したことに起因しているのだなと思うのです。そして、この場をお借りして田村先生にも感謝申し上げたいと思います。通信業界もアナログの時代からデジタル化へと大きく変化しようとしています。私のさびついた頭ではついてゆけなくなったことを実感するこのごろです。

現在は理科系を卒業した女性にもたくさんの活躍の場が与えられ、実にうらやましいとも思いますが、男性に負けない立派な仕事をして頂きたいものと応援したい気持ちです。

(香川県在住、四国南海電設(株))

五十周年に寄せて思いつくままに

三十五年電気通信科卒 益 法子

母校の創立五十周年を心からお慶び申し上げます。私が入学したのは玄関横に前年植えられた記念樹の「創立十五周年」の文字がまだ新しい昭和三十二年でしたので、今、半世紀を迎えた母校の歴史と伝統を思うと感慨無量です。同時にそれぞれの時代にそれぞれの立場で母校を支え、ご尽力下さった関係者の皆様、諸先輩の皆様のご努力を忘れることはできません。

数少ない女子OBの一人で、ずっと母校の講師をされている植田先輩から記念誌の原稿を頼まれ、断れないままやっとなを執りました。

入学式の日、男子ばかりのすごい声で「……日々鍛いぬく健児団」の校歌を聞きながら、工業高校へ入学したことを実感し、ちょっぴり不安になったことが、ついこの間のことのように思われます。

女子は、三年に高橋さん、二年に佃さんと戸田さんがいて全校で九名。階段の下を利用した女子更衣室を私たちは「部屋」と呼んで、昼休みや放課後を皆ここで過ごしましたが、お弁当の時、機械科の男の人が階段をどンドン歩くとホコリが目に見えて落ちてくるのには閉口しました。入学したころは、毎日たくさんの本やノートを詰め込んだ重いカバンを持って駅から十五分の道を歩いたのですが、少し慣れると国語、社会など厚い教科書はこの部屋に置いて帰るようになり、そのまま三年間試験の時以外は、かなりの教科書が本棚に並んでいたのです。

うれしかったのは、苦手な体操がなかったわけではありませんが、女子は養護の先生が担当で、適当にやりたいことをやっていればよかったです。今日は天気が良いから外でバレーを、今日は寒いかから中でバドミントンを、卓球をという具合です。先生を入れて六人やるソフトは、ピッチャー兼セカンド兼センター、ファースト兼ライト、サード兼ショート兼レフトですから打てばたいいヒットになるのですが、次の打者が打ったら何が何でも帰ってこないという面白かったです。もう打者がいないという面白いものでした。

一年の時は、電気の実習だけでなく、機械科の工場へも行って旋盤や木工もやりましたが、ほとんど先生や男子に手伝ってもらったように思います。授業の思い出は、あまり定かではありませんが、放課後バドミントンをやったり、浜へ行って海を見ながら談笑したこと、用務

員の阿曾さんところでマンガを見たことなどは懐かしく思い出されま
す。

また、森岡校長先生のご配慮でお花やお茶を習う機会を与えていた
だきました。英語の山田先生のお母様にお習いしましたが、いつも着
物をキリッと着てピンと背筋を伸ばし、動作にも言葉にも気品が漂っ
ていた先生を今でもはっきり覚えています。最初は校長先生のお宅で
習いましたが、校長先生の奥様も優しく上品な方でした。

学校の行事では、やはり三年の秋の文化祭が心に残っています。前
夜祭の仮装行列は、各ルームごとにそれぞれ趣向を凝らし、見ごたえ
がありました。なかでも教員チームの「世界迷作集」で森先生の乞
食（古事記）は見事なもので、何となく近寄りたいたいほどの汚さでし
た。夜は、ファイアーストームを囲み、時のたつのも忘れて歌ったり、
フォークダンスを踊ったり。赤々と燃え上がる炎、若き情熱とエネル
ギーの爆発、「コロブチカ」「オクラホマミクス」の軽快なメロデー、
三十余年を経た今なお、鮮やかに脳裏に刻まれている青春の一コマで
す。

もう一つ、私にはとっておきの思い出があります。三年の十一月の
連休を利用して、同じ科の谷口君ら男子五人、女子三人で吾川村の中
津明神へ行ったことです。仁淀高校で一泊し、翌日中津溪谷で遊び、
大きな岩の上で手作りの昼食を楽しみ、存分にリフレッシュしたので
すが、だれかが、もう一泊して明日明神へ登ろうと言い出して、たち
まち意気統合、その日は奥名野川まで行って中腹のお宮で泊まること
になりました。途中通りかかった車に私たちは乗せてもらいましたが、
男の人は全部歩いて、着くとすぐ薪を集めてくれました。

いろりを囲んで夜遅くまで話したり歌ったり、にぎやかでしたが、
夜も更けると寒さも一段と増し、私と吉本さんは一枚の毛布で寝てい
たので、いろり側はいいのですが、外側になると寒くて眠れません。
男の人が朝まで交替で火をたいてくれ、私たちもいろり側と外側を
時々入れ替わりながら、別世界のように静まった山の夜を過ごしまし
た。

翌朝は、前日に近くの農家で分けてもらった材料で、新田さんが作っ
てくれた朝食に元気を取り戻し、晩秋の冷気の中を頂上目指して出発
しました。しっとり濡れた落葉を踏みしめ、熊笹の中を登って行くと、
すっかり葉を落とした樹々が透明な秋の陽射しに白く光って、その上
に澄んだ青空が果てしなく広がり、私たちは、登りの苦しさも忘れて、
ただ「すばらしい」を連発しました。なだらかな頂上の熊笹の中で無
上の解放感を味わい、きれいな空気を満喫して、そのころ流行してい
た「雪山讃歌」を歌いながら下山しましたが、純粹な友情と山のすば
らしさに浸った本当に貴重な思い出です。

二年生だった片岡正延君、稀雄君、土居君には卒業以来会ったこと
がないので、あの時の顔がそのまま浮かんできます。その時の写真代
とかで授業料を使い込んでしまい、卒業までずっと一か月遅れで払っ
たことでしたが、モノクロの小さい写真は、今でも胸にじーんとあの
日の感動を呼び起こしてくれます。

三年後、大阪からUターンして役場に入り、友達と二人で次々に四
国の山を歩き、夏の北アルプスにも三度登りましたが、私を山へ駆り
たてたのは、あの日の青空だったと思っています。

私たちを挟んで前後四、五年の女子が集まって、「キルヒホッフの会」

と名付けた同窓会を二回やりましたが、その後長い間、今年こそ今年こそと言いながら、なかなか実現しません。五十周年を機に、女子OB会ができたかと願っています。

物質的な豊かさの中で、人間関係が希薄化し、最も大切な心が失われつつある現在、世代は異なっても母校を愛し、須工に学んだ誇りと思いを絆として、同窓会が更に広く深く結ばれることを願ってやみません。

最後に、母校のますますの発展と、校長先生はじめ関係者の皆様の今後のご活躍を祈念いたしまして、私の拙文を終わらせていただきます。

(高知県越知町在住、越知町役場)

我が故郷 高知 そして 須工

四十一年電気通信科卒 楠 瀬 三四郎

早朝霜柱を踏みながら駅に向かう私に「頑張れよ」と無口な父の励ましの一言を今でも昨日のように思い出します。二十八年前の「須崎工業高等学校 入学試験の日」のことです。時の流れは、その過ぎし方に関係なく万人に平等にどんどん過ぎて行き、今朝は一人息子の高校受験を見送り、机に向かっているとあります。

昨年十一月末「高知県スザキ工業高校 中内様に電話をかけて下さい」とのメモがあり、電話番号が書いてありました。中内先生には大変申しわけないのですが、すっかりお名前を忘れていて、思い出

すことができなまま電話をさせていただきました。ご用件はこの原稿執筆をするようにとのことでしたが、なにしろ先生のお名前も忘れてしまっているような人間ですので、須工時代を思い出せるかどうか極めて不安ながら、中内先生のお勧めに応じてしまいました。

今年創立五十周年を迎えるわけですので、卒業当時は知りませんでした。私の卒業した年は創立二十五周年であったわけで、既に二十五年もたってしまったと思うと感慨深いものがあります。私の卒業した「電気通信科」は間もなくなくなりましたが、実業高校であれば当然ありうることで、工業社会の動向に積極的に対応された結果と思っています。

昭和三十八年入学、三年間を過ごした須崎工業高校での生活を断片的になりますが少し思い出してみたいと思います。

「一年生」

イガグリ坊頭の一年生は教室の全員が天才か秀才に見える、これからの三年間にとんでもなく不安を感じたものです。最初の試験で勝負をしようとする勉強よりまじめに勉強し、たぶん数学(?)で一〇〇点を取りホットしたものです。一年の時の担任は女の先生で、入学時個人調査票のような物を全員記入させられましたが、後日先生から高校生のくせして自分の生年月日も知らないバカがいると言われるので全員大笑い。もちろん私も人一倍大声で笑っていたら「楠瀬だ」といわれ大恥をかき、我が家に帰り母親に言う「アラ、そうだった」の一言で片付けられてしまいました。六人も子供がいたとはいえ、いまだに生年月日を書く時はこの時のことを思い出します。

厳しい先生で、よくお叱りを頂きましたが、国語の授業で高村光太



窪川高校文芸部との交流会
後の一人が楠瀬氏 (須工文芸部)

郎の「道程」を説明される時「君達はまだそうだろう」と言われ全員笑うのに自分には意味が分からず、友達に聞いて納得したものでした。この後すぐ先生にはニックネームが付いたのですが、先生の名誉のためにはここでは省略します。

【二年生】

開校以来最悪の一年生といわれた私たちも、二年生になるとすっかり学校生活にも慣れ、私は無理やり生徒会の委員に立候補させられ、立ち会い演説の日を迎えてしまいました。ところが幸か不幸かその朝父親から用を言い付けられ欠席をしました。結果は当選していません。その年の夏休み、教育委員会主催のキャンプに生徒会を代表して

化学工業科の江淵洋子さんと参加しました。場所は忘れませんが「星が窪キャンブ場」という所でした。

県下の中学、高校の生徒会のメンバーが参加しており、指導の先生方を含めると総勢四十名余りでテント設営、炊飯、献火、献詩、合唱、星座観察、ゲーム等



ストックホルム王宮前で、1989. 9. 19

とても楽しく、また参加者の一人一人がイキイキと自分の学校生活を楽しんでいのに強い刺激を受けたことを思い出します。

【三年生】

三年生になり、ボンヤリと就職のことを考えていましたが、瞬間に決まってしまう、六月ころには正式の採用通知をもらったように記憶しています。小人の悲しさで、就職が決まってしまうと全く勉強をしなくなり、期末試験などは一夜潰けの典型で何とかごまかしてしまいました。先生方も百も承知でそれなりの点数を付けられたので無事卒業できたものと感謝しています。もっともそのつけは社会に出てから確実に身に降りかかり、四〇歳半ばになった今でも時々解けない試験の夢を見て大いに反省する時があります。

世間の常識として、土佐の高知は大酒呑みとなっておりますが、私のお酒の経験を……。秋祭りに友人宅に招かれて驚きました。ビール、日本酒が用意されており、友人の母上がどンドン勧めるので、勧められるままに過ぎ、翌朝目覚める

と例外なく完全な二日酔いで、頭はガンガンと早鐘が鳴り、その上昨日の記憶が途中から全くありません。記憶にない部分を友達に聞き、二日酔いの苦しさに倍する恥ずかしさを覚えた惨憺たるお酒の思い出であります。

日本経済の発展は工業技術であり、製造業であります。バブル経済の崩壊がいわれる昨今、ますますその重要性がますますの思います。

「須崎工業高等学校創立五十周年」を心よりお慶び申し上げますとともに、創立五十周年を契機に社会ニーズを先取りした技術者を数多く世に送り出していきたいと思えます。

(埼玉県在住、日本電気㈱)

高校生活の思い出

四十一年電気科卒 氏原 豊

卒業して二十五年、折しも今年は長女も高校卒業である。年月の移り変わりの速さをしみじみ感じながら高校時代を振り返っている。

戦後のベビーブームの真つただ中の昭和二十二年に生まれ、小学の時から教室不足で増築工事をしているのだから、間に合わないので講堂の中をついたてで仕切って急ごしらえの教室である。数クラスが一堂に集まるわけだから、休み時間はにぎやかなものであった。

こんな状態だから高校に進学する時も大変であり、生徒数の増加に加え進学率の向上で、入学定員を大幅に広めなければならない。そのため高校の新設(伊野商業・安芸工業・高知東工業など)や、学科

の増設、既設学科の定員の拡大が行われ、この時にわが須工に電気科が新設された。昭和三十八年四月のことであり、その第一期生として私をはじめ四十余人が入学した。

校舎は西糺町にあり電気科の実習棟はまだ建築中であつた。この中には電動機や発電機、高電圧の発生装置があつて、文化祭の時にこの装置を使って放電(雷放電のイメージ)の公開実験中に、装置のケースに漏電があり、操作者が逃げ回つたというハプニングもあつたとか。この実習棟は今でも須崎商工会議所の事務所として残っており、当時の者にとって校舎に思い出を膨らませる唯一の物となっている。

当時は相撲、卓球、ハンドボール等の体育部の活躍が素晴らしく、数々の立派な成績をあげていた。私は入学と同時に先輩の勧めで陸上部に入った。そして迷わず長距離を専門とした。夏場はトラック、冬場はロードを中心としての練習で、授業が終わるのを待ちかねてグラウンドに出ていた。練習が苦にならなかつたし、むしろ楽しかつた。走れば記録が伸びる、記録が伸びるから練習が面白いの繰り返しで、入部した時は速い存在のように見えていた先輩たちに、急に追いついていくような感じを持っていた。

先輩たちも熱心で、ある時は、夏休みも返上しての富士が浜での走り込みは、グラウンドでの走りに比べて何倍もの体力が要求される苦しいものだったが、そんな努力の結果が全国高校駅伝県大会で三位に入賞することができ、高松での四国大会に出場でき、メンバー一同喜んだものだった。

ちよつと嫌なこともあつた。そのころ蔓延していた「いんきん」にかかつてしまつて、そのかゆさと薬を付けた時の痛さはうちわであお

いでも我慢できないほどだった。ランニングパンツの下に着けるサポーターが汗になっていて、次に使うまで部屋に掛けておくのだが、風通しが悪いため良く乾燥しなかったのが原因ではなかったかと思う。

二年生の時(昭和三十九年)は、日本で初めて開かれる東京オリンピックの年で、国をあげての祝賀ムードの中、松山方面から受け継がれてきた聖火は、佐川町役場前で一旦休憩したあと、中内県教育長(現、県知事)から私に手渡され、聖火ランナーとしてトーチをもち、沿道の幼稚園児や町民の方々が日の丸の小旗を振って祝福をしてくれる中を走った感動は、この間の出来事のように思われる。

また、オシャレに敏感な年ごろであり、ヘアスタイルに大変気を使い、帽子をかぶるとヘアセットが乱れるためかぶらない者が多かったと思うが、朝は校門で教師のチェックがあるため、カバンに突っ込んである帽子を取り出して、その場だけちょこつと頭に乘せて、校門を過ぎればまたカバンの中である。こんなことで校則について、校則は拘束ではないかと生徒会で学校側に激しく詰め寄る者もいて、風紀担当の教師は本当に大変だと心で同情したものだ。

ともかく、この高校生活三年間は瞬く間に過ぎてしまった。そして高度成長時代の真つただ中に飛び出して二十五年、須工電気科一期生を誇りに思い四国電力高知支店で頑張っている。

〔追記〕 戦争のない平和な日本に生まれ育って、人間の英知と努力でもう大規模な戦争は起こらないものと考えていたが、イラクのクエート侵攻に端を発した湾岸戦争は、今月二月二十四日、多国籍軍と

イラクが一斉に地上戦に突入したことをテレビ各局が大々的に興奮気味に報道している。……一日も早い終結を望む。

(高知県在住、四国電力㈱)

光陰矢の如し

四十五年電気科卒 吉田 文雄

はじめに

創立五十周年を迎えましたこと、謹んでお喜びを申し上げます。

時の流れを、「光陰矢の如し」とよくいますが、学生帽を脱いでから二十一年、就職後四度の転勤、そして結婚、子育てと、あつとゆうまに過ぎてしまいました。

二十年たった今でも、入学式の記憶は鮮明に残っています。現在は移転して随分と立派になっていますが、私たちの入学当時の校舎は、一部を除いて木造でした。

式場である体育館の床に、無数の補修された跡があったこと。校舎は木造だし、その廊下は中学校の修学旅行でいった神社のように、周りの摩耗により、節の部分が盛り上がりが見えていたこと。

しかし、廊下にはワックスが塗ってあって、男ばかりのわりにはゴミもなく綺麗であったことなど、期待と不安の入り混じった、例えばうのない気持ちと一緒に、今も心に残っています。

教室での初日、妙に落ち着いていて、場なれした者がいました。それも一人や二人ではない。先生の説明で、「年上の同級生」五人であ

ることが分かりました。高校には、「赤点」と呼ばれる、厄介なシステムがあると話には聞いていましたが、現場を見せられると、余るほどの説得力がありました。

この強烈なインパクトと、担任して戴いたN先生をはじめ、大勢の先生方のお陰で「赤点」システムにはお世話にならず、「年下の同級生」も持たずに済みました。

「年上の同級生」五人は、共に気のいい人たちで、特にKさんには入学当初何かと世話して戴いたことが思い出されます。また日を重ねるにつれ、お互いに年齢差を意識せず、自然に付き合えるようになりましたが、残念なことに、五人はそれぞれ違う道を進まれました。

日常の学校生活では、思い出されることが以外に少ないです。せめて修学旅行にでも行っていれば、楽しかったこと、笑い話になる出来事の一つもあったのにと、思うと残念に思います。

当時修学旅行は、各クラス単位で、旅行について自主的に立案計画するようになっていまして、そのクラス会の時、だからともなく「男ばかりで修学旅行に行つて何が面白い」という声が出て、その後は「そうだ」「そうだ」と強い反対もなく、旅行には行かないことに決まっています。

結果を先生に話したところ、あきれ顔で「学校行事なので行かんわけにはいかん」とフォロー。再度クラス会をしたのですが、「どうしても行かやいかんなら近くで」の声が出て、それで決まったのが、最も近くの「新荘の浜」でした。徒歩で現地集合、そんな修学旅行には、楽しかった出来事などはあるはずもなく、今となっては学校から数⁺の場所が修学旅行先であったことが、思い出話の一つになってし

まいました。

この修学旅行のことも分かるように、どこか冷めたところのあるクラスでしたが、いじめや校内暴力には無縁のいい奴ばかりでした。そんないい奴を、卒業を前にして、それも二人一度に交通事故で亡くしたことは、忘れられない辛い思い出の一つです。

二人の友が亡くなってから毎年、担任だったN先生と地元勤めるN君とT君の二人が、お墓参りを続けていてくれたことを、三年ほど前の同窓会で知りました。それからは声をかけてもらっていますが、一度しか行っていません。

「一、二年でも大変なのに、よく二十年も続けて……」と話したところ、「お参りさせてもらうだけだし、地元にいる者の務めよ！」と一言。長い都会生活で、忘れかけていたものを思い出させてくれる言葉でした。

これからも良い思い出を増やしていきたいと思っています。

おわりに、須崎工業高校のますますの発展と、諸先生方並びに同窓生皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(高知市在住、日立電子サービス(株)高知SS)

「今も生きている須工時代」

四十五年電気科卒

西 森

豊

先日、先生と話す機会がありまして、先生今年も例の時期が来ましたが都合の方はどんなものでしょうか、と話している内に、今回の須

崎工業の創立五十周年記念行事を知ったわけです。

先ほど例の時期と書きましたが、そのことにつきましては、後ほど紹介したいと思います。

さて、自分は学校を卒業してもう二十年になりますが、須崎工業の校舎に最初入った時は、今までの校舎とは少し違うなと感じたことでした。ロウカは油臭く、教室の机も黒く薄汚れ、中学校の校舎とは違い異様な感じさえました。が、三年間も通えば愛着もわき心落ち着けるいい校舎でした。今あの校舎があれば足を踏み入れ油の匂いをかいでみたいものです。

在学中には色々ありましたが、なかでもクラブ活動の帰りの一コマが頭に強くこびり付いて忘れることができません。それは須崎工業に入学した早々に卓球クラブに入り、何日かが過ぎたある日の練習の帰り際のことでした。先輩に「おやすみ」と言っただけで帰ろうとすると、「一寸待て」と言われました。はて?どうして機嫌悪う言われなにかんろうと疑問に思っていると、その先輩は、「先輩に向かつておやすみはないろう」と言うことで、先輩にはおやすみなさいと言わないかと喝を入れられました。

中学校の時もクラブには入っていましたが、そんなことは言ったことでもないし、また言われたこともありませんでした。クラブの監督や先輩にも何げなしに「おやすみ」とあいさつしていたものです。

この一喝があり、先輩や目上の人に、「なさい」の言葉が言えるようになりました。中学までは、一年も三年も同級生の友達のように付き合っていますが、高校では先輩、後輩のけじめがはっきりしていて、このことは社会に出ても同じことがいえると思います。自分はクラブ

活動を通じ、やって良かったなと今さらながら思うことです。

クラブ活動は、自己の肉体と精神の鍛錬だと思えますが、精神の鍛錬は元より、高校時代の肉体の鍛錬は非常に良いものがあると思えます。クラブの種目は何でも良いように思います。社会人となった時、その体力がものをいうからです。

社会人でも、社内・地域でのクラブ活動があります。周りの人たちがやっていることに積極的に入って行けますし、また社会人となって覚えたスポーツは毎日の生活の中の楽しみとなり、仕事でのストレス解消に一役買うものと思います。

話は変わりますが、冒頭に記しました「例の時期」というのは、一月二十五日のことなのです。この日は、故刈谷君と故西森君の命日に当たるのです。昭和四十五年一月二十五日、ほとんどの人が就職先も決まり、もうすぐ社会人になれると胸をふくらませ、卒業式まで後二か月足らずのこの日に、級友の二人がモーターバイクで事故に遭い、帰らぬ人となってしまったのです。

翌年から先生と、級友で今も同じ職場に勤めている戸梶君たちが、命日の日にはお墓参りに行くようになったのです。一回忌の時には家族の方とも話をしましたが、顔中涙のお母さんを見るのは辛いものでした。お墓参りも、五年目、六年目と、年を重ねる度に辛さは薄らいではきましたが、お墓の前で手を合わせし彼らを思い出すと彼らはまだ学生服のままなのです。悲しいものです。自分たちはもう今年で四〇歳になろうとしています。十八年という生涯はあまりにも短かすぎました。

そのお墓参りも今年で二〇回を数えました。この二十年の中には、

同級生に声をかけ、先生をはじめ数人が行ったこともありましたが、先生や自分たちの都合がつかず、先生にお願いしたことや、自分たちだけで行ったこともありましたが、今ではこのお墓参りも先生と年に一度の親睦を深める良い機会となっています。これからも中内先生をはじめ自分たちの都合が許す限り続けたいと思っております。

学校におかれましては、バイク等の運転には十分な指導をして頂いていると思いますが、今後このような事故がなくなりますよう、一層のご指導をお願い致します。

(須崎市在住、大阪セメント(株)高知工場)

わが母校

四十七年電気科卒 徳 永 逸 夫

卒業したのはつい最近のことのような気がするが、昭和四十七年の三月一日卒業だから、もう二十年の年月が過ぎ去ったことになる。

私たちは、西札町にあった校舎での最後の卒業生である。学校跡の大部分は、現在はショッピングタウンになっているが、わずかに電気科の実習棟が商工会議所となって残っている。用があつて、ここを訪れた時などに高校時代を懐かしく思い出すことがある。ショッピングタウンの駐車場あたりが運動場で、寺尾公園のあたりが体育館であつたと記憶している。現在、学校は大間の台地の上に移つてしまい、元の場所に母校がないというのは、やはり寂しい気がする。

須崎工業高校はスポーツの盛んな学校であつた。相撲とソフトボー

ルは、全国的にみてもトップレベルにあり、全国高校総体でも輝かしい成績を挙げていた。そして、いろいろなスポーツの学級対抗戦が行われていた。各学年に電気科が二組、機械科が二組、化学工業科と造船科が一組ずつの六組だったので、三学年で一八組、それに先生方のチームと合計一九チームが、いつも何かの種目で張り合っていた。

入学して間もなくのこと、学級の代表としてソフトボールの試合に出た。これは同級生の一人が、私が中学時代にソフトボール部で活躍した選手と間違えて推薦したためだった。どこと対戦したのか、結果はどうだったのか、全然覚えていないが、推薦してくれたのが木下昭三君であつただけははっきりと覚えている。

開校記念日は、たしか五月二十五日であつたと思うが、この日には相撲の対抗戦が行われていたように思う。

放課後、よく音楽部員が吹くトランペットの音が聞こえてきた。一年生の初めのころは、なぜかこれを聞くと心が落ち着き、高校生になつたのだと実感したものだった。部活動をしない私は、これを聞きながら自転車で下校したものだった。夏の終わりから秋にかけては、この音は哀調を帯びているように感じられた記憶が鮮烈に残っている。

私たちの担任の先生は、三年間を通して岡林一馬先生であつた。温厚で人情家であられ、親身になってお世話してくださつた。現在もお勤めである。

二年生の時、社会科は倫理社会を履習したが、先生は坂本正夫先生であつた。教科書の内容は全然覚えていないが、先生は民話などをよく話してくださつたので、「泰作ばなし」や「万六ばなし」など、それらのいくつかはよく覚えている。また、先生は県下各地を歩かれて

いたようで、「君の家は、橋の近くに店があるが、その近くか」などと話されるので、すごいなと感じたものだった。電気の仕事には向いていないと教職に就いた私だが、坂本先生のように子どもたちにいるような話をしてやれる教員になりたいといつも思っている。

二年生の秋、昭和四十五年十一月二十五日、五時限目は古文の時間であった。岩井宏先生が「三島由紀夫が腹を切った」と、教室に来られるなり話されたのをはつきりと覚えている。在学中のニュースの中で最も衝撃的なものであった。

同級生だった久保博行君が、安芸市で私と同じように小学校の教員をしている。彼とは時々会う機会があり、現在でも親しくしてもらっているが、ほかの人にはあまり会うことがない。親しかった田部泉君は、大学の工学部に進み、民間会社に就職し、現在は松山市で頑張っている。時々ふと、級友たちはみんなどうしているのだろうかと思うことがあるが、きっと各方面で中堅として頑張っていることだろう。

(須崎市在住、須崎市立新荘小学校)

神戸の街より

五十六年電気科卒 大石 高 志

六甲山の下に栄える神戸の街に来て、早いもので十年の年月が過ぎて行きました。初めてここに来た時は、都会的なファッション感覚に私も圧倒されていましたが、今ではすっかり神戸市民の一員となり定着してしまいました。

私の会社は、この街の大手の鉄道車両メーカーで、毎日新幹線をはじめとする電車の配線作業を行っています。会社ではまだまだ一人前とも言いにくく、先輩たちに指導されているようなありさまで、先輩たちも熱心さのあまりに感情がムキ出しになっておこられたりもしますけど、それも教えの一つだと、ありがたく受け取っています。

早く自分の思う通りに仕事ができたらと思うけど、今はその時のために必要な技術を身につける時期であるので、私も常に前進を心がけています。

私の三ヶ条は

一、時間・約束等はかならず守る。

二、わからない事は、かならず質問をする。

三、常に、興味や好奇心の目を持つ。

この三つは私がいつも持っている考えです。大きな会社に勤めていると、人間一人一人は馬の毛一本のように思われがちですが、やはりこの人はこういった持ち味があるなと思ってもらうには、人とはちがった努力も大切だと思っています。

私は十年の間に、ニューヨークへ一年間の海外出張を経験しています。初めて異人の街へ行った時、言葉や生活様式、更には日本人とアメリカ人との仕事にたいする考え方のちがいで、とまどうことも多かったです。一つずつ前にふさがるかべをのりこえて行きました。

色々な苦労はあったけど、なかなかできる経験ではないので、このような苦労もむしろ自分は恵まれているのだと思って受けとめていきました。今でも海外での生活は、私の今日に大きなプラスとなっています。

まだまだ人生は長いから、毎日を長いかいだんを登るのだと思つて、一歩ずつふみしめて、一人前に少しずつ近づいていきたいと思つています。

神戸は一見華やかに見えるけど、地方から出て来て生活している人間には厳しい一面ももっています。私も、押しつぶされることのないように、自分の足でしっかりとふんばって生きていきます。

自分に負けないことこそ、人に勝つ秘けつだと教えてくれたのも、神戸の街です。私はこの街の中で、これからも自分自身を成長させていきたいと、毎日努力していきます。

(神戸市在住、川崎重工業(株)兵庫工場)

「学校・会社・ソフトボール」

六十年電気科卒 田村 亮 二

創立五十周年おめでとうございます。

私が卒業したのが、昭和六十年です。日本電装株式会社に入社しまして早七年目と月日の流れを感じます。

日本電装では試作部開発試作課、開発品の仕上げ工として働き、またソフトボール選手として入社したため、残業後、夜十時ころまで練習し、土・日曜日は、試合、日本リーグに加入していることもあり、三月から十一月までは、ソフトボールづくめで、仕事との両立もしなければならぬので、プロ野球選手以上の忙しさです。

今年も母校から、二人ソフトボール選手としての入社が、決まっ



日本電装ソフトボール部のユニホームで
左が田村氏、右は61年造船卒の山本孝宏氏

フト部員からも愛される存在です。今年入社する二人にも大いに土佐人らしさを發揮して、職場やソフト部の中心となって欲しいものです。また、なぜ日本電装が喜んで須工のソフトボール選手を迎えてくれるのか、それは先輩たちの築きあげた会社、ソフト部に対する信頼関係が、今日のパイプであることを、頭に入れて次の時代の母校の生徒が喜んで迎えられるよう頑張つて欲しいものです。

はつきりといひまして、職場の仕事が終わわり、練習をするのは、たいへんツライわけで、若い世代に限らず、練習にこなくなったり、仕事人間に変身してしまったり、自分たちの目標を見失いがちです。給料をもらって一番遊びたい時期に、ソフトボールの練習、土・日は試

いますが、楽しみなことです。日本電装には、須工出身のソフトボール選手が多く、また三代続いて主将を任せられるという時代もありました(私の代でとぎれました)。

母校の先輩方は、大らかで、気っ風がよく、少々マヌケなところに、愛きょうがあり、職場でもソ

合をするわけですから、無理もないのですが、そこには、目には見えませんが、かけがえのない大切なものがあるのです。

今は世の中が豊かになり、お金や物しか、信用できない人たちであふれていますが、遊べば遊ぶほど、空しい世の中で、本当の瞬間というのとは、苦勞した仲間と何かを懸命にやり遂げようとしている時間ではないでしょうか。

最後となりましたが、母校のご発展と、先生方のますますのご健康、ご活躍を心からお祈り申し上げます。

(愛知県在住、日本電装㈱)

「須工で過ごした三年間」

六十一年電気科卒 笹岡 健

須崎工業高等学校創立五十周年、誠におめでとうございます。

母校がこの佳き節目を迎えられるにあたりましては、校長先生をはじめ、諸先生方、在校生並びに同窓会、PTA等の関係者の方々の熱心なご努力があったればこそと思います。また、地域の方々の温かいご支援があったことも忘れることはできません。私も須工の一卒業生として、感慨深いものがあります。

須工五十年の歴史の中で、自分が在籍したのは三年間という短い時間でしたが、沢山の友人や先生方のおかげで有意義な高校生活を送ることができました。同時に、数え切れないほどの思い出もできました。今回は、懐かしい高校生活を振り返って、お世話になった須工五十周

年のお祝いにしたいと思います。

私は昭和五十八年四月、電気科に入学しました。入学式の当日は、それまでに小、中学校と二度経験しているのにもかかわらず、何故か緊張していたのを覚えています。あとから思い返すと、「これからは今までの義務教育とは違う」ということがあったからでした。このことはそれ以来卒業するまでいつも頭の中であって、負けてたまるかと思いつながら、三年間を過ごした気がします。

私のクラスメートは皆元気があって、クラスマッチや体育祭になると勝敗に関係なく大騒ぎでしたが、一致団結した時のパワーは他を圧倒するものがあり、私の記憶では勝って騒いだ時の方がかなり多かった気がします。体育祭では、応援合戦の時に上半身裸で走り回ったりしたこともありました。当時の須工は男子生徒ばかりだったのでできたことだと思われるでしょうが、女子生徒が在籍している現在に、あの時のクラスメートがいれば同じようなことをしたと思います。

六年たった今でもそう思えるくらい、何にでも一生懸命になれるクラスメートでした。そのうちの何人かには、今でも帰省する度に機会をつくって会っています。お互いもう大人になってはいるものの、顔を見ているとつい須工時代の面影がダブってしまいます。そして「あの時は……」と、当時の話をすることもあり。幸か不幸か、つくづく悲しい思い出がなく、ほとんどが笑って話せる思い出ですから、アルコールも手伝って大いに盛り上がります。

クラブ活動では、入学と同時にサッカー部に入部し、終業チャイムが鳴ると売店でパンとジュースを買って部室に直行する毎日でした。サッカー部の先輩は皆親切で仲良くしてもらったのをよく覚えていま

す。なかには練習に来てでも冗談ばかり言って、全くボールを蹴らずにいた先輩もいて、そういうことも印象に残っています。入部した当初はあまり勝てなかったサッカー部も、毎日の練習の甲斐あって、県大会の一回戦は勝てるようになり、練習するのも楽しかったです。最後の公式戦になった地区大会では、念願かなって優勝することができ、最高にいい気分でした。現在のサッカー部の活躍は同窓会報で知らいますが、いつか、高知県代表として全国大会に出場してくれるのを楽しみにしています。

在学中は熱心な先生方のおかげで、種々の資格にチャレンジする機会を得、また、資格を取得できたことは、その後の自分の進路を決める上で自信になりました。当時は就職難で求人数も少なく、就職先を決めるのは至難の業でしたが、担任の先生や進路部の先生方のおかげで、希望する会社に入社することができ幸せでした。

現在は水力発電所の制御設計の業務に従事しており、制御配電盤の立案計画を担当しています。日本の発電電力量に対する水力の割合は少ないのですが、最近では環境保護に対する世論が高まり、クリーンなエネルギーとして水力発電が見直されているのが現状です。また、近年は発電所の無人化による遠方からの監視や、制御、保護のデジタル化が進み、それらの機能を理解するのに苦勞しています。しかし、現在の生活には不可欠の電力の安定供給に携わっている自負があり、大変ですが充実した日々を送っています。社内には須工の先輩や後輩が何人かいるのですが、会う機会がなく残念です。

須工時代の三年間というのは、最初は長い気がしましたが、後で思うと本当に短く感じました。短い三年間で私にとって貴重な時

間でした。今の自分の人生に一番の影響を与えてくれたのが、この三年間だったような気がします。それは自分のやりたいことを自分で決めることができましたし、また、それを行動に移すこともできたからです。最後になりますが、お世話になった須工の今後のますますのご発展と、母校の歴史が永遠に続くことを願って、創立五十周年記念のお祝いにさせて頂きます。

須工に栄光あれ！！

(東京都在住、東芝エンジニアリング)

須工タイムスより

—平成三年度卒業生・学校生活とクラブ活動—

須工タイムズ

学校の生活

その一

三年間の思い出

三MA 浜口 浩也

僕は、三年前この須崎工業高校に入學してきました。高校生になったんだなあと実感した反面、色々な不安もありました。入学式の日、自分のクラスが分り教室に入ると、そこには全然知らない人達ばかりで、話もできず、イスに座っているだけでした。

そして、初めに集団宿泊研修があり、この研修で友達もでき、少しずつ不安がなくなってきました。この研修で高校の厳しさを十分知らされたような気がします。また、文化祭など色々な行事は、いい思い出になりました。

二年生になってまず頭に浮かぶことは、やはり修学旅行です。とても待ち遠しかった修学旅行に出発し、初めてスキーを経験し、最初のころは思うように滑れなく転んでは

かりだったけど、それでも滑っているうちに少しずつではあるが滑れるようになりました。スキー研修が終わると、もっと滑りたいなあと思うほど、とても楽しかったです。楽しかった修学旅行も終わりました。高校生活の締めくくりの三年生になりました。

まず、主任の先生が変わるという出来事がありました。こういう事もあるものだなあと思ひ驚きました。

そして、とても大事な就職先を決めるという時期になりました。以前から大人になったらどんな仕事をしたいかなど決めていなかったもので、どのような仕事に就こうか迷いました。

両親のアドバイスや先生方のアドバイスなどで自分の考えも決まり、志望会社を決め受験しました。あまり自信がなかったけど、合格の通知ももらうことができ、すごく安心しました。

あと少しで高校生活ともお別れで、みんな違う人生を歩んで行きます。三年間みんな

とやってきて、今思えばいろいろな事がありました。本当にこのクラスで良かったと思います。もう少して社会人になります。高校生活とは違った生活が始まります。とても不安ですが、頑張ります。

高校生活をうたう

三MB

思い出す 三年間を 振り返る 忘れたくない この思い出を (青木 貴広)

友だちの そのまた友と 友の友 みんなそろって 卒業するぞ (酒井 豊)

山頂に 須崎工業 そびえ 立つ ああ今日もまた 登る 坂道 (川田 智彦)

過ぎ去った 月日の中の 思い出は 忘れられない 時間と場所 (石山 満彦)

学生の 思い出づくりも 社会の窓 開き始める (柳本 剛)

ここにきて もう三年が 過ぎ去った これから先はどうなることやら (山本 隆文)

高校生活 もう目の前は卒業式 これから先は 社会人 (福井 公之)

楽しい思い出 ありがとう またいつか 同窓会で 会えたらいいね (松本 一三)

あの時の 友情いつも 忘れずに 歩いて行こう それぞれの道 (塩見 剛志)

三年間 大きな事は してないが 幾多の数の 悪さの 限り (津野 文昭)

高校生 今は楽でも 社会へ出れば そんな楽には いきません (田中 英之)

気がつけば 早くも終わりの 高校の 友達みんな 離ればなれに (松本 修治)

高校生活をふり返って 三S 古谷 謙信

高校生活をふり返って思う ことは、まず一年生の時のこと。一年生の時の最初は、まだ高校がどんな感じか分からないので、少し不安でした。

それは、高校は中学校の時と違って義務教育じゃないので、自分自身がすっかりして

で、自分自身がすっかりして

いないと、大変苦勞するし、責任も中学校の時と比べてそれだけ重くなるので、今までは違った厳しさがあると思

いました。それに今までの心のままでは、いけないと思いました。それから三年間の間に、社会に出る心がまえをし

なければならぬので、とても大変だと思いました。

僕は、須崎工業高校の造船科に入って、造船科の勉強をしなければならぬし、工業高校は普通高校と違って職業科目があつて、卒業して社会に出るとその科目についての職業があつたりするので、工業高校生らしい勉強をしておかなければいけないと思

いました。だから一年生の時の基本は、大切だと思

思ふことは、二年からは、一年生の時の基本を本格的に

使つて工業らしいことを本格的に行うので大変重要になるのだと思ひました。それに二年の勉強は、三年になつて就職の時期までの勉強より、一

年間を使つていけなかつた科目を就職の時期まで、とりもどせるチャンスなので大変重要な学年だと思ひました。

三年生の時のことについて思ふことは、やっぱり就職のことです。三年生の一学期と二学期の最初のあたりまでは就職のことで、とても忙しかつた。頭の中は、就職のこ

とでいっぱいでした。それに、就職試験のことを考えると、なんだか不安でした。就職試験に行つて一番緊張したこと

は、面接でした。就職試験が終わつた時、ホツとしました。会社の内定が決まつた時は、とてもうれしかつたです。高校生活は、社会に出るためのいい経験になつたと思ひます。

私の高校生活

三C 宮崎 亜也

なつたと思ひます。特に自分で気がつくことは、人のことをよく考えてあげられるようになったことです。

この学校は、ほとんどが男子で、女子が少ないのでいろいろな面で苦勞がありました。でもその反面、楽しいこともたくさんありました。すごく思い出に残つた修学旅行、つらかつたけど楽しかつた研修旅行、みんなと協力し

合つたりリーダー研修や校内大会などとても楽しかつたです。その上、私は生徒会執行

部員になつていたので、いろいろな行事の先頭に立つてみんなをまとめる大変さがよくわかりました。生徒会執行部では生徒の代表ということで、いろいろな面で責任があり、いかげんなことはできないというプレッシャーがあつて、精神的に疲れました。でも、

すようになり、とても良い勉強になつたと思ひます。入学当時は、何も知らなくて先生や先輩たちに注意され

てばかりでした。何もかも、することが見ることが初めてでうきうきしながら学校へ行つていました。

二年生になると、だいぶ落ちつき、この学校のことでも理解できるようになつてきました。先生からも、自分達が

気が多くなりました。後輩もできて、自分達が先輩だということが頭にあつたせい、この頃から考えも行動もしっかりしてきたように思ひます。三年生になると、就職活動も本格的になつて忙しい毎日

といわれるほどにぎやかだつたけど、私たち一人一人つらかつたことや悲しかつたこと涙がなくなると思ふくらい泣いたこと、いろんなことがありました。その度に、三人で励まし合つて、一つ大人になつてきたと思ひます。悲し

いことはかりでなく、大口をあけて笑つたこともたくさんありました。三人は何でも話し合い、間違つてゐることは間違つてゐるとはつきり言つ

ていて、言葉がきついでいよく他の男子に、三人は仲が

悪いとうわさになつていたこともありました。決して、そんなことはありません。私にとって二人は、とても大切な人達です。これから、就職をしてばらばらになつても三人の友情は続きます。

この三年間はとても短かつたように思ひます。忘れられない三年間になりました。

三年間を振り返つて

三C 竹内 淳也

高校生活の三年間を振り

返ってみると、あつという間に三年がたったというよりも、僕の場合はようやく三年がたったという感じだ。でも、この三年間の中でもいろいろなことがあった。

一年の時から振り返ってみると、入学した時は、何が何だか分からなくて、とても不安だった。でも、伊野中からこの須工に入学した人がたくさんいたので、不安という気持ちも薄らいでいった。けれど、伊野からだだけこの学校に

来ているのではなくて、須崎工業だから須崎から来ている人がやっぱり多いし、久礼や窪川、そして佐川というふう

にいろんな所から来ているので、初めはびびりした。勉強の方は、習う科目が多

いので、わけが分からなくなっていた。初めて習うものが結構あったので、頑張らなければいけないと思っ

た。結構難しかったけど、一年の時は三学期に赤点がなかった

ので、なんとか留年せずに二年に上がった。

二年の時は、本当にいろいろな出来事があった。学校をやめようと真剣に考えたのも

二年の時だった。生まれて初めて「挫折」ということを経験したのもこの時だ。二年の時

は、僕にとつて人生で最悪の年だったような気がする。

二年の時のことはあまり思い出したくないというのが、今の僕の本当の気持ちだ。

でも、学校をやめようと思っ

て休んでいた僕を励ましてくれた人達がいたので、とても嬉しかった。それに家

まで来てくれて励ましてもく

れた。先生達も学校をやめる

なとずっと言ってくれた。それで、今僕が学校に来ている

のも、こうして僕を励まして

くれた人達のおかげだと思っ

ているし、とても感謝している。だから何とか三年に上が

れた。

三年の時はいつと、就職が内定したことが一番よかつ

たと思う。就職が内定したことで、頑張ろうという気にも

この高校生活の三年間の中

でいろいろなことを学んだ。本

当に浮き沈みの激しい三年間

だった。後は卒業するだけ

だから、何とか頑張っていきたい。

本当に長い三年間だった。

学校生活を振り返って

三E A 谷脇 覚

須崎工業高等学校に入学し

て、はやくも三年がたってしま

いました。入学したばかり

の時、初めてのことが多く

不安ばかりでした。特に、印象深いのはクラスが全く知らない人ばかりだったこと

はいました。必修クラブ

だったので「土曜日のひまつぶしに。」と思っ

て入ったのです。しかし、鎌田先生に「や

る気のあるものは、毎日来なさい。」と言われ、他に自分

に合ったクラブもないし、はやく家へ帰っても時間をあ

まり有効に使えないと考え、結局毎日、クラブへ通うことに

しました。

それまでまともにキーをつ

ついたこともなく、ワープロ

をやるにしても、なかなか

キーの位置などを覚えること

もできずに非常に苦労しました。キーを打つのに少し慣

れた頃から、遂にプログラムを作り始めました。しかし、

で忙しいことがたくさんあつ

たにもかかわらず、短い間に

いろいろな教えてくれました。

特に夏休みと冬休み、春休

みは朝の9時から、夕方の4

時や5時ぐらゐまで、ぼくら

に教えてくれました。最初は

プログラムの意味などを教えてもら

い、電算室のホストコンピュータ

などが新しくなると、プログラムだけでは

なく、構造やシステムを教

えてもらい、またそれらを使っ

ていろいろな操作をしたりしまし

た。

このようにシステムなど

を使うことにより、さらに興

味を深くし、自分でもやれる

ように努力しました。また電

算部にいたことを就職試験の

履歴書に書いておいたので

が、面接の際に、電算部の活

動について何度も聞かれ、そ

れにちゃんと答えることも

できました。

この三年間、二年の三学期

の時の修学旅行もまた高校生

てみると、失敗したり、後悔

したりとあまり良いことはな

かったように思います。しか

し、この学校に通学してから

いろいろな人に会えたという

ことは、唯一の良い事だと思

その二

クラブ活動

クラブ活動の思い出

バレー部 柳本 剛

高校生活の中で一番の思い出といえはクラブ活動です。

バレー部に入るきっかけとなったのは、中学校のころテレビでバレーボールの試合を見て、ほくもやってみたくい

なと思い、それだけの思いで入ったのです。

須崎工業にバレー部があることを知っていたので、入学してすぐにやりたくて早速二

日目から入部しました。毎日が厳しく、つらい練習

が続く慣れるのには時間がかかり、その間には入部してき

た人々も次々と辞めていき僕たち一年生は三人だけに

なっていました。二年になり、練習にも慣れ

落ち着きがでてきたころには三年生は引退してしまい、そ

して新入部員と共に毎日厳しくつらい練習が新たに始まり

ましたが、一年生のほとんどが初心者ばかりで三人で教えていくには苦勞しました。

今までは違ひ教える立場に立ってみて、キャプテンや先輩たちの大変さがわかるようになりまし

た。そして毎日の練習の結果、試合もできるようになりまし

たが、やはり三人で一、二年を引っぱっていくのはなかなか

かできず公式戦や練習試合も数多くやりましたが、しかし

試合の結果は良くありませんでした。結果とは違つてチー

ムのまとまりは、少しずつですが良くなり、僕たちのチー

ムらしさが試合をすることに

出てくるようになりました。試合にも慣れ全員がまとま

りだした頃には、僕たち三人は引退を迎えてしまいました。

結局最後まで、一勝もせず引退をすることになりました。

今思えば僕たちが先輩や先生方から教えてもらったこと

を、もっと多く先輩に教えて

あげればよかったのですがそれができずに残念です。

あの厳しく、つらかった練習、そして楽しかった試合は今となってはいい経験と思

い出になっています。初めは、長いクラブ活動が

これから続くと思つていましが、今思えば短く、いろ

んな思い出をつくってくれたように思います。

見ず知らずの人とバレーボールという一つのこと

を取り組み、そして力を合わせ、チームをつくっていくとい

うことはすこく難しく、本当にお互いの気持がわからない

とチーム全体が一つにならないのです。

先輩や後輩、先生方そして三年間共にやってきたバレー

ボール部員のこと、これからも忘れないでしょう。

野 球

野球部 西森 貴司

僕が当時野球部に入部した時、三年生四人、二年生七人、一年生三人でした。最初に

部した時は、こんな状態でやっていたらどうか不安でした。しかし、練習内容は濃

く、最初のアップだけで、とても疲れました。アップが終

わると次にキャッチボールをしましたが、中学の時と比べ

て、ボールは重く、クラブをとつたら、手ははれるくらい

痛かったです。でもだんだん慣れるにしたがつて、ボール

の重さにも慣れ、痛くなくなりました。

高校での練習は、中学と比べて、とてもハードでした。特に冬場の基礎トレーニング

は、とても疲れました。またその後のタイヤ引きや、坂の

五往復、階段五往復などの練習も疲れました。また合宿の

時の砂浜でのランニング、グツシユは、生涯忘れること

はないと思います。練習の時の楽しみは、バッ

ティング練習です。疲れていてもバッティング練習にな

ると、体が良く動き、とてもいい気分になります。打ったときの音や、手に残る感触は日

ごろのいやなことを忘れさせてくれました。

レギュラーになった時は、はつきりいつて自信がなく不安でしたが、何度か出るにつれて、試合に出ることが楽しくなりました。僕は練習より試合の方が好きでした。でも

試合に負けた時は、くやしかったです。また、試合場に行く時のバスの中は、遠足に行くかのような気分で、おかしを食べたり、音楽を聞いて

りして騒ぎながら行きました。楽しい思い出になりました。

楽しい事はばかりではなく、二年の秋頃に、何度か辞めようかと思いましたが、しかし、周りの人たちや先生達に励まされたり、小学の時から今までやって来ていたので、なんとか最後まで頑張ろうと思

て来ましたが、最後まで辞めずにやってこれたのでよかったです

とも、機会があれば野球をやってみたいと思います。

最後に、今までご指導して下さいました。市川先生どうもありがとうございました。

私にとつての三年間

空手道部 石本 篤司

この須崎工業高等学校での三年間というものは、部活で

ある、空手道にあけくれる毎日でした。僕には、空手道がありました。ただ三年間、クラブ活動もしないで、遊んでいた人に、「一年前あるいは半年前何をあなたはしていたか覚えていますか。」と聞

えるでしょう、「僕は部活で空手道をしていました。」と。

私は、胸を張ってこう言える空手道を誇りに思っています。私達は、二度と取りかえずことのできないその日一日

を大事にしていかななくてはならないと思います。そういった意味で、空手道は、私にとつて良い思い出となりました。

私は、四代目の主将を務めさせて頂きましたが、実をいうと同じ学年の友達が空手道部にはいませんでした。だから、私が主将に選ばれました。

主将には、チームをまとめた、盛り上げたりするなどといった仕事が多くありました。そういった理由で、だれもが決して体験することの出来ない事まで経験することができ、とても良かったです。

私にとつて、三年間の空手道は、自分の人生を大きく左右するものだったと思いま

す。たしかに練習はきつかったです。社会に出ればこのきつかった練習が、いろんな面

で必ず役に立つことと思います。私は一生、須崎工業高等学校や空手道部を誇りとし、人生の支えとして、頑張っ

て行きたいと思えます。

サッカー部の思い出

サッカー部 大和田広志

私は、小学校三年から、今までサッカーをやってきました。私にとつてサッカーはなくてはならないものでした。だから高校生活といえは勉強よりサッカーの方に打ち込んでいました。

一年生の初めは、先輩たちの練習がハードで練習が終わった時には、自分の足じゃないくらいに重たかった事を覚えています。あのころの練習はとても苦しかったけどいい経験になりました。

最後の試合を終えた三年生の先輩たちは、引退し自分が

チームを引っ張って行くようになりましたが、思うように指導ができず、チーム全体も

まとまらず、悩んだこともあり、キャプテンをやめたかったこともありました。

私たちのチームは、高校生活最後の県大会に向けて、チームが一つにまとまり、去年の県大会ではベスト8に入

りその上を目指して練習に力をいれてきましたが、開会式前日に、私が盲腸になり、チームのみんなに迷惑をかけてしまいました。チームみんなの頑張りもむなしく、三回戦で高知南高校に0対1で敗れてしまい、去年のベスト8を上げる事ができませんでした。今までサッカーをやつてきて、盲腸で最後の県大会に出

場できなかつた事が、一番く日が走ることや声をだすこと
やしなかつたことです。

最後に、三年間一緒にチー

ムのみんとサッカーをして
これた事を、うれしく思いま
す。またお世話になった、梅
原先生、氏原先生をはじめ、
諸先生方、本当にありがとう
ございました。そして最後ま
でついてきてくれた後輩
に感謝します。

あの際のことを考えると、
勉強との両立は大変でした。
ただ、バスケットボールが好
きなもので続けていけたと思
います。

クラブ活動の思い出

バスケットボール部

藤田 研

私が、高校に入学するにあ
たって、勉強の不安もありま
したが、中学の時から続けて
きたバスケットボール部に入
部するかどうかも、大きな問
題でした。

結果的に入部したのは中学
の時よりやってきたのと先輩
の勧めがきっかけとなりまし
た。

実際、入部してみると高校
での練習は中学の時の練習と
は比べものにならないほど
ハードなもので、ほとんど毎

日が走ることや声をだすこと
でした。二、三年の先輩達に
できませんでした。

製図なども入ってきて、クラ
ブを休み、部員に迷惑をかけ
ることもありました。

けれども、時がたつにつれ
だんだんと、練習の仕方にも
慣れ、副主将や同級生たちに
助けてもらい、毎日頑張つて
練習をしましたが、その努力
も実らず、最後の県大会でも
初戦で負けてしまいました。

結局試合ではなかなか勝て
ませんでした。結果はどう
であれ、最後までバスケット
ボール部を続けてよかったと
思います。

一、二年生は、もつと努力
し、主将を中心として、練習
を続けてほしいと思います。

最後に、お世話になった井
上先生、松岡先生、マネー
ジャーの田所さん、本当にあ
りがとうございました。

その上、三年にもなると、
勉強の方も大変になり、また
部員に迷惑をかけたことが
ありました。

その上、三年にもなると、
勉強の方も大変になり、また
部員に迷惑をかけたことが
ありました。

クラブ活動の思い出

卓球部 川添 英生

自分が卓球を始めたのは高
校に入ってからで、一年の時
は、ルールもほとんど知らず
ボールもそれほど打てませ
ん

引退し、キャプテンを任せら
れることになった時は、やつて
いけるか不安でした。

しかし、友達に励まされ、
全員で頑張つて練習してい
きました。

それから新学期には新入部
員も入ってきましたが、その
中には、かなり上手な者もい
たので、みんな「抜かれてな
るものか!。」という気にな
り、今までよりも更に練習に
励み、力もつけてきました。

その結果、練習試合でも勝
てるようになり、みんな自信
をつけてきました。

そしてついには念願である
春期大会予選突破を成し遂
げ、良い思い出を残すことが
でき本当にうれしかったで
す。

でも最後の県大会では予選
落ちしてしまい残念でした。

一応、主将としてやってき
ましたが、主将らしいことは
何一つできませんでした。

一、二年生は、僕達三年や

前の主将達のかなえられなかつた上位進出をめざして頑張つて下さい。

僕自身、卓球を通じていろいろな人と知り合い、いろいろなことを学びました。苦しめた練習や、試合に勝つてうれしかったことなどこの三年間の思い出が、頭に浮かんできます。本当に今では卓球をやつてきて良かったと思います。これからも機会があれば続けていきたいと思つてます。

最後に、三年間御指導して下さい。下さつた、今は転勤された土居先生、そして町田先生、三年間本当にどうもありがとうございます。

剣道部の思い出

剣道部 中岡 聡

僕が剣道部に入部したのは、中学校の先輩がいたのと、自分が小、中学校と剣道をやり続けていたので、高校になつてもやり続けようと思つたからです。

入学した次の日から、僕は

練習に参加しました。先輩達とは、中学校の時に会つた人ばかりだったので、すぐに溶け込み、前々からいた部員のようになり、練習ができました。

ちょうど春の大会と県体の前だったので練習は厳しかったけれど、毎日練習し、春の大会から、補欠で試合に出られることになつたので、とてもうれしかったです。

しかし、その大会でも、次の県大会でも、出番はなく結局実質的に試合に出られるようになつたのは、秋の郡大会と県大会からでした。その時は、今までの自分の結果と比べると良かった。その後は部員のことで悩みました。練習に出来ない部員を何とか来させようと思つたが、三人で練習したり、ひどい時には、たつたの二人で練習したこともありました。そのおかげで、基本を集中的にやれたという面もあつて、そのおかげで念願の二段を取る事ができたし、取つた事によって自分に自身がついて、試合で

も頑張れるようになったのを憶えています。

それから三年生になつて、僕も主将になり、クラブを引つ張つて行くようになり、三年生にとつて、最後の試合の県大会に向けて、新入部員たちと共に、練習を始めました。そのおかげで、県大会の前、春の大会で、一年生たちが頑張つてくれたおかげで、試合ができたと思つています。

県大会もこの調子でいこうと思つたが、皆調子を崩してしまい、結果はよくありませんでしたが、この時も一、二年生が頑張つてくれたのでよかつたと思つています。

三年間いろいろなありました。挫折してやめようかと思つた事がありました。三年間何とかやり通しました。このことをよい思い出とし、卒業していきなさいと思つています。

し、悔しさをバネにIH出場を目標に走り込み、筋力トレーニング等全員が頑張りました。

三月の春休みでは名古屋、大阪など遠征に行き関西大会で優勝し、五月のIH予選前に自信がきました。

その後の練習は厳しくなり全国大会出場という目標に力が入っていました。

そして十九日から始まつたIH予選では、またもや決勝で敗れ、この時は本当に皆悔しい思いをしました。

しかし七月の四国選手権大会では優勝を成し遂げ先輩達は引退していききました。

八月、僕がキャプテンを引き受けた時は、新チームにとって遅いスタートになりました。指導はなかなか行き届かず、練習は厳しかったので毎日が嫌でした。

そして数々の試合は負ける一方で、津野先生の胃も悪くなるほどでした。

月日がたち三回目のIH予選が始まり、三回戦で山田高

校に4対7で敗れ、ソフト部を引退しました。

今、クラブ活動のことを思い出すと僕にとっては、一年から試合に出ていられたのは幸運でした。そしていろいろな体験をし沢山学びました。

監督の津野先生をはじめ、コーチの伊藤先生、栄田先生本当にありがとうございます。

須崎工業テニス部

テニス部 山崎 大

工業に入ってから来てテニス部に入部しました。でも毎日さぼってばかりでした。今もあいかわらずみただけで、やっぱり他のクラブみたいにきちんと練習をしないことにはつづれると思いません。昔からだけど、練習をするのは県体の何日前の日から、みんなし始めてました。これじゃ試合やっても負けは分かっているからだめだと思いつつ、結局三年過ぎてしまいました。

生徒もすっかり部活に出て

先生もきちんと見について、そしてしっかりやってもらいたいと思います。僕は何もできなかったけど、後輩にはがんばってもらいたいです。

そしてこれからのテニス部に期待したいと思います。

ヨット部思い出

ヨット部 福田 賢司

僕がヨット部に入った理由は、同じクラスの酒井君と一緒に入ろうと誘われて、なんとなく入りました。初めての練習の時、須崎にあるヨットハーバーへ行きました。そこには短いヨットや、細くて長いヨットなど7、8艇あり、これが風の力と人の操作だけで走るのがかと思うと、少し感激しました。それから練習風景をレスキューボートから見ました。その日は風が強くて、だいじょうぶかなと思いがながら見学していましたけど、みんな上手にヨットを乗りこなしていました。その時、自分の想像していたヨットとは違っていたため、少しびっく

りした反面、なんだかやりが

いのあるスポーツだと思えました。次の日、初めてヨットにのりました。最初のうちは全然操作のしかたがわからなかったけど、先生方の熱心な指導の下に乗れるようになり、だんだんとのめりこむようになってきました。

そして初めての公式のレースに出ました。それは四国大会で高松まで行きました。その時の結果は芳しくなかった

ので、九月にある団体までみんなまで死に練習しました。どうしたら速く走れるだろうかと考えてみたり、新しい練習メニューを取り入れたりしました。合宿も夜須の方で

やったり、高知大学のヨット部の人や何度も団体に出場させている人とも、合同練習をしました。みんな日焼けして、体力も付きました。先生が県にたのんで新しいヨットも

買ってもらいました。そして、中内知事の激励を受け、国体のレース場である石川県へ行

きました。

開会式の当日には、秋篠宮

様も来ていました。レースは3日後で、この日は練習走行でした。先生が、みんな本気で走るので、真剣に走れと言われました。言われたとおり本気で走りました。みんな本気で走りました。その時は40チーム中13位ぐらいでゴールしました。これはいけると自信をつけました。しかしレース当日は台風でした。僕たちは完

走するのが精一杯でした。

二日目はレース前半は強風でしたが後半はうそのように風がやみ、正反対から風がふきとどいてました。三日目は超微風で、レースらしいレースになりませんでした。結果

は良くなかったけど、今思えば貴重な体験が沢山でき、本当にヨット部に入って良かったと思います。先生をはじめ

多くの関係者の方々、ありがとうございます。

三年間のクラブ活動

柔道部 堀内 浩司

この須崎工業にはあいにく柔道の経験が長くある先生はお

僕の入っていた柔道部は、

あまり部員がおらず、そのため練習時間が長く続きませんでした。一学期の初め、部を決める時には、かなりの人数が集まりましたが、始めた時にはほとんど来ないという状況でした。それでもなんとか呼び集めて練習しているうちに来る部員がだいたい決まってきたので、来ないのはしかたがないのであきらめて、来るものだけで練習しているうちにだいたい上達してきたので、昇

段試験に試しに連れて行きました。一回ではなかなかとれなかったのですが、二、三回と連れて行くうちに六、七人のうち三人が合格することが出来ました。

県体にも三年連続で出場しましたが、相手チームはやはり強く、なかなか勝たせてもらえませんでした。むこうのチームは練習の内容がちがうのです。柔道歴の長い監督が

つき、毎日厳しい練習をして

いるにちがいがありませんが、

この須崎工業にはあいにく柔道の経験が長くある先生はお

僕の入っていた柔道部は、

柔道部 堀内 浩司

この須崎工業にはあいにく柔道の経験が長くある先生はお

らず、だいぶ不利でしたが、顧問の先生の協力を得てなんとか練習を続けることが出来ました。

この三年間のクラブ活動をふりかえってみて、決してよいクラブ生活だったとは言えませんが、みんな言う事を聞いてくれ、それなりに練習でき、よかったですと思っています。部員は二、三年が多く、特に三年がほとんどでしたので、その三年が引退してからは、人数もどつと減り練習がしにくいかもしれませんが、新しいキャプテンも決まりましたので、これから入ってくる部員とその主将にこれからも頑張るよう期待をしています。

三年間の思い出

陸上部 田中 誠

自分はこの三年間は世間の間で例にもれず短かったように思えてくる。

学校に入学した時には、三年もあるから卒業までのんびりできると思っていたが甘かった。

中学校の時と違い、赤点は取らないようにしなければならぬし、レポートは提出しなければならぬので、結構忙しい日々を送っていた。

しかし、そんなことも今ではただの思い出に過ぎなくなつた。その思い出の中でも強烈に覚えているのはやはり、クラブのことである。

最初にクラブに行った時のことは今でも覚えている。中学校の時と大きく違つたことがあつたからだ。部員数のはるかに少なかつたことだ。さらに、グラウンドを分割して使用していたからだ。

そのような状態だつたら、練習はきつくあるまいと、たかをくくっていたが、最初の方は、なるほどその通りであつたが、一学期の後半の方になると、中学校の時とは比べることすら馬鹿らしくなるような練習をやらされた。その上帰りは自転車を延々三kmぐらいを、ライトを付けて帰らねばならなかつたの

で、家に帰りつくと、動くのも嫌になつていた。

そんな内容だつたから、さぼつたことはあつた。しかし何故か辞めたくはなかつた。どうしてなのかは、今も謎である。

三年間の中では当然試合にも出させてもらつた。これぐらいの練習をしたので地方の小さい大会では、まずまずの成績も残したし、たまには賞もいただいたこともあつた。

しかし、県大会になると全々相手にならず、賞どころか決勝進出も困難であつた。

自分は走り幅跳びと三段跳びの選手であつたが、この県大会のレベルは、全国に比べればかなり低いことを知つた時、やはりもつと練習をせねばならぬなと感じた。

そんなこんなでクラブも終わり、ポケーっとして今、クラブをやつていて良かったと思えてくる。

もうすぐ卒業をひかえて、他の人より多くの良い思い出を持つて出て行けるのは、なかなか気分の良いものである。

当然、今後も新入生が入学してくるわけだが、できるだけ多くの人がクラブで活動(できることなら陸上部)をし、他の人達よりも良い思い出を多く持つて社会に出て欲しいものだ、切に願つた所書かれたこの作文も終わりにしたいと思う。

雨の酸性度を調査して

化学部 小野 浩司

僕が、化学部に入つて、雨のHP測定を始めたのは、三年になってからで、それまでは、化学部が、あつたことも知らないし、雨のHP測定をしていても知らなかつた。化学部の活動は、雨の日に屋上で、雨水を貯めて置きHPメーターと言う機器で測定をする活動で、雨の日以外は、天気気がなくなった。

HP測定値の数は、低いほど酸性が強いので、こんな日に濡れてしまうと髪の毛が抜けやすくなりそうで、ちょっと心配で、小雨の時でも傘をさすようになった。

雨のHP測定をする時は、僕一人ではなく森田君と下元君と三人で協力をしてやりました。

五月で一番酸性度の強かつた日は、八、三十一日でした。この月は、平均でも酸性度の強い日が多かつたと思う。

六、七月は、五月と比べ酸性度の強い日が多かつたです。九月は、全体的に見ても酸性度の弱い日が多くあり、平均も一番酸性度が弱かつたです。

十、十一月は、九月に比べ少し酸性度の強い日がありました。

十二、一、二月は、雨の降る日が少なかつたので、全体的に酸性度はかなり強い日があつたので、来年の十二月以降の日は、雨に濡れないように気をつけたいと思います。

学校を卒業しても機会があれば、また雨水のHP測定をしたいと思っています。

クラブ活動を振り返って

美術部 下元 伸一

僕が美術部に入ったのは二年生の時だった。小さい時から絵を描く事は好きだったが、クラブに入ったのは、その時顧問の先生であった竹村先生が、キャンプや自転車、登山などのアウトドア的な活動が好きだという事を知り、二年の夏あたりから、いつも部に顔を出すようになっていた。

その頃はまだ部になつたばかりで、予算などもなく、活動もオカナリを焼いているだけで、あとは部室でダベっているだけであつた。

しかし、その夏、大方町で砂像彫刻展をやるという企画があり、僕達の学校もそれに参加する事になった。夏の砂浜で、大きな砂のかたまりを削るという作業は、とてもつらかったが、完成した砂像をながめた時の感動は、これからも忘れる事がないだろう。

この年の夏は、先生方とキャンプに行ったり、泳ぎに

いったりと楽しかった。また、部活動の方も二学期の頃からは本格的になり、秋の高美展にも作品を出展する事が出来たし、他校の生徒の作品も見られ、得られる事も多かつたと思う。

三年になつてからは部員も増えたが、活動の方は去年と同じであまり活気がなく、なにか行事や目標がないと、だれも、何もしなかつたし、部室で話をして帰るという日が

続いていた。でも、五十周年記念の時などは、みんなで協力して短期間で校門にたてるアーチを作るなど、頑張った時もあった。

こうして、改めて振り返ってみると、楽しい思い出もあるが、残念に思う事もある。

もつともつと、色々な絵を描きたかつたし、みんなで作りたい事もまだ沢山あつた。僕は何も出来なかつたけど、後輩のみんなは、もつともつと自分達のやりたい事をやってほしい。

美術部が、これからも、美

術面の活動だけでなく、生徒の本当にやりたい事の出来る、またその足がかりとなるような、クラブであり続けてほしいと思う。これからは、後輩達がみんなのおどろくような、新しい事をやっていてもらいたいと思う。これから、頑張ってください。

同

窓

会

同窓会

〔創生期〕

本校の同窓会がどんな経緯でできたかについての確かな記録はない。

本校初の卒業式は、昭和十八年に機械科二種の第一期生が卒業するときであった。本来ならそのときに同窓会も発足するはずであったろうが、多分時局がそれを許さなかったのであろう。そのあたりの事情はさだかではない。

第二次世界大戦終結の昭和二十年以降、世情も段々と落ち着きを見させてきたころ、当時機械科教諭だった田村隆徳先生は卒業生の状況を見られて、その消息を頼りに卒業生名簿をこつこつとお作りになつておられたようである。また、それとは別に、造船科教諭だった竹村義典先生も高知市種崎地区の造船所を中心に、造船科の卒業生名簿を整えておられた。

これらのお仕事は、昭和二十三年七月に本校が火災によつて、主だった校舎を焼失し、その際それまでの本校の記録の大半を失つた後のことである。現在の調査の段階ではそれ以前のこととは明らかではないが、恐らく特記すべき事項はなかつたといつてよい。それは、大戦終結のころは、田村先生をはじめ、当時の先生方は兵役に出られたり、残つた先生方も我が身の処しかたすらおぼつかない時代であつたからである。

そうしたことから、本校の同窓会の創生期は、ほぼ昭和二十四年ころと考えられる。

〔会則の施行と改正の概要〕

昭和二十五年一月二十日は同窓会にとって記念すべき日の一つとしてよい。

この日、本校の「同窓会会則」が施行されたのである。

だが作成に当たつたのか、何を参考にしたのか、また施行に当たつてどのような行事を行ったかなど、それらのいきさつについて、今となってはだれも知る人はいない。ただ、現在の会則の付則にその「日」が施行日として記載されているだけである。

会則は、付則の記載から昭和四十三年、同五十一年、同五十六年、同六十二年と、四度の改正を経て現在に至っている。

現存する最も古い会則は、昭和四十三年に改正されたもので、十五条からなり、現在の会則の基本になつていて、昭和四十六年度の同窓会名簿に載っている。この改正前のものは不明である。

次に五十一年の改正では、七つの章と二十三条になり、このときの改正が大幅なものであることが分かる。この会則は五十二年度発行の「にしきうら」二号に載っている。この改正では、会員の定義のなかに、在校生を「準会員」とすること、役員の選出方法、会議の種類と役割、事務局の構成など、同窓会の円滑な運営に必要な事項が加えられている。

また、会費の徴収は、本校の場合もご多聞に漏れず大変苦勞の多いものであつたが、この改正で「終身会費・一万円」を設定し、このことが、その後の同窓会活動を極めて容易にしたことは特筆すべきことである。

昭和五十六年の改正では、年会費の項を削除し、会費は終身会費のみになった。これは、終身会費の定着により、年会費の存在が薄くなったことによる。

昭和六十二年の改正では、支部配分金の金額を理事会で決定することにした。この改正は、母校が五十周年を迎えるに当たって、同窓会の記念事業及び学校の記念式典等への援助を行うための支出について、支部配分金を一時減額せざるを得ない事情から取られた措置であった。

この改正で、もとの「二百円」という配分金額が会則から削除されたわけだが、今後の配分金額の決定に際して、基準となる金額が示されていないことによる混乱を避ける意味からも、何らかの手立てをしておく必要があると思う。

〔会費の変遷〕

会則ができる以前に、何らかの形で会費を徴収したかどうかについては、はっきりした記録がない。

前記した四十三年度改正の会則では、「年会費三百円」、「在校生積立金は入学時に三百円」となっているが、それ以前は、確か「年会費二百円」だったと記憶している。「在校生積立金」が最初からあったかどうかは不明である。

五十一年の改正では、前記の終身会費の設定とともに年会費は「五百円」とした。

この終身会費並びに年会費五百円の設定に関しては、四十七年に発足した高知支部の、「支部会費」の影響が大であった。

高知支部では、支部運営資金として支部会費を定め、それによると、会費は「通常会費(年会費)」と「終身会費」とし、それぞれを「五百円」「一万円」として、この会費を納入した支部会員の本部会費は、その支部会費のなから、支部が一括して納入することにした。

終身会費を一万円にした根拠は、当時の銀行預金の年間利子がほぼ五割で、一万円の預金利子は約五百円の通常会費に見合うものだからであった。支部ではこの終身会費は支部基金として、預金等の運用金を支部運営資金とすることにしたものである。しかし、その後利率の変動があつて、初めの思惑通りにはいかないこともあつた。

高知支部では通常会費及び終身会費の運用金から出る、一人当たり五百円の中から当時の本部会費三百円を納入し、残りの二百円を支部の運営に充てることにした。

この方式は大変有効で、高知支部の運営はうまく軌道にのることができた。

このことから、この方式を本部会計に適用してはという話になり、五十一年の改正になった。そして本部からは各支部に対し、支部運営資金として、一人当たり二百円を会費納入者数に案分して分配することにした。

高知支部では、この改正を待つてそれまでに集めた終身会費を全額本部に納入し、これで本部の終身会費制が定着した。

一方、在校生積立金は、「入会金」とし、入学時に一括二千元を納めることに改正した。このため従来在学生会員は会員の定義の中になかったので、「準会員」の制度を設けて、入会金の裏付けをした。

ところで、終身会費については、いまだにその運用規程がない。

規程を先に作らなかったことが、その後の運用に際していろいろと議論を呼ぶことになった。今ではほぼ会員の共通理解ができたので、規程作成の時期にきていると思う。

ここで、終身会費の定着について一言述べておかなばならない。終身会費が会則に設定されたものの、その徴収はそれほど順調に実施されるとは限らなかった。後で会報「にしきうら」のことにふれるが、この「にしきうら」では一般の会員に対し終身会費の納入キャンペーンを強力に行い、その反響もあって徐々にではあるが納入も増えてきた。会員相互においても「終身会費は納めたか」が合い言葉になるほどであった。しかしそれだけでは、いまのように潤沢に集まることはなかった。

当時の母校校長であった、村木威校長先生をはじめとする教職員の方々は、何とか同窓会の活力を付けるため、この終身会費の納入に協力しようと、卒業式の終了後卒業生からこの終身会費を集めることを考えてくださったのである。

実際には卒業式に参列された保護者の皆さんからの徴収になったようだが、村木校長先生を筆頭に、在職の同窓の先生、つまり同窓会の事務局員が、式場を退席される保護者に呼び掛けて終身会費を集めたのであった。さすがにほとんどの保護者の皆さんがご協力下さり、既卒業者からの納入も合わせて、毎年約二百万円強の金額が納入されることになった。

またその二、三年後には、ホーム主任のご好意で、三年生の卒業前に徴収して下さることになった。

こうして終身会費設定から約十年にして、この会費は二千万円を超

える基金となって、同窓会の会計を潤した。

その時期の村木校長先生をはじめ学校に在職した教職員の方々のご協力は多大なものであることを、ここに感謝の意を込めて記載しておく。また、当時の事務局の皆さんのご努力にも心からの感謝の意を表さなければならない。

更に平成二年からは、この終身会費の徴収は、三年生については学年初年から一年間の分割納入をお願いすることにし、銀行扱いになって、ようやくホーム主任のご苦勞を省くことができるようになった。

今回の母校創立五十周年の各事業が、殊更各方面の寄付に頼ることなく、極めて潤沢な資金を得て盛大に催すことができたのは、この同窓会の豊富な資金あつてのことであつた。

「同窓会の活動」

私は昭和二十六年三月の卒業である。そのころから本校の開校記念日である五月二十五日には、開校記念式を行っていた。

そのことを覚えているのには大きな理由がある。それは、そのころではめつたなことでは口にすることもできない、紅白の「まんじゅう」(中はたっぷり大きく甘い小豆の漉し餡入り)が、お祝いとして同窓会から生徒に配られていたからである。私たち生徒にとって毎年五月二十五日は、大変待ち遠しく楽しみの日であつた。

いつのころからか、この「紅白まんじゅう」は、「ボールペン」になっている。経費が高く付くのが理由であるが、あの味は忘れ難く、もう少ししたら再びお菓子になって欲しいとも思うのである。

私は、この「紅白まんじゅう」がそのころの同窓会活動としての唯

一のものとして最近まで思っていたが、今回本稿を企画するに当たって恩師の先生方や先輩方のお話を総合すると、それ以外にも多くの活動がなされていることが分かってきた。

〔初発行の同窓会名簿と会報第一号〕

同窓会が活動するには、当然のことながら資金が必要である。資金調達には、まず名簿と会報の発行が先決である。

初めての会員名簿及び会報第一号の編集は、田村先生によってなされ、明確ではないが昭和二十六年ないし二十七年ころであった。初発行の名簿については、先に述べた田村先生や竹村先生の基礎データが役にたったことは想像に難くない。

それらの印刷・製本は当時本校に理科の助手としてお勤めだった堅田政雄先生（後に化学工業科教諭）の、プロ並みのお手によるものだった。多分A5判、小型のノートの大きさであったという。このときの会報は、三・四号まで発行された。これらを基に、田村先生は須崎近郊から徐々に同窓会の組織作りを始められた。大変残念なことに、この会報第一号と会員名簿は学校には現存しない。どなたかお持ちの方がいれば、ぜひ学校事務局までご連絡をいただければ幸いである。記念品として保存しておきたいものである。

後年の昭和四十七年に「にしきうら」という会報が発行されて、これぞ同窓会報の第一号と考えていたが、実は上記のような次第で、既に第一号は発行済みであったわけである。しかし、その第一号には題名がなく、「にしきうら」は辛うじて題名を持った会報の第一号になった。

〔創生期の組織作り〕

須崎市内・葉山・浦の内……と、初めはごく小規模の組織を、田村先生が自ら足を運ばれてしかるべき卒業生を訪ねられ、それぞれ地域別にお世話役を頼まれたそうである。お世話役の主な仕事は、会費の徴収であったようで、「税務署よりこわい同窓会」との冗談混じりの陰口も聞かえてきたという。

須崎のお世話役は、竹下写真館の竹下増秀氏（機械科二種二期・昭和二十年卒）で、学校に最も近いことから、何かと田村先生の相談を受け、大変お世話をされたようで、当時としては同窓会の実質的なまとめ役を果たしておられた。

〔事務局の設置〕

それまで同窓会に関する事務のほとんどは、田村先生が事務局長としての役割をされておられた。

昭和二十七年になって、機械科一種第一期卒業の矢野象一氏が機械科講師（後に機械科教諭）として赴任され、また昭和二十三年から同じく機械科助手としてお勤めで、一時体調をくずして休職されていた島崎良一氏（機械科二種第四期生・後に機械科教諭）が復帰せられ、田村先生の要請で、この昭和二十七年から矢野氏が本部事務局長、島崎氏が会計を担当し、事務局の態勢が整った。田村先生にはそれ以後顧問役として同窓会運営の指導を賜った。

〔会長の就任〕

初代会長の田辺博造氏（機械科二種一期・昭和十八年卒）の話によると、大野見村に在任されていた田辺氏のもとに、田村隆徳先生が直接見えられ、同窓会長にという要請をされたという。田辺氏は「とてもそんな…」と申されて、いったんは断られたそうだが、続いて、元学級主任の太田幸吉先生の訪問を受け、同じく要請をされたそうである。

田辺氏は、二度の恩師の訪問で、しかも元学級主任であった太田先生からのお話ではお断りもできないと、引き受けられたとのことである。この出来事がいつごろのことだったのか、田村先生も田辺氏もはっきりせず、太田先生も既に故人となられているので、お聞きすることもできないのだが、年次を繰ってみると次のようになる。

まず、太田先生が本校にご勤務されたのは昭和十六年から十九年と、同三十年から三十五年の二回である。先のご勤務のときには、田辺氏は十八年に卒業後外地に行かれ、引き揚げで高知に帰られたのは戦後のことであるから、終戦前後に太田先生と会われる機会はなかったと考えてよい。その後、太田先生の二度目のお勤めまでの間についても、他校にお勤めの先生にわざわざお願いすることも、少し考えにくい。となると、三十年になつてからということになるが、これについては、周囲の状況から相当の妥当性が考えられる。

事務局長であった矢野象一氏の話では、昭和三十一年に本校創立十五周年の記念式典を行つていて（記録にも残っている）、この十五周年に併せて、前年の三十年に同窓会の総会を行い、そこで田辺氏が会長に推挙されたというのである。これなら、太田先生の二度目の本校ご勤務とも時期が一致する。

また、その当時「産業教育振興法」という法律が国会で議決された。この法律は農業・工業・商業等、全国の産業高校の実習設備の充実を図るため、国の予算をそれら高校の設備購入に補助しようというものであった。

ところが、この種の「補助金」は、設備購入金額の三分の一が国の支出（補助）で、後の三分の一は県、残りの三分の一は設備を購入する学校で負担しなければならなかった。これを「地元負担金」といつている。

現在は、三分の二を県が賄ってくれるので、その点は誠に有り難いことであるが、当時はこの地元負担金を、学校が生徒の通学区の市町村からの寄付や、PTA、同窓会などあらゆる手を使って、金集めをしていたものであった。このため同窓会でも、映画会を催したり会費を集めたり随分ご苦労されて資金を集めていたようである。

こうした背景を考えると、同窓会もきちんとした形を整えるべき時期にきていたとも考えられるのである。

そうしたことから、同窓会が正式に総会を行い、会長を推戴したのは昭和三十年だと考えられる。

この三十年の総会では、田辺氏の初代会長就任と同時に、田辺氏と同級の矢野亀雄氏（須崎市在住）及び事務局長の矢野象一氏が副会長に就任し、本校同窓会のトップ態勢が整った。

ただ田辺氏は、昭和五十一年度の総会で引退し、会長は二代目現会長の清家氏に交替したのだが、翌五十二年度の会報に、田辺氏はその退任の挨拶を載せられ、「思えば昭和二十三年以来、その席（会長職）をけがし……」と述べられている。私が生徒のころ、開校記念日か又

は卒業式の祝辞かで、田辺氏の話されるのを拝聴した記憶がある。あるときはにこやかに、あるときは真顔になって真剣に、私たち生徒にとって素晴らしい先輩として強く印象に残る話をされ、自覚を促されたことであつた。

それを考えると、早い時期から田村先生のお気持ちとしては、田辺氏に同窓会長としての席を考えられ、そのおつもりで対処されていたものであろう。そして周囲もまた田辺氏を会長として受けとめていたのであつた。

〔同窓会支部の誕生〕

△県外への就職▽

初期の卒業生の就職は全く困難だった。県内には、もちろんこれといった企業はなく、戦争はし烈を極め県外就職もそれどころではなかつた。初代中内校長先生は高知工業学校のご出身で、関西・関東にも同校ご出身のお知り合いが多く、その方々にも依頼されたが、思い通りにはいかず、数名の就職にとどまっていた。

昭和二十年の後半から卒業生の県外への就職が本格化し、三十年を過ぎるころには相当数の卒業生が定着しはじめていた。特に関西地区へは多くの卒業生が就職していった。この就職あっせんに関して、田村先生のお骨折りは並々ならぬものがあつた。

当時は、高校生の就職といっても、行政的にも個人的にもルートが確立しているわけではなく、まさに新開地の開拓そのもので、田村先生は大阪・神戸を中心に、ここぞと思う会社をしらみつぶしに訪問されて、生徒の就職を依頼されたのだが、行く先々の会社で断られるこ

とも度々であつたと伺っている。

これらの出張にしても、旅費は全く不十分で、PTA等から辛うじてほんの実費程度のものしか出ない状態であつたが、先生は生徒の一〇〇割就職を目指して、黙々と炎天下の大阪を歩かれた。

そうしたご苦勞の成果が出始めたのが、ようやく二十年の終りころで、卒業生は先生からの「石の上にも三年」の言葉を肝に銘じて、巣立つて行つたのである。卒業生の就職率のよさが学校の評価を大きく高めていったのもこのころである。

各科の先生方も田村先生の開拓方式を基に、同様の出張を重ねられ、本校の就職指導が定着していった。

田村先生が卒業生の就職のことについてどのようなお考えで当たられたかは、本誌「須崎工業スペツシャル」のなかの「創立後の数年間」という先生の稿に記載されているからご一読願いたい。

△神戸支部と大阪支部▽

この両支部は発足したのが一日違いである。神戸支部が大阪支部より一日早かつた。

神戸支部は機械科一種一期生の梶原誠幸氏（故人）、大阪支部は機械科二種一期生の西川嘉明氏が発起人であつた。いずれも昭和三十年か三十一年かの発足であるが、どなたも年次に関する正確な記憶はない。いずれにしても支部としては最も早い時期であつたはずである。

両支部の発足が一日違いであることには次の理由が考えられる。両支部の設立総会には、学校では当時の森岡貞篤校長、設立要請をされた田村先生、事務局長の矢野象一氏の三人が招かれていた。そして、

この両支部は地元を除けば最大規模の支部であり、この発会式を欠席するわけにはいかず、かといって別々の日にそれぞれというのでは経費もかさむ。そこで一度の上阪で両支部の発会式に出席するための方法をとったのだと思う。

神戸支部では、梶原誠幸氏が山中鉄工(株)の経営者であったことから、同社のスタッフの皆さんに大変お世話になったそうであるし、森岡校長は、高知工業の一期生ということから、高知工業の同窓会大阪支部の方にも何かとご指導ご協力をいただいたそう、発会式には高知工業大阪支部長さん(氏名は不明)も、お祝いにご出席いただいたことである。

大阪支部のお世話役だった西川氏は、当時から大阪府庁にお勤めで、ご多忙のなかで組織作りに大変なご苦勞をされた。しばらくは、仕事も手に付かなかったほどだったという。

神戸、大阪に限らず、事を始められた先輩方のご苦勞には並々ならぬものがあつたにちがいない。

神戸支部の初代支部長は前述の梶原氏、大阪支部は同じく西川氏だったが、現在山田豊氏(機械科一種二期・昭和二十一年卒)が務めている。

この両支部は、一度合併して「近畿支部」と呼んでいた。その後昭和五十五年、「兵庫」「大阪」「京都・滋賀」及び「奈良」の四地区に、発展的分散をしたが、大阪地区以外はその後の運営が軌道にのつていなかった。しかし、後述のように平成四年になって京都・滋賀地区は、「京・滋支部」として正式に発足し、兵庫地区も再度、組織編成を行う機運にある。

〈東京支部〉

東京支部は昭和三十一年に発足した。これも田村先生の要請で、機械科二種第一期(昭和十八年卒)の海地清幸氏、同じく箭野愷正氏のお二人が発起人になり、東京赤坂の料亭「司」で発会式を行っている。

そのときの準備など、裏話は本誌「須工での日々・その二」に、「回想」として海地氏が寄稿されているし、会報「にしきうら」第三号に「関東支部だより」として、三十一年電通卒の矢野雅也氏も寄稿されている。海地氏の稿では、発会式は三十六年としているが、矢野氏の稿では三十一年となっている。どちらをとるかについては、どうも矢野氏の記述が、ご自分の卒業の年というはつきりした記録があつて正しいようである。

東京支部はその後順調に発展し、二年に一度の支部総会を続けており、一昨年、平成二年五月の総会には私も招きを受けて出席したが、一〇〇人を超える会員が集まり誠に盛会であった。

〈中京支部〉

中京支部は、昭和四十五年に発足した。この支部は機械科二種第五期生(昭和二十三年卒)岡林懸市氏及び昭和二十四年機械科卒の春田陽三氏が発起人である。そして岡林氏が初代支部長に、春田氏が同副支部長に就任した。

中京地区はもともと卒業生は少なかった。というのは、当時の交通機関はほとんどが国鉄(現JR)で、これで行くと名古屋地区は時間的にすこぶる不便であった。東海道本線で高知から便利な列車は、こことごく名古屋方面到着が真夜中になるので、先生方の職場開拓も必

然的に足が向かないのであった。

三十年代半ばにさしかかるころから日本の経済は著しい成長をみせ始め、会社のほうからの求人活動が活発になり、中京地区ではトヨタ自動車とその関連会社の求人が来るようになって、そのころから卒業生の中京方面への就職が始まった。そして、四十五年ころには相当の人数になっていた。しかし、巨大企業のトヨタとその関連企業では同窓生の横の連絡はなかなか困難で、思うような運営はできなかったようである。その組織化は大変なご苦労であったと伺っている。

△高知支部▽

昭和四十一年に赴任された澤本豊校長先生は、本誌にも別稿で記載されているように、本校移転に際して大きな役割を果たされたが、一方では同窓会の組織強化も考えられた。澤本校長先生は、前任校の高知工業高校で、同窓会関係のご担当の経験もおありの方で、組織固めの手法は熟知されていて田辺会長以下、主だった卒業生を学校に集められ、次の手順を示された。たしか昭和四十五年のことだったと思う。

その手始めは、何といっても地元須崎及び高知に支部を作ることであり、また、組織の整備に欠くことのできないのが、きちんとした同窓会名簿の作成及び同窓生の連携のための会報の発行であるといわれた。この呼び掛けで、高知支部と須崎支部が発足した。

この話のとき、高知からは現会長の清家氏と、同じく同期の広田四郎氏、そして私も同席していたが、どうすれば高知をまとめられるか、まるで見当もつかなかったことを覚えている。しかし、清家氏は、「これは自分の仕事だ」と心に決められたと思う。その後の二年間は、

清家氏を中心に、高知地区の数名が清家氏宅に何回か集まり、いろいろと協議をした。協議には澤本校長、それに久教頭も再三出席され、なにかと細部にわたるご指導を賜った。

また、清家氏は、特に高知工業高校の同窓会にも出向いて何かとご指導いただき、そこで終身会費のことも聞き、早速取り入れた。高知支部の発足は、清家氏のお人柄とご努力の賜であり、また澤本校長先生の極めて適切なお助言あつてのことである。

終身会費等の新しい構想を取り入れたことは、その後の同窓会全体の発展にも大きな貢献を果たしているといえる。また、種崎地区の造船所関係では、竹村先生のご努力による造船科卒業生を中心に、約百五十名の集まりがあつて、高知支部の発足に多大の力を発揮していた。そのまとめ役は昭和二十八年造船科卒の岡林幸保氏で、前記広田氏及び同年の田村耕吉氏と共に初代の副支部長に就任した。会計は、機械科二種三期・柏井秀有氏（昭和二十一年卒）で、その後の支部の財源確保に大きな役割を果たされた。初代支部長はもちろん清家氏であった。

高知支部の発足は昭和四十七年三月、二〇〇名を超える大盛会で、会報「にしきうら」の一号に詳細が報告されている。

△須崎支部▽

高知支部と同様、昭和四十七年秋には須崎支部も発足した。発起人には二種一期で須崎市在住の矢野亀雄氏、久礼町と同じく二種一期の中平万年氏、一種二期・寺田郁雄氏（昭和二十一年卒）、二種五期・武内徳雄氏（昭和二十三年卒）、昭和二十五年機械科卒の坂本臣三氏、

同じく藤本幸造氏・堅田耕勇氏、昭和二十六年機械科卒の北川和雄氏（故人）らが当たった。

もともと須崎市には大勢の会員がいて、同窓会の集まりをするといふときには前記の皆さんは、いつも出てこられていた方たちであつて、あえて須崎支部といわなくとも、本部の同窓会すなわち須崎支部の感があつた。いずれにしても学校はごく身近な存在であり、須崎支部の発足といつても大勢の卒業生にとつては何となく今更といつた感もあつたかも知れない。組織化はかなり困難であつた。

しかし発会式は約八十名の会員が参加し、田辺会長をはじめ、高知支部の会員もお祝いに参加して中々盛大に行われた。その後も二年ごとに総会を行つてきたが、平成元年の総会では、母校創立五十周年を二年後に控えて支部役員の絶大な努力と、学校事務局のテコ入れもあつて、二六〇名を超える支部総会が行われ、五十周年への協力総会に發展した。

初代支部長はお世話役の中平万年氏、その後中平氏は体調を崩され、平成元年から寺田郁雄氏に代わつて現在に至つてゐる。

〈京滋支部〉

「京都・滋賀」地区では、平成三年十一月になつて、本格的な支部発足の粗案ができ、同四年四月二十六日に設立総会を催して正式に発足した。総会には学校長、同窓会本部、須崎支部長、大阪支部長らもお祝いに参加し、三十数名が出席した。

支部長は広瀬理氏（機械科一種二期・昭和二十一年卒）、副支部長は田村武夫氏（造船科・昭和二十九年卒）、浜川嗣郎氏（機械科・昭

和三十一年卒）である。

〈その他の支部〉

同窓会は、その後会報「にしきうら」を通じて順調な運営を続け、終身会費も伸びて、会員の絆きずなを深めている。これらのことは、意外な方向に發展をして、各地で支部設立の機運を生む結果となつた。県内では、「窪川支部」、「幡多支部」が誕生し、県外では前述の「京滋支部」が発足した。

それにクラスごとの集まりもあつて、二種一期生の「一睦会」、一種一期の「一一会」、二種二期の「札会」、造船科一期の「陸船会」等、名前の付いた同級会も幾つかある。これらの会の中にはもうずっと前から続いているものが多く、時々会報に記事が出て、先輩方の健在ぶりを拝読することができる。

昭和四十七年の高知支部発会式の時、広田先輩が、「我々もやつとこんなことができるようになったということかねえ……。」といつておられるのを耳にしたことがある。そのとき先輩方の年齢は、丁度四七歳、昭和初年のご誕生である。それまでは中々同窓会のことまでは考へる余裕はなかつたということだろうか……。私はまだそのとき三〇代で、なるほどそんなものかと思つたことであつた。世の中の移り変わりも激しかったが、年齢もだてではないと思つた一言として、印象に残つてゐる。

「会報」にしきうら」

会報「にしきうら」の発行の契機は、前述した澤本校長先生の「同

窓会の発展は、きちんとした名簿の作成と会報の発行である」との指示^さによるものだった。これを受けて立たれたのが、現会長の清家氏であった。

昭和四十七年発行の、会報「にしきうら」第一号は、高知支部の役員が清家氏宅に集まりそこが編集室になった。なにしろ資金はなく、ましてや機運もないところからの出発であったから、目処^{めし}の立つはずはなかった。

しかし、幸いなことに、その年の三月には高知支部の発会式があり、また四月には母校の移転等があつて、内容についての記事ネタは余るほどあつた。資金は各方面の卒業生に広告を依頼して作ることにした。高知支部の役員は総力を挙げて広告依頼に駆けずる毎日になり、本部事務局にも須崎支部にもお願いをして、どうにか予算的には目処を立てることができたのであつた。

ところが、広告というのは印刷にしなければならない。この分かったことがなかなか大変なことである。広告の原稿は、必ずしも広告主がきちんと整えてくれるとは限らないのである。まったく編集局に任されることもあつて、それらの整理は大変な労力であつたが、そのほとんどは清家氏の手で行われた。

原稿は、企画会議をし、田辺会長、学校、同窓会各支部長、須崎・高知の会員等に依頼して、十分なものが集まつた。特集は、高知支部の発会式と新生母校の紹介であつた。

中身に熟中する余り、表紙のデザインと会報名を考えることを忘れていて、編集の最後に「どうしようか」ということになった。だから「にしきうら」はどうかと提案した。「にしきうら」というのは須

崎湾の名前で、ほんとうは錦浦湾^{きんぼ}という。この「錦浦」を「にしきうら」と読んだものである（校歌の歌詞にも入っている）。この提案をだれがしたのか、どうしても思い出すことができない。

いずれにせよ語呂もよいし、だれも異論はなく即座に決まつたものである。そして後からしかるべき理由が付いた。

すなわち「須崎は海の町である。全国の同窓生は海の町須崎から巣立つた。日本のみならず世界は海でつながっている。我ら須工同窓生もその海、すなわち「にしきうら」を原点につながりをもとうではないか」ということである。

誠に当を得た名案であつた。またその後、もう一つ期待の言葉が付けられた。それは「海（にしきうら）は永遠である。海が永遠であるように、母校と共にこの会報「にしきうら」も永遠に続けよう」ということであつた。そして表紙のデザインは、遠くから須崎の岸辺に寄せる波をかたどるものにした。

最初の「にしきうら」第一号ができあがつた。B5の少し大型で、表紙には新生母校の本館棟の写真入り。まんざら悪くない出来栄えに編集一同は安堵^{あんど}した。表紙は波の青色が少し間隔があつて多少しらけ気味なのが気になったが、実は第二号から別の理由で大きさを小さくしたので、白け具合も緩和され見やすくなっている。

会報「にしきうら」二号は、一号から五年後に発行された。その五年間、私たちは学校の事務局に任しても無理だろうか、若干の虚脱感を感じたものだった。

二号ができる前の年、昭和五十一年八月に学校で同窓会の総会を行った。この総会で、初代会長の田辺氏が引退され、高知支部長の清

家氏が二代目の会長に就任された。また、この総会で、会則の大幅な改正をし、これをきっかけに学校事務局の態勢を整えて、学校に勤務している同窓生で事務局会を持てるようになり、交替で会報の編集を担当するシステムを確立した。

それまで予算編成にも事欠く状態だった会計も、なんとか事業に見合った編成ができるようになった。こうした態勢の整備で、二号からは完全に本部事務局の手で発行できるようになり、更に四号からは「にしきうら」のための広告も取る必要がなくなって、事務局の負担も少しは軽くなった。

現在、第十六号になった会報「にしきうら」最大の効用は、何といっても同窓会員の絆を強めたことであり、そのことが終身会費の順調な伸びにつながり、ひいては今回の盛大な五十周年記念式典の成功につながったといえる。「にしきうら」を通じて母校の五十周年記念式典を知った大勢の卒業生が、県の内外はいうに及ばず、外国からもわざわざ式典に出席してくれたのであった。在校生は先輩方の母校に対する思いを肌で感じた記念式典であった。

〔同窓会名簿〕

事務局にとって最も大切なのは同窓会名簿である。同窓会名簿が整備されていない同窓会は活動していない同窓会といわれても仕方がない。いかに立派な会報ができて、しっかりと名簿がなければ会員に送ることはできない。会報が会員に届かなければ、資金も集まることはない。したがって、活動もできなくなるのである。この点を明確に示された澤本校長先生は、さすがベテランだったと思う。

既存の同窓会名簿は三冊である。昭和二十年代に作られたという名簿があれば四冊になる。その、最初に作られたという名簿は、前述のとおり事務局には保存できていない。

したがって、最も古いものは昭和四十六年度のもので、この名簿は四十七年度に行われた創立三十周年記念並びに移転新築落成の行事に合わせて企画されたものと思うが、編集はそのほとんどを澤本校長先生ご自身がなさったと聞いている。身をもって示されたご熱意に敬服するのみである。

それに当時の事務局だった田村泰雄氏（機械科・昭和二十九年卒）並びに植田幸子氏（電通科・昭和三十二年卒）を中心とする方々がお手伝いをした。基礎資料は、会計担当の島崎良一氏が最後まで丹念に調査を続けてこられたものが活用された（島崎氏は当時他校勤務で、本校事務局にはおられなかった）。

次は、昭和五十二年度版で、これは二代目会長の清家氏の労作である。会員の八〇割以上が確実に調査されている。その確認作業のほとんどを清家氏が行い、なおかつ広告をとり、大変見やすい編集になっている。そのご苦勞は筆舌に尽くし難いものであった。

最新のものは、昨年の五十周年に合わせて学校事務局で作られた。事務局では四年前からこの作業にかかり、パソコンを構え、これに名簿を記憶させる仕事にかかった。

この作業に際し、現関東支部長でNECにお勤めの野瀬公介氏（電通科・昭和三十一年卒）からソフトと拡張記憶ディスク提供の申し出があり、ソフトは本校電気科の鎌田芳一教諭により作られたが、拡張ディスクは野瀬氏に寄贈いただき、強力な武器となった。膨大な名簿

の入力（打ち込み）は、在校生のコンピュータ部員が大いに手伝ってくれた。今回の名簿は、このコンピュータの出力がそのまま印刷になっている。

名簿作成の最も困難な作業は会員の所在の確認である。この困難な作業には、事務局の竹崎貞男氏（機械科・昭和四十三年卒）と西山庸一氏（造船科・昭和四十八年卒Ⅱ会計）の二人が約一年がかりで夜遅くまで調査に当たり、なおかつ事務局の全員が分担して最後の調査のつめをした。確定率は九一割の高率である。

【おわりに】

現在の同窓会の基礎となるご指導を賜った澤本校長先生には心から感謝を申し上げたいし、これまで我がことのように同窓会を育て、見守ってくださった田村隆徳先生、竹村義典先生及び初代田辺会長、現清家会長、そして事務局の皆さん、また、支部発足と運営に当たられた先輩方など多くの方々にも感謝申し上げますなければならない。

本稿は、できるだけだけの調査に基づいて記述したのであるが、推測せざるを得ない部分やまだまだ書き足りないことも多くあり、それらについてはどうかご寛容願いたい。

最後になったが、私が校長として赴任して以来、今年で八年目になる。その間同窓会の大きなご支援を賜った。遠く、近く、すべての会員の皆様方の温かいまなざしが、常に学校に向けられているという意識があり続け、それが私にとって大きな励みにつながってきたのであった。ここに心からのお礼を申し上げたい。

そして、今後とも同様のお気持ちをお寄せ願いたいと思うの

である。

同窓会のみまますの発展と、会員の皆様の今後のご活躍を心から祈っている。

このあと、現事務局長の武森幸利氏（機械科・昭和三十五年卒・機械科教諭）がまとめてくださった創立五十周年祝賀、同窓会記念事業を掲載して、稿を終わりとする。

昭和二十六年・機械科卒

学 校 長 森 岡 清

同窓会活動を通じて

記念碑建立、校旗・標旗の新調、会員名簿の作成について

同窓会事務局長 武森幸利

昭和三十五年機械科卒

創立五十周年記念式典を迎え、お慶びを申し上げます。

同窓会活動も会長さんを含め役員、会員皆様のご理解、ご支援により学校の発展と共に活動を継続することができています。これもご一同様のご協力の賜と存じます時、厚くお礼を申し上げます。

同窓会では、平成三年の母校創立五十周年記念をお祝いし、記念事業の一環として、旧校地跡記念碑の建立（平成元年）、校旗・標旗を新調し本部総会時に学校への贈呈（平成二年）、会員名簿の作成（平

成三年)、式典経費の補助(昭和六十二年〜平成三年)と、活動を続けてきました。

これらの諸活動について、同窓会発行の、会報「にしきうら」への報告をもとに、この記念誌へも同窓会事務局をあくものとして掲載をお願いした次第です。

一、記念碑の建立

記念碑建立の話は、丁度十年前の本会報四号に、恩師、野中健一郎先生(昭和二四〜三三)からご寄稿頂きました。「糺の故地に碑を残しておかれたら」の一文が発端になりました(後掲)。

その翌年の理事会では早速、現高知支部長の竹内良一氏(二五M卒)からその話が提案されました。しかし、当時は中々資金源がなく、建立の方向で検討をすることにして一時お預けになりました。

その後は毎年のように理事会でこの話ができて三年後に、建立委員会を作り、建立場所を管理している市役所との交渉などを行ってききました。

会報に記念碑建立の話が出始めたのもこのころです。同時に中平萬年先輩から、碑石の提供の話があり、一方では、「施工は私が引き受ける。お代はいらない」と笹岡勲・中平徳喜両先輩からの有り難いお話や須崎市からの建立内諾も頂けたということから、話が急に進み、事務局では島崎・西山両先生が清家会長、寺田須崎支部と連絡を取りながら、経費・基本設計等の具体案を作成し、最終の委員会で建立案が了承されました。(昭和六三年)

経費については、関西土木さんに、相当額を甘えさせていただいた

と思います。

平成元年三月に工事着工後、順調に作業が進み、同年四月に完成。

五月に竣工式を行い、資材の提供者及び工事関係者に感謝状と記念品を贈りました。

次に、建設委員会の委員及び資材提供者等の氏名を記載し、そのご苦勞に感謝の意を表します。

建立委員会委員(敬称略)

相談役 宮地 恒雄 (前校長)

〃 森 岡 清 (校長)

〃 森 峯 雄 (教頭)

委員長 清家 寛 (会長)

委員 中平 萬年 (須崎)

〃 矢野 亀雄 (〃)

〃 吉岡 豊延 (高知)

〃 松本 興雄 (須崎)

〃 笹岡 勲 (高知)

〃 寺田 郁雄 (須崎)

〃 中西 二郎 (〃)

〃 堅田 耕勇 (〃)

〃 坂本 臣三 (〃)

〃 竹内 良一 (高知)

〃 下元 征夫 (須崎)

〃 山地 健三 (〃)

〃 矢野 象一 (事務局)

委員 島崎良一 (々々)
 〃 西山庸一 (々々)
 建立関係者

碑 石 中平萬年氏 (二八年M二) 提供

碑 文 森岡清氏 (二六年M) 校長

揮 毫 竹内徳雄氏 (二三年M二) 提供

基本設計 西山庸一氏 (四八年S) 事務局

施 工 笹岡 勲氏 (二二年M二) 含提供

関西土木K須崎支店

コンクリート 中平徳喜氏 (二二年M) 提供

工 事 西村石材店 (須崎市)

記念碑建立の発端となった野中先生の寄稿文。
 昭和五四年「にしきうら」より。

札の故地に碑を残しておかれたら

(元須工教諭)

野 中 健 一 郎

校舎の移転というのは無論それなりに理由のあるものだが、これが中々容易でない。地元の利害関係者や教職員団体、在校生、卒業生団体などの猛烈な反対にあつて、スムーズに行えないのが普通で、本県の過去にも幾つかその例をみるのであるが、須崎工業高校の場

合、少なくとも表面的には異論らしいものもなく、至極平穩のうち
 に事態が運んだことについては、本校に多少とも縁りのある者の一
 人として、いささかの感慨もなかったといえは嘘になろう。まあそ
 うは言つても約七年間の経過をたどつてみて、矢張り、移転は賢明
 な措置だつたと評価できなくもないだろうと思う。

それはそれとして、西札の一角こそは今後どのように変ぼうしよ
 うとも、須工発祥の地であつて、昭和十六年本校が創立されて以来、
 昭和四十七年まで星霜三十年、その間三千余の若者が札の地に勉学
 の場を選び、人生の最も多感な時代をこの地に生き、遙かなる夢と
 希望をこの学び舎のなかにはぐくみ果立つていったのである。

須工の移転にからむ私の感慨は単純でないが、学校の移転は諸般
 の事情で止むを得なかつたとして、学園跡の利用については、先師
 寺尾先生の御遺志を幾分なりとも継承する意味で、教育、文化関係
 施設をと密かに念じていたけれども、出現したのが、なんと大型の
 スーパーマーケット、それも、旧敷地の大半を占拠してである。でも、
 その昔、機械科工場のあつた所に児童公園ができたのは、せめても
 の慰みとでもいべきだろうか。私はこの児童公園の片隅にでも「石
 文」を建て、かつてこの地の学び舎に集り、そして散じて行かれた人々
 の若き日のよろこびと涙の「しるし」を刻んでおかれたらと切に思
 うのだが……

記念碑「碑文」

高知県立須崎工業高等学校 跡

本校は、昭和16年4月に高知県立須崎工業学校としてこの地に開校した創立にあたっては、地元の数多くの方々からの絶大なご援助と、献身的なご協力に負うところが大きかった。その後本校は、学科の増設にともない、広い校地を求めて昭和47年4月に多ノ郷和佐田の地へ移転した。ここに往時をしのび、多くの関係者の方々への感謝の意をこめて本碑を建立する

平成元年5月25日

高知県立須崎工業高等学校 同窓会



旧校地「寺尾公園」内に建立された記念碑

二、校旗・標旗の新調

【会報「にしきうら」第一五号（一九九〇年）より】

平成元年度、同窓会の理事会において、母校の創立五十周年記念に併せ、事業計画の一環として、校旗・標旗を新調することが決定されました。当時の校章についての原寸図、写真もありませんので、刺繍のほつれた旧校旗と帽章を基に、この際、校章寸法割合を規定することになりました。

校旗の寸法は七八〇×一、一七〇ミリメートル。色は布地を朱で正絹塩瀬羽二重裕旗、真田織入り。章を金、中の「高」の文字を銀とし、章・高を刺繍盛り上げ縫い。布地のふちどりを金系四段フリンジ飾房付き。春慶漆金稔子三本次棒金具付き、棒頭ニツケル三方剣二四〇ミリメートル。五分丸ニツケル三脚ケース付き。大型二段トランクレザー張り赤ネール張り。

標旗の寸法は一、七七〇×二、五五〇ミリメートル。布地を江戸紫とし、校章および高知県立須崎工業高等学校の文字は隸書体でソメヌキの白地とする。

図案の意味するところは、【創立三〇周年記念誌 田村隆徳先生の「創立後の数年間」より抜粋しますと）錨は港、すなはち須崎を表し、両翼は大鵬の羽ばたきを表す。つまり高知県立須崎工業高等学校はおおりの如く飛躍するという意味を表している。】

中央の文字は工業の「工」でしたが学制改革以後（昭和二三年）に「高」に変わりました。

資料提出 CAD作図 同窓会事務局（平成二年一月十一日職員会議に提案、了承される）

校旗・標旗の贈呈 同窓会本部総会（平成二年八月十一日）二二六名出席時に、ご披露と清家同窓会会長より森岡清校長に贈呈。



新調された校旗



校旗・標旗の贈呈 平成2年8月11日本部総会にて



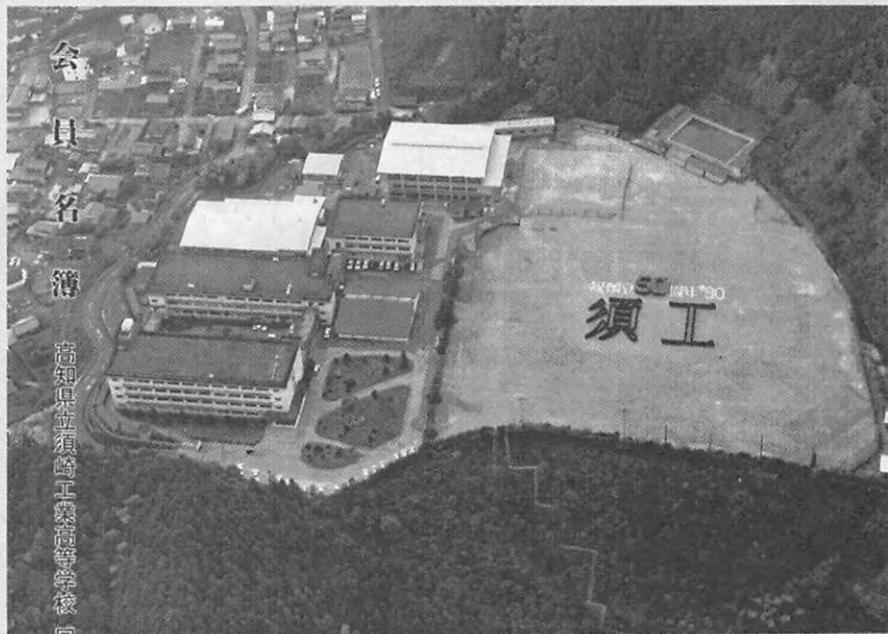
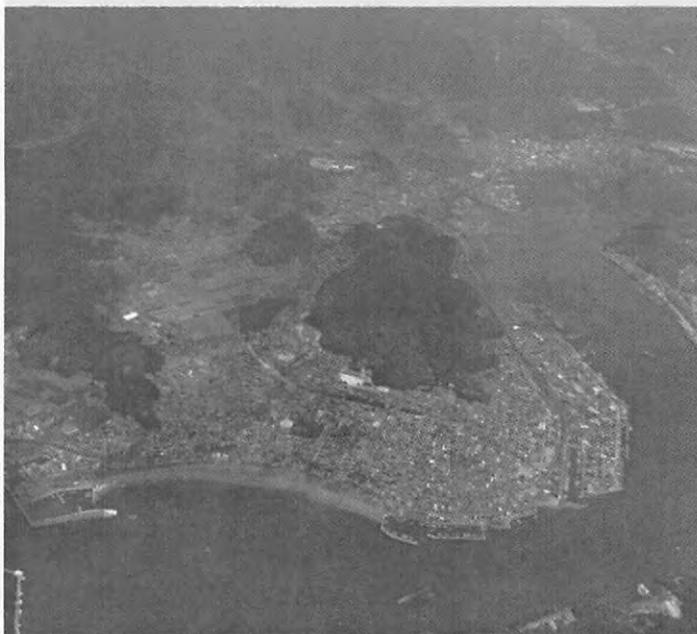
平成三年

創立五〇周年記念

平成 3 年 (1991年)

創立 50 周年記念

会 員 名 簿



会
員
名
簿

高知県立須崎工業高等学校 同窓会

高知県立須崎工業高等学校 同窓会

第1号
1972

会 報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会



にしきうら発行にあたり

同窓会長 田 辺 博 造

同窓の皆さん、お元気でご活躍のことと思います。このたび、高知支部発足を契機に、同窓会活動の盛り上がる気運の中で、会報の創刊号を発行し、お手元にお届けすることになりました。

いうまでもなく、会報は、母校の状況や同窓会の動向、会員の情報などについて年々移り変わる様子を知らせあう上に欠くことの出来ない役割を持っており、会報の発行が順調に行われるようになってこそ、はじめて同窓会活動も軌道にのると言われております。この意味で、会員名簿と会報の発行は、同窓会活動の中で最も重要な部門であり、ある意味ではこの二つの仕事を進めてゆくことが、同窓会の主たる活動だといっても過言ではないと思います。ことほどさように重要な意義を持ちながら、これほど困難な、然も地道な努力を要求される作業もありません。出来上がったものは、いとも簡単に見えますが、実にいい知れない関係者の苦勞が凝結されているものであります。

今回我々の会報として出版の運びとなりました。にしきうらも決してこの例外ではありません。清家寛、森岡清、柏井秀明君らの熱心なご活動、特に退職後も深く須工の同窓会を愛し、ご心配下さって常に、陰に日なたにご指導下さり、たびたび編集会議にもご出席下さってご指導、ご助言頂きました前校長沢

本豊先生、その他編集委員諸氏の、大変なご尽力とご協力の所産であり、心から感謝に堪えません。

今後出来得れば年一回、本誌の発行を行い、皆さんの「交流の庭」「交歓の広場」を提供したいと願っています。

そのためにも広く会員諸君の積極的なご投稿、ご通信を切にお願い申し上げます。

先に創立三〇周年記念誌にも報じられました母校の新舎屋は、本年十一月落成式の予定と聞いております。

その機会に、母校創立の恩人、寺尾豊先生の胸像の建立、除幕式も併せ行うようにしなければならんと考えます。

これが実現にも、皆さんの強力なご支援を切望してやみません。

また、出来得れば、時を同じくして、同窓会臨時総会を開いて、旧規約の改訂をはじめ、今後の同窓会活動の方向を討議したいと考えておりますので多数のご参加を期待してやみません。

終わりにのぞみ、皆さんのご健康とますますのご活躍をお祈りし、ご挨拶と致します。



ご挨拶

校長 村 木 威

この度、新築移転の難事を見事に成し遂げられました名校長沢本豊先生の後を受けまして、不肖私が本校に着任致すことに

なりました。もとより非力非才ではありますが、三十年の歴史ある輝かしい伝統をけがさないように誠心誠意をもって努力致す覚悟でございます。四月の始業式、入学式等二日間だけは旧校舎で行事を行い、四月十日より多ノ郷和佐田の高台に新築された白亜の殿堂に全校職員生徒が移転し授業を開始致しました。

二階建ての広大な体育館も間もなく竣工致します。玄關前にも今大きな庭園造りが始まって居り、また秋には盛大な落成式を致したいと思っております。遠くから眺めた丘の上の学園、また学校屋上から見渡した海や山の景色、いずれもすばらしいの一語につきます。このような立派な学園に恵まれたことは皆様方の長い間のご努力ご苦労が実を結んだものと、ここに改めて感謝の意を表わし、併せて今後のご指導とご援助をお願いしてご挨拶と致します。

(昭和四十七年五月二十五日 創立記念日 於校長室)



ご 挨 拶

前校長 澤 本 豊

先ず、最初に同窓会高知支部の結成と同窓会報『にしきうら』の創刊を心からおよろこび申しあげます。

私は、昭和四一年四月から去る三月末まで満六年間皆様方の母校に在職いたしました。この間校長としてまた同窓会の名誉会長として大変温かいご援助をいただきましたことを厚く御

礼申しあげます。

特に昨年学校の創立三〇周年記念事業として計画いたしました『創立三〇周年記念誌』の発刊と同窓会名簿の発行に對しましては多数の方々から力強いご支援をいただき無事所期の目的を果たし得ましたことは誠に感激にたえないところでございまして重ねて厚くお礼を申しあげます。

私の後任には工業教育に造詣の深い村木威先生が安芸工業高校の教頭から転補されました。私同様よろしくお願い申し上げます。

殆どの方はすでにご承知のことと思いますが、学校は多ノ郷和佐田の高台に敷地を移し校舎も鉄筋コンクリート三、四階建ての堂々たる姿に生まれ変わりました。三月末には機械設備、備品など総ての移転も終えまして四月からこの新しい校舎で授業が行われております。

これも偏に同窓先輩諸氏やPTAのご支援の賜でございました。感謝の外はございません。学校の教育は学校のみで完璧を期することはできません。学校、PTA、同窓会三者一体となつてはじめて血の通つた断絶のない、温かい人間教育ができるものであります。その意味で学校の同窓会に対する期待は非常に大きいのでございます。

昭和四五年には岡林懸市氏(昭和二三年機械科第二種・不二越工業社長)のお骨折りで、同窓会中京支部が結成されまして名古屋市を中心とする会員百余名が固く結ばれております。この度、また清家寛氏(昭和一八年機械科第二種・清家商会専務)

を中心とする有志の方々の大変なご尽力で南国市以西、土佐市
以東に在住する卒業生五〇〇名余で高知支部が創設されました
ことは誠に喜ばしく、同窓会に大黒柱ができた感がいたします。
須工の同窓会に一エポックを画したものといっても過言ではな
く、母校にとつても限りなく力強いことだろうと思います。

同窓会の健全な発展を心からご期待申しあげましてご挨拶と
いたします。

(四七・五・二〇)

P

T

A

(資料)

高知県立須崎工業高等学校PTA 歴代会長名簿(敬称略)

昭和二十五年～昭和二十九年	(初代)坂本和久
昭和三十年	黒岩 晋六
昭和三十一年	田中 保馬
昭和三十二年	又川 清水
昭和三十三年	西内 國次郎
昭和三十四年～昭和三十五年	中田 稔
昭和三十六年	又川 瀨
昭和三十七年	川村 為三郎
昭和三十八年	又川 瀨
昭和三十九年～昭和四十年	古谷 義計
昭和四十一年～昭和四十二年	笹岡 正猪
昭和四十三年	松下 好一
昭和四十四年	藤原 登
昭和四十五年	横山 昇二
昭和四十六年～昭和四十七年	橋田 忠幸
昭和四十八年～昭和五十年	竹崎 恭平
昭和五十一年	久岡 亀一
昭和五十二年	明神 一栄
昭和五十三年～昭和五十四年	高橋 末秋
昭和五十五年～昭和五十六年	村上 正夫
昭和五十七年～昭和五十八年	谷口 慶助
昭和五十九年～昭和六十年	石川 幸男
昭和六十一年～昭和六十二年	山崎 元靖

昭和六十三年

川上 和男

平成元年

下元 政夫

平成二年

森田 淳一

平成三年～

笹岡 公明

PTA会則

(名称・事務所)

第一条 この会は高知県立須崎工業高等学校PTA(以下本会といふ)、名称を須工PTAと称し事務所を学校内におく。

(目的)

第二条 本会は会員の融和と信頼に基き会員相互の研修をはかり、本校生徒の幸福を目指して教育の深化をはかることを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一、会員の研修のための共励会、講演会の開催。
- 二、学校の施設・設備等の充実、改善。
- 三、生徒の厚生施設・設備の充実。
- 四、生徒の学習活動の助成ならびに表彰。
- 五、家庭ならびに校下社会教育団体との提携協力。
- 六、その他必要な事項。

(会 員)

第四条 本会は本校生徒の父母職員ならびに本会の主旨に賛同する者をもって会員とする。

(役員)

第五条 本会に次の役員をおく。

会長一名、副会長三名、会計一名、書記一名、監査委員二名、評議員若干名、執行委員若干名、地区支部長一名、地区事情により副支部長一ないし二名、厚生部長一名。

(役員選出)

第六条 本会の役員選出は次の通りとする。

一、会長、副会長、監査委員は総会において選出する。ただし、副

会長のうち一名は教頭をもって充てる。

二、書記、会計は会長が委嘱する。

三、評議員は別に定める地区の支部長をもって充てることとし、地

区の支部長は当該地区の会員の互選によって選出する。

四、執行委員は執行部ならびに会長の委嘱するものをもって充てる。

五、厚生部長は会長が委嘱する。

六、売店・食堂運営委員は会長、副会長、厚生部長、校長、総務部長、売店・食堂代表で構成する。

(役員選出)

第七条 役職員の任務を次の通り定める。

一、会長は本会を代表し会務を統轄する。但し予算等の執行については校長に委嘱することが出来る。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、書記は会長の命を受け会務を処理する。

四、会計は会長の命を受け会計事務を掌る。

五、支部長は地区を代表し本会の議決機関としての機能を果たす。

六、執行委員は原案の編成議決事項の執行ならびに本会の運営に当たる。

七、監査委員は本会の会計を監査し報告する。

八、厚生部長は会員の厚生福祉の事業に当たる。

九、売店・食堂運営委員は売店・食堂の運営にあたり、運営規則は別に定める。

(役員任期)

第八条

一、役員任期は一年とする。ただし、再任を妨げない。

二、補充役員任期は前任者の残任期間とする。

(会議)

第九条

一、会議は定期総会、臨時総会、評議員会、執行委員会、売店・食堂運営委員会とする。

二、定期総会は毎年度初めに召集し、総会は議長団を編成して運営する。また会長が必要と認めた場合は臨時総会を召集することが出来る。

三、総会は議長団を選出して編成し、事業計画、予算、決算の承認その他重要事項を審議し決議する。

四、評議員会は総会に次ぐ議決機関であつて総会より委任された事項ならびに執行部より提案された事項について審議する。

五、執行委員はその都度会長が召集し、原案を総会ならびに評議員会に提案すると共に議決された事項の執行ならびに本会の運営に当たる。

六、売店・食堂運営委員は運営規則による。

(会の成立と議決)

第十条

一、会議は会員の二分の一以上の出席をもって成立する。

二、会議は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が

決める。ただし、本会の解散、会則の変更等重要事項については

総会において出席者の三分の二以上の同意を必要とする。

(支部)

第十一条 本会は在籍生徒の出身市町村を若干の地域に区分し、支部を設置する。支部長は少なくとも年一回支部会を召集しなければならない。

(顧問)

第十二条

一、本会に顧問若干名を置くことができる。

二、顧問は会長が委嘱し総会に報告する。

三、顧問は総会ならびに評議員会に出席して意見を述べることができ
る。

四、顧問の任期は三年を原則とする。

(経理)

第十三条 本会の経理は会費、入会金、寄付金および事業収入等をもって充てる。

(会費)

第十四条 当分の間本会の入会金は〇円、会費は月額〇円とする。ただし、一家庭二人在学ときは兄の一・二・三月分を免除する。

(会計年度)

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終わる。

(細則)

第十六条 本会の細則は評議員の承認を得て会長が別に定める。

(施行年月日)

第十七条 この会則は昭和六十年四月一日から施行することとし旧会則は廃止する。

食堂・売店の運営規則

昭和五十四年五月十三日

一、設置の目的

本校生徒の学校生活における福祉の充実をはかり、教育効果の向上に資することを目的とする。

二、運営方法

独立採算性を基本とするP T A運営とし、食堂・売店運営委員会をもって運営にあたる。

三、運営委員の構成

P T A会長、同副会長、同厚生部長、食堂・売店従業員代表、校長、事務長、総務部長で構成する。委員会に事務局をおき、総務部長が担当する。

四、運営委員会の召集

必要に応じて、P T A会長が召集する。

五、運営に関する細則は、運営委員会の決議により別に定める。

PTA財産運営委員会とPTA基金運用規定(その経緯について)

〔PTA財産運営委員会の設立の経過〕

昭和四十七年の学校移転に伴う校地(多の郷和佐田)の整地が終了し、校舎の建築が始まろうとした昭和四十三年のこと、整地の埋立部分にあたる現運動場の東北部が、豪雨のため崖崩れを発生し、崖の下にあたる稲田を潰してしまった。

稲田の所有者は、復旧が困難と、本校に被害部分の稲田の買上げを求めてきた。

このため、当時のPTAが、会長(藤原登氏)名義でその土地を購入し、PTA所有の土地が出来た。

一方、前校地(西糺町)前の、旧校長官舎跡地は高知県の所有であった。

昭和五十六年に、前記二つの土地を「等価交換」してはという話が始まった。

この交換事業は、当時のPTA会長村上正夫氏、同副会長長谷口慶助氏、元会長古谷義計氏、会員松本寿男氏、そして当時の学校長西村博氏らの、一方ならぬご尽力によって県との交渉がまとまり、昭和五十七年二月に登記を済ませ、正式に校長官舎の跡地がPTA所有になった。

この土地の管理に関する規定が、昭和五十年五月十二日から施行の「財産運営委員会規則」である。以後は、この規則によってこの土地を管理してきた。

〔PTA所有地の譲渡〕

平成元年になって、須崎市から市の事業遂行のため、前記土地の譲

渡についての申し入れがあり、財産運営委員会を開き検討の結果、市への譲渡を決定した。

委員名	PTA会長	下元征夫
	同 前会長	顧問 山崎元靖
	同 元会長	顧問 石川幸男
	同元副会長	井上徳恵
	同 副会長	教 頭 森 峯雄
	校 長	森 岡 清
	事務長	山脇正照
	総務部長	高橋三雄

(註) 山崎・石川・井上の三氏は、名義上の所有者。

副会長・厚生部長は所用のため欠席。

譲渡に関しては、相手が個人ではなく市の公共事業であることから、協力することにした。

譲渡面積、金額等は次の通りである。

譲 渡 面 積	二二六・〇二 平方米
譲 渡 金 額	二〇、五三二、六一六円
譲 渡 年 月 日	平成二年二月九日

〔譲渡金の運用〕

譲渡金の運用については、PTA本来の目的に叶った方法で運用すべきとの原則に立ち、「PTA基金並びに益金運用規程」を作成し、基金として有効に利用することにした。

規程は、平成三年二月二十一日の評議員会で了承され、平成三年度の総会で承認を受けて発効の運びになった。

〔財産運営委員会会則〕

第一条〔名称〕

本会は高知県立須崎工業高等学校財産運営委員会と称し、事務所を学校内におく。

第二条〔目的〕

本会はPTA財産（土地）の管理運営等に関する事業を行う。

第三条〔構成〕

本会に次の役員をおく。

委員長 一名（PTA会長）

副委員長 一名（学校長）

理事 若干名（PTA副会長、顧問、同厚生部長、

土地名義人、学校事務長、学校総務

部長）

書記兼会計 理事より選出する。

第四条〔役員の仕事〕

役員の仕事は次の通りとする。

委員長は本会を代表し、会務を総括する。

副委員長は委員長を補佐し、委員長事故あるときはその職を代行する。

理事は会務の執行に必要な事項を議決する。

第五条〔役員の仕事〕

役員の仕事は一年とする。ただし再任を妨げない。

第六条〔会議と議決〕

本会の会議は委員会とする。

委員会は委員長が必要に応じて召集する。

会議は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは委員長が

これを決する。

第七条〔施行〕

この会則は昭和五十七年五月十二日から施工する。

〔付則〕

名義人の変更の時期について。

何れの名義人の子弟も当校に在学しなくなったときに早期に変更の手續きをとる。

〔高知県立須崎工業高等学校

PTA基金並びに益金運用規程〕

第一章 総則

（設置）

第一条 高知県立須崎工業高等学校PTAに基金をおき、PTA基金と称す。

二、本規程は、基金の運用を定めるものとする。

（目的）

第二条 基金は、高知県立須崎工業高等学校生徒の健全な育成並びに、学校発展に寄与するものとする。

第二章 基金

（基金の金額及び積立て）

第三条 基金の額は、当初本会の財産処分金のうち弐千万円とし、

この額に剰余金・寄付金その他の事業収益金などを積み立てるも

のとする。

(管理)

第四条 基金は、消費し、又は担保に供してはならない。

但し、本会事業遂行のため止むを得ない理由のあるときには、評議員会及び総会の決議を経て処分することができる。

二、基金は、金融機関への貯金その他確かかつ有利な方法によって運用し、会長が指定する校内事務所員が保管する。

(運用益金)

第五条 運用益金は、基金運用の利子等とする。

(運用益金の処理)

第六条 運用益金は、本会一般会計または、施設・設備充実諸費への補助及び、会長が必要を認め、評議員会で承認された事業に充てる。

(予算・決算)

第七条 運用益金の収支予算及び決算は、監査を受け、監事の意見を付けて総会に報告しなければならない。

二、この収支決算に剰余金があるときは、評議員会の意見に基づき、その一部若しくは全部を基金に編入し、または翌年度に繰り越すものとする。

第三章 会計

(会計年度)

第八条 この基金の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第四章 規程の変更

第九条 この規程の変更は、評議員会及び総会の決議による。
付則 本規程は、平成三年四月一日から施行する。

おわりに

平成三年（一九九一年）は、本校創立五十周年にあたります。

学校は、この記念すべき年にあたり、四年前から準備を進めてまいりました。

記念式典を平成三年十一月二十二日とし、学校・同総会・PTAの三者が協力して、式典は約千人の参列を得て盛大に行われ、特に生徒達の整然とした態度での式典参加は、来賓の皆様からお褒めの言葉をいただきました。

本誌は、記念事業の一環として、記念式典及び本校の歴史を中心に各時代の教職員、卒業生からの寄稿をもとに編集したものであります。

本校の記念誌は、昭和四十六年十二月に創立三十周年を記念して「創立三十周年記念誌」が発行されていまして、なかなかの秀作でありま

す。学校移転を中心に、当時の困難な状況が余すところなく記述されています。

今回は、その三十周年記念誌からも本校の歴史上重要と思われるものを一一編転載しました。

また、平成四年三月卒業の在校生を主とする生徒会の機関紙「須工タイムズ」からも、二〇編を転載しました。これらは、現在の生徒たちの状況を伝えるものであります。

今回の寄稿数は、元教職員・元PTA役員・卒業生等から総数七四編、相撲部座談会その他を含め総数約八〇編になっています。

原稿は、各科を中心とする編集委員が、関係の皆さんにご依頼して集められましたが、それぞれ快くお引き受け下さり、ご寄稿いただいたことに心から御礼申し上げます。

多くのこうしたご協力にもかかわらず、編集の未熟さから五十周年

記念誌としてまだまだ不備な点のあること、そして当初の発刊の予定は、平成四年三月（三年度末）でしたが、事情により大幅に遅れ、大変お待たせしたこと等、お詫び申し上げます。

また、編集・印刷・製本等について、再三にわたりご指導、ご援助いただいた、第一法規出版株式会社四国支社営業第二部課長の嶋田精一氏にもお礼を申し上げます。

この記念誌が、本校を一層ご理解いただくためのお役に立てば、望外の幸せであります。

編集委員

森 岡 清（校長） 竹崎 貞 男（M科）

森 峯 雄（教頭） 山崎 吉 広（S科）

高橋 三 雄（総務） 津野 隆（S科）

伊藤 正 孝（教務） 多田 和 子（C科）

川西 輝 道（写真） 小野 敬 和（C科）

武森 幸 利（同窓会） 中内 裕（E科）

岡林 龍 明（国語） 植田 幸 子（E科）

井上 耿 介（M科）

須崎工業高等学校創立五十周年記念誌

平成四年九月二十四日印刷

平成四年十月一日発行

編集 須崎工業高等学校創立五十周年記念誌

編集委員 会

発行者 須崎工業高等学校創立五十周年記念事業

実行委員長 清 家 寛

印刷 千一〇七 東京都港区南青山二一十一一七

第一法規出版株式会社

発行所 高知県須崎市多ノ郷和佐田甲四一六七―三

高知県立須崎工業高等学校